文學博士　藤村作著

國文學史總說

東京　中興館藏版

例言

一、本書は高等學校及びその程度の學校の文學史教授の參考書として編んだものでありますが、兼ねて一般にも文學史の知識を得るために參考となることを期して居ります。

一、本書は文學史研究の基礎として、日本文學史上の主なる作家の傳記、作品の解題を記述し、かねて文例を擧示する態度をとりましたが、傳記・解題の間に連絡をつけるために、思潮の概觀や批評にも觸れました。

一、大和時代と平安時代では作品は大抵擧げる事にしましたが、鎌倉室町時代及び江戸時代に於ては主要なるものを以て代表せしむる態度をとりました。更に明治時代に於ては作家の傳記をも殊に簡略にして、主要なる作品の解説にとゞめました。これはこの程度の大きさで纏める必要上已むを得なかつたのであります。

一、引例は詩歌は抄出の態度をとりましたが、小說・戲曲の方面では主要なるものは古寫本・版本によつて本の體裁をも示しつゝ、かねて引例となるやうに致しま

した。明治以後は殆ど引例を省略しました。

一、本書を記述するに當つて解題は原本によつて行ひましたが、傳記はそれ〴〵の權威ある研究に基づいて記述した所が多くあります。また從來の文學史を始め諸家の研究に據るところが多い事を記して感謝の意を表します。

大正十五年一月　　　　著者しるす

國文學史總說　目次

第三篇　鎌倉室町時代

第四篇　江戸時代

第五篇　明治時代

――目次終――

國文學史總說

緒論　國文學史と其の區劃

文學史の意義

文學史は文學の歴史的展開の考察であつて、文學的現象の事實の上に流動する流れをたどつて、現代の文學が如何にして生じたかを探求する所に意義がある。文學史研究に於て事實の探求は忽緒にしてならない所であるが、たゞ事實や資料を羅列したのみでは文學史にはなり得ない。その事實と事實との間の關係を究めて、その間の展開を明かにする所に、生命のある文學史が構成せられる。國文學史はその原始文學の時代から現代に至る國文學の流動の痕をきはめて、その展開の必然的理法を明かにする所に大なる目的があるのである。

文學史を扱ふ態度

然しながら文學の史的展開を考察するにも種々の扱方がある。從來の方法を見る

と文學それ自身に卽しない外面的な扱方をして居た點が多い。時代の區分にしても政治史の區劃をそのまゝに用ゐて奈良時代・平安時代・鎌倉室町時代といふやうな名稱のもとに文學を區劃するのである。もとより文學がその環境の影響を受けることの多いのは言ふまでもないのであつて、從つて政治上の大變動が文學に大きな變化を與へることは多い。藤原氏が衰へて平家がこれに代り、更に平家も忽ち衰へて源氏がこれに代るといふやうな榮枯盛衰のあとをまのあたり見る時、人間の心が現世のはかなきことを感じてそれが文學の上に影響を與へる。また政治史上の大きい區劃につれて文化の中心となるべき土地が移動する。政治の中心地が變化するにつれて、その土地の變化が文學の上に大きな影響を與へる。平安時代の文學の特性も京都といふ秀麗の土地が與へた點が多いと思はれる。

かくの如き外的變化とともに文學を創作する個人の境遇の變化も亦文學の上に轉機を與へる。こゝに文學作家の傳記研究の必要も起るのである。かくて文學史の研究が政治史や土地や作家の傳記・作家の屬する流派等の研究に相俟つべきことの多いことは言ふまでもないのであり、この點を主として文學を觀察しようとする立場もある。しかし是等は文學そのものではない。文學の史的展開は文學そのも

のに卽して考察せらるべきである。文學史の區劃も文學それ自身の發展の上から區分すべきである。文學の展開に於て叙事文學が抒情文學となり、更に物語となり劇文學に展開するといふのは、文學の形の上から見た展開の相であるが、一方に於て文學を產出す動機、或は文學の內面を流れる思潮によつて文學の展開を跡づけることも可能であらう。是等は文學そのものに卽したものであり、かくの如き點から、文學の展開を考察する所に外廓から文學を扱ふと異なつて、文學そのものの內に入つてその本質を見きはめることにもなるであらう。流動してやまない文學の生命をとらへ、その展開する理法を考察する所に、卽ち過去の文學から現在の文學への展開の必然的理法を究める所に、生きた文學史が構成されるであらう。政治史や土地や環境の如きはその意味に於て第二義的のものである。文學史の考察の上に於て、文學書の書史的考察は極めて必要なる基礎作業であるが、それは文學史そのものではあり得ないのである。

編述の態度

而して本書に於て試みることは文學の史的展開を考察する基礎研究として文學の作家の傳記、作品の解題、及び引例を主なる目的として概觀しようとするものである。もとより作品の批評や思潮の展開にもふれては居るけれども、各作家の傳

記、各作品の解題を結びつけるために加へたに過ぎないのであつて、主なる目的は眞の文學史研究の基礎となるにある。

しかし日本文學史上の主なる作家、作品は極めて多いのであつて、傳記・解題の詳細なる叙述は期し難いのである。殊に近世以後に於ては作家・作品の類は殊に多いのであつて、たゞ代表的作家・作品をのみ擧げてこれを概觀するに止める。

區劃

かくの如く本書に於て試みる所は文學史研究の基礎としてであるから、文學史の區劃に於ても普通の態度をとつた。卽ち大和時代、平安時代、鎌倉室町時代、江戸時代、明治時代の五期に分ち、更に各時代を二期若しくは三期に分つた。大和時代を古事記を中心とする前期と萬葉集を中心とする後期とに分つた。前期は神話傳説卽ち民族的叙事文學の時代であり、後期は抒情文學の時代である。平安時代は前期・中期・後期に分つた。前期は詩歌から物語に轉向しようとする時代で、未だ傳奇的傾向を多く有して居り、中期は源氏物語・枕草子を中心として平安時代の物語の極盛に達した時代であり、後期は物語が漸くゆきつまつて頽廢的に陷るとともに新しい機運が動いて來た時代である。鎌倉室町時代は前期と後期とに分つた。前期鎌倉時代は軍記物語や新古今集・方丈記等を以て代表せられ、後期

は謡曲・狂言・徒然草・お伽草子等によつて代表せられる。前期は個人的感情を否定しようとしてなほ否定し得ない所があつたが、後期は個人的感情を全く否定し得た。江戸時代は三期に分けた。前期は西鶴・芭蕉・近松等によつて代表せられる元祿文學の時代であり、中期は上方の文學が江戸に東遷しようとする時代であり、後期は文化・文政時代の文學である。明治時代は三期に分けて前期は明治二十年頃までの啓蒙時代であり、中期は二十年より三十六・七年に至る浪漫主義時代であり、後期は三十七・八年より明治末年に至る自然主義時代である。大體かういふ風に區劃して考察の歩を進めて見たいと思ふ。

第一篇　大和時代

序　説

原始文學の發生に關する研究は極めて興味ある問題である。文學の起原が感情の詠歎からであるとすれば、抒情文學が文學の原始形式となるのであるが、一方に

合唱より起つて民族的な敍事文學となり、更に抒情文學に展開すると說く學說もある。が今はこの問題に論及することを避けて、文献の上から日本文學の原始時代を見ると、古事記・日本書紀に見える神話・傳說竝びに歌謠はその最も古いものであらう。それは記載年代のまゝに作られたものではないにしても、記紀の製作年代卽ち奈良朝頃に製作されたものではなく、それらの文學の搖藍は意外に古きものもあるであらう。更に祝詞も現存のものは後世の改作を經て居るであらうが、その發生は餘程古いものであり、祝詞のもつ本質的のものから文學の起原を說かうとするものもある。記紀の原始歌謠が萬葉集の歌となる所に文學としての展開を見ることが出來る。この大和時代は時間的に見て極めて長いのであるが、其作品の製作と文献の製作との時期は一致しないのであつて、之を時期に分つて觀察するのに困難であるが、文献の成立を基礎とせずに、その作品の成立から見て大體之を二つの時期に分け、前期に於て古事記・日本書紀及び風土記・祝詞等を解說し、後期に於て萬葉集・宣命・懷風藻・日本靈異記等を解說する。

第一章　前　期

一、古事記と日本書紀

最古の文献

古事記は日本書紀・萬葉集とともに日本上代の最も重要なる文献の一つであつて、古代の文學でもあり歷史でもあり神話でもあり言語資料でもある。古事記より前に作られて今日殘つて居るものには聖德太子の御傳を書いた上宮聖德法王帝說があある。又上宮記は聖德太子の薨ぜられた後間もなく出來たものといふ說があつて釋日本紀に引用せられて居るが今原本は亡びて居る。聖德太子の經疏や第十七個條憲法その他金石文などにかなり古いものはあるが、文學としても價値があり、かつ注意すべき最初の文献としては古事記を擧げなければならない。で先づ此の書に就いて其の成立・組織・異本・註釋書等に就いて述べて見たいと思ふ。

古事記の成立

古事記三卷は太朝臣安麻呂の撰であつて、その成立の由來は安麻呂の序によつて知ることが出來る。天武天皇は諸家の有する帝紀及び本辭の正實に違つて居ることをなげき、今の中に帝紀を撰錄し舊辭を討覈して後世に傳へようとして舍人稗

田阿禮に命じ、帝皇日繼及び先代の舊辭をよみならはしめ給うたが、その後果すことが出來なかつたのを、奈良朝に入つて元明天皇の和銅四年九月十八日に安麻呂に命じて、阿禮の誦した舊辭を編ましめ、功成つて上つたのが和銅五年正月廿八日である。これに就いて從來阿禮は男性であるか女性であるかに就いて說があり、本居翁は男性說をとつて居るが、平田篤胤は女性說をとつて居る。男とする說の根據は弘仁私記序に「名舍人姓稗田」とある。舍人といへば男らしくかつ國史を編むのは男らしいといふのである。女性說をとる者は阿禮が天鈿女尊の子孫であるからといふのにある。いづれか斷定は出來ないが、萬葉集にも嫗が昔の話をした事もあるから或は女ではなからうか。また、阿禮に誦せしめたといふのは諳誦せしめたのか、種々の記錄を統一させたのであらうかに就いて二說に分れて居る。が從來古事記以前は全く語部によつて語られたと言はれて居るが、古事記以前に記錄のあつたのは序文を見ても明かである。卽ち阿禮が二十八歲の頃天武帝の詔を奉じて諸種の記錄を統一したのを老年になつて太安麻呂が之を文章として書きつゞつたのであらう。その時阿禮は六十歲程であつた。而して序文の中に帝紀とあるのは帝皇の世繼の系譜の如きものであり、本辭は種々の物語をさしたも

のと思はれる。所謂神話などは本辭に屬すべきものであらう。尚太安麻呂は氏長者で和銅四年には正五位上となり、養老七年從四位下で死んだ。丁度日本紀編纂の後三年に當る。父も天武帝に從ひ壬申の亂に功勞があつた。

題號

次に古事記の題號に就いて井上賴圀は古事記考の中に「古事記」は「フルコトブミ」といふのを可とせられて居るが、これは宣長一流のすべてを和訓にするといふ考より出でた說であつて、むしろ「コジキ」とよむ事のまされるを思ふものである。卽ち田中賴庸が「本記は古より音讀なりけむ。或はフルコトブミと唱ふる說あれど、舊事記も亦同轍に歸するより外なければ從ひがたし」と言はれたのに從ひたいと思ふ。

古事記の組織と神話傳說

古事記の組織を見ると、三卷の中で上卷は神代卷であつて、天地開闢神話に始まつて神武天皇御東征の前までに至つて居る。中卷・下卷は神武天皇の御東征から推古天皇に至つて居る。卽ち上卷は神話であり、中卷・下卷は歷史傳說であり、その間に遊離說話と稱すべきものが散見して居る。神話は神格を主動者としての宇宙の創造・國家人類の創生・生死の問題・自然現象等を說話として敍述したものである。而して神格にも種々の段階があるが、大體絕對神・自然神・人格神の三に

分れる。絶對神としては天御中主神・高御産靈神・神御産靈神の如きがあるが、伊弉諾尊・伊弉冊尊にも絶對神の要素が濃厚である。次に天照大神と素盞嗚尊とは太陽神と暴風雨神として見る時自然神であるが、一面に於て天照大神は國家統治の人格神であり、素盞嗚尊は八岐大蛇を退治して奇稻田姫を得た如き、英雄神的人格神の性質を有して居る。更に大國主尊は純粹なる人格神として、沼河姫や八上比賣を得た如き、黄泉で素盞嗚尊から種々の試をうけながら遂に須勢理比賣を得た如き、英雄神としての性質が多く、更に人文神としての性質をも有して居る。日本神彦火々出見尊の海幸山幸說話の如き、人格神としての性質を示して居る。日本神話の場所を見ると高天原と地上界と黄泉とが重なる舞臺であるが、高天原と出雲地方とは特に主要なる舞臺であり、そこから歷史的に見て天孫民族と出雲民族との交涉を表して居るとも見られるのである。

神武天皇以後は歷史としての性質が多く、上卷の天孫降臨から引きつゞいて土地の擴大に力を注がれる。民族もしくは國家發展がその根幹を爲して居る。神武天皇の御東征、日本武尊の御征戰、神功皇后の新羅征伐はその力の發展を物語るのであり、そこに神話以來見える國家的精神が强調されて居る。

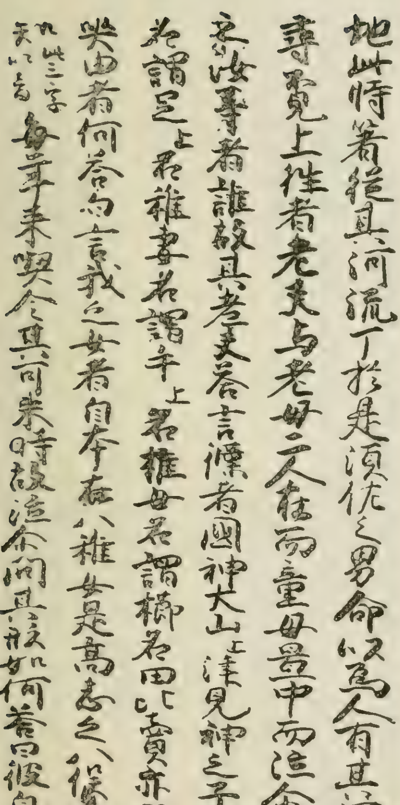
文章

更に文章といふ點から見ると、古事記は純粹漢文ではないが、さりとて純粹な日本文でもない。兩者を混淆した文といふ事が出來る。さうして歌なども一字一音で表して居るのである。全體として素朴な文體の上に具象的表現に富んで生々した潑溂さが見られる。

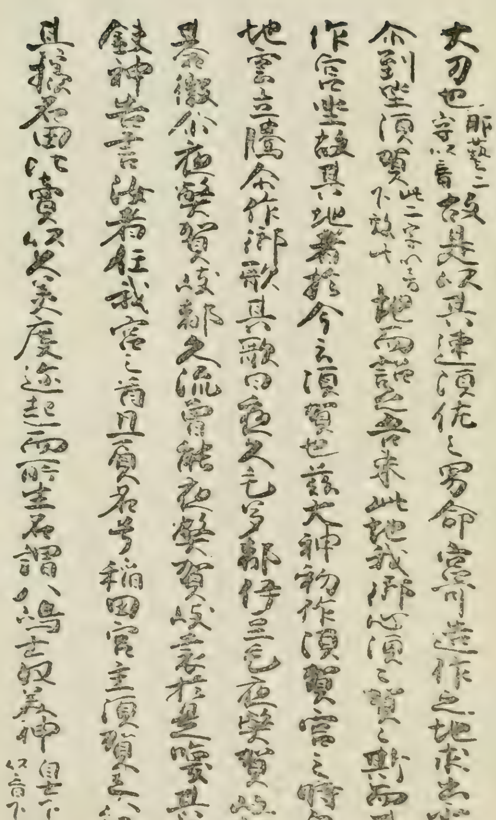
古本及び註釋書

終に古事記の古本及び註釋書に就いて一言しておく。古事記は古寫本が極めて尠いのであつて、大須眞福寺に藏する古寫本は現存のものでは最も古いものであるが、なほ南北朝時代の寫本であつて應安四年に賢瑜といふ僧が書寫したものである。其他應永三十一年寫の伊勢本や應永三十三年寫の伊勢一本などあるが、何れも室町時代のものである。次に註釋書としては室町時代の古事記裏書があり、徳川時代の初めに田安宗武の古事記詳說があるが、古事記全部の註釋としては本居宣長の古事記傳によつて始めて完成されたと言ふべきである。此書は明和四年三十八歳から古事記の註釋を始め、爾後十九年を經て天明六年五十七歳の時上卷を終へ、寛政四年六十三歳の時中卷が終り、寛政十年六十九歳の時下卷が完成した。首に總論として古事記の重んずべきこと、諸本註釋・文字・訓法また古道を論じた直毘靈をもそへ、次に本文に於て精密な註釋を加へて居る。が宣長は單なる古事記

の註釋を作つたのでなく、古事記傳によつて彼が懷抱して居る上代主義を極力主張せんとしたのであつて、徳川時代に起つた古學はこの一書を中心として國家的意識を強調して居るのである。古事記傳以後幾多現れた古事記の註釋も結局はこの古事記傳によつて作つたものであつて、吉岡徳明の古事記傳曆の如き、その最もすぐれたものであるが、古事記傳以外の新説は餘りない樣である。チアンブレンは古事記を明治十六年に英譯したが、其序論の中に宣長の偏した點を多少非難して居る。とにかく古事記研究に於ける宣長の努力は永久に滅びないであらう。


故此時箸從其河流下於是須佐之男命以爲人有其河上而
尋覓上往者老夫與老女二人在而童女置中而泣爾問賜
之汝等者誰故其老夫答言僕者國神大山上津見神之子焉僕
名謂足上名椎妻名謂手上名椎女名謂櫛名田比賣亦問汝
哭由者何答白言我之女者自本在八稚女是高志之八俣遠呂
知此三字以音每年來喫今其可來時故泣爾問其形如何答白彼目如赤加

加賀智而身一有八頭八尾亦其身生蘿及檜椙其長度谿八谷
［酸醤人］峽八尾而見其腹者悉常血爛也（此謂赤加賀知者今酸醤者也）爾速須佐之男命
詔其老夫是汝之女者奉於吾哉答白恐亦不覺御名爾答詔吾
者天照大御神之伊呂勢者也（自伊下三字以音）故今自天降坐也爾足名椎手
名椎神白然坐者恐立奉爾速須佐之男命乃於湯津爪櫛取成其
童女而刺御美豆良告其足名椎手名椎神汝等釀八鹽折之酒
亦作廻垣於其垣作八門每門結八佐受岐（此三字以音）每其佐受岐置酒
船而每船盛其八鹽折酒而待故隨告而如此設備待之時其八俣遠
呂智信如言來乃每船垂入己頭飲其酒於是飲醉留伏寢爾速
須佐之男命拔其所御佩之十拳劒切散其蛇者肥河變血而流故
切其中尾時御刀之刃毀爾思怪以御刀之前刺割而見者在都牟
［草那藝釼］刈之大刀故取此大刀思異物而白上於天照大御神也是者草那藝之


大刀也(那藝二字以音)故是以其速須佐之男命宮可造作之地求出雲國
爾到坐須賀(此二字以音下效此)地而詔之吾來此地我御心須々賀々斯而其地
作宮坐故其地者於今云須賀也茲大神初作須賀宮之時自其
地雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻
碁微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁於是喚其足名
鉏神告言汝者任我宮之首且負名号稲田宮主須賀之八耳神
且櫛名田比賣以久美度邇起而所生神名謂八嶋士奴美神(自士下三字以音下效此)

（眞福寺本　古事記　古典保存會刊行本に據る）

古事記と並んで上代の文献の中に最も注意さるべきは日本書紀である。日本書紀三十卷は國初から持統天皇の朝までの事を誌し、漢文を以て綴つてある。撰者に就いては續日本紀に「養老四年五月癸酉、先是一品舍人親王奉勅修日本紀、至是

功成、奏上紀三十卷系圖一卷」とあるので、舍人親王の撰たる事が分るが、今日は系圖一卷は缺けて居る。舍人親王は天武帝の第三皇子で、淳仁天皇の父君であり、太政大臣となつた。また太朝臣安麻呂を撰者の中に加へてある。その點は弘仁私記序に「夫日本書紀者一品舍人親王從四位下勳五等太朝臣安麻呂等奉勅所撰也。」云々と記されてある。かくて舍人親王が總裁として事を執り、太安麿呂を始め幾多の學者が集まつて之を編輯したものであらう。一體歷史編纂は國民としての自覺を促された時に起るものであつて、聖德太子の修史の事業を起されたのも、佛敎思想の勃興によつて國民思想の上に危殆を感ぜられた爲であらう。又天武天皇の修史事業を起されたのも、固有思想と外來思想との調和を必要とせられた爲であらう。かくの如くにして更に古事記の撰進となり、日本書紀の編輯となつたものと思はれる。古事記は卷數も少く歷史としては精細を缺き、かつ文體も當時に於てはもとより力をこめたものではなかつたのであつて、大規模な天武天皇の修史事業は直ちに日本書紀の編纂に接續するものであらう。

日本書紀の組織

日本書紀の組織を考へて見ると、三十卷の中、第一。第二は神代紀であつて、第三卷から第三十卷までは神武天皇から持統天皇までの歷史が記してある。神代紀

は古事記の上卷より遙かに文學的價値も劣つて居るが、第三卷即ち人皇紀以後は古事記が單に天皇の系譜を記した如き所が多くあるに反して極めて詳密である。かつ日本紀は一書曰一書曰として種々の記錄の說を擧げて、一つに統一してないところに、その歷史として史實を重んじた點が見られる。說話の大體の根幹は古事記と同樣であるが、神代卷に於ては古事記が出雲民族を强調して大國主命の多方面なる活動を敍述してあるのに、日本紀はこの點に筆を極めて簡略にした事が注意すべき相違點であり、神武天皇以後に於ては古事記は土地の發展・武力の發展を根幹として居るが、日本紀はこれとともに精神的・文化的方面、たとへば儒敎・佛敎の渡來、殖產工業の發達といふ方面にも力をこめて居るのは、古事記の傳說的であるに比して本書の歷史的である事を立證する。

更に部分的な事實の相違は極めて多いのであつて、たとへば古事記に見える倭建命が出雲建をあざむいて肥の河に水浴して木刀とすりかへて建を殺した時よんだとある「やつめさす出雲建が佩ける太刀つゞらさはまきさみなしにあはれ」の歌も、日本書紀では出雲臣の遠祖出雲振根が弟の飯入根を殺した時に時人がよんだと傳へて居る。かういふ風に相違して居る所があるのは、種々の記錄があつてそ

れらの間に相違があつた爲であらうと思はれる。さうして日本書紀は立派な漢文に直したため、文章のために事實をまげた點も見出されるが、然し上代文献としての價値はこれらのために沒却する事は出來ない。

なほ古事記・日本書紀に於て注意すべき點は、これらの中に上代歌謠の殘されて居る點である。古代歌謠の精髓は萬葉集に見出されるが、それ以前の歌謠は記紀によつて始めて知る事を得るのである。卽ち古事記に百十餘首、日本書紀に百三十餘首あつて、長歌・短歌その他各種の形式の整はない歌が多く見出される。而して歌謠の最初の發現である詠歎から出發して、抒情詩的の歌・敍事詩的の歌・敍景詩的の歌などに展開して居るのであるが、何れにもなほ素朴な心情を見る事が出來る。しかし日本最古の歌謠を傳へてゐるといふ點で、この二書は日本歌史の上に尊い資料を提供するものと言はなければならぬ。

や雲たつ出雲八重垣妻ごみにやへ垣造る其のやへ垣を
みつみつし久米の子らが粟生にはか韮一もと其根（それ）がもとそねめつなぎて撃ちてし止まむ
佐葦川よ雲たちわたり畝火山木葉さやぎぬ風吹かむとす
倭は國のまほろばたゝなづく青垣山こもれる倭しうるはし

命の全けむ人は疊薦平群の山のくまがしが葉をうずにさせその子
ちばの葛野を見ればもゝちだる家庭も見ゆ國のほも見ゆ

日本書紀の古寫本及び註釋書

古事記の最も古い本は鎌倉以後書寫されたものであるが、日本書紀は古來非常に重んぜられたために、遙かに古い寫本が傳はつて居る。竹柏園所藏の神代紀上殘闕一幅、田中勘兵衞藏の應神紀一卷は最も古く、平安朝初期のものであり、岩崎文庫藏の推古紀・皇極紀二卷、前田侯爵家藏の仁德・雄略・繼體・敏達紀の四卷、北野神社文庫の藏本等も古寫本として貴重なるものである。版本では慶長四年の勅版、慶長十五年の活字版があり、更に寛文年間に慶長活字版を覆刻整版にしたものなどがある。註釋も古來極めて多く日本書紀の講義である私記には養老以來行はれた樣に見えるが、今日傳はつて居るのは弘仁私記の序文、延喜私記の斷簡、年代不明の私記の神代から仁德天皇までのもの二卷、同じく應神天皇以後のもの一卷等である。而して講義が終ると宴を開く慣例があつて、その時には歌を詠んだ。その歌を集めたものが日本紀竟宴歌二卷である。鎌倉・室町時代には神道家のために研究されたが、それらの中で卜部兼方の作とする釋日本紀、及び一條兼良の日本紀纂疏は最も注意すべきものである。近世に於ては眞淵・宣長によつて古事

記が重んぜられる樣になつたが、なほ日本書紀研究も盛んに行はれた。それらの中主なる著述は谷川士清の日本書紀通釋、河村秀根の日本書紀集解、鈴木重胤の日本書記傳、飯田武鄕の日本書紀通釋などである。平田篤胤の古史傳も日本書紀研究には必要なる註釋である。更に古事記。日本書紀の歌だけを註釋したものには釋契沖の厚顏抄、荒木田久老の日本紀歌酒解、橘守部の稜威言別等がすぐれて居る。この日本書紀に引きつゞいて、續日本紀以下の六國史が平安朝に於て作られたが、是等は文學としてよりは歷史として見るべきである。續日本紀の中に見える宣命に就いては後節にこれを說く。

二、風土記

風土記の成立

上代の神話。傳說を語る文學として風土記がある。風土記の成立に就いては續日本紀に

和銅六年五月甲子畿內七道諸國郡鄕名著ニ好字一、其郡內所レ生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物具錄ニ色目及土地沃塉山川原野名號所由一、又古老相傳舊聞異事載ニ于史籍一言上

とあるのが重要なる記事である。後延長二年十二月十四日の太政官符に、再び風土記を撰進すべき命のあることが朝野群載に見えて居る。和銅の時に風土記を徴せられたのは、當時勃興した歴史編纂の機運に乘じて起つたものであらうが、また日本書紀を編纂するための材料として地方に求められたものであるかとも想像される。日本書紀と風土記とを比較して其の兩者の密接なる關係を思はせる句は多々ある。これは必ずしも風土記の文によつて日本紀が記したとも斷じ難いのであるが、しかしさう見る事もあり得るのである。

現存の五風土記

かうして風土記は各國から撰進されたのであらうが、今日殘つて居るものは極めて僅かであつて、播磨風土記・常陸風土記・出雲風土記・肥前風土記・豐後風土記の五種よりない。而してこの中完本であるのは出雲風土記のみであつて、他は零本に過ぎないのである。出雲風土記は終に「天平五年二月卅日勘造」とあるから、和銅より二十年後の天平五年に勘造したものであつて、和銅の時に撰んだのではない。地理的記述が多くて、舊聞異事は比較的に少いのであるが、國引の段の如きは興味ある傳說であつて、文學的にもすぐれてゐる部分である。出雲風土記に見えてゐる傳說の中心は素盞嗚尊と大國主命である。播磨風土記は卷首が缺けて居

るが、是は和銅撰進のものである事は栗田博士も言はれてゐる所であつて、種々の證を擧げて居るが、中にも出雲風土記には「鄕字者依二靈龜元年式一改レ里爲レ鄕」とあるのに、播磨風土記は里とのみあつて鄕とかゝれてないのは、靈龜元年以前の撰進たる證であると言はれて居るのは的確な說である。播磨風土記には興味ある傳說が多く含まれて居り、鄕土傳說の匂がゆたかである。播磨風土記に於ては大國主命も滑稽な臆病な神として現れて居る。常陸風土記も和銅撰進のものであるといふのが定說である。播磨風土記に比して文章も漢文的であり、多少文辭の修飾が見られる。常陸風土記には日本武尊の說話が中心となつて居る。肥前國風土記と豐後國風土記は和銅よりはおくれて居ると思はれる。殘つて居る部分も極めて少いのであり、文學的・傳說的の興味も少いのであるが、日本武尊や景行天皇が傳說の中心となつて居るのである。かくの如く其地方に關係の深い神によつて傳說が統一されて居るのは興味深い點であると思ふ。

逸文風土記

風土記の傳はつて居るものは以上の五ケ國であるが、外に仙覺抄や釋日本紀等に引用せられて居る部分がある。それらの蒐集は古來幾多の學者が試みて居る。卽ち今井似閑の萬葉緯や吉田令世の風土記抄、伴信友の古風土記逸文、栗田寬の古

風土記逸文考證などある。栗田寛には別に現存五國の風土記に標註を加へた標註古風土記の著があつて、これと古風土記逸文考證とを參考とすれば古風土記の大體を知る事が出來る。なほ日本總國風土記といふものがあり、信友の如きはこれを大いに重んじたが、その後世の僞書であることは、中山信名の前後風土記權論の辨・平祖衡の辨日本總國風土記によつて論ぜられてゐる。

風土記と説話

風土記は上代の地理書として、地方文化を知る貴重なる文獻であるが、傳說としては記紀のやうな統一ある說話形式でなく、遊離的な說話であり、殊に地名傳說が最も多い。地名傳說は地名を說明するための傳說であり、それには地名があつて傳說が生ずるものと、傳說があつて地名が生ずるものとあるが、風土記に於けるものは多くは地名があつて傳說が生じたものと思はれる。

米は爾の誤か

意宇となづくるゆゑは、國引きませる八束水臣津野命の詔はく、やくもたつ出雲の國は、布狹(さの)の稚國なるかも、初國小さく作らせり。かれ作り縫はむとのり給ひて、たくぶすま新羅の三崎を、國の餘ありやと見れば、國の餘りありとのり給ひて、童女のむなすきとらして、大魚の支太衝きわけて、はたすゝきほ振別けて、みつよりの綱うちかけて、しもつゞらくるやくるやに、河舟のもそろもそろに、國來國來と、引きき縫へる國は、こづのうち絕えよりして、八穗米支豆支の御埼なり。かくて堅めたてし加志は、石見國と出雲の國と

の堺なる、名は佐比賣山これなり。また持ち引ける綱は、薗の長濱是なり。また北門佐伎の國を、國の餘ありやと見れば、國の餘ありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太衝きわけて、はたすゝきほ振り別けて、みつよりの綱打かけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と、ひきき縫へる國は、多久のうち絶よりして、狹田の國是なり。また北門良波の國を、國の餘りありやと見れば、國の餘ありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太つきわけて、はたすゝき穗ふりわけて、みつよりの綱打かけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來とひきき縫へる國は、たゆひの打絶よりして、闇見の國これなり。また高志の都々の三崎を、國の餘ありやと見れば、國の餘ありとのり給ひて、童女の胸鉏とらして、大魚の支太衝きわけて、はたすすき穗ふりわけて、みつよりの綱うちかけて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來とひきき縫へる國は三穗の崎なり。持引く綱は、夜見島これなり。かためたてし加志は、伯耆國なる大神岳是なり。今は國引きをへぬとのりたまひて、意宇の杜に御杖衝立てて意惠とのり給ひき。かれ意宇といふ。（出雲風土記國引）

三、祝詞

祝詞の成立

古代祝詞の現存するものは、延喜式第八卷に收載されて居る二十七篇が主なるものであり、他に台記別記に中臣壽詞の一篇があり、日本紀顯宗紀に室壽詞がある。

延喜式は藤原忠平・藤原淸貫・大中臣安則・伴久永・阿刀忠行等五人が勅を奉じて延長五年十二月二十六日に撰進したものであるが、祝詞の成立はそれよりも極めて早く奈良朝以前であつたと思はれる。而して現在見られる祝詞がその製作の當初の原文と一致して居ない事は明かであつて、延喜式に拾錄せられるまでに幾度か改删を經た事は推定せられる所であるが、延喜式の編まれたよりかなりの以前に於て既に大體現存の祝詞のやうな形式を有つてゐた事を信じたいやうに思ふ。而してこの祝詞が何の時代に何人によつて製作されたかに就いては、從來種々論議された。が之に就いても確定的に製作時代を定めようとするものと、たゞ漠然と推定するだけに止むる態度とがある。六人部是香・加茂眞淵の如きは前者であつて、是香は大祓・大殿祭・御門祭は神武天皇の時に成つたといひ(大祓詞天津菅麻)、眞淵は祝詞考序の中に出雲國造神賀詞は舒明の朝に作られ、大祓詞は天智・天武の朝に成り、次に遷却崇神・大殿祭は奈良朝の初期に作られたと述べて居る。之に對して宣長は大祓詞後釋の中に出雲國造神賀詞と大祓とを古きとする說を肯定したが、是等に確定的年代を與へることを避けて「全く今式にのれる如く、定まりたるは大寶令の頃ならむか、はたそれよりやゝ前つかた天智・天武の御代のほど

などより定まれるも有りやしけむ。それはた確かにはいひ難し。」と述べて居る。今日より見ても眞淵の如く明確に時代を定める事は到底出來ないことであつて、たゞその內容形式などの考察と相俟つて漠然と新古の區別を想像するに止むべきものである。卽ち一方に於て祝詞の成立の重要なる動機となるべき祭祀及び神社の起原成立の上から考へ、一方に於て祝詞に現れた日本固有の思想生活や外來思想などを明かにして、その思想の發生等の考察の上から大體の年代を推定するに止まるべきである。是等の種々の方面の考察の上から出雲國造神賀詞や大祓詞、更に大殿祭・御門祭・祈年祭などが古いといふ大體の推定はつくのであるが、しかし何時の時代に現在の形となつたかといふ點、また其の前後といふ點も確然とはいへないのである。

更に祝詞の作者に就いても、もとよりある個人の作に歸することは不可能であるが、當時神祇官として中臣・齋部二氏が世襲的に之に當つて、國家的の祭祀の如きは二氏があづかつたらしく、隨つて祝詞の大部分も二氏の手によつて作られたものであらう。祝詞式の首に

凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞以外諸祭中臣氏祝詞

とあつて、御門・御殿の如きは齋部氏の祝詞らしく、齋部廣成の作である古語拾遺と本文の中の語に註を加へてゐる所など一致して居る。而して是等祝詞を奏するに當つて、「前ㇾ祭進ㇾ官經二處分一然後行ㇾ之」とあるから多くの人の改修を經て神前に唱へられたのであらう。なほ朝廷の神祇官の與らない、たとへば出雲國造神賀詞は出雲國造の朝廷に參賀して讀んだのであつて、その國造に屬するものの作であらうと考へられ、東西文寸部献橫刀時呪は東西文寸部の製作する所であらうといふが如き事はまた想像される所である。

性質及び組織

次に祝詞の性質及び組織を考へて見るに、祝詞は祭祀の時神の前に於て唱へるものであつて、その目的には種々の方面があるが、祈願もしくは祝福の意が著しきものと思はれる。祝福の意を持つたものは特に壽詞と稱せられる。祝詞は人が神に對して祈願もしくは祝福するのである。が、又神の人間に對する託宣の如き意味に解する説もある。祝詞の語義は「のることば」であらう。「のる」といふのは本來述べることであつて、人間の意志を神に對して申すのである。祝の字を當てるのは、祝の本來の意義は言を以て神に告ぐる意、もしくは神に仕へ神を饗し言を告げて神を悦ばす人の意であつて、「いはふ」といふのは後出の義で、所謂巫祝の

祝であらうと思はれる。かくて祝詞に於ける「のる」といふ意義は單に述べるのではなくて祈願の意を含んで居るのであらう。而して祝詞の形式を見ると、主なる部分が二つに分れ、それに序と結とが附加されて居る。最初の序の部分に於て集れる親王・諸王・諸臣・百官人等に向つて「諸聞食止宣」と言ひ、次に「皇神前留白久」といふ二つの言葉が來り、終の結に於て「稱辭竟奉止申」「天津祝詞乃太祝詞事以氐稱辭竟奉止申」又は「如此久申進止宣」といふ言葉で終つて居る。而して序の「諸聞食止宣」といふ言の結としては「宣」で終り、「神等前留申久」といふ言の結としては「稱辭竟奉止久申」で終つて居るやうに見える。而して序に於て神嘗祭の如く「皇太神乃太前留申進留天津祝詞乃太祝詞平神主部物忌等諸聞食止宣」になつてゐる例もある。この「宣」の方を宣命體の祝詞といひ、「申」の方を上奏文體の祝詞といひ、宣命體のが古い形式であるといふ事は肯定し得るにしても、一の祝詞にこの兩方の形式が存して居るのは矛盾のやうに見えるが、祝詞を神に申す言葉であるとすれば、「神の前に申さく」といひ、「稱辭竟奉止久申」といふのは祝詞の主體であつて、一方の「諸聞食止宣」と宣るのは多くなみ居る神主等を代表して神に申す場合に、先づ一座のものに命令する言とも解釋されるであらう。斯の如く此の序と結とは數

種の異なつた形式からなつて居るのであるが、次に本文となるべきものを檢するに、はじめの部分は祝詞の奏せられる神を主として其神のなした事業、又大祓の如きに於ては大祓の行はれる理由、卽ち人はいかにして穢が生ずるかに就いて語つて居る。この部分は古事記などに見ゆる神話的事業を語つて居る。鎭火祭に於ては伊弉冊尊が火を產みて死に給ふ神話的事柄を語つて居る。この條には古事記・日本書紀の所傳と異なつてゐる部分も多い。而して後半はかくの如き功業ある神に對し之を祝福し、もしくは祈禱する祝詞の主なる目的を表して居るのである。而してこの祈禱には多く幣物を捧げる事が見えて居る。幣物を捧げて神を祭るのである。卽ち前半の神話を語る所は祝詞として見れば副の部分であるが、こゝに建國の由來を語り罪惡の根源を說き、祝詞の文學的興趣の豐かさを增して居る。後半は祝詞としては極めて重要なる眼目であるが、幣物をならべて寧ろ興味としては前半に劣るのである。故にこの兩者相俟つて祝詞が一箇の統一ある組織をなして居るのである。而してそこに人間が神に呼びかけて神を讚美し祈禱して人間の現實生活をより淸くより幸福にしようとする意志を神に表示するのである。祝詞の奏せられるのは、神に對する祭祀又はそれに類する儀式の行はれる場合で

ある。従つて祝詞の神は神社に祭られた神と一致する。卽ち絕對神の如きは多く見られずして國家的祖先神・民族的祖先神などが最も重んぜられ、自然神にしても農業に關係ある神などが重んぜられるのであつて、國民生活に密接なる關係ある神が最も崇拜されるのである。而して祝詞に表れた思想のうち最も注意すべきは穢・罪・災及び之に對する祓の思想である。現實生活の中から一切の惡とか穢れとかを消滅させて淸淨なる世界を作り出すこと、これが祝詞の中心思想である。祝詞の祈願の對象は國家の場合も家の場合も又個人の場合もあるが、何れにしてもその家なり國家なりが災なくして安穩に、而も淸くあることを祈願するのであり、同時に國民の生業としての農作の豐なる事に對する祈願が行はれてゐる。而して壽詞に於ては平和なる國家・平和なる家に對する祝福の思想が見られるのである。

更に文學として祝詞を見ると敍事的な部分が多いが、中心とする所は抒情的であらう。又韻律的要素ももとより多いが、詩歌形式とは異なるものがある。而して祝詞の宗敎文學としての特質は更に重要なるものがある。この宗敎文學としての性質上、表現の上にも莊重なる格調の美が現れてゐるのであるが、之はその內容

から見ても超現實的な神の世界の事を扱つて居るためもあらうが、其表現が抽象的であること、又形式が如何にも整齊して居り、部分的技巧にも繰返・對句などの修辭を用ゐてゐる事も原因すると思はれる。が是等の點は一面には個性的感情の表現を妨げて類型的となり、生々しい實感から遠ざかつて居るといふ弊も生ずるのであつて、そこに文學としての多くの價値を與へる事の出來ない點が生ずるのである。

祝詞の註釋書

終に從來の祝詞研究を見るに、祝詞は神道の上には注意すべきものであるから、この方面から多く研究せられ、大祓詞に關する研究は殊に多い。が研究として最も注意すべき最初の著作は加茂眞淵の祝詞解・祝詞考である。この以前にも神道家の度會延佳の如きは中臣祓瑞穗抄を萬治年間に作つては居るが、未だ餘り注意すべきものはない。眞淵は大膽なる直觀的態度で、註釋の外に祝詞の成立年代の推定を試みた。未だ從ひ難いものではあるが、この大膽なる試みは祝詞研究の機運を促した。本居宣長は祝詞中の重要なる大祓詞と出雲國造神賀詞との註釋を試みて、眞淵説の批評をもして年代推定説に反對した事は前述した所である。宣長の大祓詞後釋について其の門の藤井高尙は大祓詞後々釋を著し、伴信友も中臣祓詞

要解を作つて居る。殊に平田篤胤は祝詞の神道史的價値を古史徵開題記の中に主張して居るが、祝詞正訓の如きを作り、古史成文には祝詞の本文から多く材料をとつて居る。六人部是香の如きも大祓詞天津菅麻を作つて、其成立上の考察をもなして居るが、近世に於ける祝詞研究は鈴木重胤の祝詞講義に至つて精細の域に達したと言ひ得るのである。

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣天皇朝廷爾仕奉留比禮挂伴男手襁掛伴男靫負伴男劍佩伴男伴男能八十伴男乎始氐官々爾仕奉留人等乃過犯家牟雜々罪乎今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎諸聞食止宣高天原爾神留坐皇親神漏伎神漏美命以天八百萬神等乎神集集賜比神議議賜氐我皇孫之命波豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食止事依奉岐如此依志奉志國中爾荒振神等乎波神問志爾問志賜神掃爾掃賜比氐語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氐天磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐天降依佐志奉支如此久依佐志奉志四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定奉氐下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氐皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氐天之御蔭日之御蔭止隱坐氐安國止平氣久所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜々罪事波天津罪止八畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戶許々太久乃罪乎天津罪止法別氣氐國津罪止八生膚斷死膚斷白人古久麗犯己母罪犯己子罪犯母與子罪犯子與母罪犯畜罪昆蟲乃災高津神乃災高津鳥乃災畜仆志蠱物爲罪許々太久乃罪出武如此出波天津宣事以氐大中臣天津金木乎本打切末打斷氐千座置座爾置足波志氐天津菅曾乎本刈斷末刈切氐八

針留取辟氐天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮
如此久乃良波天津神波天磐門乎押披氐天之八重雲乎伊頭千別留千別氐所聞食武國津神波高山之末短山之末留上坐氐高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氐所聞食武如此所聞食氐波皇御孫之命乃朝廷乎始氐天下四方國留波罪止云布罪波不在止科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹拂事之如久大津邊留居大船乎舳綱解放艫綱解放氐大海原留押放事之如久彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氐打掃事之如久遺罪波不在止祓給淸給事乎高山之末短山之末留利佐久那太理留落多岐速川之瀨坐須瀨織津比咩止云神大海原留持出奈武如此持出往者荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會留坐須速開都比咩止云神持可可呑氐武如此久可可呑氐波氣吹戸留坐須氣吹戸主止云神根之國底之國留氣吹放氐牟如此久氣吹放氐波根之國底之國留坐速佐須良比咩登云神佐須良比失氐牟如此失氐波天皇我朝廷留仕奉留官々人等乎始氐天下四方留波自今日始氐罪止云布罪波不在止高天原留耳振立聞物止馬牽立氐今年六月晦日夕日之降乃大祓留祓給比淸給事乎諸聞食止宣
道留持退出氐祓却宣。（祝詞、大祓）

第二章　後期

一、萬葉集

萬葉集は上代文學の精髓であるばかりでなく、日本文學史上に於ける有數の文學

書である。記紀の歌に端を發した詩歌がこゝに至つて抒情詩として行くべき極點に達したといふ事が出來る。

萬葉集の成立

萬葉集の撰者は從來橘諸兄が天皇の命によつて撰んだといふことが榮花物語に見えて世に行はれてゐたが、平安朝末期の藤原清輔の袋草紙や藤原定家等から大伴家持の私撰説が行はれ、仙覺は橘諸兄・大伴家持兩人說をとなへた。而して元祿になつて契沖が多くの根據を擧げて家持私撰說を唱へてから多くの學者は之に據つた。この間に春滿は諸兄の撰に家持の集の混じたものとし、眞淵もこの說に替して萬葉集に新古の二部ありとした。宣長も全部卷々之考に大伴家持の二度に撰したものとした。現在に於ても大伴家持が撰定の上に主に力を注いだことは大體承認せられて居るが、卷一・二の勅撰說も提出せられて居り、必ずしも一人の撰とすることは出來ない。次に撰定の時代に就いて見るに、古今集に「奈良のみかどの御時」とあるのを、平城天皇をならの帝と申したのであるといふ說も平安朝末の顯昭によつて稱へられ、最近にもこの說を唱へる人があるが、孝謙天皇の天平寶字三年正月の歌までであるから、ほゞ成立したのは稱德天皇の頃であり、更に平安時代に至るまで改定を加へられて現存の形になつたものであらう。要するに

作者ならびに年代に就いてはなほ考察の餘地がある。

萬葉集二十卷は長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合せて四千四百九十六首（この歌數は數へやうによつて相違が起る。この計算は萬葉集古義に據つた）を含む大歌集である。後世に於ては長歌は衰へて古今集にも數首見えるだけであり、その他の歌集にも餘り長歌は見る事を得ないが、萬葉集には長歌が二百六十餘首もあり、かつ後世に亡びた旋頭歌があるといふ事はその形式に於て萬葉集の變化に富む所以である。而してその分類を眺めると、大體に於て雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌、四季、四季相聞の六部に分れて居る。古今集以後は四季、戀、哀傷、羇旅、祝賀、雜などに分れたが、萬葉集の分類に暗示を得て居る事は明かである。

その年代を考へて見るに、作者も年代も不詳の歌が多くあるが、明かなものに就いて見れば仁德天皇から淳仁天皇の天平寶字三年まで約四百五十年を含んで居るが、天武以前の歌は少く、主として持統天皇から淳仁の頃まで約七十年間の作を含んで居る。二十卷の中第一卷と第二卷は全體の組織が整然として居るから最も古い卷であらう。卷五は山上憶良の歌が多く見えて居るから憶良に關係の深い卷であらう。卷九や卷十六には傳說を取扱つた歌が多い點に、民衆詩として注目す

べきものがある。卷十三は古い抒情歌として注意すべき卷であり、卷十四は東歌を含んで居る點に興味があり、卷二十にも防人の歌を多く含んで居るのは、家持が卷十四にならつて集めたものであらう。卷十七・十八・十九・二十は家持の日記の如き卷であらう。

用字法

萬葉集に就いて更に注意すべき事はその用字法である。卽ち漢字を以て音を表すのであつて、これにも音を表すものと訓を表すものと、更に其の他のものとがある。音を表すものにも單を伊加豆知と表す正音と、「安印」を「アイ」と訓する樣な略音とがあり、訓を表すものにも「天地」を「アメツチ」と訓する如き正訓と、淸明を「アキラケク」と訓する如き義訓とがある。更に、荒礒を「アリソ」と訓ずる如き約訓、蟻の字で在を現す如き借訓もある。更に又「山上復有山」として「イヅ」と訓じ、「馬聲蜂音石花蜘蛛」を「イブセクモ」と訓ずる如き戯訓もある。是等の種々な使用法によつて表現する所に、種々な不便もあつたらうと思はれるのである。

萬葉集の歌人
柿本人麿

次に萬葉集の中で主なる歌人を見ると、第一に柿本人麿がある。人麿は持統・文武朝頃に朝廷に奉仕した歌人であつて、官は極めて低かつた。萬葉集の中で歌の

數も多くかつ長歌に富んで居る。其の長歌は氣魄の力强さと格調の雄大なる事を以てすぐれて居る。或は近江荒都を歎き、天皇・皇太子等に供奉して諸所の自然をうたひ、或は妻と別るゝを悲しみ、亡妻を哀歎するなどの取材を扱ふに、先づ天地の創造より筆を起し、對句・繰返しなど豐麗なる修辭を用ゐながら、强い情熱をうたつて居る。その短歌も羈旅の歌の如き流るゝやうな諧調を以て自然の姿を表さうとして居る。その人生に對する態度や感情は多少類型的な所があり、生々とした個性味の乏しい嫌はあるが、その規模の大きい點に於て匹敵するものはない。之に對して山部赤人は優しい自然の愛にひたつた自然歌人である。赤人も傳記は極めて不明であるが、その奉仕した年代を見ると人麿よりはやゝおくれて居る。彼は歌も少くかつ長歌も短篇が數篇あるに過ぎないのであつて、その特質は短歌にあるのである。赤人の眺めた自然は雄大な自然でもなく靜寂な境地にも深く入つてゐない彼の眺めた自然は優美な境地であつた。而してその眺め方は自然と一に融合する。人麿の自然の歌には自己が中心となつて其周圍に自然が展開されるのであるが、赤人には自己は姿を隱してたゞ自然の中にのみひたつて居る。こゝに自然詩人としての純粹さがある。更に萬葉集の中で外來思想の影響を比較

山上憶良

的多くうけて居る歌人に山上憶良と大伴旅人とがある。山上憶良は若き時遣唐小錄として渡唐したことが見えて居るから、その間に儒敎的敎養を得たものと思はれる。筑前守に赴任したのは餘程老年であつたと思はれる。當時太宰帥であつた大伴旅人との交遊は深く、憶良から奉つた歌も多い。それらの間になつた歌が萬葉集卷五に收められてあるのであつて、旅人と近づいた事が彼の萬葉歌人の有力なる一人となさしめた原因であらう。それでなければ今は亡びた類聚歌林の編者として名を止めたに過ぎないかも知れない。彼は地位としても高きを得なかつた上に、痾疾のために苦しみ貧窮のためにも艱んだ。加ふるに現實の執着から超然たり得なかつた彼には、事毎に憂悶の種ならざるはなかつた。彼の歌は貧窮問答を始めとして彼の境遇・思想から産出されたものであつた。彼には強い理智的な反省的な心境のためにその歌に觀念的な歌があるが、多くは人性の奧底から發した沈痛な響がある。赤人を自然詩人とすれば彼は人生詩人と言ふべきであらう。

大伴旅人

而して憶良の思想的根柢に儒敎的精神があるとすれば、老莊思想の影響を受けた歌人として大伴旅人を擧げる事が出來る。大伴旅人は名家大伴家に生れ、祖父は右大臣であり、父も大納言であつた。彼も又從二位大納言にまで昇つた。地位は

高きを得、性格は明るく快活であつたらしく、其の歌は安易に過ぎると思はれる迄明朗である。太宰帥になつて筑紫へ赴任してから妻に別れたが、その時の歌にも悲哀を明るい色調で現して居る。從つて彼がよんだ讃酒歌も享樂の底にある悲痛なる心情はなくして老莊の思想を知識的に唱つたに過ぎないやうに見える。

次に旅人の子の大伴家持は萬葉集の撰定にも與つて力あるのであるが、更に歌も極めて多く殘つて居り、卷十七以下の四卷は家持の歌が主になつて居る。かつその傳も比較的明かに知られる。彼は初め宮内官となり、次に越中に國司として赴任し、後兵部卿として中央官に任じ、更に國司ともなつたが、晩年は左遷の悲運にも幾度かあひ、延暦四年に死して葬られない事十餘日にわたつた。宮内官時代は彼の歌の第一期をなし多感な戀愛陶酔の時代といへる。その歌は卷三・四等に見えて居る。越中守時代は彼の第二期をなし、長歌をも多く詠じ、又種々の題材をうたつて居るが、平板な散文的に流れた歌が多い。兵部卿時代はこの平板な散文的な態度から、再び物の本質をつかまうとするに至り、自然觀照の歌にも秀れた作が多くなつた。而して更に地方官に赴任してからは歌を殘してゐない。忠君の心厚く家を思ふ情の深き彼は、行爲の人として詩歌に親しまなかつた事もそ

の歌を傳へない理由であると思はれる。彼は歌才は比較的乏しく、人麿や憶良に私淑してその詞句を襲用したものも多いが、努力を以て展開を求めてやまなかつた彼には、強い人性がひらめいて居る。以上の樣な歌人の外にも高市黑人の如きは歌數は尠いが、其の歌は深い自然觀照の域に入つて居り、高橋蟲麻呂の如きは、明かに名の記してある歌に卷六にある天平四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋蟲麻呂作歌一首并短歌とある二首のみであるが、外に高橋蟲麻呂之歌集中出とあるのが蟲麻呂の作と認められるのである。彼は東國地方に任にあつた事があるらしく、その地方の傳說を多く詠じて居る所に傳說歌人としての特異な色彩を放つて居る。

高市黑人

高橋蟲麻呂

又女歌人としては旅人の妹で家持の叔母に當る坂上郎女は、女歌人の中で最も多くの歌を殘し、又女性として多方面の題材をうたつて居る。理知の勝つた冷靜な女性を思はしめる。又天智天皇と天武天皇とに愛された額田女王の歌も、優雅な自然愛の精神が見えて居り、茅上女郎や笠郎女の如きは、強い情熱的な戀愛をうたつた女歌人としても見る事が出來る。是等の歌人の外に作者未詳の歌にすぐれた歌が多くある。東歌の如きにはその點に於て注意すべきものが多く、卷十三の

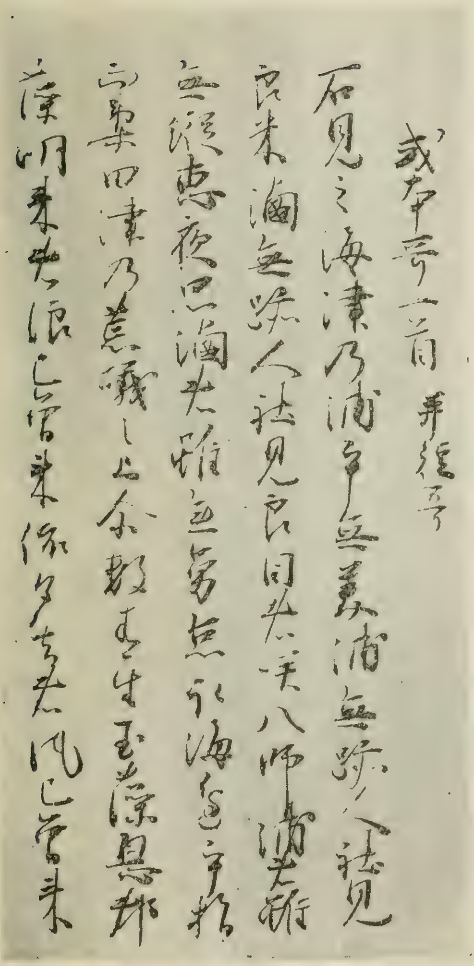
女歌人

抒情歌も素朴の中に強い力の籠つた歌が多い。

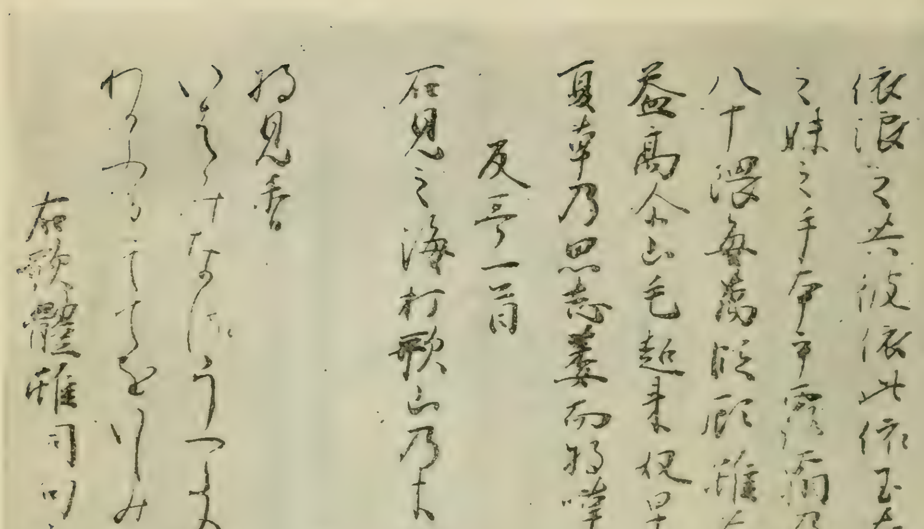
み吉野のきさ山のはのこぬれにはここだもさわぐ鳥の聲かも
ぬばたまの夜のふけゆけば久木おふる清き河原に千鳥しばなく

山部赤人

春の野にすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける



柿本人麿



依浪之共彼依此依玉藻成依宿之妹
之手本乎露霜乃置而之来者此道之
八十隈毎萬段顧為騰弥遠尓里放来奴
益高尓山毛越来奴早敷屋師吾嬬乃児我
夏草乃思志萎而将嘆角里将見靡此山

反歌一首

石見之海打歌山乃木際従吾振袖乎妹
将見香

いはみのうみうつたのやまのこのまより
わかふるそてをいもみつらんか

右歌體雖同句々相替因此重載

（金澤本萬葉集に據る）

思子等歌一首　　山上憶良

瓜はめば子供思ほゆ栗はめばましてしぬばゆいづくより來りしものぞまなかひにもとなかかりて安寐(やすい)しなさぬ

反歌

しろがねも黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

わかければみちゆきしらじまひはせむしたべの使おひてとほらせ

大伴旅人

しるしなき物を念はずは一杯の濁れる酒をのむべかるらし

此の世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にもわれはなりなむ

妹として二人作りしわがしまはこだかくしげくなりにけるかも

こゝにありて筑紫やいづく白雲のたなびく山の方にしあるらし

大伴家持

朝床にきけば遙けし射水河朝こぎしつゝうたふ船人

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯なくも

わが宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけきこの夕かも

敷島のやまとの國にあきらけき名におふとものを心つとめよ

作者未詳

旅人のやどりせむ野に霜ふらば我子はぐくめ天の鶴むら

しなが鳥猪名野をくれば有間山夕霧たちぬ宿はなくして

古寫本及び註釋書

終に萬葉集の古寫本を見ると、平安時代の書寫では桂宮本萬葉集は卷四の殘闕一軸で古く桂宮に藏せられてゐたもの、金澤本萬葉集は卷二と卷四との零本であり、天治本萬葉集は卷十三が殘つて居り、天治元年六月に書寫したものである。更に藍紙本萬葉集は薄藍漉紙に書いてあるために名づけたもので、卷九の大部分と卷十八の斷片とがある。元暦校本萬葉集は元暦元年に校合した古寫本で一・二・四・六・七・九。十・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十四冊が傳はつて居る。其他鎌倉以後の寫本も數多くある。又刊本としては活字附訓本と活字無訓本などが近世の初めに刊行され、活字附訓本によつて寛永二十年に通行本が覆刻された。次に萬葉集の研究は古くから行はれ、殊にその訓法に就いては古く平安朝の天暦五年に坂上望城・源順・紀時文・大中臣能宣・清原元輔等梨壺五人によつて古點が作られ、更に平安時代の末になつて大江佐國・藤原孝言・大江匡房・源國信・源師賴・藤原基俊等により次點か施されたが、猶訓の附せられなかつた歌に仙覺が新點を

加へた。この後も訓法は多くの學者によつて試みられたが、一方註釋の方面に於ては鎌倉の仙覺の萬葉集註釋は最初の優れた著と言ひ得べく、その後宗祇・由阿など註釋を試みたが、特に優れたものはなかつた。近世の初めになり下河邊長流の萬葉集管見、北村季吟の萬葉拾穗抄、契沖の萬葉代匠記など作られたが、萬葉代匠記は一新生面を開いたものである。その後荷田春滿の萬葉僻案抄、荷田信名の萬葉童蒙抄など出で、その系統を引いて賀茂眞淵の萬葉考・冠辭考出でて萬葉研究が一般的に鼓吹され、その門下の本居宣長の萬葉集玉の小琴、荒木田久老の萬葉集槻落葉、橘千蔭の萬葉集略解等が成り、京都の香川景樹の萬葉集捃解、富士谷御杖の萬葉集燈、江戸の橘守部の萬葉集墨繩・萬葉集檜抓、岸本由豆流の萬葉集攷證がある。夫等が集大成されたのが鹿持雅澄の萬葉集古義であり、それに次で出た木村正辭の萬葉集美夫君志など註釋書として最も注意すべきものである。

佛足石歌碑の歌

なほ奈良時代の歌としては萬葉集の外に佛足石歌碑の歌二十一首がある。之は奈良藥師寺にある金石文であつて、奈良時代の刻である點に殊に貴い資料である。其歌は形式に於て短歌に一句多く謠物としての性質を示して居る。內容は佛敎思想をうたつたもので概念的に失して居るが、格調の流麗愛すべきものがある。一

字一音で現してあるが假名混り文で二つの例を擧げる。

みあとつくる石の響は天に到り地さへ搖れ父母が爲に諸人のために
雷の光の如きこれの身は死のおほ君常にたぐへり畏づべからずや

神樂・催馬樂もこの期の作があると思はれるが、今は平安時代に讓つておく。

二、宣命

宣命の成り

宣命は天皇から臣下に賜ふ詔であつて詔勅と同じであるが、漢文で賜うたものを特に詔勅といひ、所謂宣命體で書かれたものを宣命といふのであつて、續日本紀に見える六十二の宣命を主なる文献とする。しかし日本紀に見える詔は漢文で書かれてゐるけれども、之は日本紀の編者が漢文に改めたもので、最初書かれたものは宣命體であつたと思はれる。續日本紀に見える宣命は文武天皇から光仁天皇に至るまでのものであつて、純粹に奈良時代の製作である。普通宣命と稱するものは大君から臣下に賜ふものであるが、神社又は祭祀の如き場合に賜ふものも宣命といふ。而して宣命は普通黃紙に書き、伊勢大神宮には縹紙を用ゐ、賀茂社

には紅紙を用ゐると定められてあつた。かくの如き神社などに用ゐる宣命は、祝詞と性質が類似して來るのであるが、たゞ大君から賜ふと否とによつて相違するのである。宣命はかく天皇の御心を表したものであるが、之を作るものは內記であつてこれを讀むものも宣命大夫又は宣命使といふ參議以上の高官であつた。而して宣命譜といふ如きもののあつたことが見えて居る所を見ると、多少抑揚を附してよまれた事が想像される。

更に所謂宣命體といふのは日本文であるが、手爾乎波など普通假名で書くべき所に漢字を一字一音式に用ゐて小さく書くのである。たとへば

大臣明日者參出來仕牟止待比賜閒爾休息安麻利弖參出末須事波無之留

の如く、手爾乎波又は活く言葉は普通小字で書くが、

受被賜而（けたまはりて）

將知食國（しらさむをすくに）

將嗣坐御世名（つぎまさむみよのな）

の如く小字を用ゐない場合もある。かくの如き文體が何時頃作られたかは疑問であるが、今日ある材料では文武天皇卽位の宣命の如き最も古いものであると思は

れる。奈良時代には普通用ゐられた文體と見えて正倉院文書の中にはしば〳〵散見する。正倉院文書の中に孝謙天皇御讓位の宣命を書寫したものが存して居るが續紀にあるのと多少文字の異同がある。

宣命の內容

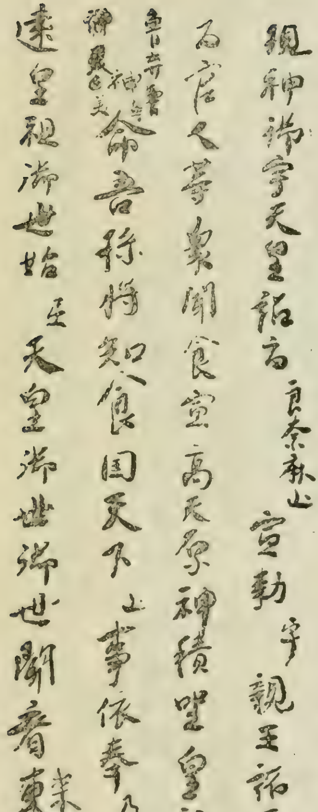
續紀にある宣命は內容から見て大體五つに分たれるかと思ふ。卽ち第一は皇室に關する宣命であり、第二は皇室對臣民の交涉に關する宣命であり、第三は對外關係に關する宣命であり、第四は宗敎もしくは一般儀式に關する宣命であり、第五は死に關する宣命である。この中最も多いのは第一・第二に關する宣命であつて、宣命なるものの目的が天皇と臣民との間に關するものである以上當然のことである。第三以下は類は少いのであるが、死に關する宣命の如きには文學的に極めてすぐれたものがある。

而して宣命を全體的に見ると、內容の上から見て、第一に國家を中心としてそこに平和なる親子の如き君臣關係が存する事に氣付く。もとより宣命は天皇の御言葉であつて臣下からの言ではないが、しかも天皇が常に國家を中心として御自身を輕く見給ひ、天皇の位にある事を常につゝしみおそれて、臣民のために御心をいためられ、功臣には感謝の心をもらされ、柔順ならざるものに對しても尚反省

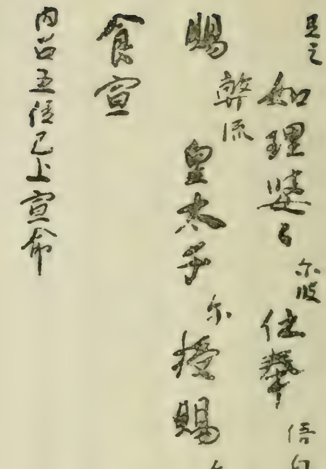
せしめ、而も反省を與へても服從せざる時は涙を吞んで國家のために制裁を加へられるが、出來るかぎり制裁を輕くして居られるのである。この言を拜する臣下が感泣して忠を誓つた事は推察に餘る所であつて、奈良時代の末期には政治史的に見て種々暗い所もあつた事は歷史に見える所であり、宣命の上にもさういふ事實が多少見えるのである。天皇の御心は常に國家を中心として、臣民を子の如く慈まれる御心は燃ゆるが如くであつた。かくの如きは日本固有の國家的思想である。第二に宣命にはかくの如き固有の美しき君臣關係を基礎として作られる思想とともに、外來思想の影響も祝詞の如きよりは遙かに多く見られるといふ事である。外來思想の中でも殊に佛敎思想はその著しきものであつて、從來の神を中心とする思想と對立的に行はれてゐる事が知られ、而してある場合には神よりも寧ろ佛を重んぜられ、又は神と佛とを融合せしめて神佛融合の觀念を表して居るのである。而してこの佛敎思想とともに道家思想・陰陽思想なども しば〳〵見えるのであつて、この點などより見て祝詞よりは思想的に見て後のものであるといふ事が出來、萬葉集殊にその中期以後の歌と同じ時期に屬すべきものと思はれる。第三に之を形式的の方面から見る時帝王の御言葉であるといふ點に於て、又全體

の形式が祝詞の如く整齊して統一されて居り、言葉も抽象的に長々とした言葉から成つて居り、かつ感情の表現が死を悼む宣命などを別として激越でないといふ如き點からみて、やはり莊重の感を與へるのである。但し繰返・對句の如きは祝詞よりも少く事柄も祝詞よりは具體的であるといふ點に於て祝詞と相違する所もあるが、全體から見て、殊に形式的から見て祝詞と同一に論ぜらるべき性質を餘程多くもつて居るものと思はれるのである。

なほ宣命の研究としては、本居宣長の歴朝詔詞解が殆ど唯一のすぐれたる註釋書である。



国高御座乃業止奈母随神所念行之止宣天皇勅衆聞食宣　加久聞看来天日嗣高御座乃業波天坐神地坐祇乃相宇豆奈比奉相扶奉事尓依弖之此座平安御坐弖天下者所知物尓在自止奈母随神所念行須　然皇止坐弖天下政乎聞看事者勞岐重支事尓在家利　年長久日多久此座坐波荷重力弱之弖不堪負荷　加以挂畏朕婆婆皇太后朝尓母人子之理尓不得定省波朕情母日夜不安　是以此位避弖間乃人尓在



（正倉院古文書南京遺文に據る）

三、懷風藻と日本靈異記

大和時代の作品はすべて漢字で記されてあり、從つて漢文も多く作られて居る。萬葉集の題詞がすべて漢文で記され、殊に憶良や旅人の如きは長い漢文の序などを記して居る。而してこの時代に於ける漢詩文を集めたものは懷風藻がある。懷風藻一卷は弘文天皇を始めとして六十四人の詩百二十篇を含んで作家には簡單な傳が附してある。六十四人の中萬葉集に名の見えるものが河島皇子・大津皇子・大伴旅人を始めとして二十人ほどある。成立の年月は自序によつて天平勝寶三年十一月である事がわかり、また「余撰二此文一意者、爲レ將レ不レ忘二先哲遺風一故以二懷

懷風藻

風ニ名レ之」とあるによつて懐風藻の意味も明かである。而してこの書の撰者を淡海三船とするのは林春齋の本朝一人一首に始めて見える說であるが、その根據なき事は平出鏗二郎の鏗痴集に論ずる所である。葛井連廣成說を立てる者もある。懐風藻の作家はほゞ年代によつて先後を立ててあるが、廣成が最後にある點から見て一說として聽くことが出來る。懐風藻の最後にある亡名氏の歎老一首は故友多く世を去つた後薄官である撰者の感慨をうたつたと見られるであらう。

懐風藻の詩材から觀察して見ると、第一に宴に侍する詩、殊に天皇の詔に應じてよんだ詩が多く君德を美し或は自然をたゝへて居るが、類型的で、個性味が乏しい。第二に自然にかくれ又は諸所の自然を誦したものも多く、叙景詩と稱すべき詩であるが、純粹の客觀詩は少く自己の主觀を寓したものが多い。第三に所感を述べた主觀詩と稱すべきものがあるが、自己の不遇をいたんだ如き詩もあり比較的個性味に富んで居る。外に少數ではあるが遊獵の詩或は長壽を賀した詩或は望鄉詩又七夕の詩も數首あるが、最も多いのは宴會の詩と叙景詩とであつて、萬葉集の如く戀愛をうたつた詩は懐風藻には見られないのである。次に作者を見ると數奇なる短き生を送られた大友皇子・大津皇子の詩は心を動かすものがある。又

藤原宇合・石上乙麻呂も詩人としてすぐれて居り、石上乙麻呂は朝譴によつて南荒に飄寓し、その間に銜悲藻兩卷を編んだ事が見える。今は傳はつて居ないが、これこそ日本詩集の最初のものであらう。懷風藻には四首殘つて居るがすべて流離の間にうたつた詩で哀愁の情に堪へざるものがある。奈良時代後期に於ては淡海三船・石上宅嗣がすぐれて居るが、懷風藻には其の詩が見えて居ない。經國集などに見える。唐に於て名聲をあげた安倍仲麻呂も此の時代の詩人である。

臨終　　大津皇子

金烏臨西舍　鼓聲催短命　泉路無賓主　此夕離家向

五言奉西海道節度使之作　　藤原宇合

往歲東山役　今年西海行　行人一生裏　幾度倦邊兵

五言秋夜閨情一首　　石上乙麻呂

他郷頻夜夢　談與麗人同　寢裏歡如實　驚前恨泣寒
空思向桙影　獨坐聽松風　山川嶮易路　展轉憶閨中

日本靈異記

次に奈良時代の傳說を集めたものに日本國現報善惡靈異記三卷がある。これは奈

良の藥師寺の僧景戒の著であつて、著作年代は明かに記してないが、嵯峨天皇の弘仁年間の事が記してあるから平安時代初期の著である事は明かである。しかし靈異記に見える傳說は奈良時代に成立したものであるからこゝに考へる。序によつて支那の冥報記・般若驗記によつた事もわかる。而して此の書が記紀・風土記の傳說と異なる所は、記紀・風土記は奈良時代の撰ではあるが、それより以前の神話傳說を統一して、そこに佛教によつて殆ど影響されない說話を見る事が出來るに反して、靈異記は雄略天皇頃からの傳說が見えるが、多くは奈良時代佛敎の盛なる時の產物で、所謂因果應報の理を中心として、善をすれば善報があり惡をすれば惡の報があるとする佛教傳說である所にある。中には雷をとらへる如き說話もあるがそれは例外である。狩谷掖齋の日本靈異記考證がある。

第二篇　平安時代

序　說

平安時代の文學は、大和時代の文學が粗撲ではあるが純眞なる、感情が發揮せら

れて居るに反して、感情が纖細になり情趣化すると同時に表現も、假名文の勃興により優麗なる文體となり形式内容相まつてそこに統一したる文學を形づくつたのである。而して文學の形といふ點から見ると刹那的抒情である詩歌から感情を反省し客觀化した物語への展開をなして居るが、更に時代的展開から見ると傳奇的浪漫的傾向から寫實的となり、更に頽廢的傾向に進んで居る。卽ち第一期は平安時代の初期から延喜頃までの時代であり、一方に純粹感情の世界から理智的傾向に進んだ古今集の歌となり、更に歌から物語への展開をなす伊勢物語・大和物語となり、傳奇的傾向の著しい竹取物語及び宇津保物語等の作品となつて居る。第二期は道長中心時代であつて、浪漫的傾向から寫實的傾向に傾いて來たのであつて、源氏物語・枕草子や和泉式部日記・紫式部日記などはこの時代を代表するものであり、歌の上には古今集を踏襲したに過ぎない拾遺集などが出でたのであつて、物語がその最も盛を極めた時代であり、その作品の中心に於て理想的傾向はあるが、寫實的態度が著しく現れて居るのである。次に第三期に於ては寫實的な態度かち說話の變化や奇拔な構想を努めて求めるやうになり、一方貴族の平民化、靜の動化、小說の戲曲化といふ方面に進んで行くのである。狹衣物語・濱松中

納言物語から更にとりかへばや物語などになつて殊に甚しいのであり、一方物語である源氏物語を實際の人物に求めて表現した榮花物語や大鏡の如きが出で、更に今昔物語の如きが作られるに至つたのである。而して歌に於ても陳套になり因襲化したのが新舊二派の對立となり、そこから新たなる文學展開の道を示して來るのである。

第一章　前　期

一、初期の漢詩及び漢文

平安時代は、假名の行はれた事によつて假名文の最も隆盛となつた時であるが、初期に於ては和歌が一旦衰へて漢詩漢文が隆盛となつた。之は嵯峨帝が漢詩を好まれたにもよるであらう。從つて奈良時代の懷風藻を承けてこの時代には多くの詩文集が撰進されたが、凌雲集・文華秀麗集・經國集の如きはその主なるものである。凌雲集は凌雲新集ともいひ、嵯峨天皇の弘仁五・六年の頃小野岑守が、勅を

奉じて菅原淸公、勇山文繼と議り、また賀陽豐年の力をも得て撰進したもので、延暦元年から弘仁五年までの詩を集めてあり、作者二十三人詩九十首を收めて一卷から成つて居る。嵯峨帝の御製が廿二首、賀陽豐年・小野岑守が各十三首ある。懷風藻が五言詩の古撲な詩の多いに比して優麗になつて居るのを認める。

文華秀麗集

次に文華秀麗集は凌雲集に稍おくれて嵯峨帝の弘仁九年に成つて居り、仲雄の序によつて藤原冬嗣が勅令を奉じて、仲雄・菅原淸公・勇山連文繼・滋野貞主・桑原公腹赤等が撰したもので、作者廿六人詩百四十八首あり、三卷になつて居る。嵯峨帝の御製が最も多く載せられて居る。

經國集

更に經國集は良岑安世の下に滋野貞主・南淵弘貞・菅原淸公・安野文繼・安部吉人等が撰進したもので、淳和帝の天長四年に成つて居る。前の二集に比して量も大きく二十卷であるが、今は卷一・卷十・卷十一・卷十三・卷十四・卷二十の六卷のみが傳はつて居る。組織分類も整然として居り、貞主の序がある。嵯峨帝の御製が最も多く、貞主の如きも多くを載せてあるが、古の詩人の作をも集めて石上宅嗣や淡海三船の作も見え、又新しく空海の作なども見える。

詩人

而してこの時代に、詩人として嵯峨天皇は帝皇中最も俊秀であらせられ、平城・

淳和二帝の如きもまた、詩文に長ぜられた。臣下としても是等の三集に多くの作
を殘して居る仲雄・賀陽豐年・滋野貞主の如きすぐれて居り、冬嗣の如きもその作
をとゞめて居るが、詩人としてまた詩學を傳へた點に於て空海の名は殊に忘れ難

空海

きものである。空海は入唐僧として詩文の才があり、三教指歸・性靈集などの著を
有するが、文鏡秘府論及びそれを簡約した文筆眼心抄の如きは、詩の法則を論じ

小野篁

た書で、平安朝の歌學の上にも影響する事の大きかつた書である。又小野篁も空
海とならんで詩文の名高かつたが、その作は經國集殘篇・扶桑集・本朝文粹等に見
える。更にやゝ時を隔てゝ貞觀より寛平頃には都良香や菅原道眞が詩人としてす

菅原道眞

ぐれて居り、殊に道眞は不遇なる政治家として筑紫配流の悲痛なる境遇を詠じた
ために人の心をうつ作が多い。菅家文草十二卷と菅家後草一卷とがあり、後草は
筑紫太宰府に於て詠じたものを集めたのであつて、初め西府新詩といひ、紀長谷
雄に贈つたものと傳へられる。その卷頭の五言詩「離レ家三四月　落涙百千行　萬
事皆如レ夢　時時仰ニ彼蒼一」の如き先づ人の肺腑をつく。而して是等の詩人の中で
も、小野篁の如き歌人としても名があり、道眞また歌を大鏡などに留めて、その
平易暢達の中に無限の感慨をのぼる所彼の詩と同樣である。都良香には都氏文集

がある。

以上の如く三詩集などを中心とした平安時代初期の漢詩漢文は一面に於て日本書紀などの系統を承けて律令格式や續日本紀以下の六國史をも産出したのである。

二、六歌仙と古今集

新撰萬葉集

詩文が衰へるに及んで勃興して來たのは短歌であつた。萬葉集時代の長歌・旋頭歌などの形式は衰へて短歌形式が中心となり來つた。而して延喜年間に古今集が撰定されるに至つたのであるが、その前にも菅原道眞の撰といふ新撰萬葉集が出來て居る。此の書は上下兩卷から成り、それ〴〵の卷前に序があり、上卷は寛平五年九月廿五日の年附があるが、下卷は延喜十三年八月廿一日に成つた由記してある。而して終りに上卷は菅公の撰であるが、下卷は他人の撰であらうとしてある。すべてで三百餘首の歌が萬葉假字で記してあり、七言絶句で同じ意味の詩が記してある。道眞の詩と歌とを思はせるやうな佳麗な詞句から成つて居る。

古今六帖

この新撰萬葉集とともに、平安初期の私家集として古今六帖がある。紀貫之の女

の撰といはれて居る。が是等は文學史的意義は極めて尠くて、歌界の大勢は延喜五年の古今集によつて代表せしめ得るのである。
古今集は醍醐天皇が延喜五年に紀貫之・凡河內躬恒・紀友則・壬生忠岑に勅して撰ばしめ給うたものである。一體この集は萬葉以外の古歌・新歌すべて千百首程を選んで萬葉の後を繼がうとしたものであつて、卷數も二十卷ある。首に序があつて、歌の本質論から詩經の六義によつた歌の分類、更に從來の歌の變遷を述べて六歌仙論に及び、古今集編纂の由來に筆を結んで居る。歌論としてはもとより簡單であるが、全體に統一があり、歌論の初めのものとして注意せらるべき文字である。而して二十卷は四季・賀・離別・羈旅・物名・戀・哀傷・雜歌・雜體に分類してある。この分類は萬葉集の雜歌・相聞・挽歌を主體とする分類から、更に一步を進めたものであつて、これより後の歌の分類の標準となつたものである。
而して古今集の歌を見ると大體三期に分れるのである。第一は讀人知らずの歌であり、第二は六歌仙時代の歌であり、第三は貫之躬恒時代の歌である。讀人知らずの歌は大體に於て平安時代初期の作と思はれ、萬葉風の粗樸な感情と表現とを示して居る。六歌仙時代は貫之が古今集序に於て批評した在原業平・僧正遍昭・小

野小町・大伴黒主・喜撰法師・文屋康秀等の歌人の輩出した時代であつて、既に上代の素朴なる歌風を離れて平安時代の特色を十分に現して居る。然し六歌仙時代にはそれ〲技巧が意識して用ゐられて居るけれども、其の技巧が感情内容と融合して、單なる智巧的なものは尠いのであるが、古今集撰定時代である貫之等に至ると、その智巧に煩はされて理窟に走つてしまつた點も認めざるを得ないのである。

在原業平

古今集の歌人の傳は古今集目錄の中に見える。今それによつて主なる歌人を見ると、先づ六歌仙の中在原業平は平城天皇の皇子阿保親王第五の子であつて中納言行平の弟である。「體貌閑麗放縱不レ拘、略無二才學一善作二和歌一」といふのは三代實錄に述ぶる所である。元慶四年五十六歳で卒した。その多感多情の性格は、一面に於ては藤原氏のためにはゞまれて帝位につくを得なかつた惟喬親王の御境遇に同情せしめるとともに、一面に於ては奔放なる戀愛生活に陶醉せしめた。その熱情がほとばしり出でたのが彼の歌であつたのである。次に僧正遍昭は俗名を良峯宗貞といひ、　納言良峯安世の男である。承和十一年正月藏人となり、從五位上

僧正遍昭

左近少將藏人頭にまでなつたが、寵をうけた仁明天皇が嘉祥三年に崩ぜられたの

小野小町

で衰暮の餘り出家して佛理を求めた。高德の聞え高く、宇多天皇も之に歸依せられた。がその心情は洒落であつた事はその詠ずる歌によつて知られる。平俗なる言葉を用ゐて、洒々たる心情をうつす所業平とは別の趣がある。寛平二年正月十九日七十六歳で死んだ。又小野小町は出羽國郡司女とあるがそれ以上詳細なる傳は知られないが、一生を戀のために費した樣に見える。而も初めは驕恃の心を持ち、次第に衰へてゆく容色に對して今更に嘆じた心持が見える。その歌には强き心情よりは弱々しき心が見られ、戀の情をば人の一般の心と對比したり、人生に對する感情に推し及ぼしたりして居り、又技巧として夢に託して戀愛の情を表して居るのである。

六歌仙の中、以上の三歌人は歌も多くまたすぐれても居るのであつて、他の三人は傳はる所も尠いのである。

紀貫之

次に貫之は延喜六年に越前少掾御書所預となり、加賀介、美濃介、大監物、右京亮等を經て延長八年土佐守となり、天慶三年玄蕃頭となり、後從五位上に叙せられ、木工權頭となつて同九年に卒した。貫之の手に成つた散文は古今集序を初め、大堰川行幸和歌序・土佐日記があり、漢文には新撰和歌集序があるが、歌人とし

凡河内躬恒

てその彼には理智的の技巧が一首の中心興味となつてゐるものが多く、天眞の情趣の叫びといふ點には未だしい。中には平明にして情趣のゆたかなものもあるが、「櫻花ちりぬる風の名殘りには水なき空に波ぞ立ちける」の如き機智が中心となつて居る歌が多い。之に反して撰者の一人である凡河内躬恒には卽興的の歌が多いが、客觀的の傾向を有して居る。躬恒は寛平六年甲斐權少目に任じ、延喜七年丹波權大目となり、同十一年和泉權掾に任じた事が古今集目錄に見えて居る。この外にも紀友則・壬生忠岑を初め古今集の歌人は多いが、是等三期殊に貫之時代を中心として見た古今集の歌には、萬葉集の如く感情の直接的表現といふよりは、感情を反省し、理智的に曲折せしめて居り、刹那の感動から時間的連續を示して居る。而して形式的にも萬葉集の五七調から七五調を多く加ふるに至り、また歌の終句に於て萬葉集の歌が終止形が多いに反して、「色こそ見えね香やはかくるゝ」「花ぞ昔の香に匂ひける」の如く連體形已然形によるものが多くなつて居るのである。

在原業平

つひにゆく道とはかねてきゝしかど昨日今日とは思はざりしを

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉

僧正遍昭

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬるものを

大伴黒主

おもひいでて戀しき時は初雁のなきてわたると人知るらめや

紀貫之

かすが野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人の行くらむ

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり

凡河內躬恒

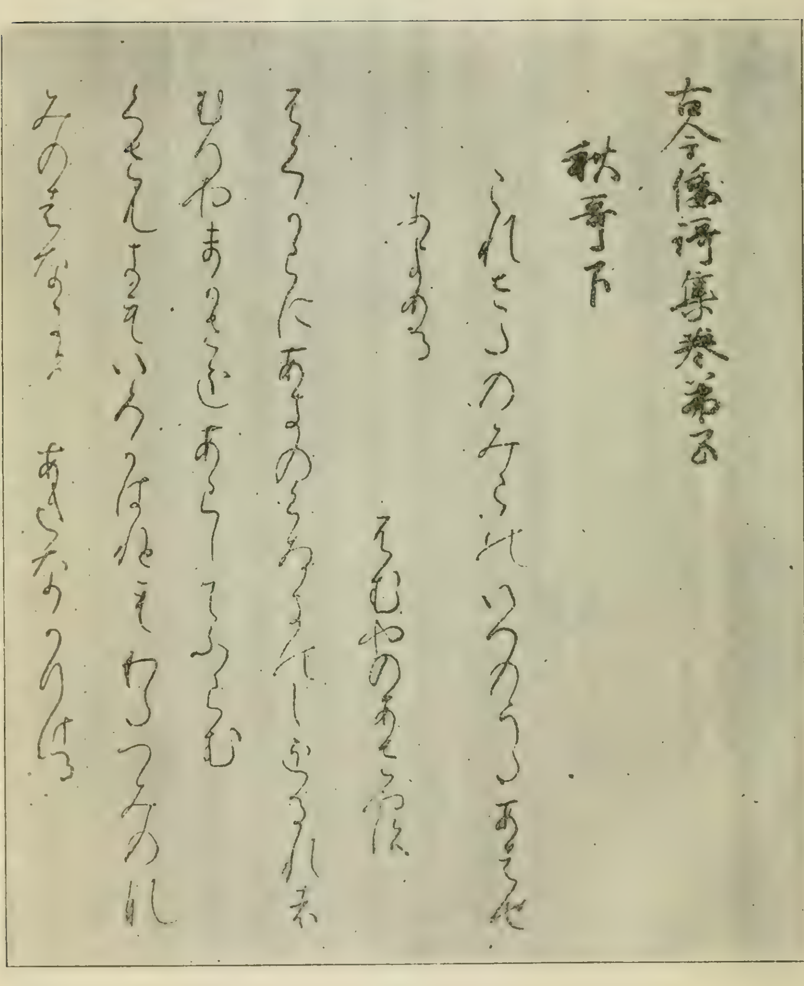
大あらきの森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな

都にて春をだにやはすごしてぬいづちに雁のないてゆくらむ

千鳥なく濱の眞砂をふみわけてゆく旅人はあはれ誰れぞも

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ



（傳紀貫之筆 古今集高野切 歌と草假名に據る。）

古今集の寫本は普通行はれて居るものは定家の貞應元年十一月廿日の奥書ある定家の校本貞應本であるが、定家にはこの外嘉祿二年四月九日の奥書のある所謂嘉祿本がある。がこれは極めて尠く普通傳はつて居るのは貞應本である。しかるにこの貞應本より前に多少の古今集の古寫本はあるのであつて貫之自筆の本と言はれて居るものがある。是は全部ではなく完全した卷は卷五（秋下）卷八、（離別、）卷二十（大歌所）であつて、他は切々になつて居て高野切といふ。がこれらは貫之自筆といふ事は出來ないが、平安時代のものである事は明かである。尾上氏は「寛弘から永承・元永下つて保延の間に出來たものに相違ないとは云ひ得ると思ふ。」と言つて居られる。なほ元永本古今集といふのが三井家にあり、筋切といふ古寫本もある。

次に古今集の註釋書を見ると此の集が舊派學者の間に重んぜられたに比して研究書は尠いのである。近世以前に於ては教長の古今和歌集註、顯昭の古今集序註や古今集註、定家の顯註密勘、一條兼良の古今集童蒙抄などがあるばかりで、他は古今傳授として傳統的に尊重せられて居つたに過ぎない。近世以後に於ては契沖の古今餘材抄、賀茂眞淵の古今和歌集打聽、本居宣長の古今集遠鏡、香川景樹の

古今集正義などがあり、明治に於ては金子元臣氏の古今和歌集評釋がすぐれた註釋である。

古今集の撰定は和歌勅撰集の起原を開いたものであつて、これ以 引きつゞいて室町時代に新續古今集の撰定される迄二十一代集を數へる事が出來る。その中文學史的意義の深いものは新古今集に至る八代集である。而して古今集についで撰定されたのは村上天皇の天暦五年に梨壺の五人清原元輔・源順・大中臣能宣・紀時文・坂上望城の五人が撰した後撰集二十卷である。後撰集は古今集に比して撰定の態度も杜撰であり、又歌そのものも劣つてゐる。古今集は序を初めとして組織も整然として、そこに新しき立場を開拓して居り、歌の取材も六歌仙時代の歌もあるが、貫之時代を中心として撰者等の強い自信を語つて居るに反 て、後撰集に於ては序も無く古今集時代を規範としてそれより一歩もはづれざらんとして居る。隨つて貫之の歌を最も多くとり、撰者時代の歌は個々の歌人から見ても全體の量からいつても尠いのである。

三、神樂と催馬樂

上代に於ては歌と謠物とは同一であつたが、平安時代以後は歌が謠はれなくなつたので、獨立に謠物が生じた。その純然たる謠物として考ふべきは神樂催馬樂である。この神樂催馬樂もその成立はあるものは奈良時代にあつたのであるが、今日殘つて居る神樂催馬樂は平安時代に至つて修正されたのであつて、神樂の如きは清和天皇の貞觀年間と醍醐天皇の延喜年間及び圓融花山天皇の頃とに修訂されて居る。故にこれを平安時代の謠物と見て差支ない。

今日殘つて居るものは神樂は六十三首、催馬樂は六十一首ある。この外に風俗歌が二十餘首と東遊歌が數首ある。風俗歌は催馬樂とほゞ同性質を有する民謠であり、東遊歌は神樂と同じく神前に奏せられるが神樂よりは重々しくない場合に用ゐられた。神樂催馬樂を載せた古いものは仁智要錄であつて、藤原師長の撰になり、高倉天皇の治承年中に書かれて居る。又天治二年の奧書ある催馬樂抄があつて現存の催馬樂譜中最も古い本である。この外後花園帝の文安六年二月源有俊の奧書ある神樂催馬樂略譜二卷、建久四年五月の奧附のある催馬樂笛譜がある。風俗歌、東遊歌は風俗歌譜と東遊歌譜がある。而して古今集卷二十に神樂・催馬樂・風俗等が數首づつ見えて居る。

神樂は神前で神を祭るときに歌つたものであらう、隨つて多くは謹嚴で乾燥である。神樂の起原はたしかには分らないが、現存の神樂を見ると、岩戸隱れの中の「あはれあなおもしろ」と同じ樣な形式である事から見て、餘程前からあつたものである事を推測せしめる。勿論現存の神樂が古い形式をそのまゝ傳へて居るものとは思はれないが、神樂そのものの起つたのは餘程古いと思はれるのである。神樂の中にもいろ〳〵名がついて居るが、採物といふものが神樂の純なるものであらう。その中の篠といふのを見ると

本此のさゝはいづこのさゝぞ、とねり等が、こしにさがれる、ともをかのさゝ

ともをかのさゝ

末さゝ分けば袖こそやれめ、とね川の、石はふむともいざ川原より、いざ川原より

の如く思想も形式も極めて單純なものである。更に神樂に小前張。大前張といふ名稱があるが、これは前張を「さいばり」とよぶのであつて、これは催馬樂と同一であると言はれて居る。しかし神樂の中にある前張といふ曲にある

さいばりにころもはそめん　雨ふれど雨ふれど　雨ふれど、うつろひがたし

深くそめてば　ふかくそめてば

の前張は榛の皮を細くさきて染める拆榛であるから前張は催馬樂と同一であると

いふ說はどうかと思はれる。庭燎・採物等が單に儀式的のものであるに比して前

張は神樂の儀式後餘興にうたはれたものらしく趣味あるものである。神樂に本と

末とあるのは本座と末座とにわけて兩方で謠つたためである。

催馬樂は當時の俗謠であつて神樂に比して更に興味あるものである。催馬樂とい

ふ名義については說があるが、體源抄に催馬樂といふのは催馬樂といふ樂があり

それからおこつたとある。和名抄雙調の部に桃花苑・春庭樂・催馬樂・狹鰭河・和風

樂とならべ皆唐樂とあるのを見ると、催馬樂はもと唐樂の樂曲であるかも知れな

い。又長瀨眞幸が催馬樂の初にある我駒といふのに

いでわが駒はやくゆきこせ　まつち山あはれまつち山、はれつち山待つらむ人

を、ゆきてはや、あはれ、ゆきてはや見む。

とあるから來たのであるとするのも一說であらう。

催馬樂は律と呂とに分けてあるが、これは調子によつて分類したのであらう。催

馬樂には近古以後に榮えた小唄俗謠的思想をうたつたものがあつて甚だ興味があ

る。たとへば我門爾にといふのは

わがかどにや　我門に　うはもの裾ぬれ　下裳のすそぬれ　あさなつみ　夕なつみ　朝なつみ

あさなつみ　ゆふなつみ　わが名を知らまくほしからば　御園生の　みそのふの

みそのふのや　みそのふの　あやめのこほりの　大領の　まなむすめといへ　おとむすめとこそいはめ

など小唄的である。

催馬樂は當時廣く行はれて上流の人々も遊宴に際して餘興として謠つたらしく、源氏物語の中、竹川・東屋の如きは催馬樂の曲名を取つて居る。和歌の如く單調でなく博奕の事をうたひ(大芹)、或は世を諷刺し人を嘲弄して居る。和歌が次第に智巧的になつたに對して、寧ろいつはらざる平安時代民衆の叫びを是等に聞くことが出來るのである。催馬樂の形式は複雜であつて、「はれ」「おけ」「そよや」等の拍子の詞を挿入して聲調を助けて居る、がその雜多な中にも七五調の形式はこれを認めることが出來るのである。

四、歌物語と傳奇的物語

歌の方面から物語の方面に視點をうつして見たい。この物語の勃興したのは假名文の發達といふ事も力あるであらうが、物語の展開の過程を見ると歌より進んで來た道と、傳説から進んで來た道との二つの方面がある。卽ち物語の初期に於ける歌物語と傳奇的物語とはその二つの道を示して居る樣に思はれる。伊勢物語・大和物語は前者であり、竹取物語・宇津保物語・落窪物語は後者であり、この二つの合流したのが源氏物語であると見る事が出來る。但し落窪物語の成立に就いては議論があるが、こゝでは從來の説のまゝに第一期の物語として見ておく。以上の立場からこの兩者の物語の解説を試みる。

伊勢物語は歌を中心とする説話の集であつて、個々の説話は多く「昔男ありけり」といふ冒頭で書起してある所に、萬葉集卷十六の傳説歌の系統をひくものであることを思はせる。而してそれが獨立した小篇のやうであつて、實は在原業平の歌を中心として、それに興味の多い詞書をそへてある物語がほゞ統一的に收められてある。勿論これを純粹の在原業平の著といふことは出來ないが、業平の日記の

如きものがあつて、それを基礎にして、かく一篇の歌物語となつたものだとは推測せられる。古今集の中にも業平の歌は多く載つてゐるが、その詞書は他の業平以外の歌に比して頗る詳しいから、或説の如く古今集によつて伊勢物語が出來たとは想像されない。むしろ古今集以前に伊勢物語がなつて居り、それによつて古今集の撰者がとつたのか、或は伊勢物語の 扮本の如きかあつて それに よつて 取り、伊勢物語もそれを基礎として書いたのか、何れにか歸着するより外ない。本居内遠は在原業平が昔男と身をなして自ら書きとめておいたのを、其の死後もと親しかつた人(兄の行平の子の棟梁か滋春か)が多少加筆したのであると言つて居るが、ほど信じたいと思ふ。年代もたしかには分らないが、文章も簡古で假名文の初期のものと思はれるから、業平の時代である文德清和頃からほど遠からざる間に出來たものであらう。

また伊勢物語の題號に就いても古來說がある。或は「伊勢」は「ひがこと」の意であり、ひがことの物語であるから斯くなづけたといひ、また伊勢の御の作であるからだらうといひ、またある說には篇中多くある伊勢國に關する說話が物語の初めにあつたためであらうといふ說もある。自分は第三說に從ひたいと思ふ。

在原業平は文德・淸和頃の人であつて、大鏡には宇多天皇のまだ殿上人でおはした時殿上の御倚子の前で相撲をとられた時に高欄を折りたまうたとあるから、光孝天皇の頃までは在世してゐたかと思ふ。惟喬親王に仕へてその帝位につかれるのに盡力したが、終に事に失敗したのは情熱的な業平を如何に失望せしめた事　あらう。御ぐしおろし給うて比叡の山の麓小野に詫住居したまふのを雪の日詣でて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君をみんとは

とよんだその歌を見ても想像する事が出來る。而して伊勢物語はその情熱的抒情的な業平の人物を中心としてその情熱生活の展開を眺める所に無限の興味を生ずる。

> 昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京には居らじ東の方にすむべき國もとめむとて往きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは水ゆく河の蛛手なれば橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におり居て餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて旅の心を詠め」といひければよめる

唐衣きつゝ馴れにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。

行き〳〵て駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて我が入らむとする道はいと暗う細きに蔦楓生ひしげり物心ぼそく、すずろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかいまする」といふに見ればみし人なりけり。京にその人の許にとて文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ

この山はこゝにたとへば比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

猶行き〳〵て武藏の國と下總の國とのなかにいと大いなる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟に乘れ日も暮れなむ」といふに、乘りて渡らむとするに皆人ものわびしくて京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも白き鳥の嘴も脚も赤き、鴫の大きさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ「これなむ

都鳥」といふを聞きて

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

而してこの伊勢物語を形式的に踏襲したものは大和物語であるが、源氏物語もまたその形式をかへては居るが、伊勢物語の影響を大いに認める事が出來るのである。かつ近世に於ても競伊勢物語や或は仁勢物語など種々の影響文學を數多く生じた。がそれらは後に述ぶべき機會もあらうから、こゝに其の異本及び註釋書の主なものを擧げておく。

伊勢物語は一般に定家の天福二年に校合したといはれる天福本が行はれて居るが、他に異本として眞名本伊勢物語と塗籠本伊勢物語とがある。眞名本は萬葉假名で書いてあるがこれが普通本より古いといふ事は信ぜられない。塗籠本は群書類從にのつてゐるが、塗籠にあつたといふ本で餘程内容が違つて居る。異本といふべきである。次に伊勢物語の註釋書は後の源氏物語とともに極めて多いが、伊勢物語髓腦は最も古きものであり、一條兼良の伊勢物語愚見抄、細川幽齋の伊勢

物語闕疑抄、北村季吟の伊勢物語拾穗抄の如きは舊註の中で注意すべく、契沖の勢語臆斷、荷田春滿の伊勢物語童子問、賀茂眞淵の伊勢物語古意、藤井高尙の伊勢物語新釋の如きは新註としてすぐれたものであるが、殊に伊勢物語新釋はすべてを集成した上に創見も多く最も注意すべきものである。

大和物語

大和物語は伊勢物語の系統を引いた歌物語で、種々の說話を擧げてある。作者は在原滋春であるとし（皇胤紹運錄）又は花山院の御撰（歌林良材抄、尾崎雅嘉）と言はれて居るがたしかではない。淸輔の袋草子には「作者不審先づ朱雀院の御時天曆の始の事か、先帝は延喜御宇也おほきおほいもうちきみと號するは貞信公なり。兼盛幷に檜垣嫗等の歌有なり」とある。延喜帝を先帝などといふ所を見れば天曆の頃何人かかき出し、また淸愼公實賴を今の左のおとゞ（實賴は天慶十年左大臣となつた）などいふ點から見て花山院の寬和・永延の頃の人が書加へなどしたものであらうといふ說はほゞ妥當であらう。又題號を大和物語といふのは伊勢物語に對して大和といつたのであると思はれる。さてこの大和物語を見ると、歌物語ではあるが、伊勢物語の樣にある一箇の人を中心として書かれたものでもなく、また伊勢物語の樣に歌が珠玉として說話をくくつて居るといふ樣な所もなく、また文章も彼の如く

情熱と力のある文ではない。たゞ歌を含む多くの傳說を書きあつめたといふもので、むしろ後の今昔物語とか古今著聞集などに似かよふ所があるのである。姥捨山の話、采女投身の話、菟原處女の話などもこれに見えて居る。

註釋書には北村季吟の大和物語抄、賀茂眞淵の大和物語直解、井上文雄の冠註大和物語などがある。

竹取物語は源氏物語繪合の卷にも物語のいでき初めのおやとしてあつて、伊勢物語と共に平安時代の物語の先驅となるべきものであらう。而してその作られた時代に就いては諸說がある。普通に竹取物語の作者を源順としてあるが、この說はたしかな證は無いのである。宣長は玉小櫛に「いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたる。」といつて居り、田中大秀は竹取物語解に「源氏物語に繪は巨勢相覽書は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし。」といひ、更に文德淸和の頃或は弘仁の頃の作とする說がある。藤岡博士は大秀の說を穩健として延喜をへだたる遠くない時に作られたとして居る。而してこの竹取の訓法に就いては顯昭は「タカトリ」であると述べて居る（六百番歌合顯昭陳狀）が、なほ「タケトリ」と訓ずべきものである。

竹取物語は竹取の翁が竹の中から一少女を見出したといふ點から筆をおこして、その少女が輝くばかりの女性となつたために五人の公卿から愛を求められたが難題を設けてすべてを失敗させ、終りに天皇の求婚にあつて月の夜昇天したといふ説話を扱つてある。この説話は神性を備へた女性と人間との戀愛を描いた神婚説話形式の變化であるとも見える。萬葉集の中にも竹取翁と九人の女性とをうたつた歌はあるが、それとは殆ど關係なく、竹から生れるといふ事は契沖も言ふ如く大寶樓閣善位祕密陀羅尼經序品に見え、その他の説話形式は柰女耆婆經などに見えるのであつて、月中の女、不死の藥、蓬萊山、龍首の玉の如き支那神仙思想などを基礎として一編がつゞられたと思はれる。全篇が傳奇的傾向にみちて、歌物語とは別の叙事的傾向の著しいものである。文章もなほ簡素で、その初期の作品である事を思はせる。

註釋書としては天明年間に作られた竹取物語抄二卷、入江昌喜の竹取物語補註三卷、田中大秀の竹取物語解六卷を始め、佐々木弘綱の竹取物語俚言解一冊、井上賴文の竹取物語講義一冊、今泉定介の竹取物語講義一冊などあるが、殊に大秀の竹取物語解はすぐれて居る。

竹取物語の傾向を有しながら次第に寫實的傾向に進みつゝあるものに、宇津保物語・落窪物語を擧げる事が出來る。

宇津保物語の作者、成立の年代に就いては諸說あるが確證はない。河海抄には源順說を擧げ、細井貞雄の玉琴には紫式部の父藤原爲時ではないかといつて居る。その男性の作である事は首肯されるが、それ以上に作者を定める事は困難である。其の作られた時代は伊勢・竹取よりおくれて圓融・花山の頃であらう。枕草子にも「物語は住吉、宇津保の類」とあり、源氏物語繪合にも「竹取の翁に宇都保の俊蔭を合せ」とある。この物語は俊蔭の卷を始めとして、藤原君・忠こそ・梅花笠など二十帖に分れて居るが、卷々の間に錯簡があり、又字句にも錯誤があつて一定し難いのである。田中道麻呂・細井貞雄などは この 宇津保物語の本文批評に力を盡したのであるが、未だ極めて不完全である。故に宇津保物語は一般に讀まれることが尠く、俊蔭の卷のみが讀まれて居つたのである。この物語は貴宮といふ美しき女性を中心として、仲忠を始め其の周圍に集まる多くの男性を配し、終に貴宮が皇太子の妃となる次第を叙してある。

竹取物語の赫夜姫に比して、宇津保物語の貴宮は現實的寫實的傾向に富んで居る

が、しかし人物の性格描寫に進まず、說話の上に傳奇的傾向が頗る多いのである。仲忠の出生を描いた俊蔭の卷は藤原俊蔭が十六才で渡唐し、波斯國に漂流して三人の異人に琴の傳授を受けた如き、或は阿修羅に逢つた說話の如き、俊蔭が歸朝して得た女と藤原兼正との間に生れた幼兒が母とともに杉のうつぼの中で養育された如き、傳奇的傾向に富んで居る。後の卷は比較的寫實的であるが、なほ樓上の卷に見える高樓の上で琴の傳授をするが如き神秘的の趣を見ることが出來るのである。

宇津保物語を研究し本文批評・註釋を加へたものに細井貞雄の宇津保物語玉琴があるが、卷々の間に錯簡があつてなほ歸一する所を知らない。この外に、古寫本により校訂を行つたのは田中道麻呂であつて、玉勝間にその說が見える。

落窪物語

宇都保物語とほゞ同時代に成つたものに落窪物語がある。落窪の成立に就いても現存のものは後世の作であるといふ說があるが、一方に松木琴園は村上天皇の御代より下らないであらうといひ、賀茂眞淵は冷泉天皇の頃の作であらうといひ、また中村秋香は圓融・花山以前のものであらうとして居る。作者は宇津保物語と同じく確說はないのである。落窪物語は四卷であつて、繼母のために虐遇されて寢

殿の放出の一間の落窪に置かれて居つたために落窪の君とよばれた姫君が、左近少將といふ貴公子に見出されて、其の妻となつて榮え、繼母は種々報復されるといふ說話を描いて居る。宇津保物語に比して短篇であり、性格描寫もしくは叙景の如きは見られないが、叙事に變化あり、波瀾あり、而も統一がある。かつ所々に滑稽の筆もあつて物語としてすぐれて居る。其の繼子いぢめの說話の如きは後世に多い形式ではあるが、平安時代の初期としては餘り見えないために、この物語は後のものであらうといふ說もおこるが、繼子いぢめは宇津保物語にもやゝ見えるのであつて、必ずしも後世のものとする事は出來ない。

落窪物語も從來餘り研究されなかつたものであつて、賀茂眞淵はやゝこれに着目してその講義を筆記した落窪物語頭書の如きがあり、村田春海・加藤千蔭もこれが註釋を企てたが一卷しか成らず、明治の中村秋香の落窪物語大成がその最もすぐれたものである。

この落窪物語に關聯していふべきは住吉物語であつて、これは源氏物語や枕草子にも見えて居るから古くあつたものであらうが、現存する住吉物語は遙かに後のものである。而して其の現存のものの語る所は落窪と殆ど同じき繼子いぢめの說

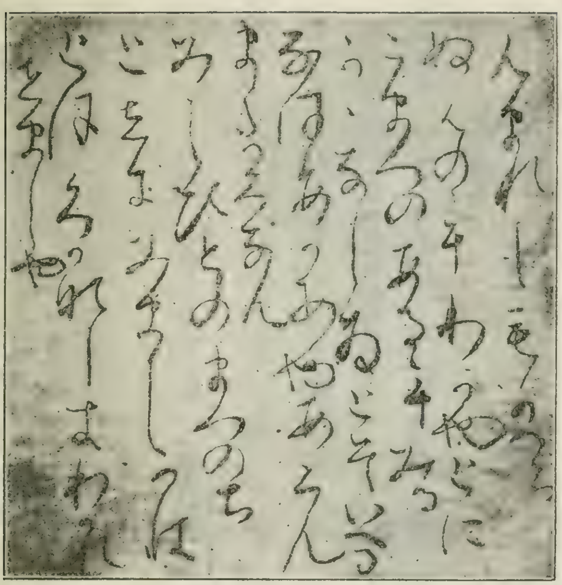
話であつて、落窪に倣つて記したものであらう。なほ源氏物語以前に作られた物語は源氏・枕草子などに種々名が見えて居るのであるが、傳はつてはゐないのである。で、こゝで暫く物語に筆を絶ち、日記・隨筆に就いて觀察して見たい。

五、土佐日記と蜻蛉日記

平安朝文學は物語が中心を占めて居るのであるが、それらの物語も主觀的抒情的要素の多いものであることは前述した所であるが、その物語の主人公を第一人稱で記す時には、直ちに日記隨筆となり得るのであつて、この兩者の關係は頗る密接なるものである。而して平安時代初期に於ける日記隨筆の最初のものは紀貫之の土佐日記である。

土佐日記は醍醐天皇の延長八年に土佐守となつて赴任した紀貫之が、朱雀天皇の承平五年に都へ歸るときの日記である。景樹の說によれば貫之が七十三四歲の頃の作である。首に「男もすなる日記女もして見んとてするなり」とあるが如く、未だ男性は漢文のみで記して假名文を用ゐなかつた時であるために故意に女性として筆を執つたものである。その意味に於て土佐日記は假名文の創始の上に力ある

ものであり、貫之の古今集序などとともに文學史的意義も高いのである。が平安時代初期は物語・歌に於ても見得る如く、土佐日記にも快活な明るい色調が中心となつて居つて、失つた子をいたむ悲痛な心情をも洒脱な滑稽的筆致でおほつてゐる感がある。



（定家筆　土佐日記　松雲公小傳に據る）

土佐日記は前田家に藤原定家筆の本があり、その中定家が貫之筆の土佐日記を模寫した部分がある。土佐日記は近世の學者にも比較的多く注目され、元和年間の土佐日記聞書などを始めとして、北村季吟の土佐日記抄、岸本由豆流の土佐日記考證、香川景樹の土佐日記創見、富士谷御杖の土佐日記燈などがある。

この土佐日記は男性の日記であるが、平安時代の日記隨筆は寧ろ女性が彼等の宮廷生活を記したものに於て其の特色を見る事が出來る。而してそれらの中最初に出たものは右大將道綱の母の著である蜻蛉日記である。

蜻蛉日記は道綱の母が其の夫兼家との間の家庭生活を主として記したもので、三卷になつて居る。天曆八年兼家が二十六歲の頃通ひ初めてから、道綱を生み、それから天延二年兼家が四十六歲になる頃まで二十一年間の日記である。中數年とぎれてゐる所がある。平安時代の結婚生活は夫が妻のもとに通ふために、一旦愛を許してからは夫の愛の衰へる事を憂ふる。殊に一夫多妻であつた當時には、權門の出である妻に愛が集つて、勢力のない家の出である妻は夫の離れゆく事を常に悲しむのであつた。兼家にも多くの妻があつた。殊に仲正の女の腹には道隆。道兼。道長などの子を得て權勢があつたが、倫寧の女である蜻蛉日記の著者には、道綱を得たのみで勢力もなかつた。そこに家庭生活の寂寥と憂愁とがあつた。彼は夫のつれなさをかこつて鳴瀧に籠り、容易に歸らなかつたが兼家や道綱にすゝめられて歸つた。しかしあきらめの寂しい生活であつたのである。その妻としての寂寥の心持の披瀝されたのが此の日記である。而も彼の女は貞淑なつゝましや

かな性格であり、佛教に對する信仰心もあつたために、その日記にはしめやかな眞率の氣があふれて居る。

この蜻蛉日記には契沖の蜻蛉日記考證、坂徵仲文甫の蜻蛉日記解環十八册などがある。

第二章　中期

一、和歌と謠物

この時期は詩歌よりは物語が中心となつたのであつて、從つて詩歌は前期に比べて因襲に陷つたのであるが、勅撰集はひきつゞいて撰定された。卽ち拾遺集はこれである。

拾遺集

拾遺集の撰者に就いては說がある。卽ち花山天皇の御撰であるか、藤原公任の撰であるかといふ二說である。而してこれと關聯して拾遺抄との關係に就いても拾遺抄は拾遺集を抄したものであるか、もしくは拾遺集は拾遺抄を增補したもので

あるかの兩說があり、兩書の撰者に就いて袋草子は集も抄も花山院の撰とし、八雲御抄は集は公任、抄は花山院とし、拾遺抄註等は集は花山院、抄は公任として居る。是等に就いては未だ斷定すべきまでに至つて居らぬ。

拾遺集の歌人を見ると、人麿・貫之の歌が最も多く、當代歌人の作の極めて尠いのは後撰集と同じく古今集を模範とする態度を見る事が出來る。然しながら歌風は古今集時代のやうな智巧的な風から次第になだらかな風になつて來たが、一面に力のぬけた點をも認めざるを得ない。

藤原公任

而して拾遺集時代に最も重んぜられた歌人は藤原公任である。公任は小野宮實賴の孫、賴忠の子であつて道長とは從兄弟に當るが、賴忠と兼家とは兄弟で勢威を爭つたために、道長と公任も競爭の位置に立ち、兼家が勢力を得てからは公任は世に容れられずその不平を歌にもらしたのである。が彼の歌人としての位置は餘り高くはなく、たゞ彼の歌に關する博識を以て尊崇されたのであつて、その撰と傳ふる新撰髓腦の如きもある。この時代に於て眞の歌人として優れたのは和泉式部であり、更に新樣の歌人としての曾根好忠の如き最も注意すべきである。好忠

曾根好忠

は狷介の性のため時人に容れられず、嘲笑の中に世を終つた事は袋草子などにも

見えて居る。その歌は古今集以來の陳套な歌風を破つて、詞句の上に表現の上に新しい態度を開いた點に注意されるべき價値がある。好忠の革新もその時代には認められなかつたが、後に金葉・詞花集の時代に好忠は次第に重んぜられるに至つたのである。しかし彼の歌は詞句表現の上に新しい態度はあつたが、心情の上には未だ特に注意すべきものがない。この點に於て拾遺集時代に最もすぐれて居るのは和泉式部である。和泉式部の歌は拾遺集よりも後拾遺集に多く見えるのであるが、時代としては拾遺集時代であり、赤染衛門などと並んで當時のすぐれた女流歌人である。和泉式部集といふ家集もある。又和泉式部日記もあるが、これは後に述べる。和泉式部は越前守大江雅致の女で、和泉守橘道貞の妻となつて小式部を生んだが、後更に冷泉第三の皇子爲尊親王、第四の皇子敦道親王に愛せられ、更に丹後守藤原保昌の妻となつて丹後にいつた。その一生は情熱的な戀愛に陶醉したのであつて、その多感な心情が表現されて彼女の歌となつたのである。從つてその歌は強い情熱がさながらに歌はれて居るのを感ずる。

　　和　泉　式　部

人もがな見せんきかせん萩の花咲くゆふかげのひぐらしの聲

うきことも戀ひしきことも秋の夜の月には見ゆるこゝちこそすれ
夕ぐれは物ぞ悲しき鐘の音を明日もきくべき身とし知らねば
はるがすみたつやおそきと山川の岩間をくゞる音きこゆなり
人の身もこひにはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆとみえぬばかりぞ

曾根好忠

なけやなけよもぎがそまの蛬くれゆく秋はげにぞかなしき
なつかしく手には折らねど山がつの垣根のむばら花咲きにけり
人はこず風に木の葉は散りはてゝ夜な夜な蟲は聲よわるなり

朗詠

この時代に於ては散文が中心であつて詩歌は餘り振はなかつたのであるが、それは謠物に於ても朗詠の如きが專ら行はれた事によつても知られる。朗詠は詩文の佳句を二句づつとつて、これに曲節をつけて謠ふのであつて、それも多くは四六駢儷體の二行を朗詠したものである。卽ち文選や白氏文集・唐詩選などの流行した時代の產物といふことが出來る。朗詠を集めたものに藤原公任の和漢朗詠集がこの期に成り、更に第三期に至つて藤原基俊の新撰朗詠集が編まれた。是等を見ると短歌が添つて居る。この短歌は後のものであるとする說もあるが、古筆の朗

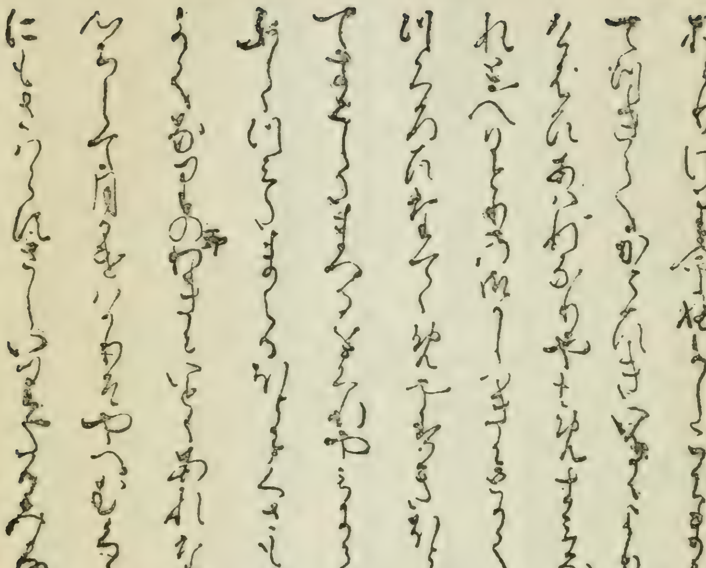
詠集切にも短歌が載つて居る所から見て、古くから短歌も載つて居り、また當時短歌も朗詠されたと見るべきではなからうかと思ふ。朗詠集に所載の短歌も多くは三代集等に見える歌であり、詩句もすべてこれまでの詩文の佳句であつて、新たに作られたものはない。既に創作力が衰へて一種の衒學的に赴いた時代の産物として見るべきであらう。而して朗詠の詩文の佳句も漢詩そのまゝに謠はずに殆ど軟い平安朝式の文になほして居る。當時支那の小説遊仙窟などが大いに行はれたが、やはり同樣な訓法を用ゐて居るのであつて、一種の飜譯文學といふべきであらう。而も白氏文集の如き大文章の僅かに二句位づつをとつて、之を一首にしたなど、こゝにも日本人の形を小さくする態度を見ることが出來るのである。

註釋は和漢朗詠集の方には北村季吟の和漢朗詠集註もあり、明治になつては金子元臣。江見清風兩氏の和漢朗詠集新釋も作られたが、新撰朗詠集の方には これといふ註釋書もない樣である。

背レ燭共憐深夜月　踏レ花同惜少年春　　白居易

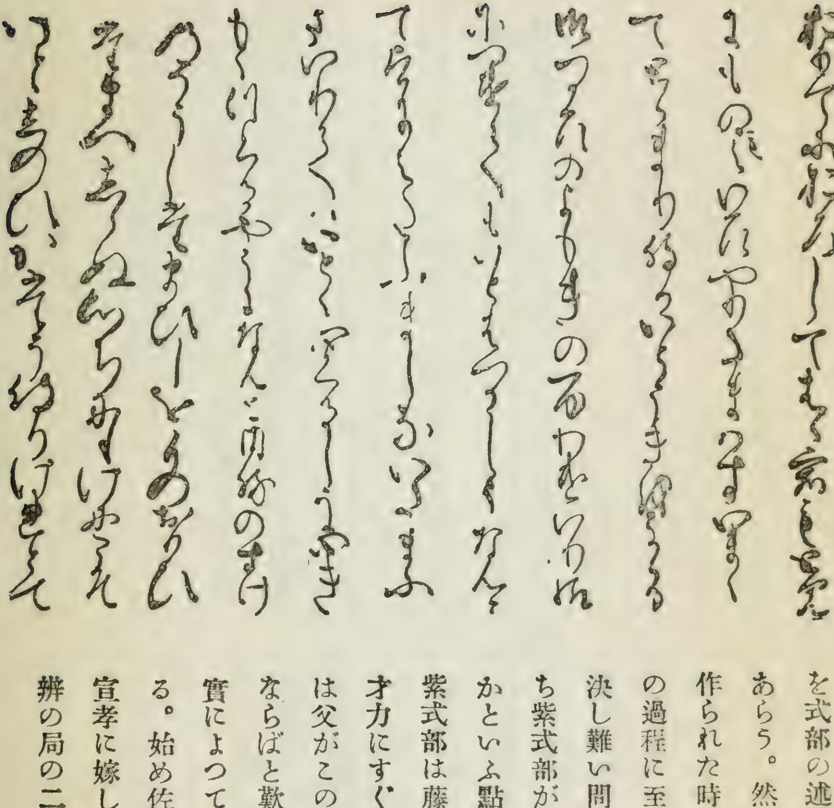
落花不レ語空辭レ樹　流水無レ心自入レ池　　白居易

二、源氏物語



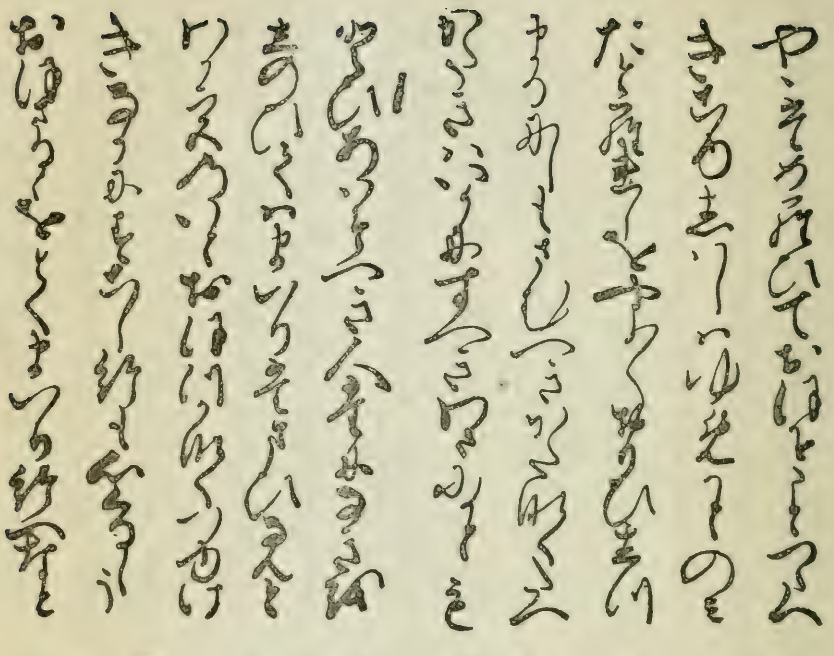
成立

源氏物語は平安時代小說の中心をなすものであつて、日本文學史上にも有數な作品である。この物語の作者に就いては紫式部とするに異論は無い。その宇治十帖のみは全體の色彩が首の部分と異なるために、式部の娘大貳三位の筆であるとする說もあるが當らない。又式部の父藤原爲時の功に歸せんとするのも牽强な說である。やはり全體



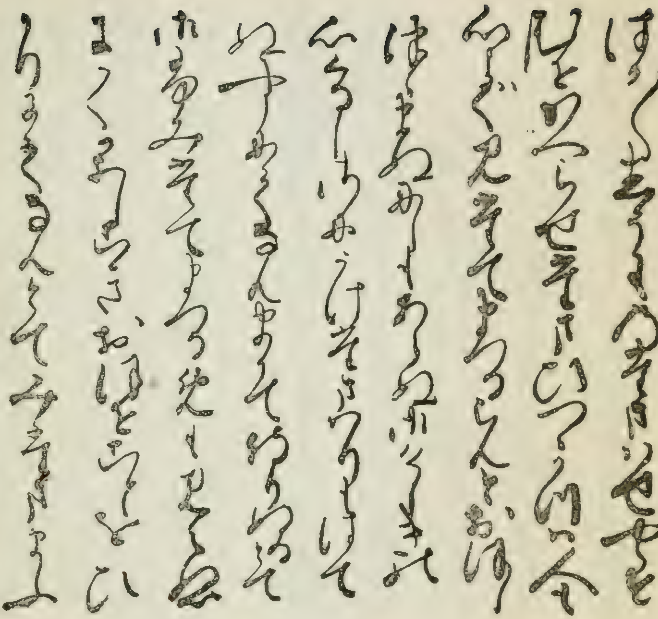
を式部の述作とすべきであらう。然しながら其の作られた時代、また成立の過程に至つては容易に決し難い問題がある。卽ち紫式部が何時頃作つたかといふ點である。

紫式部は藤原爲時の女で才力にすぐれて居つた事は父がこの子の男であるならばと歎いたといふ事實によつても明らかである。始め佐衞門權佐藤原宣孝に嫁して大貳三位、辨の局の二人の娘を擧げ



たが、夫は長保三年四月二十五日歿した。後寛弘二・三年頃宮廷に仕へ、道長の女で、一條天皇の中宮であつた彰子に仕へた。その歿したのは、萬壽二年から長元四年までの七年間の中であらうとする安藤爲章の說を擧げる。而して源氏物語の作られたのは式部の生涯の何時頃であるかといふに紫式部日記の寛弘五年霜月の條に「左衞門督あなかしこ此のわたりに若紫

やさふらふと伺ひ給ふ。源氏に似るべき人見え給はぬに、かの上はまいていかでものし給はんと聞きゐたり」とあるを始め、寛弘元年の條にも源氏物語のある事などを證として、長保の末、寛弘の首に式部が寡婦生活の時に記したといふ事は河海抄や紫家七論などに說く所である。寛弘の初めに、ある部分まで作られた事



（平瀨本、源氏物語刊本に據る）

は明かであらうが、その全部完成したのはやゝ後の事であらう。是は更に物語の人物を實在の人物と比較する事によつても解決を見出されると思はれる。

源氏物語の組織を見ると、五十四帖から成つて居る。初め四十一帖は光源氏を中心としてその花やかな生涯を描き、次の三帖は薫君等の生立を描き後の十帖は薫君を中心としてその失意の半生を描いて居る。而して後の十帖は場面を宇治にとつて居る所から宇治十帖と言はれる。光源氏は身分いやしき桐壺更衣の腹に生れ、更衣も弘徽殿の女御などの嫉視をうけて早く病になつて逝き、光源氏も臣下となつて源氏となつた。

容貌も美しく才識すぐれた彼は多くの女性との間に戀愛を構成する。それらの女性はそれぞれ性格を異にして居た。夕顏や朧月夜の內侍や女三の宮の如きは意志の弱い、男性の心のまゝに引かれる女性であつた。空蟬や藤壺や玉葛の如きは意志の強い男性のまゝには動かない女性であつた。而して藤壺の姪で幼少の時から源氏が養育して妻とした紫の上の如きは誠に中庸を得た女性であつた。而して源氏は亡き母君に似て居るといふために、繼母に當る藤壺に懸想してその腹に皇子を生ませた事は宥し難き過失であつて、その應報として己が妻に賜はつた女三の宮と柏木君とが通じて薰君が產まれるやうになる。かくの如くして花やかな源氏の晚年にも寂しさと此の世の賴りなさとがひしひしと感ぜられたやうに思はれ

る。この後をうけた宇治十帖の薫君は、いかにも寂しい佛の道に專念する人物であつて、戀愛にもふりむからうとしない。之と親しき色好の匂宮と對照して居るが、薫君も宇治の大姫君が死んでから次第に戀に狂奔して中姫君に失敗し、浮舟をも匂宮に奪はれるといふ所に、どこまでも薫君の失意の半生を描いて居る。背景も靜かなる宇治の自然を描いてしつとりとした空氣がみなぎつて居る。

源氏物語の中に現れる人物はその時代に多少モデルを有したであらうし、また源氏以前の宇津保物語等の影響をうけた跡は、細井貞雄が宇津保物語玉琴に詳說してあるのを始めとして古來種々考へられて居る所であるが、而も源氏物語に於て人物の性格が活躍し、不自然な作爲の跡が見られずして、この長篇をなして居る事は從來の作品に比して遙かに卓越して居る。もとより源氏物語の描く所は平和なる戀愛物語であり、そこに複雜なる事件なく、場所も須磨・明石及び宇治を除いてはおほむね京都の中で、五十四帖の長篇冗漫の點もないではないが、その筆は深く人生の內面的觀察に進み、心理の變化を寫し、而して自然の描寫を時に加へて人と自然との調和的美を味ひ得る。

源氏物語は後世に影響する所極めて多く、後の物語の之を踏襲するものが極めて

多く、その飜案的な作品も近世に至つて出でたのであるが、それは後にゆづつて、一方源氏物語の研究を見るとこれも極めて多く行はれて居る。源氏物語の本文としては河内本と青表紙本とがあるが、初めは河内本が行はれたが、後世多く行はれたのは定家の校合になる青表紙本である。而して註釋書の初めは光行の水原抄であるが、是は今見る事が出來ない。中世に於ける最も重んずべきは四辻善成の河海抄と一條兼良の花鳥餘情とである。而して近世に於て注意すべき註釋書は北村季吟の源氏物語湖月抄、契沖の源註拾遺、賀茂眞淵の源氏物語新釋、本居宣長の源氏物語玉の小櫛、萩原廣道の源氏物語評釋等であり、就中評釋に葵の卷までしかないが註釋として最もすぐれて居る。玉の小櫛は批評的研究として、從來源氏を佛教的もしくは儒教的見地で說いて居つたのを物のあはれ論によつて之を批評した卓拔なる見識に於て最も見るべく、外に安藤爲章の紫家七論は儒教的見地に立つて居るが、紫式部日記によつて論を立て、其の論理、其の叙述整然として玉の小櫛に相ならぶ好論文である。

三、枕草子と日記・隨筆

源氏物語と相ならんでこの期の最も注意すべき作品は枕草子である。枕草子の作者清少納言は梨壺の五人の一人である清原元輔の女である。彰子と對抗せられた一條天皇の皇后定子に仕へて居たのであるが、定子が薨後宮廷に仕へる事も出來ず不遇の中に一生を終つたのである。枕草子を記したのは宮廷に仕へてかららしく、枕草子の終に皇后の兄伊周が皇后に料紙を奉つたのを、皇后が清少納言に「是に何をか書かまし」と言はれた時に「枕にこそはし侍らめ」と言つたので賜はつたといふ記事は、この書の題名を枕草子といふこととの說明にもなるが、また枕草子の大部分の記事が宮廷生活の後に書かれた事を證するものである。然しながら宮廷生活以前の文もあるのであつて、第二段の宮中の白馬の節會を見に行つた記事の如き、或は小白河の法華八講の如き宮廷生活以前の記事である。清少納言が宮廷に仕へたのは三十歲頃であらうか。枕草子の記事にも己れの事を「さだすぎ」といふやうに述べた所が多くあるのも既に若さを失つた事を自覺した時に書かれたものの多いのを推察せしめる。

枕草子は清少納言が日常生活の經驗ならびに感想を叙述したもので、自己の周圍に關するものと自然の觀察に關するものとが交錯して居る。而して中には「雪の

山」や「法興院の供養」の如き長篇もあるが、「物は盡し」の如き名詞を羅列した極めて短いものもある。かくの如くして三百一段の記事はその間に連絡もなく統一もなくたゞ思ふがまゝに書いてあるので、自然觀察の文の後に自讃の文があり、次にものは盡しがある如きである。この一見不統一である如き中に清少納言の環境が浮み出で、その自然觀が現れて居るのである。而してそこに自我の強い彼女と、感性の鋭敏な彼女とを見る事が出來るのである。彼女は殿上人に對しても常に對抗し、頭中將齊信や藤原行成に對しても漢才の應用と機智とをもつてはり合つて居る。而して己れより才の鈍い則光の如きに對しては盲目的な愛をよせ、幼兒や犬猫に對しても溢るゝばかりの愛と同情とをそゝいで居る。この弱者を愛し強者に對抗する所に彼女の自我の強さを示して居り、從つてあるものには非難せられた所もあつたのであらう。而して一面に於ける感性の鋭さは衣服の色彩等に關する細かい記述にもなり、自然の急所をとらへても居る。この點に枕草子の特質もあり、長所もある。が、彼の女の觀察はどこまでも感覺的であつて、內面に入り得ず、彼女の自我も外面的な自己優越感であつて、それ以上深く內面的に入り得なかつた所に、やはり彼女も此の時代の一女性であつた事を思はしめる。

枕草子は異本が極めて多く、その研究も殆ど顧みられなかつた。僅かに北村季吟の枕草子春曙抄、加藤盤齋の枕草子抄の如きがあるのみであるが、明治になつて武藤元信氏の枕草子通釋、金子元臣氏の枕草子評釋の如き最も注意すべき註釋が作られるに至つた。而して本文としては春曙抄系統本と武藤氏の用ゐた古本の系統本とがあるが、更に久原文庫や圖書寮や富岡氏等の藏本の系統本がある。

かへる年の二月二十よひ、宮の職へ出でさせ給ひし御供に參らで、梅壺に殘り居たりし又の日、頭の中將の消息とて「きのふの夜鞍馬にまうでたりしに、こよひ方のふたがりければ、かたたがへになむ行く、まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふ事あり。いたう敲かせで待て」とのたまへりしかど、「局に一人はなどてあるぞこゝに寢よ」とて御匣殿の召したれば參りぬ。久しう寢おきておりたれば、「よべいみじう人のたゝかせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば『うへにかたらばかくなむと聞えよ』と侍しかども、『よもおきさせ給はじ』とて臥し侍りにき」と語る。心もとなの事やと聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の聞えさせ給ふ。只今まかづるを聞ゆべき事なむある」といへば、「見るべき事ありて、うへになむのぼり侍る。そこにて」といひてやりつ。局は引きもやあけ給はむと、心ときめき煩はしければ、梅壺の東おもてはしとみあげて、「こゝに」といへば、めでたくてぞあゆみ出で給へる。櫻のあやの直衣のいみじうはな〲と、裏のつやなどえもいはずきよらなるに、

蒲萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろ〳〵しく織りみだりて、紅の色、打目など、かゞやくばかりぞ見ゆる。次第にしろき薄色などしたにあまたかさなりたり。せばきえんに、片つ方はしもながく、すこし簾のもと近う寄り居給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはとぞ見えたる。

御前の梅は、西は白く東は紅梅にて、少し落ちがたになりたれど、なほをかしきにうららと日のけしきのどかにて、人に見せまほし、みすのうちにまいて若やかなる女房などの、髪うるはしくこぼれかゝりてなど、いひためるやうにてものゝいらへなどしたらんは、今すこしをかしう見所もありぬべきに、いとさだ過ぎ、ふる〳〵しき人の髪などもわがにはあらねばにや、處々わなゝき散りぼひて、大かた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍　あはひも見えぬ衣などばかりあまたあれど、つゆのはえもみえぬに、おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にて居たるこそ、物ぞこなひにて口惜しけれ。「職へなむ参る。言づけやあるいつか参る」などのたまふ。「さてもよべあかしもはてで、さりともかねてさいひてしかば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京といふ所よりくるまゝに、局をたゝきしほど、辛うじて寝おびれて起きたりしけしき、いらへのはしたなき」など語りて笑ひ給ふ。「むげにこそ思ひうんじにしか。などさる者をばおきたる」とのたまふ。げにさぞありけむと、をかしうもいとほしうもあり。しばしありて出で給ひぬ。とより見む人はをかしく内にいかなる人あらむと思ひぬべし。奥の方より見いだされたらむうしろこそ、とにさる人やとおぼゆまじけれ。

暮れぬれば参りぬ。御前に人々いと多くうへ人などさふらひて、物語のよきあしき、にくき所なんどをぞ定めいひそしる。すゞし仲忠などがこと、御前にもおとりまさりたるほどなど仰せられける。「まづこれはいかに、とくことわれ。仲忠が童おひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「何か琴なども天人のおるばかり彈きいで、いとわろき人なり。みかどの御むすめやは得たる」といへば仲忠が方人ども所得て、「さればよ」といふに、「この事どもよりはひる齊信が参りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺えつれ」と仰せらるゝに、「さてまことに常よりもあらまほしうこそ」などいふ。「まづその事をこそは啓せんと思ひて、参り侍りつるに物語の事にまぎれて」とて、ありつる事ども聞えさすれば、誰も見つれど、いとかう縫ひたる絲針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。垣「西の京」といふ所のあはれなりつる事、もろ共に見る人のあらましかばとなむ覺えつる。などでも皆ふりて苔生ひてなむ」など語りつれば、宰相の君の「かはらに松はありつや」といらへたるに、いみじうめでて「西の方都門を去れること、いくばくのところぞ」と口ずさびつる事などかしがましきまでいひしこそをかしかりしか。（富岡氏藏枕草子 本文に據る）

紫式部日記

この枕草子と殆ど同時に作られた日記に、紫式部の紫式部日記と和泉式部の和泉式部日記とがある。紫式部日記は紫式部が夫藤原宣孝に死別して宮廷に仕へてからの日記で、一條天皇の寛弘五年彰子の懐姙から筆を起して、皇子御降誕を始め

自己の經驗した事柄を記し、又清少納言や和泉式部などの批評を加へ、自己の幼時のこと、或は道長に懸想された事柄などを記して居る。宮廷生活の上に現れる服装・儀式などを細かく描いて居るのであるが、式部は清少納言のやうに觀察をそのまゝに表現しないで、之を情趣の世界に統一して表すために內面的な氣分を感得し得る。清少納言を批評した箇所の如きは餘りに辛辣であつて、これは娘に送つた書簡であるといふ說を關根博士は唱へて居られる（紫式部日記精解）。而してこの日記によつて味ひ得る所は夫を失つた女性の人生に對する寂寥さである。花やかな宮廷生活の間にあつて靜かに過去の家庭生活を思ひやり、何となき哀愁の世界にひたつたのが彼女であつたやうに思はれる。それは源氏物語を通じても見られる特質である。此の書の註釋としては壺井義知の紫式部日記傍註がある。

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿のありさま、いはんかたなくをかし。池のわたりのこずゑども、やり水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつゝ、おほかたの空もえんなるに、もてはやされて、不斷の御讀經のこゑ／＼、あはれまさりけり。やう／＼涼しき風のけしきにも例のたえせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、きこしめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、

さりげなく、もてかくさせ給へり。御有様などの、いとさらなる事なれど、憂き世のなぐさめには、かゝる御前をこそ、たづね參るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづ忘るゝにも、かつはあやしき。

和泉式部日記

和泉式部日記は和泉式部の日記であつて、和泉式部物語ともいつた。奔放なる戀愛に陶醉し、情趣的な歌を殘した式部の戀愛生活を描いたもので、冷泉院第四の皇子の帥の宮が式部のもとへ通つてゐられた間の事を記したのである。紫式部日記のやうなしんみりとした自己を反省する心境は見られずして、どこまでも進んでやまない情熱が見られる。而してその中に見える歌は此の日記の價値をより重からしむるものである。

更級日記

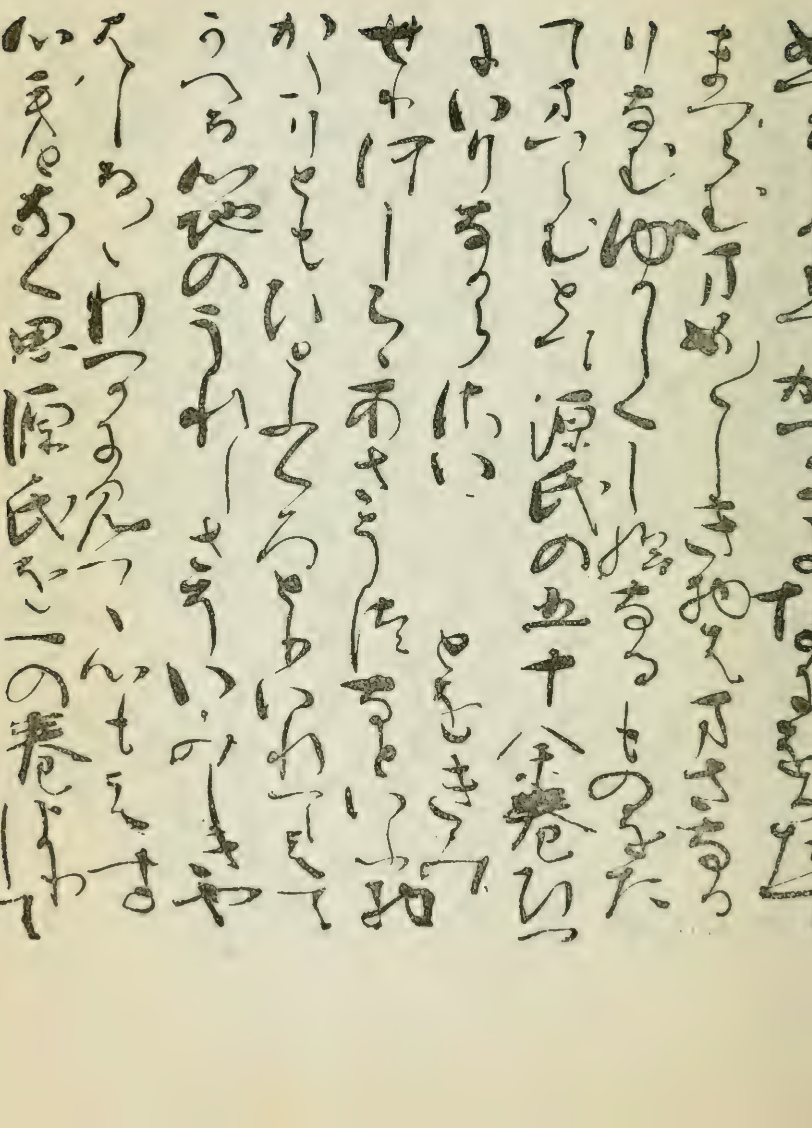
この二書にやゝおくれて更級日記がある、菅原孝標の女の著であつて、女の母は倫寧の女であるから蜻蛉日記の著者と伯母と姪との關係である。孝標の女は貞淑順良の性質であつて、孝標が上總介となつて任に赴いたとき、彼の女も伴はれていつたが、任滿ちて京に歸る時、父とともに上總から都に上つた。その時寛仁五年で彼の女は十三歳であつた。日記はこの時に筆を起して、幼き彼の女が憧憬に充たされて富士山を眺め京に接し、而も夢と憧憬とが破れて行く心持がつゝまし

く描かれて居る　後橘俊通の妻となり、子仲俊を生み、五十歳で夫に別れた頃までの記述である。田舍の叔母の土産として物語を多く貰つて喜び、寢る間も忘れて耽讀し、さうして源氏物語中の浮舟を憧憬するなど夢多き心持が現れて居る。物語を多く記したのは、信仰深きを示し、夢を多く描いて居るのも憧憬的な心情を示して居る。現行本は錯簡があるのが殘念であるが、近時古寫本の發見によつて錯簡がほぼ明かにせられた。

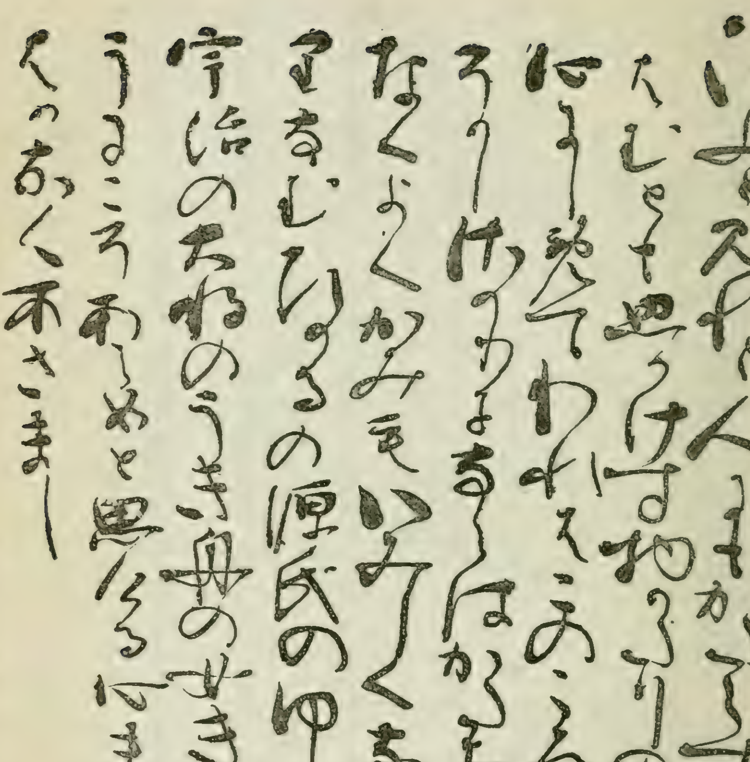
漢文學

終に此の期に於ける漢文學を見ると、平安朝の初期に比して衰微の狀に陷つたのであるが、男性はなほ漢文に親しみを持ちこれを綴つて居るのである。而してその詩文を見るべきものには藤原明衡の撰した本朝文粹があり、外にも扶桑集・本朝麗藻などがある。本朝文粹は十四卷と外に目錄一卷があり、嵯峨天皇の弘仁年間から、一條院の寬弘年中に至るまで十五代二百餘年間の文を卷毎に類別して集めてある。卽ち賦・雜詩から詔・勅書・官符・論奏・序・讃・論・記・祝文・落書其の他の類に分つてある。而して作家としては菅原・大江の二家が著れて居り、菅原家の菅三品輔正、大江家の以言・匡衡の如き殊にその名が高いが、他にも源英明・紀齊名・慶滋保胤を始めすぐれたものが多い。

源氏の物くさは一のたきよかへして
みなへせなへやんのゆよいのるなの
うけぎよこゝあれだつまでもとれ
あくこのかをやていうむまに
このおつーや人をうむとおかでみた
すいとくら行く思なけつるよ
きえなる人の井中わのほやゐ
所子わいい子えいとうたくてう
不いるわよりへるとあへす



今更ましらな木ちゃの門よう
ちゃやてぎきいつ佐く人るん地き
さきのちひちたまつくせむひふ
じくしよるえめのさぬそるかき
またをちくもつてこわとなる
よりほのちぢえをのつう
るといろくみてほえうつてさいに
しきつとよ思よ善うよいやきよけ
なるうのきたる地のけさきるの
きて法華経五巻をさごくるへと


いふと見れと人にもかたらすなら
はむとも思かけす物かたりの事を
にしめてわれはこのころわろき
そかしさかりにならはかたちもかきり
なくよくかみもいみしくなかく
なりなむひかるの源氏の夕かほ
宇治の大将のうき舟の女きみのや
うにこそあらめと思ける心まつい
とはかなくあさまし

（御物本　定家筆更級日記刊本に據る）

第三章　後　期

一、後期の和歌と謠物

後拾遺集

後撰集と拾遺集とは古今集の延長に過ぎなかつたが、後拾遺集に至ると漸く何物か動くものが見え、金葉集・詞花集に至つて外形的ではあるが、新しい革新の氣が見え、千載集に於て心情表現相俟つて渾然たる領域に入らうとして居る。

後拾遺集二十卷は承保二年に白河天皇が藤原通俊に撰するやうに勅を給うてから十餘年を經て應德三年九月十六日に成つて奉つた。拾遺集の後勅撰集の撰せられないこと八十六年であつたが、漸く和歌の機運が起り來つた事を示して居る。通俊はこの時代に於ける歌人としては源經信に劣つてゐたにかゝはらず撰者となつた上に、その撰集に不整の所が多かつたので、時人から種々非難を受けた。難後拾遺の如きは源經信が後拾遺集を難じたものである。後拾遺集の組織を見ると、雜の部に神祇釋敎と俳諧歌の加はつて來た事は特質とすべきで、宗敎思想の浸潤し

て來た事を認めしめる。全體の歌風は拾遺集の後を承けて感情並びに表現のなだらかになり來つた事であつたが、それだけ力の缺けて居る感がある。しかし一面に於て小主觀に捉はれた歌の境を脫して、淸新なる叙景の歌の加はつて來た事は、そこに新しい機運の動くことを示して居る。歌人に於ても源經信の如きは好忠の風を承けて淸新なる格調を以て當代歌人の中に最もすぐれて居る。

金葉集十卷は經信の子源俊頼が白河法皇の院宣をうけて撰したもので、崇德天皇の天治元年に撰進したが、再度改訂を命ぜられ三度目に奉つて嘉納せられたものである。故に金葉集には初度本、再度本、奏覽本の三種あるのであるが、現在八代集の中に加へられて居るのは再度本である。金葉集も種々非難を加へられ譬突集の如き異名を與へられたが、古歌人よりも當代の歌人を多く採るやうになつた事は注意すべき點である。殊に撰者俊頼は一方藤原基俊が公任に私淑して保守派の歌人であつたに比して、極めて革新的態度をとつた歌人であり、從つて金葉集には形式の上に新しい空氣の見えるものが尠くない。集中最も歌の數の多いのは撰者自らの三十五首であり、父經信が二十六首ある。從來の撰集に比して連歌の部の加はつた事も形式の上に注意すべきことである。

詞花集十卷は崇德上皇の仰せで近衞天皇の天養元年六月二日に左京大夫藤原顯輔が撰進して奉つたものである。この場合にも最初に奉つたのを更に改めて仁平元年に重ねて奏覽した。八代集の中最も歌數が尠い。歌風も金葉集の風を大體追つて革新の風に滿ちて居ることは、曾禰好忠の歌が最も多いのを見ても知られる。後拾遺集から詞花集時代の主なる歌人の歌を二三擧げる。

能因

心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春の景色を

源經信

夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く
旅ねして曉がたの鹿の音に稻葉おしなみ秋風ぞ吹く

源俊頼

煙たつ海人の苫屋も見えぬまでかすみにけりな鹽竈の浦
夕まぐれ戀しき風に驚けば荻の葉そよぐ秋にはあらずや
夕されば萩女郎花なびかしてやさしの野邊の風のけしきや
風吹けば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬ茅蜩の聲

千載集

千載集は後鳥羽天皇の文治四年四月廿二日に、白河院の院宣によつて入道俊成の撰して奏したものである。此の集は金葉集・詞花集が十卷であつたに反して、再び二十卷となり、序もまた加へられた。而して千載集の特質は金葉集・詞花集の奇嬌から離れて、溫雅なる中に平安末期の幽寂なる境地を現して居る所にある。千載集の撰者俊成ははじめ名を顯廣といひ後俊成と改めた。正三位皇太后宮大夫となつたが、安元二年に官を辭し入道して釋阿と稱し、建仁三年に九十歲で死んだ。始め六條家に關係があつたらしくあるが、後基俊を師とした。しかし彼は千載集を撰ぶに當つては、公平なる立場から基俊とは反對の俊賴の歌を最も多く取つた。而して彼の歌論の中心である幽玄體はまた千載集を撰ぶ上の標準であつた。千載集時代の歌人としては俊成の外に西行を始め數多いが、それらの中で西行に就いて特に一言する必要がある。

西行は佐藤義淸といひ藤原秀鄕の九世の孫として武勇の名があつた。始め鳥羽上皇の北面の武士として仕へたが、一朝遁世の心を起し、妻子を棄てゝ諸國行脚の旅に上つた。それより自然を友とし吟詠を事として建久元年二月十六日七十六歲で死んだ。西行の歌は千載集・新古今集等の勅撰集に在る外、家集山家集があり、

その著書と傳ふるものに撰集抄があり、傳には西行物語を始め數あるが撰集抄以下は信ずべきか否かを知らない。山家集等によつてその傳を僅かに知らるゝ外傳說の西行たる部分が極めて多い。山家集は俊成・定家・家隆・後京極良經・慈鎭五人の集とともに、六家集として刊せられて居るもの二卷が普通に用ゐられて居る本であり、外に西行法師家集二卷あるが、歌も少い。更に藤岡博士の刊行された異本山家集は流布本の誤を正すべきものが多い。

西行の歌は自然の中にひたつて、其の中に自己の生命を托したものが多く、殊に自ら自然を跋涉して自然の閑寂なる氣分を捉へ得た事に於て、始めて自然に對する愛の詩人を得たといふ事が出來る。もとより西行は自然の中にひたり切つてしまふには尙人間に對する執着が多過ぎる點もあるが、彼の如く自然を愛し得た歌人は平安時代に於て見ることを得なかつた所である。

藤原俊成

夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

哀なる野島がさきの庵かな露おくそでになみもかけけり

住み詫びて身を隱すべき山里にあまり隈なき夜半の月かな

戀せずば人は心もなからましもののあはれはこれよりぞ知る

西行法師

つく〴〵と物を思ふにうちそへて折あはれなる鐘の音かな

いづくにか眠り〳〵てたふれふさむと思ふ悲しき路芝の露

今よりは昔がたりは心せんあやしきまでに袖しをれけり

ながむとて花にもいたく馴れぬればちる別れこそ悲しかりけれ

きり〴〵す夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠さかりゆく

津の國の難波の春は夢なれやあしのかれ葉に風わたるなり

年たけてまたこゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん

よしの山梢の花を見てしより心は身にもそはずなりにき

晴れやらぬみ山の霧のたえ〴〵にほのかに鹿の聲きこゆなり

梁塵秘抄

次に平安末期の謠物としては今樣・和讃の如きを擧げる事が出來るが、文献として最も注意すべきものは梁塵秘抄である。梁塵秘抄は徒然草にも「梁塵秘抄の郢曲のことばこそまたあはれなる事は多かめれ」とあつて、室町時代まで傳はつてゐた事た明かであつたが、その後久しく世に隱れて居たのを明治四十四年の秋その零本が世に出で、次いで明治四十五年七月刊行された。梁塵秘抄は後白河

天皇の御撰である事は、法皇の皇子守覺法親王の右記、順德天皇の八雲御抄に見えて居る。この零本は卷二の一卷であつて、粱塵秘抄二十卷の中僅かに一部分に過ぎないが、これによつて資料乏しきこの時代の謠物の性質を大體知る事が出來るのである。此の書に收めた歌は法文歌と神歌とから成つて居る。法文歌は二百二十首あり歌體は主として今樣體である。內容は佛敎に關係したものであり、和讃として謠はれたものであらう。神歌は四句神歌と二句神歌とに分れ、目錄には四句神歌百七十首、二句神歌百十八首とあるが、實際の歌數には少しく相違があり、四句神歌二百四首、二句神歌百二十二首ある。四句神歌は大體今樣體であり、二句神歌は短歌體である。外に六句體もあり、又種々の雜體などもある。而して神歌は神といふ意味に於て神樂などと一致するものであらうが、その中には神に關するものの外に種々の內容を含んで居る。是等の歌には短歌などの如く囚はれた所がなく、感情・事件などに對して生々とした所があり、又自由な形式の潑剌たる感を與へるものがある。

春のやけ野になをつめば、いはやにひじりこそおはすなれ、たゞひとり野邊にて度々あふよりは、ないざたまへ。ひじりこそあやしのやうなりとも、わらはらが柴のいほりへ

舞へ〳〵かたつぶり、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴させてん、踏破らせてん、
眞にうつくしく舞うたらば、花の園まで遊ばせん。（四句神歌）
神ならばゆらさららとをりたまへ。いかなる神かものはぢはする（二句神歌）
佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ。
（法文歌）

二、小説物語

狹衣物語

源氏物語以後の物語は一面には源氏物語の傾向を追つて行つたものと、更に別の物語形式に展開していつたものとある。而して前者に於て先づ第一には狹衣物語を擧げる事が出來る。狹衣物語の作者は紫式部の女大貳三位とも、其の妹辨の局とも、或は後朱雀天皇の皇女禖子内親王に仕へた宣旨とも言はれて居るが、大貳三位說は紫式部の源氏物語から聯想される說で、深い根據はない。他の二說ももと

より精確なる根據はないのであるが、宣旨說は定家の作と傳へる僻案抄の中に「この物語禖子內親王宣旨作りたりときこゆ」とあるによつたので、比較的信ずべきは藤岡博士も言はれて居る所である。作られた年代は永承・天喜の頃であらうと言はれて居る。

此の物語は狹衣大將といふ才色雙絕の貴公子が、同じ家に養はれた源氏宮に戀してもその戀を得ることが出來ない。その中に源氏宮を東宮も心にかけて宮中に召されんとするが、狹衣はなほ諦めきれない。かくて帝が女二宮を狹衣に賜はらんとするにも心が進まない。が女二宮の狹衣に降嫁の計畫が進んで來た時に、計らずも飛鳥井姬君が拘はれてゆくのに會つて之を助け、姬君の家に宿して契を結ぶ。源氏宮を思ひつゝ戀を打明けても容れられざる心の艱みを、飛鳥井姬君によつて辛くも慰める。後飛鳥井姬君は筑紫の方に落ちてゆく途中入水したが、救はれて都のほとりにあつたが、その後病歿する。女二の宮は狹衣大將とはからずも契り、そのために懷姙したので女二の宮の母君も思ひなやんで死に、その生れた子は母君の產まれた事にする。女二の宮も出家する。源氏の宮も齋院となる。而して狹衣大將は帝の妹一品の宮といふさだすぎた女を妻とするやうになるが、もとより

愛のない結婚である。狹衣大將は後天皇にまでなるが、その戀愛生活に於ては常に得られざる戀に惱む事、源氏物語の薰君と同樣である。かくして狹衣物語は心理の描寫よりも說話の複雜變化によつて作の興味を與へようとしてゐる。而も說話として源氏物語を踏襲した所も尠くないが、全體としてよく統一を得て居る事はこの作のすぐれた所であると思ふ。狹衣物語には狹衣系圖、狹衣物語下紐のある外特に注意すべき研究はない。

濱松中納言物語

濱松中納言物語は狹衣物語と殆ど同時に作られたものと思はれる。その作者は明かでないが、更級日記の著者と同一であるとする說はほゞ信ずべきと思ふ。此の物語は場所を支那にとり、かつ夢の極めて多い事が着目せられる。濱松中納言は亡父が唐の第三皇子に生れかはつて居ると聞いて、唐に渡り、母后とともに高陽縣といふ所に住む第三皇子にあふが、濱松中納言は母后と相思の中となり一子が生れる。三年の後中納言は日本に歸り、唐の后の母が尼となつて吉野にあるのに逢つていろ〳〵語る。昔契つた大姫君が今は尼となつて居るのと共に住む。後尼君も唐の后も去るが、尼君が日本で得た一女と契を結ぶやうになる。此の物語は闕卷があるが支那を背景とし、且つ夢に支那と交通するなど變化を求めた構想があ

り、かつ狹衣物語が記述的であるに對して感傷的な筆致に富んで居る。

次に狹衣・濱松について此の頃に作られたと思はれるものに「夜半の寢ざめ」があるが、これは流布極めて尠い本であり、かつこの時代の原本をば改めたものである事は、藤岡博士が黑川本・中村本等の比較によつて考察されて居る。

更にとりかへばや物語も平安末期の作であるが、現存するものは鎌倉時代の改作であらう。是等によつて平安末期の物語が如何に荒誕なる說話を好んで用ゐたかを推察する事が出來る。

なほ此の時代の物語として特異なものに堤中納言物語がある。これは「花櫻を折る少將」を始め十篇の短篇から成つて居るが、各篇それ〴〵主題の捉へ方や表現の確かさに極めて優れて居る。蟲めづる姬君の如き庭に種々のむくつけき蟲を養つて愛して居る姬君を描いて、耽美主義的傾向を示して居る。作者を堤中納言兼輔とするは非であつて、平安末期の作であるとするのは正しいであらう。

三、歷史物語と傳說物語

前節に述べたやうな小說物語は源氏物語を極點として次第に頹廢的に傾いて來た

のであるが、平安末期に於ては別の形式を作り出して來た。卽ち歷史物語と傳說物語とである。是等は近古時代にも引續いて作られて居るが、此の期に於ては歷史物語として榮華物語と大鏡とがあり、傳說物語として今昔物語がある。

榮華物語は世繼ともいひ、藤原道長の榮華の一生を中心として描いた所に榮華物語の名があるのであらう。作者は赤染衞門と傳へられて居るがこの考に就いては安藤爲章も疑ひ、その榮華物語考の中に女性の日記などを集めて堀河院より後の男性が記したものといつて居る。全體が四十帖に分れ卷毎に優美なる卷名を附してあるが、編年體で宇多天皇から筆を起して堀河天皇の寬治六年までの記事である。第一帖月の宴から第三十帖の鶴の林までは、道長を中心としてその薨去までを記し、後の殿上の花見以後の十帖はその薨後の記事である。而してこの兩者は文體も相違しまた佛語などの多寡によつて作者が異なるといふ說を伴信友が說き、更に信友は藤原爲業がその何れかを記したものではないかと唱へて居る。藤岡博士もこの前篇後篇に分つ事に從つて居るが、なほ同一人が後より記したものとして居る。要するに榮華物語の作者も未だ斷定する迄に至つて居ないのである。而して榮華物語の組織を見るに、道長を中心とした事は源氏物語が光源氏を中心と

したと同一であり、たゞ源氏が架空の人物であるに對して道長が實在の人物である事に相違する。又榮華の前篇後篇に分れる事は源氏に於ける初めの四十四帖と後の宇治十帖の如きである。榮華物語の叙述は事實を叙述し、道長の榮華を讃嘆するのみで、文學的の價値は餘り高くないが、なほ精細なる事實の記述は源氏物語の背景としても興味があり、道隆の薨後伊周・隆家等の左遷、定子の哀歎を記した浦々の別れの如き讀むに足るものがある。

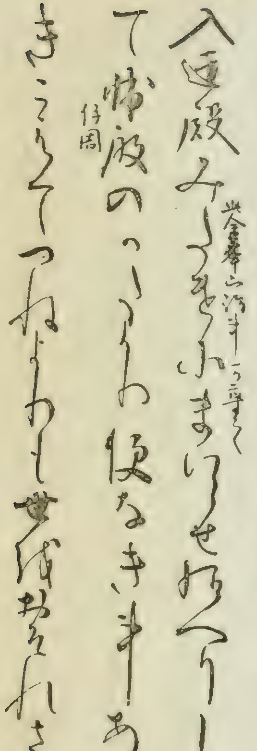
榮華物語の成立的研究としては安藤爲章の榮華物語考と伴信友の榮華物語考とがすぐれて居るが、注釋としては和田英松・佐藤球兩氏の榮華物語詳解が最も精緻なる研究である。

大鏡は榮華物語と同じく道長を中心として記述してある。年代は文德天皇より後一條天皇の萬壽二年までであるが、榮華物語と異つて列傳體であり、支那の史記にならつて帝紀・列傳に分つてある。初めに序があつて、雲林院の菩提講に大宅世繼・夏山繁樹といふ百五十餘歳と百四十歳程の老人が行きあひ、それに若侍も一緒になつて、世繼が主として語り、繁樹が合槌をうち、若侍が批評をするといふ全體の組織をなして居る。而して作者は萬壽二年の記述のやうに裝つてゐる

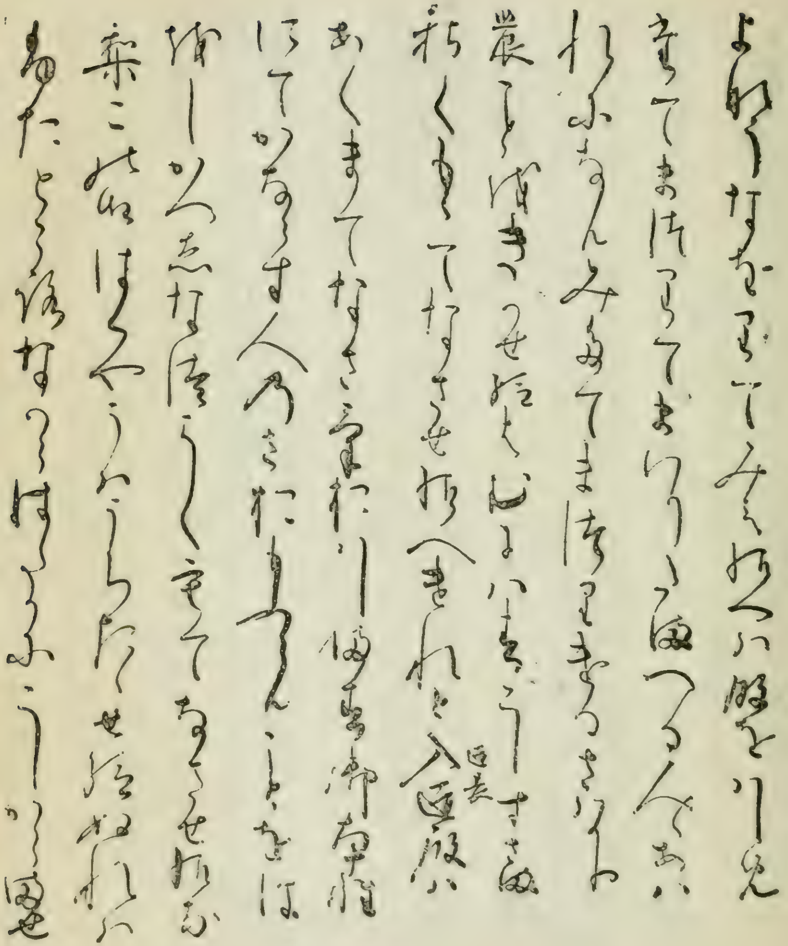
が、萬壽二年以後の事柄をも知らず識らずの中に記して居る。作者は尊卑分脈に爲業の所に世繼の作者とあるのによつて爲業説が行はれて居るが、この世繼は榮華物語を指したらしく必ずしも從ふ事が出來ない。

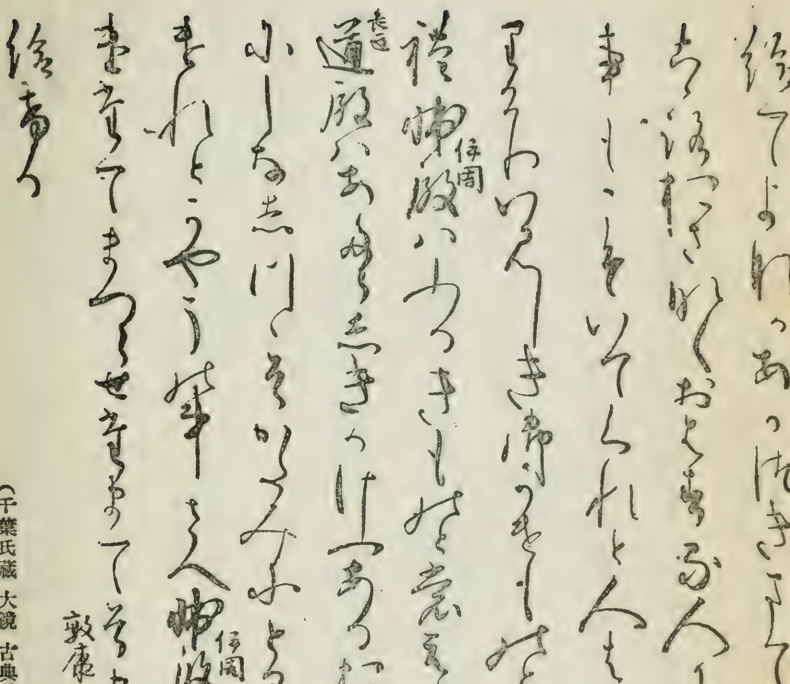
大鏡は榮華物語に比して分量も尠く記述も簡略であるが、一の事件を叙するにもその核心を捉へて事件を印象的に知らしめようとする。且つ記述的よりも批判的であり、道長の榮華を叙する側に、若侍をしてその陰謀を深刻に批判させる所に特色がある。而して文章の簡潔にして力強い所、翁等の洒脱なる風貌が躍如として居る點などに叙事文學として見るに足るものがある。

大鏡に就いては大石千引の大鏡短觀抄のある外餘り見るべきものが無いが、明治以後鈴木弘恭氏の大鏡註釋、落合直文氏の大鏡詳解が出た。



まゐらせつるにをねつるふかせ殿もしから
ことさらにまつとまうしと人は申せ八年との
たもくいくわかされしわのやうにてある
へきなうをはまいりて修行ありみをかたき猶
諸ねともをさせたまつる仏殿（行宮）いくおくし
きぬつる咽ましきれしうさは成れしく
さえまするに年となうしとしおかされて
ひきしく雙（スグ）六（ロク）はじまりていとさゝく
わきつふけふあそせとて雙六の枰をや
してたゞしぬこの将棋ふ清衛しきこ





（千葉氏藏　大鏡　古典保存會刊行本に據る）

今昔物語

次に傳說物語は平安初期の日本靈異記などの系統を引くもので、この末期に於て今昔物語が作られた。今昔物語は三十一卷から成り、卷一から卷五までは天竺の說話を、卷六から卷十までは震旦の說話を、卷十一から卷三十一までは本朝の說話を纂めてある。この中卷八・卷十八など數卷闕けて居る。其の說話の範圍は極めて廣く、佛敎傳說が多數を占めて居るが、本朝の部に於ては世俗・合戰・爭鬪・宿報・靈鬼・惡業等の一般民衆生活の上に現れる傳說を集めて、平安朝の貴族生活以外民衆生活に觸れた所がある。今昔物語は各傳說の初めに「今は昔」とある所から稱したのであり、宇治大納言隆國の作と稱せられる。隆國は源俊賢の子であつて寬弘元年に生れ、十二歲で從五位下に叙せられたが、累進して正二位權大納言に至り、承保四年出家して其の年七十四歲で薨じた。傳によれば、宇治平等院一切經藏の南の山際南泉房といふ所に籠つて居たために、宇治大納言といはれ、往來のものを呼び集めて昔物語させて書き寫したのが今昔物語であるといふ。この今昔物語の事を一名宇治大納言物語ともいふ。今日別に宇治大納言物語三卷があるが、是は後世の作品である。又宇治拾遺物語は鎌倉時代の作品である。

漢文學

終に平安末期の漢文學を見ると、續本朝文粹・朝野群載があり、外に本朝無題詩

の如きもある。續本朝文粹は十三卷あり、明衡の本朝文粹に次いで藤原季綱が撰したもので、朝野群載は三十卷あつたが今二十一卷存して居る。三善爲康の撰したものである。而してこの時代に最も漢文に名の高かつた者は大江匡衡の曾孫匡房であり、その著は續文粹や朝野群載に載つて居るものの外、有職の書である江家次第や、その談を門人の筆記した江談抄の如きがある。

第三篇　鎌倉室町時代

序　說

平安時代の纖細な統一のある作品から鎌倉室町時代の作品に至ると粗樸な雄健な所の生じたのを感ずる。これは一面には平安時代の假名文から和漢混淆文に變化した爲でもあるが、それと同時に鋭敏なる感性と優美な情趣との世界に浸りきつて、強い意力と人生に對する內面的統一も得なかつた立場から、平安末期の榮枯

盛衰に直面して得た人生に對する强い無常觀に統一せられたためであると思ふ。而して鎌倉時代には佛教觀によつて人生を厭離しようとする心持が、意識的な意力によつて行はれたために、そこに自己の中にめぐる二つの心持が互に爭つて居るのを見る。現實の自己を脫離して永遠の世界に統一しようとする心持と、現實の自己を生きたいといふ心持との爭闘が見られ、現實から脫却したいといふ心持の後から現實に對する執着が現れて來るのである。それは西行にしても長明にしても同樣であつたが、室町時代に至ると人間としての弱い執着から脫離して無我な普遍的世界に入り得たやうに思はれる。差別の相から普遍の相に歸一し得たのが此の時代の相であつたやうに思はれる。かくして此の鎌倉室町時代はこの二つの時期によつて特質があるが、而も全體を貫くものは佛教思想のゆきわたつた事である。而して一方には家を重んじ、教權を尊ぶ傳統的思想が漲つて居つたのである。所謂傳授思想はこの家を尊重する觀念と宗教的神秘思想とが結びついて生じたものと思はれる。

次に鎌倉・室町の二つの時期に分つて考へて見たいと思ふ。

第一章　前期

一、歌集と歌人

新古今集

鎌倉時代の歌集の中で第一に注意せられるものは新古今集である。新古今集は後鳥羽院が參議右衛門督通具・大藏卿有家・右近中將定家・前上總介家隆・右少將雅經の五人を鳥羽離宮に召して撰せしめたものであつて、土御門帝の元久二年に完成して居る。撰進されたのは建仁元年である事は明月記の同年十一月三日の記事にも見えて居る。新古今集は假名・眞名の兩序があり、組織の上にも古今集以來の整つた選集であるが、歌風の上にも表現を重んじて藝術的な句が最も高まつて居る。後拾遺集の頃から多くなつて來た叙景的な歌が多くなり、その表現を洗練する事によつて氣分を象徴するに至つた。歌の形式の上にも初句切・三句切が多くなり、體言止の歌が多くなつた。而して一面に於て本歌取が行はれて古歌の同じ題材を新古今特有の技巧形式のもとに表現するに至つた。

定家

新古今集の歌人として最も注意すべきは、撰者の中の藤原定家と藤原家隆とであつて、この二人は古今集の貫之と躬恒との如き位置を占めて居る。定家は俊成の子

として、歌人としてのみならず歌論の上にもまた古典研究の上にも功績がある。歌人としては歌の彫琢に苦心を重ね、新古今の歌調を代表して居るが、西行のやうな心情の自らに發して歌を成したものとは趣を異にして居る。新古今集に歌の見える外家集として拾遺愚草がある。歌論としては極めて多くの著書を有するが假託の書が多くある。近代秀歌・毎月抄・詠歌大概の如きはほゞ彼の著として信ずべきものであらう。彼の歌論は俊成の唱へた幽玄體を更に深く究めて、所謂有心體の歌を理想とするに至つた點にある。更に源氏物語・古今集・伊勢物語等の古典のテキストを制定した功績も忘れることは出來ないのである。これは貫之が歌論家として勝れてゐたのと同樣である。定家は明月記といふ日記を記してゐるので、これによつて生活なども知られるのであるが、名譽心の強い主我的の性であつた事がわかる。天福元年十二月出家して明靜と改め、仁治二年八月二十日に八十歳で卒した。

家隆

家隆は壬生中納言光隆の第二子で、母は實兼の女である。若くして寂蓮の婿となつたが、後俊成の門下となつた。歌人としての力は定家を壓して居る。家隆も新古今調の巧緻な表現を用ゐて居るが、定家に比して卒直に自然の姿を捉へようと

して居る。其の家集に壬二歌集がある。

この外にも當代の歌人は多いが、殊に注意すべきは後鳥羽上皇であつて、その不遇なりし御半生の間に生れ出でた御歌には、人の心を自らに動かすものがある。土御門・順德院も和歌に造詣深く、順德院の如きは八雲御抄といふ從來の歌學を綜合せられた御著書もある。

藤原定家

霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞふる
見わたせば花ももみぢもなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ
秋とだにわすれんと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣かな
駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ
玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふるやどのあきかぜ
忘るなよやどる袂は變るともかたみにしぼる夜はの月影
袖にふけさぞな旅ねの夢もみじ思ふかたよりかよふ浦風
夕暮はいづれの雲の名殘とて花たちばなに風のふくらむ

藤原家隆

昨日だにとはんと思ひし津の國の生田の杜に秋はきにけり

梅が香に昔をとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる
思ふどちそことも知らず行きくれぬ花のやどかせ野邊の鶯
吉野川岸の山ぶき咲きにけり嶺の櫻は散りはてぬらむ
あけぬるか衣手寒しすがはらや伏見の里の秋のはつ風
鳰の海や月の光のうつろへば浪のはなにも秋は見えけり

實朝と金槐集

此の時代の歌人として忘るべからざるものに源實朝がある、その家集金槐集は山家集に次いで注意すべきものである。

實朝は源氏の三代將軍として天下の政權を掌握して居つたのであるが、彼もとより蒲柳沈鬱の質である上に、北條氏の爪牙逞しくして武人としての地位は決して安固でなかつた。かくて彼は二十八歳を以て公曉のために此の世の生命をたちきられたのであるが、この不遇なる短い生涯を飾るものは歌人としての彼である。

彼は定家に歌を學んだが、後、萬葉集を定家より贈られて、之を見てから萬葉歌風を得て清新なる調を開いた。彼の家集金槐集の注意すべき特色は、萬葉調を取り入れたその復古的な所にある。金槐集は鎌倉右大臣家集ともいひ、貞享の版本と群書類從に收められた本との系統があり、その間に多少異同がある。その歌の中

悉くを金玉の響ありとは稱し難いが、萬葉風の力強い表現とともに眞率なる人間性のひらめきを見せた歌には、三唱措く能はざるものがある。

大海の磯もとゞろに寄する浪われて碎けてさけて散るかも

箱根路を我越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

ものいはぬよものけだものすらだにも哀なるかなや親の子を思ふ

いとをしやみるに涙もとゞまらずおやもなき子の母を尋ぬる

さりともと思ふものから日をへてはしだい〳〵に弱るかなしさ

我々は更に翻つて新古今集以下の勅撰和歌集を眺めたい。新古今集以後鎌倉期の末までに作られた勅撰集には新勅撰集より、續後拾遺集に至る九集があるが、是等の歌集はもとより新古今集の糟粕を嘗めるに過ぎないのであつて、文學史的には多くの價値を置き難い。殊に此の時代には定家の門閥が歌界を統一して、たゞ家風を傳統的に傳へるに過ぎないやうになつた。定家の子爲家は凡庸の資ながら、なほ努力によりて其の歌風を繼承したが、その以後は家風が三つに分裂するに至つた。

定家——爲家——爲氏（御子左（二條家））——爲世——爲通——爲定
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└爲藤
　　　　　　├爲教（毘沙門堂（京極））——爲兼
　　　　　　└爲相（冷泉）

是等の中二條家は定家の直系であると稱したが、其の歌風は保守的であつた。之に反して京極・冷泉家は寧ろ傍系の形をとつたが、二條家に比して新しき傾向を有し、殊に爲兼の如きすぐれたる才を以て二條家に對抗した。その爲世との論爭を記した延慶兩卿訴陳狀は兩派の態度を示してゐる。而して勅撰集も是等兩派のものが撰者として撰定したのである。

新勅撰集

新勅撰集二十卷は後堀河天皇の勅宣によつて藤原定家が貞永元年に撰進したものである。新古今集の幽玄な巧緻な歌風から淡雅な歌風に推移するのを認める。所謂新古今集は花をとつたから、これは實をとつたとある。が當時に於ては非難もあつたので、俊成の女も定家の撰集でなかつたならば手にもとらないであらうと

續後撰集及び其の後の勅撰集

言つて居る。契沖に新勅撰集抄の著がある。

續後撰集は後嵯峨上皇の院宣によつて後深草天皇の建長三年に爲家が撰した。續古今集は後嵯峨上皇の院宣によつて龜山天皇の文永二年に、藤原爲家・同基家・同行家・同光俊の撰定したものである。續拾遺集は龜山上皇の院宣により後宇多天皇の弘安元年に二條爲氏が撰進したものであり、新後撰集は後宇多上皇の院宣により、後二條天皇の嘉元元年に二條爲世が撰進した。玉葉集は伏見上皇の院宣により、花園天皇の正和元年に京極爲兼が撰進したものである。續千載集は後宇多上皇の院宣により、後醍醐天皇の元應二年に二條爲世の撰進したもの、續後拾遺集は後醍醐天皇の勅宣により、正中二年に二條爲藤と二條爲定が撰進したものである。かくの如く見ると、是等の撰集の撰者は爲兼の玉葉集を除く外は、すべて二條家によつて撰せられ、而も大覺寺統の天皇の命ぜられた所である。斯くして當時の二條家に於ける家の分裂は、皇室に於ける兩統と結びついて居る事を知るのである。是等の中で爲兼の玉葉集は新傾向を唱へた人の撰であるだけに、新しき傾向を示して居るが、要するにこの時代の勅撰集は新古今集等より一歩も出る事は出來なかつたのである。

二、宴曲

宴曲は神樂・催馬樂・朗詠・今樣等の平安時代の謠物と室町時代の謠曲とを結付くる謠物の一形式であつて、續群書類從遊戯部に選要目錄・宴曲集五卷・宴曲抄三卷・眞曲抄一卷・究百集一卷・拾菓集二卷・拾菓抄一卷・別紙追加曲一卷・玉林苑二卷の十七帖が收められてあるが、此の十七帖は嘗て吉田東伍博士によつて校訂を加へられて世に出たが、更に外物一帖を加へた十八帖をば宴曲全集として大正六年世に出したものがある。宴曲といふ名は宴遊に供ふるためであるといふ考が行はれて居り、又撰要目錄によつて宴曲集から究百集までは沙彌明空が正安三年八月上旬までに叙した事が分り、拾菓集二卷は明空が更に嘉元四年三月下旬に集めた事が分る。拾菓抄は正和三年、別紙追加曲、玉林苑は文保三年二月になつた事が記してあるが、編者の名は見えない。而して明空の作が多い事は究百集まで十帖の中、愚作ならざるものが二十餘首であるといふ自序の言によつて知り得る。作られた年代も野村八良氏は後鳥羽天皇御登遐前後から弘安の頃までに作られたものだというて居る。

宴曲の形式は平安朝の歌曲に比して極めて大きく、宴曲集に見える海道上りの如き、三段に分れて伊勢物語の業平東下りや、平家の海道下りなどによつて、長篇として作られてあり、宴曲抄の熊野參詣の如きも極めて長篇であるが叙事的構想はなく、又叙景としても極めて不自然で、たゞ美しき言葉を錦の如く列ねて、そこに音樂的諧調を示さうとして居る。題材としては極めて廣く、宴曲集の如きは四季・祝・戀・羇旅の如く大體勅撰集の部立によつてゐるが、或は源氏・伊勢物語・狹衣袖の如く物語より得たものもあり、聖廟靈瑞譽山王威德の如く靈驗に關するものもあり、そこに謠曲などに近づいて居る事を認める。內容思想としては特に見るべきものはない。

夕

夕陽西に傾て、東にかへりみれば又、山より遠の夕日影、さすがに麓は霧のへだてつゝ、松の行あひの木枯に、つれなき色を殘しても、よその木の葉や、時雨る暮やはてざらむ。夕越かゝる旅の空、かこつ方なき哀さは、夕やわきてまさるらむ。夕しほ夕なぎ夕波千鳥、なく音さびしき夕まぐれ、夕のことにわりなきは、野分の風も身にしみて、思みだれし折かとよ。忘るゝ間なく忘られぬ、夕の空の村雲に、猶立まよふ夕霧の、籬の花の

夕じめり、手折し袖やそぼちけむ。夕顔の花さく宿の主や誰、たそがれ時の空目は、げにおぼつかなくぞ覺ゆる。夕立の晴れぬる跡の夕づく日、かげろふかたの涼しきは、雲間をわたる夕風、夕霧の晩稻のいな葉うちなびき、風にたまらぬ夕露は結びもあへずや亂るらむ。墨染の夕の色の凄じきは、樒つむ山路のそば傳ひ、麓の野寺のはる〴〵と、そこともも見えぬ歸るさに、時しもあれや入相のかねて思し有增より、猶こゝろすむ山陰の、五百代小田の夕嵐、草の戸ざしの明暮は、袖も干しあへぬ露の間に、聲よわりゆく古鄕の、蓬が杣のきり〴〵す、暮れゆく空のけしきは、誰もあはれやまさるらむ。夕はもろき泪かな。

三、軍記物語と其の他の物語

軍記物語

この時代の物語で先づ第一に注意すべきは軍記物語である。平安時代の小說物語及び歷史物語から、更に武人の爭鬪を扱つた軍記物語の出たことは非常に興味のある事である。而してこの時代に於ける軍記物語としては保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記を擧げる事が出來る。是等の四書の成立の順序に就いて保元平治が最初に作られ、次に平家物語・源平盛衰記が作られたと見るのが從來の說であるが、藤岡博士は鎌倉室町時代文學史に於て平家物語の後に保元・平治物語

が作られたとし、野村八良氏も鎌倉時代文學新論に於て此の說に從つて居られる。又平家物語と源平盛衰記との先後に就いても說があるが、藤岡博士は源平盛衰記を先として居られる。が一般の說である保元物語・平治物語が作られ、次に平家物語が成り、源平盛衰記は平家物語の後に成つたといふ考は必ずしも否定せらるべきものではない。

保元物語

保元物語は保元の亂を中心として記した物語であつて、三十七章ほどに分れて、その次第を記して居るが、作の中心人物として活躍して居るのは源爲朝であり、父爲義に從つて崇德天皇方である。爲朝の剛勇と、味方が破れて後爲朝の陷つて行く失意の中に、その剛勇を發揮する點とが基調となつて居る。その筆は華麗ではないが、勇健な力に充ちたものである。作者は葉室大納言時長といふ說が最も有力であるが、中原師香の作とする說もある。

平治物語

平治物語はその組織並に文章も保元物語と同一であつて、同一作者の手によつて引續いて成されたものと思はれる。從つて保元物語の作者は平治物語の作者でもある。平治物語は平治の亂を扱つたもので、信西と信賴との不和から筆を起して、源義朝と信賴との爭鬪に至つて居るが、保元の亂に於ける爲朝に匹　する人物と

して悪源太義平が活躍して居るのである。

平家物語は平家の榮華に筆を起して其の滅亡に至る間を記した物語であつて、初に劍の卷があり、（但劍卷は普通に太平記について居る）、次に十二卷あつて、終に建禮門院の御出家の次第を記した灌頂卷がある。平家物語の作者に就いては諸説がある。徒然草には「後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の譽ありけるが、樂府の御論義の番に召されて七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名つきにけるを心うき事にして學問を捨てゝ遁世したりけるを、慈鎭和尚の一藝ある者をば下部までも召し置きて不便にせさせ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此の行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に敎へて語らせけり」とあるのであつて、是が多く用ゐられてゐる。惠空といふ僧の說には「行長入道慈鎭和尚に扶持せられし故にや平家物語の節も多くは臺家の聲明の音に似たる所あり」とあるが、確說といふ事は出來ない。尊卑分脈には葉室大納言時長を平家物語作者の隨一といつて居り、臥雲日件錄には平大納言時忠が文事を錄し、惡七兵衞景淸が武事を錄して置いたのを、其の後、菅原爲長が蒐集整理し、更に玄慈法印が正して一書としたとあるが、何れも確な根據はない。その僧侶の手に成

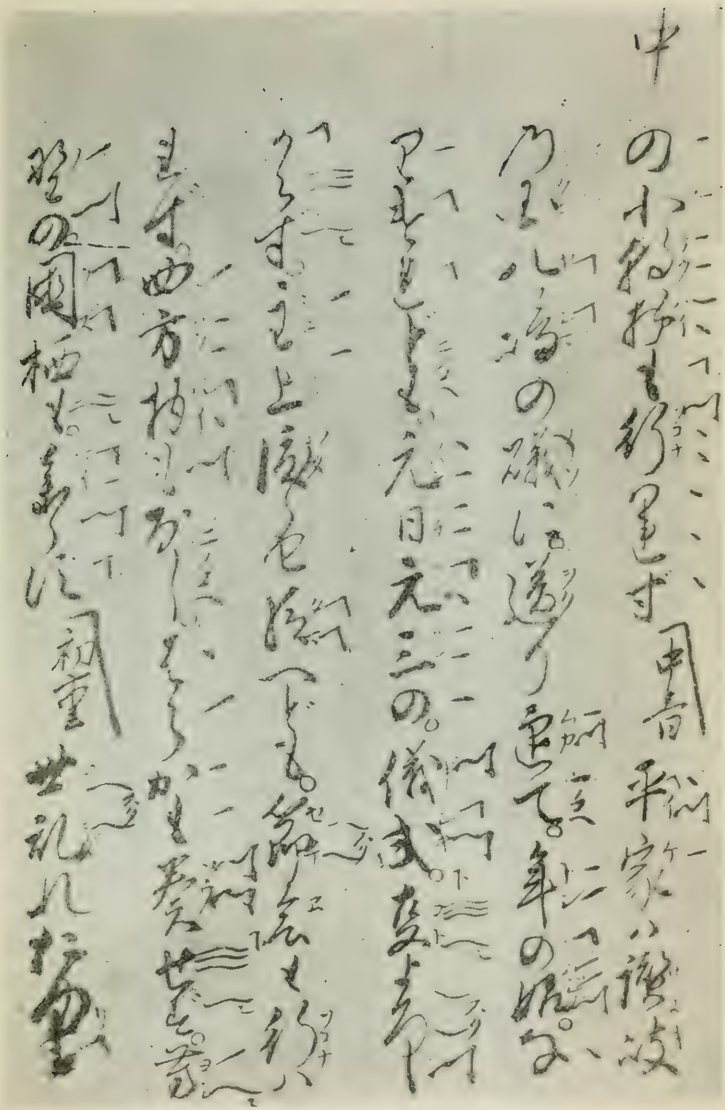
り、謠物として多くの手によつて改删もされ增補もされたものであらう。その成立年月に就いて物語の中に順德院を當代といふ文字のある點から見て承久頃に成つたものではないかといふ說がある。今日平家物語の流布本。異本が極めて多く存するのも謠物として多くの家に傳承されたためであらう。

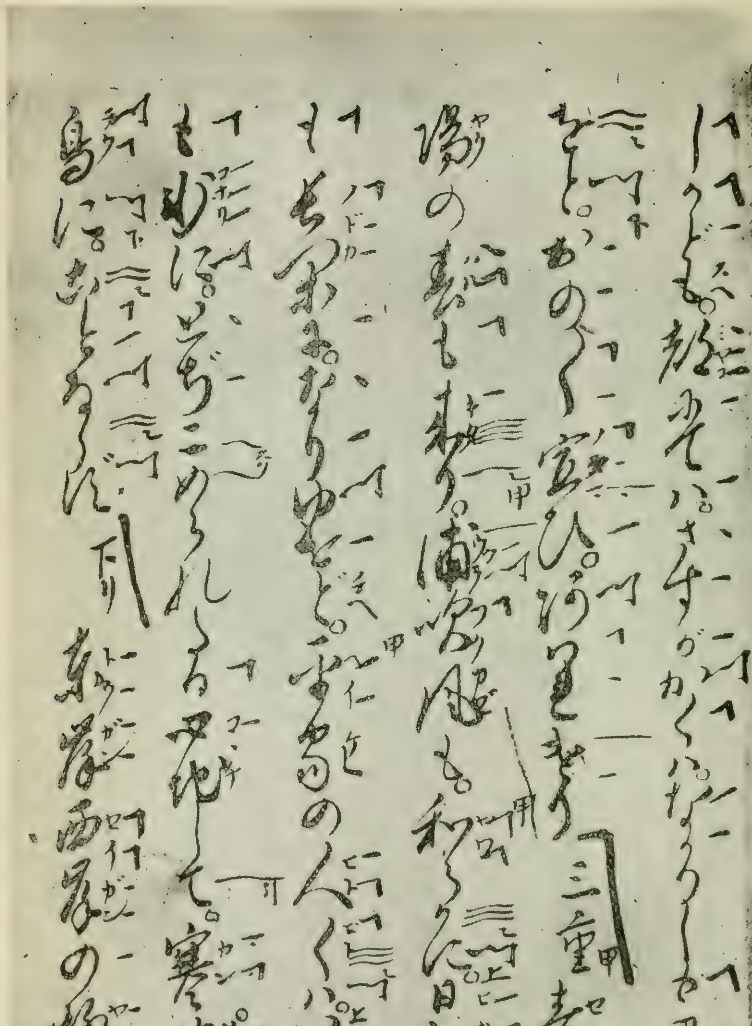
平家物語の全篇を見ると、人生に對する無常觀が中心となつて平家の二十年の榮枯盛衰のあはたゞしい事件を貫いて居る。强烈なる自我をあくまで突進まうとした淸盛の一生は、その全體の空氣の上から見てむしろ痛ましい。この物語の中には重盛の如き賴朝・義仲・義經の如き活躍して居る人物も多いが、淸盛の前には副人物たるに過ぎない。而して平家物語は一面に於て貴族的精神が武士的精神によつて次第に亡ぼされてゆく經路が描かれてある。平家は兩者の過渡にたついたましき犧牲者であつたのである。それが平家物語のもつ悲劇的性質でもあると思ふ。文章も和漢混淆文であつて强い所があるが平安時代の假名文脈と程よく織交ぜられて、祇王祇女や小督の如き優美な事件を叙するには、纖細優雅な文を用ゐ、戰鬪を叙するにはひきしまつた句法を用ゐて場景を活躍せしめて居る。

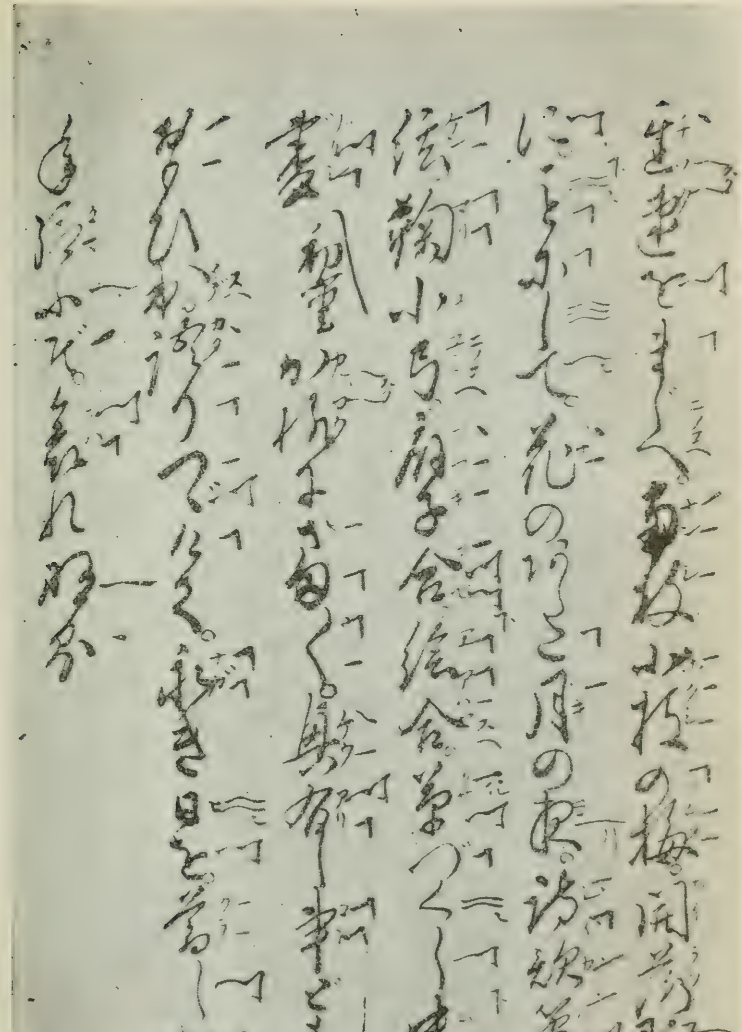
平家物語巻第九上

小朝拝

寿永三年正月一日の日院の御所は大膳の大夫成忠か宿所六条西の洞院なれハ御所乃体しかるへからすとて礼ともおこなはれす院の拝礼なかりしかは内裏







源平盛衰記四十八卷は平家の盛衰興亡を記したもので、扱つた題材は平家物語とほゞ等しくして詳密である。そのために平家物語との關係に就いて平家物語の異本であるといふ說も起る。異本といふ說にはにはかに從ひ難いが、兩者の密接な關係は否定し難いものがある。源平盛衰記が平家物語より前に出來たものであるといふ說は既に前に述べた所であるが、湯淺常山の問に土肥經平が答へた湯土問答には源平盛衰記の平家物語より後に作られた事を證して居る。

是（源平盛衰記）は平家物語の異本にあらず、信濃前司等が書きし時より遙か年を經て後、寶治二年・三年・建長元年、此の三ヶ年の中に書きしものと見えたり。如何となれば寶治元年巴女九十一歲にて死せし事を注せしと、又順德帝を盛衰記に佐渡院と記せるにて、寶治建長の中にあるを知る。巴女は元曆元年に二十八歲なる由、此の書に見えたり。之を以て九十一のを數ふれば寶治元年に死にたるに當る。順德帝、仁治三年九月に崩じ給ふ。順德院と尊號を奉られし。然るに盛衰記に佐渡院とのみ記したる順德と尊號なき前に書きたる事明かなり。夫れのみならず、賴經將軍を入道將軍と記したる如き盛衰記に後年の物にて平家物語の異本に非ず。

この考は一說として見ることが出來る。

源平盛衰記は平家物語と同じ題材を扱ひ、叙述としては平家よりも精細なる點があるが、物語の中心點が稀薄で全體を貫く精神の力强さが見られない。而して平家のやうな音樂的諧調が見られない。是は一面には平家が謡物である點もあらう

が、平家の製作者が殊にその榮枯盛衰に就いて痛切に世の無常を感じ、それが筆端に自らほどばしる所があつたためであらう。

軍記物語はこの期に於て始めて作られた文學形式であり、この時期に於ける文學を代表するものであるが、なほ物語の上に於て平安時代に創始された文學形式が引きつゞいて作られて居る。それらを次に考察して見たい。

第一に源氏物語の系統を引いた假名物語に就いて考へると、平安時代の頃にその名の見えて居る住吉物語やとりかへばや物語も現存の本は鎌倉時代の作と思はれるが、是等はその文章に於ては鎌倉時代の趣があるが、内容は平安時代末期のものと思はれる。更に二三のものに就いて見ると、

小說物語

石清水物語

石清水物語は寫本で上下二卷に分れて居り、續々群書類從歌文部に載せられて居る。この物語は正三位物語としご傳へられて居るものであり、正三位の名は源氏物語繪合の卷にも見えて居るが、この作は鎌倉時代のものであることは疑ない。

石清水物語の說話は複雜であるが、骨子となる所を見ると、常陸守の子鹿島の君は、後に伊豫守となつたが、右大臣と宰相の君との間に出來た姫君を戀しても得られず、後に石清水に於て夢に姫君に逢ひそれをせめてもの慰めとして出家する

といふ所にある。そこに平安時代のやうな情の行く儘に進む事がないと同時に、佛敎的思想の浸潤して居るのを見る事が出來る。近古小說解題ではこの書の成立を寶治元年以後文永八年以前二十四年の間の作と見て居る。

苔の衣

次に苔の衣は寫本で五冊から成つて居る。古物語類字抄には建長頃の作であらうとして居る。關白の一子右大將が、その從妹を慕つて夫人とし、一男一女を擧げたが、冷泉院が其の姬宮を右大將に賜はらうとしたので、夫人は憂愁して病を獲て逝き、右大將も橫川に隱遁したといふ事を中心として居る。この說話は源氏に女三宮を賜はらうとして、そのために紫の上が快々として居る所に類似して居つて、その影響をうけた事は想像されるが、その失意の境遇をのみ寫した所に此の時代の特質を見る事が出來る。

この他にも此の時代に作られたものは多くあるが省略する。

水鏡

更に歷史物語に就いて見ると、大鏡今鏡に次いで、水鏡が作られた。作者は中山忠親といふ說が比較的信ずべきであらう。水鏡は神武天皇から仁明天皇まで五十四代の叙述である。編年體の歷史で叙述も簡單であり、たゞ大鏡の前を補つて記したものであつて、全體としての强い統一點は見られず文章としても味ふべき所

は少い。しかし材料に就いては新しいものも取られて居る。初めに大鏡にならつて七十三歳の尼が葛城で仙人に逢つて聞いた事を、泊瀨寺で三十四五歳の修行者に夜をあかして語つた事になつて居る。

この歷史物語は更に室町時代になつて增鏡を出だしたが、これは更に後に述べる事にする。なほ增鏡序に「まことやいや世繼に、隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御ほどまでをしるしたりとぞ見えはべりし」とあり、本朝書籍目錄にも「彌世繼二卷」とあるが、今日傳はつて居ない。

宇治拾遺物語

次にこの期に於ける今昔物語の系統を引いた傳說物語を見ると、第一に宇治拾遺物語がある。宇治拾遺物語は今昔物語の補遺といふべき意味であらうが、今昔物語に重複するものが全體の百九十四段の中八十餘段もあるから、今昔物語の中から多く傳誦される說話を基礎として、更に後人が敷衍したものであらうか、之を隆國の著とするはもとより誤であらう。說話には佛敎傳說もあるが、民衆生活に觸れたものの方が多く、文章も今昔物語に比してやゝ平易になつて居る。今昔物語のやうに說話の性質によつて分類せずに集めてある。

十訓抄

十訓抄は其の序に「建長四とせの冬神無月の半の比おのづから暇あき、心閒なる折

節にあたりつゝ、草の庵を東山の麓にしめて蓮の臺を西土の雲に望む翁念佛のひまにこれをしるし終ることしかりとなむいへる」とある事によつて、建長四年の冬佛教に信心あつき老翁によつて作られた事は明かであるが、然らば何人であるかといふに、まだ確説はないのである。或は之を著聞集と文體の似て居る所から著聞集の著者である橘成季の著ではないかとする説もあり、又正徹の清巖茶話の記事によつて菅原爲長説をとる者もあり、又妙覺寺本の奥書に「或人云六波羅二﨟左衞門入道作云々（長時時茂等奉公）」とあるによつて六波羅二﨟左衞門入道説をとる者もある。この第二説は最も有力なるが如く、屋代弘賢もこの説に賛し、藤岡繼平氏もこの説をとつて居られる。（十訓抄詳解・十訓抄考に據る）

十訓抄は全體を十篇に分ち、「可定心操振舞事」、「可離憍慢事」、「不可侮人倫事」、「可誡人上多言等事」等それぞれ教訓的の題目をあげて、先づその趣旨を説き、之に關する説話をあげてある。和漢印度等の説話もあるが、今昔物語や宇治拾遺物語その他より材をとつたのであつて、今昔物語の如き説話としての價値は尠く、説話を材料として教訓を説いた所に此の書の特色がある。而してその説く所は儒教佛教の説などにより、その洒脱なる事は徒然草に及ばないが、淳々として説く

所に此の時代の特質を見る事が出來る。

十訓抄研究としては石橋尙賢氏の「十訓抄詳解」が見るべきである。

更に古今著聞集がある。此の書は著者の序に「于時建長六年應鐘中旬散木士橘南袁愁課小童猥叙大較而已」とある事によつて、作者ならびに成立年代を知る事が出來る。南袁は南里須袁の二字をとつたのであつて橘成季であり、建長は後深草天皇の御代である。同じ序に「余稟二芳橘之種胤一顧二璅材穉質一而琵琶者賢之所レ傳也。儻辨二六律六呂之調一圖畫者愚性之所レ好也」とある事によつて成季の性行をも推知し得る。著聞集は神祇・釋敎・政道忠臣・公事・文學・和歌・管絃・歌舞等三十篇に分ち、之を二十卷となして居る。著聞集も種々の説話を集めてあるが、今昔物語や宇治拾遺物語のやうな民衆的な素朴な所が失せて、やゝ批評的敎訓的な所が見られる。例へば、一の説話を擧げた後に、「秘すべき事もいたく過ぎぬるは罪となるにこそ、能く心得べき事なり。」といふ如き言葉を加へる事は、鎌倉時代の特色を示して居る。なほ此の時代の説話文學としては古事談を始め多くあるが、すべて略して次に隨筆紀行文學を眺めて見たい。

四、日記・隨筆・紀行

鎌倉時代に於ける日記隨筆は、此の時代の特質をうけて宗教的であり、又一面には傳統的の性質を有して居る。主なる日記・隨筆文學は、方丈記と十六夜日記と東關紀行及び海道記である。これに就いて解説を試みる。

方丈記

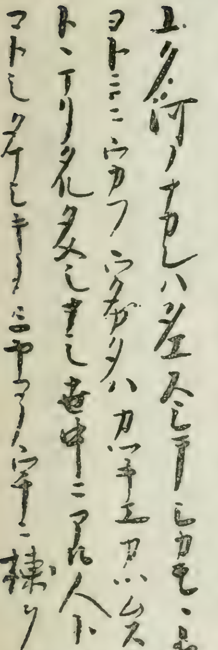
方丈記は鴨長明の著である。もとより是にも藤岡博士は平家物語等に類似する所多きを以て方丈記を僞書とせられ（鎌倉室町時代文學史）、野村八良氏も方丈記の流布本を本朝文粹卷十二の慶滋保胤の池亭記と比較して、是等を用ゐて後人が補綴したやうに言はれて居る。が未だ僞書説にも十分從ひ難いから、こゝには長明の著であるといふ前提のもとに考を進める。

鴨長明は加茂神社の禰宜の家に生れ、菊大夫と號し、法名を蓮胤といつた。十訓抄によると和歌管絃の道に通じて居つたが、社司を望んで叶はず、世を怨んで出家したとある。新古今集雜下のはしがきにも「身の望叶ひ侍らで社のまじらひもせでこもりゐて侍りけるに云々」とあるのは、方丈記に見える日野山隱遁の事柄と關係せしめて見る事が出來る。世の轉變のはかなきとともに、自己の不遇をな

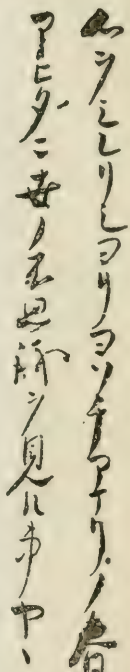
げく心とが凝つて世を遁れたと見るべきであらう。泗説の或説に建暦四年五月八日六十四歳で死んだといふのはその正否を知らない。彼には方丈記の外にその著といはるゝものに無名抄・四季物語・瑩玉集等がある。

方丈記は初めに人生の無常をなげく言葉があり、次に大火・大風・都うつり・饑饉・大地震等目のあたり見た世の悲慘なる事柄を敍して、次に日野山の隱遁の事を記してある。組織の上にも統一があり、思想に於ても無常觀が中心となつて貫いて居り、この時代の文學思想がこの一篇に結晶したかの觀がある。その部分的に平家・盛衰記に類似し、池亭記に似て居る點を以て方丈記の文學としての價値は失墜するものではないと考へられる。

方丈記には流布本と異本とある。異本はその原本に近いものであらう。註釋には元祿七年に刋行された方丈記諺解三卷を始め方丈記泗說等がある。



アラソヘル高キイヤシキ人ノスマヒハ世ヽヲヘテ
ツキセヌ物ナレト是ヲマコトカト尋レハ昔シアリシ
家ハマレナリ或ハコソヤケテコトシツクレリ或ハ大
家ホロヒテ小家トナル住ム人モ是ニ同シトコロモカハラス
人モ多カレトイニシヘ見シ人ハ二三十人カ中ニワツ
カニヒトリフタリナリ朝ニ死ニ夕ニ生ルヽナラヒ
水ノアハニソ似リケル不知ウマレ死ル人イツカタヨリ
キタリテイツカタヘカ去ル又不知カリノヤトリタカタメニ
カ心ヲナヤマシナニヽヨリテカ目ヲヨロコハシムル
ソノアルシトスミカト無常ヲアラソフサマイハヽアサカ
ホノ露ニコトナラス或ハ露オチテ花ノコレリノコル
トイヘトモ朝日ニカレヌ或ハ花シホミテ露ナヲキエス
キエストイヘトモ夕ヲマツ事ナシ予モノヽ



（異本方丈記・古典保存會刊行本に據る）

十六夜日記は爲家の後妻阿佛尼の紀行である。阿佛尼は安嘉門院に仕へて四條又は右衞門佐といひ、後に爲家に嫁して、爲相・爲守などを生んだが、爲家の死後播州細川の庄をば先妻の子の爲氏と爭ひ、その訴訟のために鎌倉まで下つて行つた。その時の紀行が十六夜日記である。而して鎌倉に下つた年は建治三年十月であり、この日記を書いたのは弘安三年である事を、十六夜日記殘月抄の總論に於て北條時鄰が考證して居る。十六夜日記と名づけたのは京都を出發したのが十六日の夜であつたからである。

十六夜日記は子の愛のために弱き女性の身として鎌倉まで下つて行くその母性愛の見える所に、平安朝の女性の日記と異なる特質があるのである。文章も歌もまた觀察に於ても特にすぐれた所がないにも拘らず、その心をひきつけるもののあるのは其の子を思ふ眞情から出發して居る所にある。

註釋としては十六夜日記殘月抄がある、これは高田與淸が初め二卷を書き、後の

一巻を北條時鄰が書いたものである。

むかし壁の中より求め出たりけんふみの名をば、今の世の人の子は夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。水莖の岡の葛葉返す〲も書きおく跡たしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすて給はぬ政にももれ、忠臣の世を思ふ情にもすてらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひしりながら、またさてしもあらで、なほこの憂こそやるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれば、大和歌の道はたゞまこと少く、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。日の本の國に天のいはと開けし時よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め物を和ぐるなかだちとなりにけるとぞ、此道の聖たちはしるし置かれたりける。さてもまた集を撰ぶ人はためし多かれど、再び勅をうけて世々に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけん。その跡にしもたづさはりてみたりのをのこゞ共もゝちの歌の古ほぐどもを、いかなるえにかありけん、預りもたることとあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて深き契を結びおかれし細川の流も故なくせきとめられしかば、あととふ法のともし火も道を守り家を助けん親子の命も、諸ともにきえを爭ふ年月をへて、あやふく心細き物から、何としてつれなく今日まではながらふらん。惜からぬ身ひとつはやすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほ忍びがたく道を顧る恨はやらんかたなく、さてもなほ東の龜の鏡にうつさば曇らぬ影もやあらはるゝと、

せめて思ひあまりて、よろづのはゞかりを忘れ、身をえうなきものになしはてゝ、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひなりぬる。

海道記と東關紀行

この時代の紀行文學として海道記と東關紀行とを見のがすことは出來ない。海道記は源氏物語の註釋書水原抄の著者といはれる源光行の著書であり、京都から東海道を通つて鎌倉に至る紀行である。初めに貞應二年卯月の上旬に都を出でたとある。又東關紀行は光行の子源親行の著と言はれるが、鳥野幸次氏は親行說を否定して居られる。海道記と同じく京都から鎌倉に至る紀行であり仁治三年八月十日に都を出でたとあるから、海道記より約二十年おくれて居る。兩書共に男性の日記であるから、十六夜日記のやうな和文調でなく、和漢混淆文であるが、海道記の方が比較的和文調を多く存して居る。何れも華麗な對句などを用ゐ力强い所はあるが、作の基調が稀薄なために方丈記のやうな感銘をうける事が少い。なほ此の時代に於ける隨筆・議論といふべきものは多いが、それらの中で佛敎の敎理を中心として歷史を說いた愚管抄と、法然・親鸞・日蓮等の法語が、日本文學の上に一の光彩を放つものである事を一言するに止める。

第二章　後期

一、室町時代の和歌と連歌

勅撰集

室町時代に於てもなほ勅撰集は撰進された。卽ち續後拾遺集以後、風雅集二十卷が花園院御自らの御撰として貞和二年に作られた。花園院の序がある。花園院は爲兼の御弟子であらせられた爲めに玉葉集とともに二條家から非難されて風體わるきは風雅集といはれた。

次に新千載集二十卷は後光嚴天皇の勅宣によつて二條爲定が延文四年に撰進した。新拾遺和歌集は後光嚴院の勅宣によつて二條爲明が撰したが、爲明が早く歿したので頓阿繼いで撰したと言はれる。撰進し終つたのは貞治三年である。又新後拾遺集は後圓融帝の勅宣によつて初め二條爲遠が當り、爲遠歿後二條爲重が代つて永德二年に撰進した、二條良基の假名の序がある。序には「權中納言藤原朝臣爲重に仰せて、古より今に至るまでの歌を集め撰ばしめ給ふ」とある。最後に新續古今集は後花園天皇の勅宣により、永享十年八月に飛鳥井雅世が撰進したも

のである。而してこの後勅撰集は絶えてしまつた。かくて室町時代に於て五部の勅撰集が撰せられたのであるが、既に因襲に流れて歌に力なく、文學的價値に於ては極めて乏しいのである、この時代に於て特に注意すべきものは新葉集であり、又二條家に於て重んぜられたのは頓阿の草庵集である。新葉集は弘和元年十二月に宗良親王の撰進されたもので、後龜山天皇から勅撰に准ぜられるべき勅宣を下されたとある。この集が勅撰集よりも注意さるべきは吉野朝の人々の歌集である點にある。吉野朝の人々は吉野に籠つて悲痛なる境遇を經驗したものであり、その經驗から自らに發した悲痛なる心情を歌つた事に於て、從來の因襲的な感情をうたつた歌に對して遙かに尊むべきものがあるのである。歌風そのものに就いては此の時代の他の歌集に比して特異な色彩を有するものではない。

新葉集の註釋としては村上忠順の新葉集標注がある。

題しらず　　中院入道一品

いかにせむさらでも霞む月影の老の涙のそでにくもらば

中務卿守良親王

歸る雁なにいそぐらむ思出もなきふる里の山としらずや

吉野の行宮におはしましける時、雲居の櫻とて世尊寺のほとりにありける花のさきだるを御覽じてよませ給うける。

後醍醐天皇

こゝにても雲居の櫻さきにけり唯かりそめの宿と思ふに

後村上天皇

高御座とばりかゝげて橿原の宮の昔もしるきはるかな

後村上天皇

鳥のねにおどろかされて曉のねざめしづかに世を思ふかな

草庵集

新葉集とならんで歴史的に注意すべき歌集に頓阿の草庵集がある。頓阿は兼好・慶運・淨辨とともに四天王と稱せられ、二條爲世の弟子として二條派の傳統をうけたのである。從つて歌學の方面にも井蛙抄・水蛙眼目などの著があるが、その歌を集めた草庵集は二條派に於て極めて重んぜられた。頓阿の歌は自然の捉へ方に於て、また感情に於て銳い所もまた清新な所も見られないが、その平易暢達の點が當時にあつて愛賞せられたものと思はれる。本居宣長の如きも草庵集を愛して註釋「草庵集玉箒」を著して居る。

たかまどの野路のしのはら打靡き朝置く露に秋はきにけり
ことわりと思ひながらも淋しきは深山の庵の秋の夕ぐれ
老いぬれば何故落つる涙とも我さへ知らでぬるゝ袖かな
行くまゝにいや遠ざかる故郷の山さへ今は雲がくれつゝ
いほりさす山田の引板のうちはへて明けぬくれぬと秋風のふく
百舌のなく尾花が末の夕日かげのこるもさびし秋の山ざと
山かげの比良の湊に舟とめて月まつ程に小夜ふけにけり

この後も歌の傳統はひきつゞいて歌人は輩出し、歌もよまれたのであるが、文學史的に特に擧ぐるだけのものはないと思はれる。

和歌が歌の家の專有の樣になつて生氣がなくなつた時に當つて、連歌が盛んに行はれ、近世に於ける俳諧へ導く過渡的產物をなして居る。一體連歌は三十一文字の歌を上下に分けて二人で唱和するのであつて、伊弉諾尊と伊弉冊尊二神の唱和が初めであるといひ、又記紀に見える日本武尊が甲斐國酒折宮で「新はり筑波を過ぎて幾夜か寢つる」と言はれた時、御火燒(みひたき)の翁が「かゝなべて夜にはこゝの夜日には十日を」と答へたといふ說話や、萬葉集卷八に大伴家持が「さほ川の水せき入

れて植ゑし田を」と言つたのに對して尼の「かるわさ稲はひとりなるべし」と答へたなどを以て起原とせられて居る。室町時代に出來た連歌の書物に筑波といふ文字を多く附するのは日本武尊の御歌を以て起原としたものである。その後、拾遺集の雑の部にも數首見えるが、特に連歌の部を設けてあるのは、金葉集が初めである。が平安朝では全く遊戯的であり、一首の歌を二人で唱和するに止まつたが、鎌倉以後には五十韻・百韻とつゞける様になつた事は順徳院の八雲御抄の中にも「昔は五十韻・百韻とつゞくる事はなし。たゞ上句にても下句にてもいひかけつれば、いまなからを付けるなり。今の様にくさる事は中比よりの事なり」とあるによつても明かである。而して既に鎌倉時代にも多少の法則があつて、發句は必ず言切るべきであるといひ、三句の中には病を去るべきであるといふ如きこれである。而して柿本衆と栗本衆とに分れ、柿本の衆は優美なる歌の趣味にたち、栗本の衆は滑稽の趣を主として居るのである。かくて鎌倉時代にも連歌は盛んであつたが、歌のやうな嚴肅なものでなく、遊戯的に見られて居つたのである。が、室町時代になつて和歌と對立して、否歌よりも生々とした力を以て行はれるに至つたのである。而して室町時代の連歌の位置を高からしめたものは二條良基

二條良基

であり、連歌を文學史的に見て價値多からしめたのは宗祇である。二條良基は攝政にまで至つた社會的地位の高い人物であるが、連歌を好み救濟その他のものを集めて、連歌を深くきはめ、古代から當時に至る連歌を集めた筑波集二十卷を後村上天皇の正平十一年に撰した。更に連歌の法式を記した應安新式を作り、又連歌に就いて說いた筑波問答もある。良基の後、幾多の連歌師が輩出したが、その

宗祇

最もすぐれたのは宗祇であつて、宗長・肖柏はこれにならんで注意すべきものである。宗祇は萬葉集・古今集・源氏物語等主なる古典の研究家としても注意すべき業績を殘して居るが、連歌に於ては新筑波集二十卷を撰し、また吾妻問答などの連歌を說いた著もある。彼は西行の如く諸國を周遊して自然の中にひたり、その間に古典の講義を各地で行つて居るのであつて、その作は自然の靜寂をとらへた點に於て自然詩人といふ事が出來るであらう。

連歌の例として水無瀨三吟三百韻の一部分を擧げる。

長享二年水無瀨三吟三百韻

雪ながら山もとかすむ夕かな　　宗祇

ゆく水遠く梅匂ふ里　肖柏
河風に一むら柳春見えて　宗長
舟さす音もしるきあけがた　宗祇
月やなほ霧わたる夜に殘るらん　肖柏
霜おく野原秋はくれけり　宗長

小歌

なほ此の時代の謠物を見るに、鎌倉時代に行はれた宴曲は發展して舞の本から、謠曲となるのであるが、是等は單なる謠物といふよりは劇的要素を加へてゐるから別に述べる事にして、こゝには近世の俗謠等に導く短形式の謠物に就いて一言する。小歌といふものが室町時代に行はれた。此の時代の小歌は閑吟集といふ集によつて殘されて居る。閑吟集は永正十五年に成つたもので三百餘首の歌謠が含まれて居る。是等の歌謠は初めから小歌として獨立したものでなく、謠曲や狂言等に見える小謠を切離して一首の小歌として認められるに至つたものもあると思はれるが、かくの如き小詩形の謠物が獨立して行はれるに至つたのは興味ある事である。その格調には近世の俗謠の趣をすでに示し、その感情は民衆の生きた心

があらはれて居る。

二、軍記物語と歴史物語其の他

室町時代の小說と名づくべきものは各種の形式に富んで居る。先づ前期に於て現れた形式の小說から、新樣式の作品に及ぼして行きたいと思ふ。即ち軍記物語を見ると太平記がある。

太平記

太平記は四十卷から成り花園帝の元保二年から後村上天皇正平二十二年北朝の貞治六年迄の記載であるが、主としては後醍醐天皇が北條氏追討の軍を起される所から筆を起して、朝廷軍の敗北から笠置の御沒落となり隱岐への御遷幸となり、やがて建武中興となつたが、また足利尊氏の叛によつて四海みだれ、楠木正成・新田義貞・北畠顯家なども陣沒し、後醍醐帝も吉野に崩御になり吉野朝の勢威衰へてゆく次第を叙してある。作者に就いては太平記理盡抄に玄惠法師が主として記し、後數人の僧侶の手を經て完成したといふ說が見えるが、近時、洞院公定日記によつて小島法師とする說が多く行はれて居る。また書名に就いても理盡抄によ

れば、四度も代つたのであつて、初めは安危由來記といひ、次に國家治亂記とし、三度國家太平記と改め、四度目に天下太平記と號したとある。

太平記は平家物語等と同じく戰爭を叙して居るが、叙事の進行に直接關係の薄い和漢故事を夥しく引くために、叙事が岐路にわたる事が多く、又漢文の語句を多く引用して居るために華麗ではあるが、率直な力がない。かつ平家物語のやうな統一ある花やかな事件と、中心となる思潮に乏しいために散漫に流れて詩的興味に乏しい。が南北朝が分れてから吉野朝の忠臣が苦鬪も効なく楠木父子や北畠顯家や新田義貞等が次第に戰死し、後醍醐帝も怨をのんで崩ぜられる等吉野朝の衰滅に陷つてゆくあたりのじめ〳〵した陰慘な氣分はよく寫し出されて居る。そこに平家物語の樣な劇的な効果は無いにしても、實人生そのものを思はしめるものがある。

義經記

次に太平記とはやゝ性質を異にするが、軍記の中に入れられるべきものに義經記と曾我物語とがある。是等は平家物語や太平記が時代の戰爭を扱つてゐるに反して義經といふ一個の英雄若しくは曾我兄弟の敵討といふ極めて狹い事件を扱つて居る所に相違がある。義經記は作者も年代もたしかには分らない。伊勢貞丈は鎌倉

○飢人投身事

角テ事ノ様ヲ見聞ニ天下此廿餘年ノ兵亂ニ禁裏仙洞竹苑椒房ヲ始トメ公卿殿上諸司百官ノ宿所宿所多ク焼ケ亡テ今ハ纔ニ十カ一ニ殘リタリシヲ又今度ノ東寺合戰ノ時地ヲ拂テ京白川ニ武士ノ屋形ノ外ハ在家ノ一宇モツヽカス離々タル原上ノ草壘々タル白骨叢ニ纏レテ有シ都ノ跡共不見成ニケレハ蓮府槐門ノ貴族ナヽ上達部上臈女房達ニ至ルヽテ或ハ大井桂川ノ波ノ底ノ水屑トナル人モアリ或遠國ニ落下テ田夫野人ノ賤キニ身ヲ寄セ或ハ片田舍ニ立忍テ柴門竹扉ニ住ワヒ給ヘハ夜ルノ衣薄メ曉ノ霜冷ク朝食ノ煙絶テ後首陽ニ死スル人多シ中ニモ哀ニ聞ヘシハ或ル御所ノ上北面ニ兵部少輔ナニカシ

トカヤ云ケル昔日来ハ富栄テ楽ミ身ニ餘リケルカ流罪ノ後財寶ハ皆取散サレ従類眷屬ハ何地共ナク落失テ只七歳ニナル女子九ニナル男子ト年比相馴シ女房ト三人計ソ身ニ添ケル都ノ内ニハ身ヲ可置露ノユカリモ無テ道路ニ袖ヲシヒロケン事モサスカナレハ思カネテ女房ハ娘ノ手ヲ引夫ハ子ノ手ヲ引テ泣々丹波ノ方ヘソ落行ケル誰ヲ憑トシモナク何クヘ可落著共覺ネハ四五町行テハ野原ノ露ニ袖ヲ片敷テ啼明シ一足歩テハ木ノ下草ニヒレ臥テ啼キ暮ス只夢路ヲタトル心地メ十日計ニ丹波國井原ノ岩屋ノ前ニ流タル思出河ト云所ニ行至リヌ都ヲ出シヨリ道ニ落タル栗柿ナントヲ拾テ纔ニ命ヲ繼シカハ身モ餘リニクタヒレ足モ不立成ヌトテ母少キ者皆川ノハタニ倒レ伏テ居

タリケレハ夫餘リニ見カ子テトアル家ノヮリメヘキ人ノ所ト見ヘタル内ヘ行テ中門ノ前ニイテツカレ乞ヲソヒタリケル暫ク有テ内ヨリ侍中間十餘人走出テ用心ノ最中ナレハウタル人ノツカレ乞スルハ夜討強盗ノ案内見ル者歟不然ハ宮方ノ廻文持テ回ル人ニテゾアルランヽ誡置テ嗷問セヨトテ手取足取打縛リ舉ツ下ツ二時計ツ責タリケル女房少キ者斯ル事トハ不思寄川ノ端ニ疲レ臥テ今ヤくト待居タリケル處ニ道ヲ通ル人行ヤスラヒテ穴哀ヤ京家ノ人カト覺ヘキ人ノ年四十許ナリツルカ疲レ乞ヒツルヲ怪キ者カトテアレナル家ニ捕ヘテ上ツ下ツ責ツルカ今ハ責殺テゾアルラント申ケルヲ聞テ此女房少キ者今ハ誰ニ手ヲ牽レ誰ヲ憑テカ暫クノ命ヲモ助ルヘキ後レテ死ナハ冥途ノ旅ニ獨

迷ハンモ可愛暫待テ併ハセ給ヘト聲々ニ泣悲テ母ト二人ノ少キ者互ニ手ニ手ヲ取組思出河ノ深淵ニ身ヲ投ケルコソ哀ナレ共兵部少輔ハイカニ責問ケレ共此者元來咎ナケレハ落サリケル間サラハ許セトテ許サレヌ是ニモコリス妻子ノ飢タルカ悲レサニ又トアル在家ヘ行テ菓ナントヲ乞集テサキノ河端ヘ行テ見ルニ母少キ者共カ著タル小草鞋杖ナントハ有テ其人ハナシコハ如何ニ成ヌル事ソヤト周章騒キテ彼方此方求アリク程ニ渡ヨリ少シ下ナル井堰ニ奇キ物ノアルヲ立寄テ見タレハ母ト二人ノ子ト手ニ手ヲ取組テ流懸リタリ取上テ泣悲メ共身モヒヘハテ、色モ早替リハテ、ナレハ女房ト二人ノ子ヲ抱拘ヘテ又本ノ淵ニ飛入共ニ空ク成ニケリ

將軍の末に記したものといつて居るが、山崎美成の海錄には義經記の中に御免やうの軟革とあるが、御免革の名は室町將軍の時出でたから、義經記は室町將軍の時の作であらうと言つて居る。島津久基氏は足利義滿・義持時代の作であつて、儒教風の教育をうけた公卿が義經傳說を集成したものであらうと言つて居る。義朝の都落から筆を起して、牛若の鞍馬入となり、金賣吉次につれられて奥州の秀衡にたよる所から、賴朝擧兵のために之に從ふ事になる。しかし平家物語に精細に敍せられてある平家追討の花々しき義經に就いては全く省略して直ちに腰越の申狀となり、土佐坊の堀河夜討となり、かくして判官の吉野落に悲壯の筆をふるひ、更に判官の北國落となり、判官自害の事に終つて居る。卽ち義經の所謂英雄としての花々しき時代は之を略して、少年の頃の苦楚艱難をなめた次第、兄賴朝と仲違をしてから、居るに所なき逃亡落魄の悲痛なる時代を主として描いた所に義經記の作者の態度が窺はれるのである。

曾我物語は十二卷に分れ、曾我兄　の仇討を扱つてある。作者も時代もたしかに分らないが、義經記とほゞ同時代に作られたものであらう。主題は仇討であるが軍記一流の溯源的敍述法から神代の始の事から筆を起して、惟喬・惟仁の位爭など

を叙してあり、次に曾我兄弟の先祖の事から委しく說いてある。その間に支那や印度の故事を盛んに引用して居る。たとへば杵臼・程嬰が事、費長房が事、泰山府君が事、王昭君が事、玄宗皇帝の事、眉間尺が事、帝釋と阿修羅の戰の事といふ樣に煩しきまで故事を叙してあるのは軍記物語の一般の特質に從つて居る。曾我兄弟の仇討は義經記とともに國民精神のあるものに觸れて居る點で、國民の愛好して止まなかつたものである。その意味に於て、この兄弟の仇討を始めて精細に叙した物語として注意すべきものである。

次に歷史物語として增鏡を擧げる事が出來る。增鏡は治承四年後鳥羽院の卽位し給うてから、元弘三年後醍醐天皇が隱岐から御還幸になるまで十五代百五十年間の編年體の歷史物語である。此の書の成立に就いては一條兼良作といふ說もあるが、未だ從ひ難いのであつて、たゞ應永本の奧書によつて元弘三年から永和二年までの四十八年間に或人によつて書かれたといふ事のみはたしかであらう。本文の中に錯簡があつて「大內山」と「烟の末々」とは一部重複があり、かつ年代も錯誤して居り、又「山のもみぢ葉」と「北野の雪」とも重複して居る。之に對して校定增鏡には烏丸本によつて「山のもみぢ葉」の終と、「北野の雪」と重複す

る部分を削り、又「大内山」の末を割いて「烟の末々」の終に移してあるが、之は谷森善臣翁の「烟の末々」と「北野の雪」とを贅篇とせられた如く、この二篇は增鏡の作者（若しくは別の人）が更に詳しい材料を得て書き足したものであると思はれる。增鏡詳解に擧げてある永正本、校定增鏡の終に記された近衞家本の外にも、前田家の古寫本一本及び應永九年書寫の奥書のある尾張家本をはじめ「烟の末々」及び「北野の雪」のない古寫本は多いのである。太平記にも切繼本があるが、增鏡も書足して現在の形になつたのであらう。

增鏡は之を內容の上から見れば、承久の亂と元弘の亂といふ二つの事件を中心とした皇室と執權北條氏との交涉史卽ち公家と武家との爭鬪史である。斯の如く皇室對幕府の爭鬪史であるために、公家でありながら武家に接近した西園寺家の榮華を極めた點、武家が皇室の反武家的御精神を幾分でも弱めるために計らつた兩統迭立問題や攝家將軍・親王將軍の如きは委曲を盡して居るが、武家と公家との融合一致した元寇の亂はそれが歷史としては重大な問題でありながらこの書の精神に觸れる事が少かつたために筆をば省いたのであるとも思はれる。その文章は源氏物語を摸した擬古文であつて、優麗な點はあるが、力が弱く描寫も生々とし

て居ない、嵯峨の清凉寺で老婆が語る事になつて居るのは大鏡等にならつたものであるが、大鏡のやうにそれらの人物が躍動して居ない。

註釋書としては和田英松・佐藤球兩氏の增鏡詳解がある。

增鏡は過去の事件を扱つて居るが、現在に當面した事件、若しくは過去の事件を現在との深き交涉に於て記したものに吉野拾遺と神皇正統記とがある。

神皇正統記

神皇正統記は北畠親房の著である。親房は村上源氏の出であつて、伏見・後伏見・後二條・花園・後醍醐・後村上の六朝に歷仕したが、殊に後醍醐天皇の御代には碎身の忠をはげみ南朝の忠臣として仰がれた。而して後醍醐帝の怨をのんで吉野に崩ぜられ、南朝の運非ならんとする時、關東に轉戰して恢復をはかつた。關城にこもつた時、結城親朝に書を送つてその救を乞ひ、また小田城内にある時、大義を明かにするために神皇正統記を著した。その薨じたのは正平九年であつた。正統記は神器の存する所に正統のある事を證せんため、建國の初めより筆を起して、歷代を概觀して後村上帝の卽位に終つて居る。その間に一貫するものは大義の精神であり、建國の條には佛敎的解釋も多く見えるが、「神代より正理にて受け傳へる謂を述べん事を志して常に聞こゆる事は載せず、されば神皇正統記とや名づ

け侍るべき」とある如く神道を中心として居るといふ事が出來る。而して一面には政道の正しかるべき事を說いて、賴朝や泰時の功績をたゝへて居る、君の政もその可否に隨つて御運の通塞があるべき事、說いて居る。正統記は此の如く親房の熱血の溢るゝ所に成つたものであるから、その文章はかざらないが力が漲つて居る。建國から後村上の朝までの大きい範圍を描いてよく統一を得て居る。

吉野拾遺は南朝に關する種々の說話を擧げてある。たとへば後醍醐天皇が吉野の行宮でよまれた

こゝにても雲居の櫻咲きにけりたゞかりそめのやどと思へど

の御歌を始めとして、辨內侍に關する說話や伊賀局が藤原の基任を慰めた說話など數十項の說話を集めてある。神皇正統記が史論を中心として居るに反して、是は說話集として一貫の主潮はないが、南朝の悲慘なる運命に對する詠嘆が全體に流れて居る。奥に

正平つちのえのいぬのとしの春、草の庵の夜の雨に、よしの花の露をしためて、よしなしごとを書きつらね侍るこそものぐるほしけれ　隱士松翁

とある。松翁は新井白石の新安手簡によれば侍從吉房である。吉房は延元のはじ

めから正平十三年まで凡廿三年吉野に奉仕し、天皇崩御の後出家してこの書を綴つたと思はれる。

三、お伽草子と舞の本

お伽草子

室町時代に於て源氏物語の系統を追つた擬古物語が引きつゞいて作られるとともにお伽草子が作られた。擬古物語は大體に於て寫實的傾向を追ふものであるが、お伽草子はこの時代に起つた說話を平易に叙述したものであつて、寫實的分子よりは空想的・想像的要素が濃厚である。例へば鉢かづきをとつて其の說話を見る。河内の國かた野の邊に備中守さねたかといふ人があり、家富みさかえ、夫婦の中に一人の姫君を得たが、母君は鉢に何か入れて眉のかくれるほどにかぶらせ觀世音に祈願した。その中に十三になつたが母はかりそめの病に死した。そこで姫の頭の鉢をとらうとしたが如何にしてもとれなかつた。その中に繼母を迎へたが、繼母は姫の鉢かづきである事を嫌つて、父に讒して姫を逐出した。姫はなく〳〵流浪する中に、中將殿といふに見出されてその家に伴はれ、湯殿におかれたが、矢張人からあざけられて居た。かくてその中將殿の四人目の御曹司がこの鉢かづきの

姫と契を結ばれたので、兩親からも諫められたが聞かないので兄三人の嫁などとともに嫁合をする事になつた。鉢かづきの姫と御曹司は悲んで家を出ようとする時、鉢が落ちて金銀の調度や御小袖などが出て來た。さうして姫の容顔はかゞやくばかりであつた。かくて嫁合せで恥を與へようと思つてゐたのに姫の美しき姿に皆々は驚き、音樂。歌すべてにすぐれて居るのを感じて父はこの四男と鉢かづき姫とに財産の大部分を與へた。さうして姫を逐ひ出した繼母も今は悔悟して、この姫にめぐり逢ふのである。かくの如く一時は輕蔑されたものが再び榮えの春にあふ事は、物ぐさ太郎にしても一寸法師にしても同樣であつて、行きつまつた現實から離れて、ほしいまゝに空想の世界をめぐらした所に是等の說話が生れ、又お伽草子が生じたのである。而して一面には敎訓的要素が加へられて居るのである。

お伽草子を集めたものはお伽草子前編。後編に二十三篇集められ、又新編お伽草子にこれにもれたもの二十篇を集めてある。

舞の本は幸若舞の詞をさすのである。幸若舞は舞舞ともいつて、源義家から八代の後胤桃井播磨守直常の孫の宮内少輔直詮が始めたと言はれる。而して直詮の童

名を幸若丸というたために幸若舞と稱するのである。足利義政の頃から行はれ近世にかけて盛んであつた樣である。雍州府志に幸若舞の事をといて「一種有二舞舞一凡舞有二兩流一越前幸若流幷大柏流是也。幸若自稱二桃井直常之裔一代代領二公方宗之祿一其舞詞或戰場之事、盛衰之變、戀慕之情、種々有二三十番一其後所レ作是號二新曲一。其所レ唱曲節音聲與二猿樂之所一レ唱大同小異。是亦有二太夫一。其左右二人連舞、是稱レ連又謂レ脇。大小鼓助レ之。」といつて居る。舞の詞の存するものは貞享の書籍目錄に三十六番あり、群書一覧には書籍目錄にある鎌田・いづみが城が見えないが、別に夢合・劒讃談の二番が見えるので、兩者で三十八番ある事になるが、この外にも數番あるから總べてで四十餘番存する事になる。

舞の本の製作者竝に製作時代はたしかには分らないのであるが、謠曲や狂言などの如く、次第に作られていつたものと思はれる。而して舞の本に於て扱はれた題材を見ると曾我兄弟。義經を扱つたものが最も多く、その他平家物語から題材を得たものが多い。又大織冠。入鹿・百合若大臣等平安朝及びその他の時代から材を得たものが多い。上田博士はこれらの作品が最も古いと言はれて居る。

舞の詞の組織を見ると地の文と詞とに分れて居るが、地の文も謠曲の樣な華麗な

韻文式でなくお伽草子風の散文式であり、全體が劇的な要素が少くお伽草子と同じ樣な體裁をなして居る。例へば「富樫」の如き辨慶と義經が安宅を越える事件を主として扱つて居るが、謠曲の安宅の如き劇的な趣がなく、叙事的であつて事件が浮出して居ないのである。今日傳はつて居る幸若舞の曲節は極めて素撲なものであり、舞も極めて單純なものである。

四、謠曲と狂言

然しながらこの時代の文學を最もよく代表して居るものは謠曲と狂言とである。謠曲は猿樂の能の詞曲であつて、能と合せて味ふべきものである。謠曲は觀世・寶生・今春・喜多・金剛等の諸流派に分れそれ〴〵によつて曲節のみならず詞章をも多少異にして居るが、大なる相違はない。番數は普通行はれるものは二百番であるが、すべてを合すれば五百番餘りに達する。作者も作られた年代もはつきり言ふ事は出來ないが、室町時代よりおそくは近世の初頭にまで多くの人の手によつて作られたものであらう。世阿彌によつても多く作られた事は世阿彌十六部集

などによつて知る事が出來る。

謡曲の構造

謡曲の構造を見ると、シテとワキとが主であつて、それにツレ・トモ等が現れる。またツレが多勢なる時は立衆といひ、又子供のする役を子方といふ。又アヒといふのは狂言師のする役である。謡曲の中、詞の文句は是等によつて語られるのであるが、別に地の文は地謡がうたふのである。又シテはその姿が前後變つて現れる場合に之を前シテと後シテと稱する。而してシテが前後姿を變へるのを複式能といひ、シテが姿を變じないのを單式能と稱する。

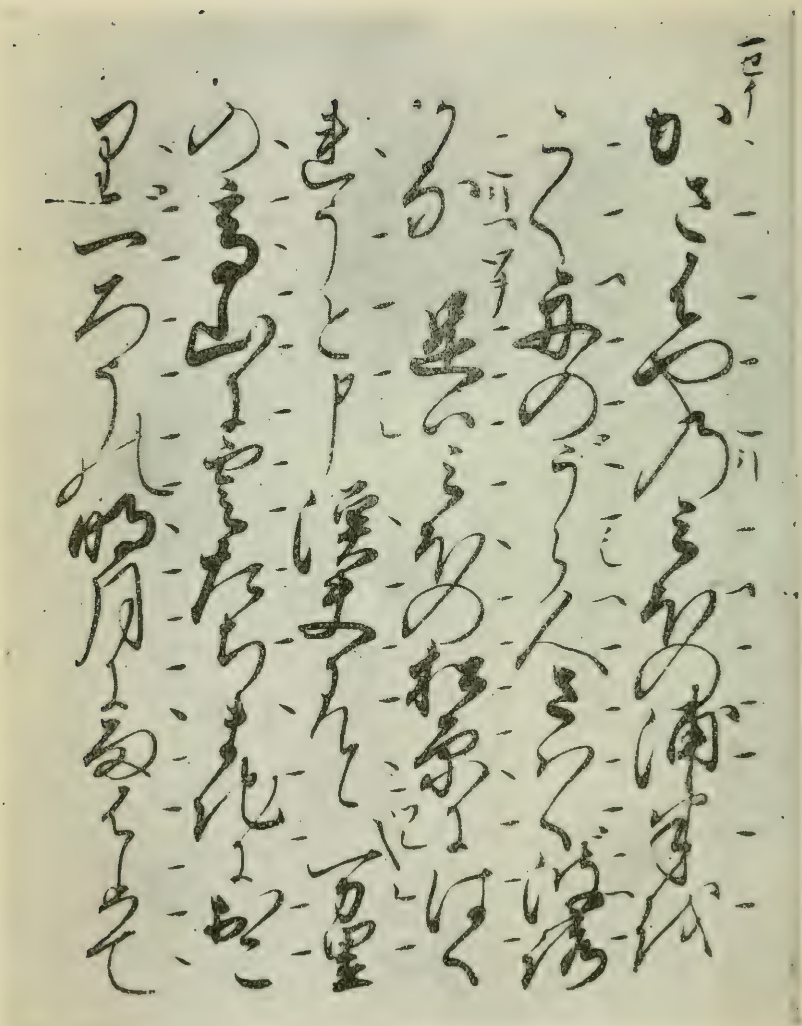
謡曲の内容

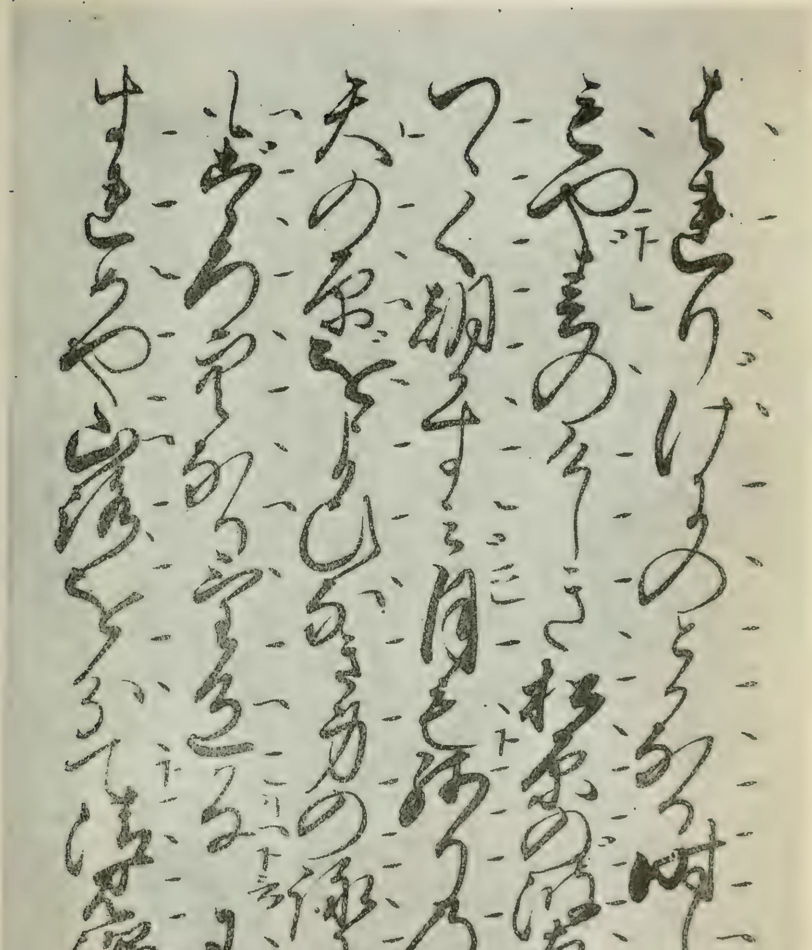
次に謡曲を内容の上から見ると、神事祝言能・精靈能・人事能の三つに分ける事が出來るかと思ふ。是等を一二の作によつて少しく解説して見たい。神事祝言能は神事に關するもの若しくは祝賀の意を表したりするものであつて、形も單純であり、劇的な要素が極めて尠い。思ふに謡曲の原始的なものであつて高砂の如きはその最も代表的なものである。此の曲は前シテは翁、後シテは住吉明神であり、ツレは嫗、ワキは阿蘇の神主である。處は播摩であり、季は二月である。阿蘇の神主が高砂の浦を一見せんとして來ると、老翁老婆が唱ひながら來るので、それに高砂住吉の松の由來を聞く。老翁老婆は相生の松の精なる事を語つて沖の方に

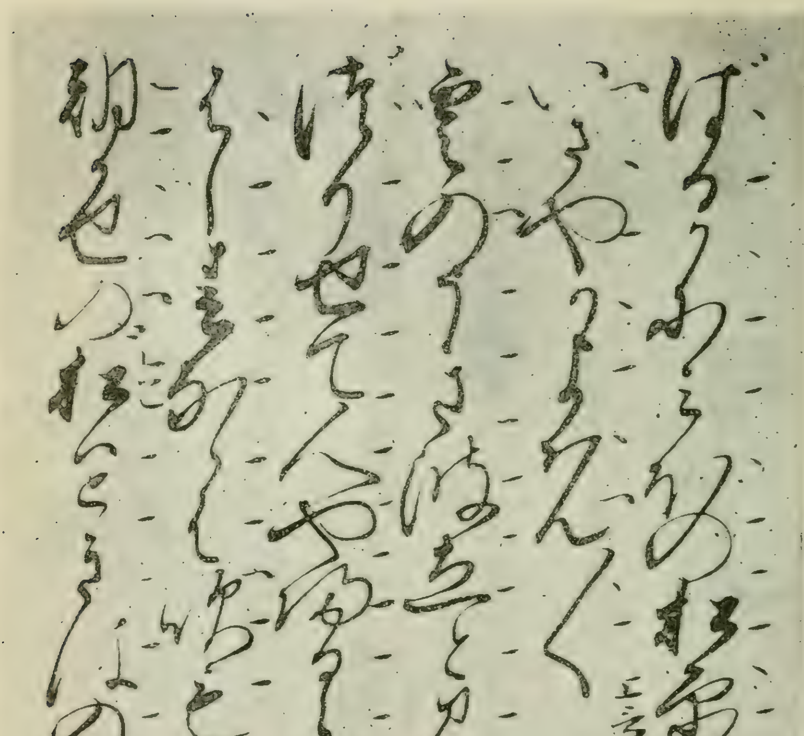
出る。住吉の浦に於て住吉の明神があらはれて御世をことほぐといふ說話になつて居る。

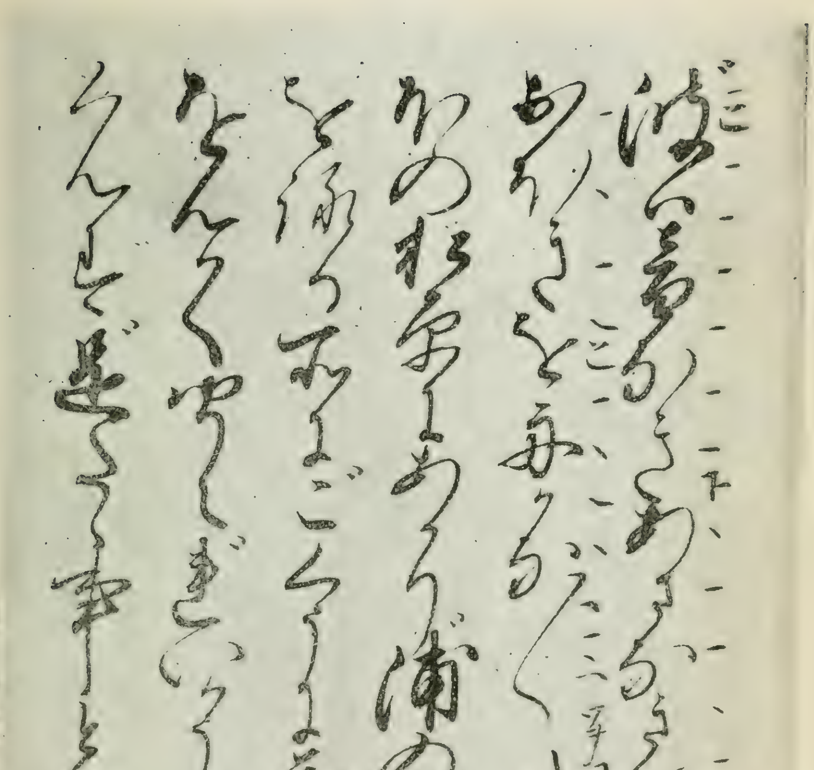
精靈能は形は普通複式であつて、死んで往生を遂げない魂魄が此の世に假に姿を現すが、旅人に敎化され迷の雲はれて、眞の姿をあらはして消えるといふ說話形式になつて居る。例へば田村をとつて見る。此の曲は處は京都の淸水寺であり、時は三月の花の頃で、前シテが花守、後シテが坂上田村麿、ワキは旅僧である。旅僧が淸水寺に參詣して玉箒を持つ花守に向つて寺の來歷を聞くと、花守は委しく述べ花盛りなるあたりの名所の話をする。旅僧もその博識に驚いて素姓を聞くと、その姿は田村堂の内に入つてしまつた。旅僧は花も妙なる法の庭に經を讀誦して居ると、田村麿が現れて旅僧の讀誦は大慈大悲の觀音擁護の結緣たる事を語りその素姓を述べ鈴鹿の惡魔退治の功績を語りて姿が消えるのである。精靈能の形式は大體是と同樣でたゞシテが田村麿の樣な武人である事もあり、松風の樣な妙齡な女性である事もあり、或は芭蕉の精の如き場合もある。それによつて又別の分類もなされるであらう。

第三に人事能は人事を扱つたもので、これには精靈能の如く一定の說話形式もな









（東京帝國大學文学部國語研究室藏）

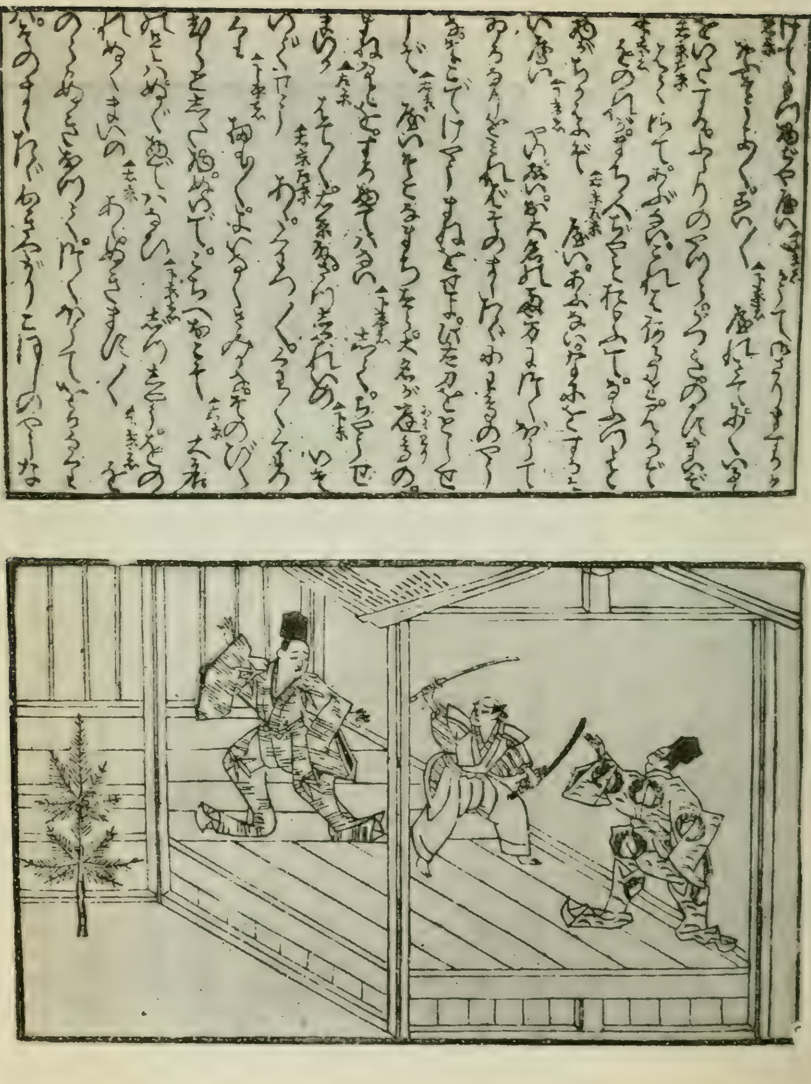
く、又形は多く單式であるが、構造は複雜であり、一曲毎に特殊性があつて劇的要素が豊富である。謠曲の本質は精靈能にあると思はれるが、藝術的に見て人事能はすぐれて居るといふ事が出來る。たとへば義經と辨慶とが奥州へ落ちのびる際安宅の關でにせ勸進帳を辨慶が讀んで難をのがれた説話を扱つた安宅の如き、平家の景清が流されて居る所へ、その女の人丸が訪れた哀憐の場面を描いた景清の如き、又時頼が佐野源左衞門佐世を拾ひあげた説話を描いた鉢木の如き、その他敵討説話を描いた望月の如き、盲目の俊德丸を扱つた弱法師の如き是れである。形式が捉はれないだけに自由である。

謠曲とならんで狂言がある。狂言は謠曲が猿樂の能として演ぜられる間に演ぜられたのであつて、謠曲との間に著しき相違を示して居る。謠曲は從來の古典文學を集成したものであつて、その詞は華麗であり、その內容は神祕的宗教的であり、全體に嚴肅な氣分がたゞよつて居るが、狂言は舊文學の傳統から離れて新しい詞と內容とから成つて居る。卽ち言語も室町時代の口語を用ゐて居り、その描く所も室町時代の世相の上に立つて居る。傳統的な權威と、新しく起つて來たものとの衝突葛藤といふ樣な題材を扱つてそこに滑稽な氣分がたゞよつて居るのである。

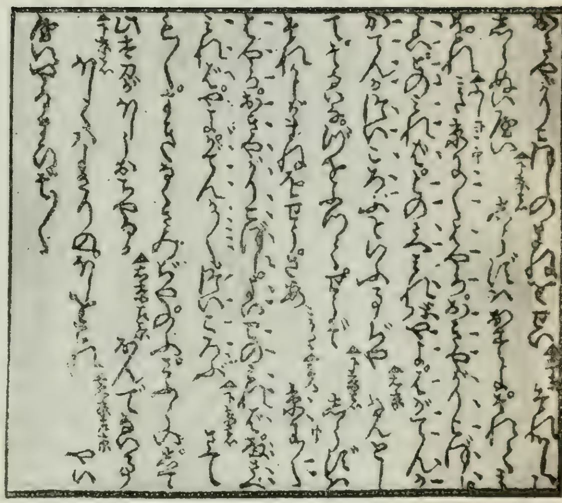
十　二人大名

一元来　さあ〳〵うつくれはとみへた人あれに何かつてみ
きの誰ぞよりとはつてやるとてよいて
はござらぬかやうにまいりましてそれよと存
ずるが、やがてまふさうずる。何よりござるぞ
一元来　さいはひあれへ行とはまいつてはかてござるぞ
一元来　何と御来をとしたが、此方へまいりませい
一元来　まづそれはてはまゝ、何がうつて何とござる
一元来　いやまづまいりませう　去来　去ていやされ行と
まいりませいといふてこれにて人を待まする
さるゆへ　去来さく存　仍病をいたしてから仰よませ
んでござる　一元来　のふそれがしが目をかけ候
めいたした事ではござらうぞ　一元来　いや是は何を
すにおよびてすこしたゞへのものをとつて
まへてむかうよりよろこびて　去来　これが一段の
ござる　一下来去　さて御前は下京辺のものでござ
るな。さうハ八丸まいつて。ふ外へまいつてふとあそうずる
そうくまいらう　一元来　のふあれをばうんざる
れて。ふあそうしさまよりがたうござるとや

待て行きたいものゝ一人まいる　一元来　一段でござらう
一元来　おもしろく　一下来去　あるとこのかそではござりまする
一元来　御入てあらず。一下来去　そんのは夏ではござります
一元来　さて〳〵さらばそれがしとれへゆくぞ　一下来去
何　ふ外へまいりますする　一元来　一段のおちぞぞれうとまい
一下来去　いやなにものもいてこ
何程の何ほどにそそ
くハぶあいや世みえたへおまいりますする　去来　去て
行ぞでらんへいつてござらう　一下来　おらやおでとを
いでつまいらしい　去来　いやうはいつてたハされ候
よ。さあく誰ぞれく　一下来去　てあまりまする
一元来　めうとう来ふどれこのまいあいつてござる刀を
もらいまするまいらせ　一元来　やふまことにて候
とさげてござそてくれ　一下来去　是でござる　一元来　これ
くさのくどのれきれてあづけ行くとござけ
たのしんださてとらやいてをきうぞでい
下せし　一下来去　そあ　去来　申しくれうくいつてある
へ大は事こそおのなりてくせ候ふ　一下来去　い
そでこざりまするぞ　去来　もちやいとて
れど御事てあんの下をハ女のてよまぎあ



而して狂言の今日存するものは　言記・續狂言記・拾遺狂言記によつてそれ〴〵五十番づつ合せて百五十番と外に狂言記外五十番に載せられてあるものによつて合せて二百番になる。狂言の流派にも大藏流・鷺流・和泉流の三流あるが、最も勢力あるは和泉流である。



(二人大名)

是等の狂言は内容から言つて種々の分類がなされるであらうが、演ずる上から見ると脇狂言と二番目狂言と雑狂言とに分けてある。脇狂言には祝賀の意のあるものを用ゐ、末廣がり・寶の槌などはその例であり、二番目狂言には大名物などを主とし、文相撲・墨塗・二人大名の如きその例であり、雑狂言は種々の題材を扱つてあり、その番數は最も多い。

狂言の組織は極めて單純であつて、例へば「末廣がり」の如き、大名が太郎冠者

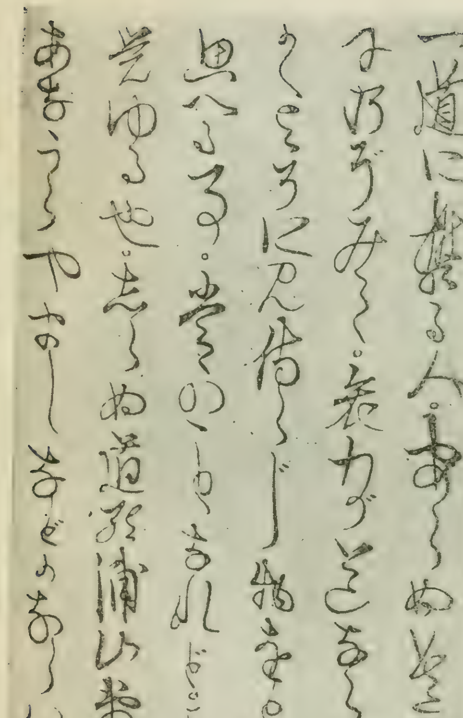
に末廣がりをとゝのへにやると、末廣がりをよく知らない冠者は惡者にだまされ、傘を高價でかはされ、主人に叱られるといふ次第であり、そこに無智なる者の滑稽を現して居る。「かたつむり」にしても主人からかたつむりを捕る事を命ぜられたのが、山伏にだまされるといふ構想である。かくの如きは太郎冠者の無智を主題としてあるが、更に大名の無智臆病を主題としたものには「二人大名」の如きこれであつて、道づれに刀を持たせたが、道づれにおどかされて散々弄れた上に衣類までも奪はれる事を扱つてある。卽ち權威あるべきものが臆病で無力である所に滑稽があり、又諷刺があるのである。同樣な意味に於て「布施ない」の如き法師が布施の事をのみ氣にして居るといふ所に滑稽があり、諷刺があるのである。かくて狂言は當時の現實を逆行的に見た點に謠曲が理想化され淨化されたる方面を見るのと反對の傾向を有し、兩者併せてこの時代の特質を表して居るといふことが出來る。

五、徒然草

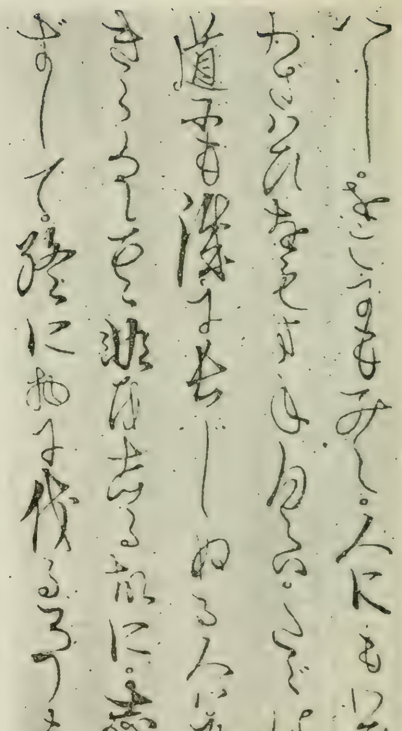
室町時代に於ける日記隨筆として我々は兼好法師の徒然草を擧げる事が出來る。

集の如きもあつて相當にすぐれて居るが、その文學史上に忘るべからざるは徒然草の著者であるためである。兼好傳に關するものは中園太政大臣公賢の日記である園太暦の外に、近世に於て種々のものがあるが、その傳は餘り詳しくは分らないのである。觀應元年四月八日六十八歳で卒去した事、また出家したのは四十歳を越えてまもなくであつた事位しか明かでない。その性行は人生を超越し得たもののの如く、禪僧の飄逸なるにも似て居る。長明の如く人生に對する愛着捨てがたいものとは異なつて居る。從つて徒然草に見える所もこの小我を脱却し得た境地である。第一段の「つれづれなるまゝに」云々から、最後の八歳になつた時佛に就いて父と問答した段に至る迄、その說く所多方面にわたつて居るのである。その間に戀を說き、解脱を說いて、平安朝の情趣主義と室町時代特有の主情主義否定の間に一見矛盾があるやうであるが、そこには長明や西行などと違つて解脱の境地から再び人間生活に立歸つて見て居る樣に思はれるのである。短い隨筆の連續する中に統一した作者の個性を眺める事は難くはないのである。哲人としての兼好の面目が躍動して居るのを覺える。

徒然草は枕草子とならんで隨筆文學の中のすぐれたものである上に、その近世に於て一般的に行はれた點に於ては遙かに枕草子を凌ぎ、源氏物語や伊勢物語にも劣らぬ多くの註釋的研究がなされて居る。それらの中で北村季吟の徒然草文段抄はすぐれて居り、諸註を集めた徒然草諸抄大成と併せて見るべきである。明治以後にも多く現れたが、沼波瓊音氏の徒然草講話の如きすぐれた註釋である。


一道に携る人。あらぬ道のむしろ
にのぞみて。あはれわが道ならましかば
かくよそに見侍らじものをといひ心にも
思へる事。常のことなれどよにわろく
覺ゆる也。しらぬ道の羨しく覺えば
あなうらやまし。などかならはざりけん。

とりいれてあかきんに歌舞をやり出して人
にあそふは角あるものゝ角だからうふ
けり牙あるものゝ牙をつかひぞまさぞれ
ば人としては芸はおほしませ鳥とあ雁
それあるを徳と池にまはるゝものある
は火ある炭が呂に萬すてまず才藝
のすぐれ且るまでしらや。此祖先誉まても。
にたゞおほきおとおりへる人は、それに云
慈すおてこうゝいれもだしゞ肉ほすたこ
がくのめぐみか。ほうえんこて学びてたまはる



（模本嵯峨本徒然草）

第四篇　江戸時代

序説

元祿期の文學

中世の神秘的宗敎觀と傳統的な空氣との中から出でて自由に個性を創造しようとした自覺の下に產み出された近世の文學には潑剌たる生命がひらめいて居た。近

世の第一期とも言ふべき元祿文學は、その潑剌たる生命が産み出したものである。因襲的な現實から脫却して古に復らうとする運動は古學の復興となり、萬葉集の歌風が唱へられた。又自然の中にあくまでひたつてそこに自己の生命を見出さうとする態度は芭蕉の藝術を産出した。而して階級意識から離れて町人となり、町人の藝術を新しく創造したのは近松・西鶴であつた、此の如く元祿時代は因襲から解放せられて、獨自の世界を創造した所に生々とした力が漲つて居る。

而して第二期ともいふべき安永・天明の時代は、第一期と後の第三期との間の過渡にたつ時であつて、和歌の如きはこの期になつて萬葉派の歌風を初めて完成した觀があるが、既に芭蕉・近松・西鶴の創造した藝術は漸く頽廢して、第三期に於ける新なる開展の跡を示さうとして居る。加ふるに第一期の文學が京阪に於て行はれたに反して漸く東遷しつゝ、第三期の眞の意味の江戸文學を作り出す過渡時代であつたのである。俳諧に於ては蕪村がこの期に出で、その他狂歌・川柳の如き滑稽詩歌も起らんとする。小説に於ては洒落本・讀本などの新しき小説の形式が起らんとして居る。しかし淨瑠璃は既に衰へ、脚本がこれに代つて劇文學の中心とならうとして居る。が全體に於てこの期は動いて居る時であつて完成せられたる時

期といふ事が出來ぬ。

第三期は第一期とならんで近世文學の一の中心となる時代で、第一期の如く潑剌たる生命は無いが、感性は纖細になり、所謂粹とか通とかの氣分が橫溢して居る。和歌は復古の精神から一歩を進めて現實に立脚して、そこに生命をとらへようとした氣運が現れ、俳諧も一茶の如き又現實に足を下したといふことが出來る。小説に於ては讀本・人情本・滑稽本・合卷など種々の形式の上に多くの作家が輩出した。淨瑠璃は僅かに存續するだけで、脚本の方面に於ける鶴屋南北から河竹默阿彌に發展するその運動 比して遙かに光が弱いのである。近世文學を大體この三期に分つて主なる作家作品に就いて解説を試みて見たい。

第一章　前　期

一、古學復興時代の和歌

近世の初頭に於ける和歌は萬葉集の精神に復つて、こゝに新しい歌を作らうとし

た。　この氣運によつて生れ出たのが戸田茂睡・下河邊長流・契沖・荷田春滿等である。がこの時代に於ては萬葉集を智的に明らかにしようとする意識はあつたが、未だ實際の作歌に於て萬葉集の歌風を現す事は出來なかつたのである。戸田茂睡は寛永六年五月十九日駿河府中の御城の三の丸で生れたが、五歳の時下野國那須郡の黑羽に移つてそこで成人した。後江戸に出て戸田恭光と改め仕官したが、官を辭して隱棲した。而してかくれがの茂睡と名乘り現實の譽を捨てゝ學問と文學との世界に遊んだ。彼の歌學上の功績は梨本集や僻言調によつて從來の二條派の傳統に從つた歌論を破壞した所にあるのであつて、その清新なる破壞的態度から必然的に歌の上にも多少の新しさを加へて居るのである。彼の歌は「とりのあと」や「さざれ石」などによつて見られるが、舊派の歌風の中にやゝ表現や心境の上に新しさを認める。

ぬれてなく山ほとゝぎす五月雨のふる巣やおもふ親や戀しき
秋の色のながめにかへてこのころは高根のあらし麓のしぐれ
旅衣たちへだてゝもさらざるはさらばといひし人の俤
みる夢のなにそはありてありし世の忘れぬさまを猶したへとは

山名玉山

茂睡と親しかつた山名玉山も茂睡についゝの傳授をしたと茂睡が記して居るから、多少學問もあつたであらうが、むしろ歌人としての方がすぐれて居る。而して歌人としては茂睡よりも清新温雅な點に勝つて居る。

雨かすみ吹くとしもなき風のゆふべ花しめやかにかほりみちつゝ
枝しげみ夕日へだつる松陰にわが色みせてさくつゝじかな
むらすゞめさわぐ夕の竹垣にひとりしづけき鶯のこゑ

下河邊長流

下河邊長流は大和龍田に生れ、江戸に出たが志を得ず、難波に歸つて隱棲し、學問や和歌の道にすべてを忘れて生涯を送つた。釋契沖と莫逆の契を結んだ事は契沖の「われを知る人は君のみ、きみを知る人も多くはあらじとぞ思ふ」といふ歌によつても知られる。殊に萬葉集に造詣が深く、若き時に萬葉集管見などの著もあつたので、水戸光圀は萬葉集の註釋を彼に求めたが、病のため果さず、貞享三年六十三歳で歿した。歌集には延寶九年自ら選んだ自撰晩花集（長龍延寶集）と、死後契沖が撰した晩花集とがある。その歌風は未だ二條家から全く脱却するには至

らなかつた。

里中に夕あさりせし庭鳥のとぐらに入れば日は山の端に

富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

せば布の胸あひがたきすきまより身にしむけふの秋の初風

つひにわがきても歸らぬから錦たつ田や何のふるさとの山

契沖

長流とならんで契沖がある。彼は攝津の尼ヶ崎の武士下川元全を父として生れたが幼にして出家し、今里の妙法寺に入り、更に高野に修行し、後生玉の曼陀羅院に住持となつたが暫くにして去つて、和泉の久井や、池田萬町の伏屋氏により、殊に伏屋氏の許では養壽庵といふ庵の中にあつてその所藏の和書を研究した。契沖が佛學以外に得た國學の基礎はこゝに築かれたといふ事が出來る。後契沖は妙法寺の住持となつたが元祿の初年には住持の職をも辭し、圓珠庵に隱棲して著述に從ひ、元祿十四年一月六十二歳で寂した。長流とは莫逆の交を結び、天和三年の頃からは水戸光圀の委囑により萬葉代匠記の著に從事して、貞享の末に初稿本を上り、元祿三年頃再度の稿を上つたが、それ以後も古今餘材抄・勢語臆斷・源注

拾遺の如き古典の註釋や、和字正濫抄の如き假字遣の研究などを著したが、和歌の集としては延寶九年に自ら撰した契沖延寶集（自撰漫吟集）と後に撰した漫吟集類題二十卷とがある。契沖の歌には萬葉調は殆ど見られないが、華麗な中に僧侶らしい靜寂の境地を現して居る。殊に多くの長歌を殘して居るのは注意すべきことである。

にごり江にやどる影より霞めばやぬるゝ顏なる春の夜の月
聲はして空ゆく鴈のつら〳〵にみれども見えず霞む夕ぐれ
山寺の花はのこりて鐘のおとけふもくれぬと人ぞちりゆく
初瀨のや里のうなゐに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす
しでの山こえぬ人には疎くともさきだつをだに哀とはみよ

荷田春滿

長流・契沖よりやゝおくれて、而も彼等と大體同じ傾向にたつものに荷田春滿がある。春滿は伏見稻荷の神官荷田信詮の子と生れ、若くして社家神道などに思をひそめたが後、復古神道を唱へて國學啓文などを著し、日本紀に關する著述は最も多く、萬葉集に就いても多くの註釋を試み、律令に關する著もある。然し萬葉

僻案抄・伊勢物語童子問などの外に多く流布せず、すべて稿本は伏見の羽倉家に藏せられて居る。氣慨のある人物であつて若くして江戸に出でた事もあり、その門下には賀茂眞淵があつて國學と萬葉集研究とを傳へ、甥の在滿は律令有職の方を繼承した。而して春滿の歌集としては春葉集があるが、歌才は餘りゆたかでない。しかしその慨世の意氣の自ら磅礴するものがある。

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとをみるのみ人の道かは
わけ入りてとふもかたるも靜けしややまとの書の深き教に
見る書はのこり多くも年くれてわが世ふけゆく窓のともしび

二、俳　諧

山崎宗鑑

歌から俳諧に筆をうつして見る。俳諧は連歌から出發して最初は滑稽の想を現したものと思はれる。山崎宗鑑・荒木田守武の俳諧はさういふ點から出發して居る。宗鑑は若き時は將軍義尙の近侍であつたが後剃髮して攝津の尼ヶ崎に到り、更に山城の山崎に移つて山崎宗鑑と稱へた。連歌を敎へ、點者ともなつて生活したも

のと思はれる。晩年四國に行脚して讃岐の琴彈山下の一夜庵で病歿した。宗鑑には犬筑波集がある。この集は四季・戀・雜に分けてある。句の作者は記してないが宗鑑の句の外に、その時代の俳人の句もある事と思はれる。滑稽的な句が多い。例へば

切りたくもあり切りたくもなし
ぬすㇲ人をとらへて見れば我子なり

の如きこれである。

荒木田守武

守武は伊勢の內宮の宮司であつて、宗鑑の洒落な性行と異なつて眞面目な人物であつたと思はれる。從つてその句も宗鑑に比して眞面目な句が多いのであるが、なほ洒脫な趣を有して居る。發句を見ても卽興的な句が多いのである。守武の句は天文九年になつた獨吟千句によつて見ることが出來る。

落花枝にかへると見れば胡蝶かな
元日や神代のことも思はるゝ

松永貞德

この宗鑑と守武とは近世以前に出て俳諧を創始したのであるが、德川時代に入つて俳諧は益々盛になり來つた。而して近世に於て第一に注意すべきは松永貞德で

ある。松永貞德は松永彈正久秀の孫に當る。彼の活動したのは德川の初期寛永から承應頃迄であつて、所謂古風の俳諧を唱へた、彼に至つて法式から解放されて居たのが、再び種々の規則が作られた。御傘は俳諧に關する法則を記したものであり、十卷から成つて居る。俳言をいろは順に配列して修辭學的に種々說明を試みて居る。

又淀河に於て宗鑑の犬筑波集を法式の上から批評し、油糟では犬筑波集の付句を試みて居るのであつて、彼の立場を實例によつて示したものである。彼は俳諧にをかしみを主張したが、又一方には敎訓をとなへた。其の俳諧も法式をある程度まで守つて、保守的であつた。

談林派

貞德の俳諧が餘りに法式に拘泥したのに對して、之を破つて自由な破格な態度をとつたのが談林派である。談林は檀林ともいふ。田代松意談林軒が江戸で同志とともに、俳諧をはじめて、談林と稱してから始まるといふ說もあるが、延寶年間に西山宗因が江戸に出て「さればこゝに談林の木あり梅の花」といつてから始まつたと見るのが通說である。

西山宗因

西山宗因は次郎作豐一といひ、梅翁・西翁その外多くの號を有して居る。里村昌琢について連歌を學んだ。正保の初めには大阪の天

滿天神の月並の宗匠となつた。が彼は重賴が貞門を破門され里村家へ入門するに及び、俳諧に心を向けるに至つた。かくて延寶時代には大坂獨吟集といふ門下の俳諧集が作られ、又宗因の五百韻や千句も版行され、談林派の勢力は次第に強くなつた。その門に菅谷高政や田中常矩・井原西鶴・一時軒惟中など出でて貞德の古風と對峙した。

宗因等の談林派の句は句格の規則を破壞した所に淸新の趣があるが、然しながらその感情は未だ新しき境地を開拓したものではなかつた。そこに遊戯的分子も極めて多かつたと思はれる。

さればこゝに談林の木あり梅の花　　梅翁
　世俗眠をさますうぐひす　　雪柴
朝霞たばこの煙よこをれて　　在色
　駕籠かきすぐるあとの山風　　一鐵
なふ〳〵旅人三伏の夏　　在色
　なみ松の聲高うして馬やらふ　　雪柴

（談林十百韻）

談林の俳諧は過渡時代の產物であつて、その俳諧の完成は松尾芭蕉の出現を待たなければならなかつた。芭蕉は正保元年伊賀國の柘植で生れた、幼名は甚七郞、後忠左衞門と改め、又宗房ともいつた。初め藤堂家に仕へたのであつて、その主良忠は季吟の門で蟬吟と號したのであつたが、寬文六年歿したので、辭して遁世し京へ出た。その時芭蕉は二十三であつた。芭蕉の遁生の原因に就いては種々傳說があり、主の死を悲んだためといひ、戀愛關係であるともいはれる。出家の後彼は京へ出て北村季吟の門に入つたが、やがてまた鄕里へ歸つた。寬文十二年二十九歲に「貝おほひ」を著して居るが、それは伊賀上野に於て作られて居る。門下の句を集めたもので自らの句も入つて居る。この年の九月彼は江戶へ出た。江戶へ出た後彼は水道工事の監督をしたり、其の他種々の事をして生活するとともに俳諧生活に精進したらしい。春二百韻・江戶三百韻など作られたがこの時代には談林の影響が多かつた。

　あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁

の如きその例である。

が次韻時代になると芭蕉は漸く獨自の俳境を開いて來た。次韻は延寶八年に成つ

た。伊藤信德の七百五十韻に對して作つたので次韻といつたのである。

鷺の足雉脛長く繼添て　桃青
這句以莊子可見矣　其角
禪骨の力たわわになるまでに　才丸
しばらく風の松にをかしき　楊水
（次韻）

この年に「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」といふ句も出來た。この時代に於て閑寂の境地がうたはれるに至つたのである。是より虛栗、野ざらし紀行、冬の日、初懷紙、春の日、續虛栗、鹿島紀行、卯辰紀行、曠野集、奧の細道、幻住庵記、ひさご、猿簑、嵯峨日記、炭俵、別座敷、續猿簑などの俳諧集や紀行などを編んだ。是等の中冬の日（貞享元年）、春の日（貞享三年）、續虛栗（貞享四年）、ひさご（元祿三年）、猿簑（元祿三年）、炭俵（元祿七年）、續猿簑（元祿十一年歿後）を世に七部集と稱するのである。是等に於て次第に芭蕉の閑寂味は加はり、猿簑に至つてその極點に達したので最も重んぜられて居る。炭俵に於てはこの閑寂味から人事に興味を持つて

來た。而してこの炭俵の成つた元祿七年に京阪の旅をして九月に發病して十月十二日歿したのである。歿後四年の元祿十一年に續猿簑が出たが是は芭蕉が生前に大體編んだものである。紀行文章としては奥の細道、幻住庵記の如きは最もすぐれたものである。

市中は物のにほひや夏の月　　凡兆
　あつし〳〵と門々の聲　　芭蕉
二番草とりもはたさずほに出て　　去來
　炭うちたゝくうるめ一枚　　凡兆
此翁は銀も見知らず不自由さよ　　芭蕉
　只どひやうしに長き脇差　　去來
草村に蛙こはがる夕まぐれ
　路の芽とりに行燈ゆりけす
道心のおこりは花のしぼむとき
　能登の七尾の冬はすみうき
魚の骨しはぶるほどの老を見て
　待つ人入りし小御門のかぎ

（猿簑集）

枯枝に鴉のとまりけり秋の暮
古池や蛙飛び込む水の音
雲雀より空に休らふ峠かな
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲
明月や池をめぐりて夜もすがら
五月雨をあつめて早し最上川
初時雨猿も小簑をほしげなり
もろもろの心柳にまかすべし

松尾芭蕉

三、假名草子と井原西鶴

假名草子　お伽草子によつて小説界に於ける近世的色彩がやゝ現れたのであるが、近世になるに至つて先づ假名草子として展開した。假名草子は寛文頃に多く出た啓蒙的な小説であつて、漢籍や佛書及び古文等を翻案して平易な假名文にしたものである。假名草子の作者として如儡子に可笑記・百八町記があり、山岡元隣に誰が身の上・

鈴木正三

小さかづきなどあるが、最もすぐれて居るのは鈴木正三と淺井了意とであつて作も多く傳はつて居る。その中でも正三の因果物語（寛文元年）と二人比丘尼（寛文四年）、淺井了意のお伽婢子（寛文六年）、浮世物語（延寶九年）の如きは最も注意すべきものと思はれる。正三の作品は佛敎思想の現れて居るものが多く有限の生を解脫して成佛すべきを說く。二人比丘尼は夫の戰死によつて、寡婦となつた年若き女性が、家を出で一人の女性に佛の道をきかされ、又亡夫の戰死の場に至つて回向し、更に一人の女性と逢つてともに日を送るが、その女性も死に、その骸の朽ちゆくさまを見て無常の理を知り、老比丘尼を師として尼となり大往生を遂げた次第を叙してある。

淺井了意

而して淺井了意の作品にも敎訓的の意味はあるが、更に種々の方面に進んで居る。お伽婢子の如きは支那の剪燈新話によつて之を翻案したもので怪談小說といふべく、浮世物語は敎訓の意もあるが、そこに世相を描くといふ方面にも進んで來たのであつて、假名草子より浮世草子に展開する經路を語つて居る。

浮世草子

浮世草子とは浮世の事を記した意味である。浮世とは廣い意味の人生であるが、狹くいつて好色といふ意味になる。世を知るといふのが男女の道を知るといふ意味に用ゐられて居るやうに、浮世草子といふのもかくの如き意味が多いと思はれ

る。而して浮世草子の作者としては井原西鶴を擧げる事が出來る。

井原西鶴

井原西鶴の傳は餘り多く知られて居ない。西鶴置土産にある「浮世の月見過しにけり末二年」の辭世の句に「元祿六年八月十日五十二歳」とある事によつて寛永十九年に生れて元祿六年五十二歳で歿した事は明かであり、また延寶七年版の難波雀に「俳諧點者檜屋町井原西鶴」とある事や、延寶八年の大矢數に「余俳諧正風初道に入りて二十五年晝夜心を盡し」とある事によつて明暦二年十五歳頃から俳諧に志して、後點者として立つて居た事も知られる。而して俳諧師としては談林派の一人として活動した事は既に述べた所であるが、四十一歳の時初めて好色一代男を出版してから浮世草子の作者として立つたのである。而して歿するに至る十年間は浮世草子作家として活躍した。

西鶴の浮世草子好色物

彼の浮世草子は大體三種に分れる。一は好色物であり、一は町人物であり、一は武家物である。好色物にも女色と男色とがあるが、好色物で最も注意すべきは好色一代男（天和二年十月）と好色一代女（貞享三年六月）と好色五人女（貞享三年仲春）とであらう。一代男は八卷から成つて世之介といふ好色の人物を中心としてその色慾生活に關する小話を連接して成つて居るが、そこに一貫して世之介といふ人物の生涯が浮き出されて居る、大阪のみなら

ず各地の遊女との關係が描き出されて居る。さうして最後に六十年の好色生活を回想し、好色丸に乘つて女護島へ渡る事に終つて居る。

而して一代男は男性を中心としてその性慾生活を描いてあるが、好色一代女は女性を中心とした性慾生活の描寫である。宮仕、藝人の生活、花やかな廓の生活、質實な主婦の生活、お針師といふやうに當時の女性生活の殆どあらゆる方面を送る間につらぬく性慾生活が描かれて居る。それは世之介と同樣であるが、たゞ彼にあつてはどこまでも積極的に進んでやまないが、一代女の女性はそこに消極的な態度が見られる。卽ち終りに大雲寺の五百羅漢に詣でて、その五百の羅漢の顏が、一生の中にあつた男性の一つ一つの顏に見えたので初めて菩提の心を起して北山に庵を結んで世をかくれた。その庵を尋ねた人に語つた話がこの好色一代女である。こゝに最後に及んで好色生活に對する自己反省の心持が見え、そこに一抹の哀愁が見える。好色五人女も一代女と同年に作られたが、これはお夏淸十郞、樽屋おせん、おさん茂右衞門、お七吉三、おまん源五兵衞の五人の女性の生活を描いたものであり、一代男や一代女の樣な樣式と違つて、五つのまとまつた短篇をなして居る。而して前者が純粹性慾生活の描寫であるに比して、これは戀愛と

いふ點が加はつて來た事に差別を有する。しかし八百屋お七を扱つても、戀に日ざめてゆく過程をつかんで人性の眞を思はせるものがある。好色物から彼は町人物と武家物とに展開した。

町人物

町人物では日本永代藏・胸算用の如きが優れて居る。日本永代藏は元祿元年の刊行で、金を中心にした町人生活を主題として如何にして富を得るかといふ當時の町人生活の實相をつかんで表して居る。胸算用は元祿五年の刊行で、年の暮を世界として、そこに現れる町人生活の相を描いて居る。

武家物

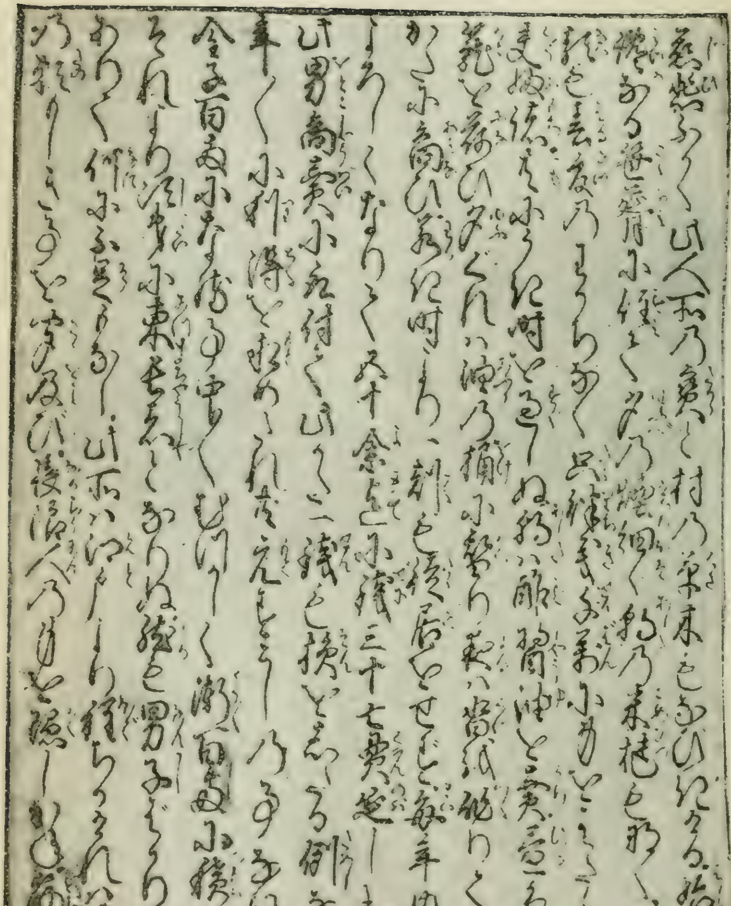
武家物は町人と對立した武士生活を扱つて居り、武道傳來記は仇討を、武家義理物語は色々な義理説話を綴つて居るが、是等は想像の分子が多くて實際の觀察から出て居る所の尠いだけ彼の作としては劣つてゐる。寧ろ男色大鑑は武家物の一面を有した作品で、女色に揮つた筆鋒を以て性慾描寫を試みたのである。

錦文流

この西鶴にやゝおくれて浮世草子に作を殘して居るものに西澤一風・錦文流・北條團水・月尋堂等がある。西澤一風は西澤九左衛門といひ、西澤與志、朝義ともに同人である。大阪の書肆で、淨瑠璃の作もあるが、浮世草子にも多くの作を殘して居る。一二の例として風流今平家は一人の町人の榮華から沒落を平家になぞらへて作り、後室色縮緬は十人の後家の物語を描いて居る。形の上から見れば前者は

第四　鉢乃塩鏡久乃油揃

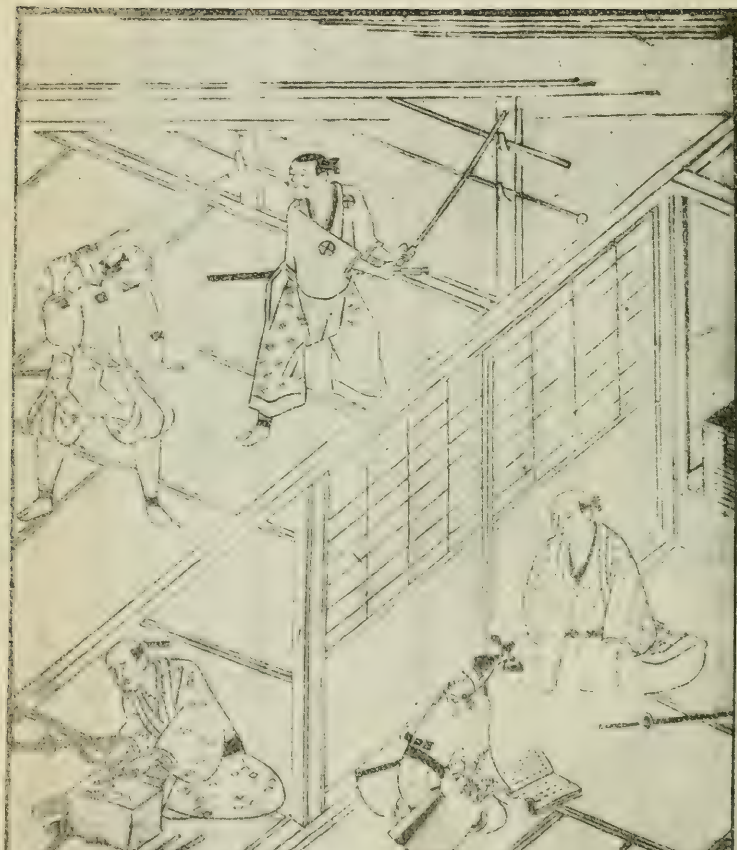
是やこのへ流れ有りて康傳大納言乃流乃清滝寛にへ
乃身袋ハ勤さもしまりやけれし乃栗のあわれ乃めうんめくり
ハそれ清涼寺乃人ハ忠しして春葉乃露に遊付て免ん乃
分し云解かいもく唯もりし心盡乃耳ふしをきてある
乃様とも我さふも隠すあるしむし夏雁をまじりが抜擢て
猫倉門ともさがりしも世れ皇后乃折様乃事と備へしの心
案好しそれハ為朝る乃清閑まで私橋橘と功くる新やも
ありさも振れ乃南庵世界乃今ハ福の道を修め時為へ入ハ
中く油なとく後世ハ分かりかゝし常にも常陰乃圃あり
主身一代乃うちの身躰十万両の銀をもつとして利息間に高
乃何がしく棟高く屋継ありて人る所まて抱へ田・さく
百町にあまり家業て不足なし・まえの人を穣



あさくさわ俳を添られ撰述の書に誇らしくいひこしらへて勇ましくなる
にせ男なさすら深く芸業尊ぶ乃慮を添ふる事く技芸を分る
ものに遊びせし八人をえらみて抱かしまいらせんと家へ入れかるに
世にあれバ何事も見捨かく置乃月日をかさね給ひけりまま
森鴎權六といふ男あらしまいらせるをいふまで学力おれバなる
とされどもかくやりくりてあまる或愛に世めまくつひ〳〵
人乃子を小児書乃素讀をさせけるか講釋なるハ又本懐
新右衛門といふ男ハ中せまし子で追めに三野弁をおしへ
大和乃余弘をつてさせける或日忘念問ひと云男ハ此方細工さて
なれバ那波乃草稿乃仮り揃仕出して明暮油断なく
心情に入江戸乃通り町に越り又六年に小路する
ハ此時ふしてれも覚人なり又大浦甚八といふ者ハ小
齋小辭に小免は聊し漬けれ自かし機みうきて人の為

種乃子なりひさごといふ事なし。又人形[illegible]と云人ハいにしへ
き角とゞれて大男なる腕にも[illegible]しく使[illegible]あしてさし
三百石の禄ハ見しらぬ後まで見山人[illegible]細をなし入佛の力に
かしらく事なせさく[illegible]さ難きすも下の[illegible]と蹴て山道
の頭ならりハ思ありて大和[illegible]たまつて云男八山力に強
ても鉄砲で[illegible]道[illegible]開の[illegible]野[illegible]山の指を[illegible]て[illegible]
武勇を進て年中[illegible]ましとふうまてひかゝるをしくの人ふかく
[illegible]りあるしてそ浮世ぬれしてかくまへ[illegible]して主ハ此[illegible]とうず
さるとまりして世の[illegible]人ふ[illegible]小背に[illegible]とつてうるをまつくて
せちとかん[illegible]こに[illegible]行き[illegible]してをりくれ[illegible]の指
六ハ[illegible]田[illegible]小[illegible]太平記の讀を[illegible]のするたまへ
いまでも[illegible]よかれしく田町小[illegible]居して見[illegible]ところ口
三味線を[illegible]くかまへの細工利の[illegible]八[illegible]の[illegible]の[illegible]

て渋紙袋にて作れる陶器ハ今に織部といふ音曲師の志賀
又九郎の音曲ハ今にやうやう思ひ出す世々にハ総ハられ鶴かう寛
まそて兎角にかられけるに其業を武夫も常やめず
宗左衛門にいふやうく家のために十余年の学びとりて毎夜三百余の
時にわかれぬ又生得のその妻屋敷ハいかにもうつけの様
となりぬれも大仏の所にてはした挑ぐんとはじめる様
にて色く精兵の弟もて恵時かくしてはじめの業を
ぬ命なれハいかくなりさぶろう見とおもふに近く家業の外
ふたすして経営ふしく始めるなりとてもうれしく思ひて常といふ
私の弟とたりぬかたしとも人にとりく難用といふはハ
主の躬の然ありぬ云ふ我が通の名武士ハ写る断へ今ハ算
用の極めて計日の盡ハぬやうにしまめに高座帳を付べし
家の内の下連人のあつかひの為に印しされたる



（日本永代藏）

全篇一貫の説話の脚色を有し、後者は斷片的小説話の集となつて居る。文流は傳は明かでないが、作中に「難波津俳諧僧文流」とあるから俳諧師であつた事を知る。淨瑠璃の作も本海道虎ヶ石を初め三四あるが、彼の本領は浮世草子にある。浮世草子の一二を言ふと、棠大門屋敷は大阪の長者淀屋辰五郎父子のおごりの生涯を叙したものであり、當世乙女織は大阪富豪の息子の德二郎といふ律義な男が友人に誘はれて遊里に耽溺する次第を描いたものである。この二作はむしろ好色本的性質を有するものであるが、熊谷女編笠の如き、仇討物であつて好色本的性質を有するものもある。なほ北條團水には晝夜用心記（六册、寶永四年）、本朝智慧鑑（六册、寶永六年）、日本新永代藏（六册、正德三年）等の作があり、月尋堂には鎌倉比事（寶永五年）、今様二十四孝（寶永六年）を始め種々の作品がある。而して西鶴の作とならび稱する事はもとより出來ないが、それ等につゞいて注意せらるべきものに八文字屋本がある。

北條團水

月尋堂

八文字屋本

八文字屋といふのは書肆の名前であつて、江島其磧・八文字屋自笑・多田南嶺等の著したものを八文字屋自笑の名のもとに出版したために八文字屋本といふのであつて、元祿の末から寶曆明和に至るまで作られて居る。而して西鶴本が端物であ

るに反して八文字屋本は多く物語的である所に相違がある。

江島其磧

江島其磧は名を市郎左衞門といつた、元文元年に七十歳で歿して居る。八文字屋自笑は其磧より八歳年上であつたが、多少筆も立ち、また機敏であつたために役者評判記などを著して名を知られて居た。而して其磧は自笑のために多くの作を著し、自笑の名で出版したのである。而も自笑の名が高くなるにつれて其磧は自笑と離れて、その子に江島屋といふ書肆を開かせたが振はず、後には再び八文字屋と結んで自笑と合著の名で版行して居る。かくの如くして八文字屋本は多く自笑の名で著されて居るが、大部分は其磧の作に成つたのである。

彼の作は元祿十四年の遊女名よせ傾城色三味線を始めとして、正德元年の傾城禁短氣の如き好色本もあるが、正德四年の世間息子氣質、正德五年の世間娘氣質の如き所謂氣質物もある。彼の特質はこの氣質物に見られる。世間に多くある息子や娘の類型的性格を描いて其の特質を語つて居る。西鶴のやうな鋭い觀察は見られないが、西鶴に次ぐ浮世草子の作家であつた。

四、古淨瑠璃と近松

淨瑠璃は平家・謠曲その他の曲を綜合して作られたもので、謠曲が古典的であるに比して、人形の所作や三味線によつて更に複雜になり劇的になつて居る。而して淨瑠璃の起原は宗長日記享祿四年の條に駿河の宇津の山邊で淨瑠璃を語らせた記事があり、又天文九年の守武千句の中に「いとゞだに座頭まがひの杖つきの」「淨瑠璃かたれともしびのもと」「こよひはや時はうし若ふけはてゝ」の句があるから、享祿の頃に僻遠の地にまで行はれ、また淨瑠璃の原始的のものに牛若を綴つた作品のある事を知る。而して現存する淨瑠璃の最も古きものとして淨瑠璃十二段草子がある。この曲は牛若丸が三州矢矧の宿の長者の家に宿つてその長者の女淨瑠璃姫と逢ふ說話を十二段に綴つたものであつて、小野お通の作とせられ、淨瑠璃の名義の起原はこの曲の名に基づくとせられて居るが、お通の傳もはつきりして居ないので、年代的に見て淨瑠璃十二段草子がお通の作であるかどうか、また今日の十二段草子が、その牛若を綴つた所謂淨瑠璃であるかどうかは明かにしがたい。淨瑠璃節も最初は簡單なものであつたらうが、次第に曲節も複雜になり、また詞章も初めはお伽草子風のものから、純粹の劇的のものに發達していつたのであらう。淨瑠璃の古い詞章として十二段草子や阿彌陀の胸割・八島・高館な

金平本

どがある。阿彌陀の胸割は本地物であつて、日頃阿彌陀を信仰したために危難を免れたことを叙してある。近世になつて江戸に起つた淨瑠璃は殺伐な武勇を尊んだ一般の氣風に促されて所謂金平淨瑠璃と言はれるものが流行した。薩摩淨雲は寛永の初めに江戸に下つて淨瑠璃を肇めたが、勇壯活潑な曲節を以て江戸人の好尙を得たのである。この淨雲の弟子に丹波太夫・丹後太夫・源太夫・長門太夫の如きがあつたが、この中、丹波太夫は淨雲の勇壯なるところを受け繼いで一層强い方面に進み、岡淸兵衞の作である金平物を演じて喝采を博した。金平物といふのは金時から脫化した勇壯な人物が怪物を退治し、勇武な行爲を現すのを叙したものので、金平法問論とか金平千人切・金平天狗問答の如きすべてそれである。是等は粗野なあくまで誇張した表現に過ぎないのであつて、藝術的價値は乏しいのであるが、當時の幼稚な江戸人の鑑賞力にはこの程度のものしか理解し得なかつたのである。次に源太夫は京都に上つて淨瑠璃をひろめたが、その弟子の井上播磨は

竹本義太夫

大阪に於て淨瑠璃を弘め、殊にその孫弟子に當る竹本義太夫は終に義太夫節なるものを完成し、淨瑠璃を義太夫とも稱せられるに至つたのである。而してこの義太夫のために詞章を作つて淨瑠璃をして江戸文學の中の最も重要なる一方面とし

近松門左衛門

たのは近松門左衛門である。近松は義太夫のみならず、それ以前に宇治加賀掾のためにも數曲を作つて居り、天鼓の如きは井上播摩のために作つて居るが、主としては義太夫のために書下したのである。義太夫の歿後は政太夫のために筆をとつて居る。

近松の傳は西鶴と同樣に不明である。傳說によれば椙盛信盛といひ、生國は不明で、兄は相國寺の宗長老であり、弟は岡本一抱子といふ儒醫で、妹は錦江といつた。近松は宮仕したとか、或は役者であつたとか種々の說があるが、恐らくは後者が近いのではあるまいか。その歿したのは享保九年十一月二十一日七十二歲の時である。而して彼が淨瑠璃作者としての初めは現存するものでは延寶八年二十八歲の時に刊行された赤染衞門榮花物語である。この作は古淨瑠璃風の作であるが既に文章のすぐれた點は見える。それ以後彼が一生に成した作は百數十曲に達するのである。

時代物

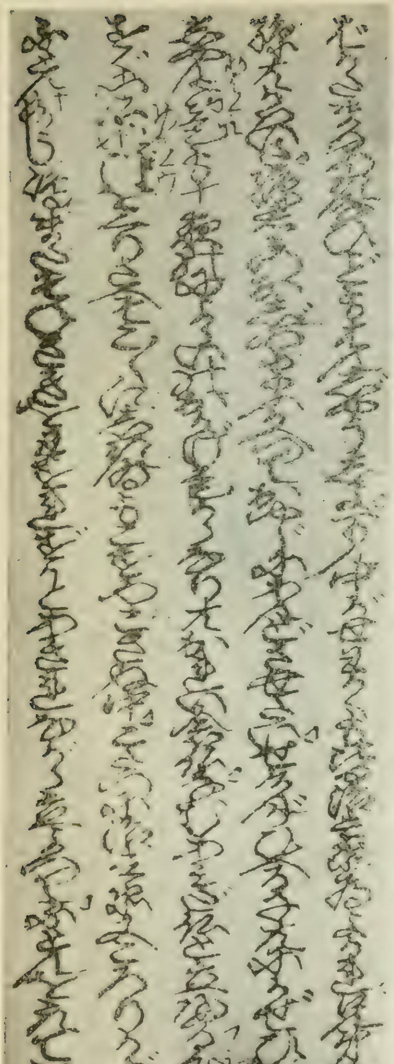
而して近松の作品は時代物と世話物とに分れる。時代物は數も極めて多く、また近松が力を盡したものと思はれるのであり、實際操にかける上からいつても、慰本位の觀衆の目から見ても時代物は主なるものであつたに相違ない。國姓爺合戰

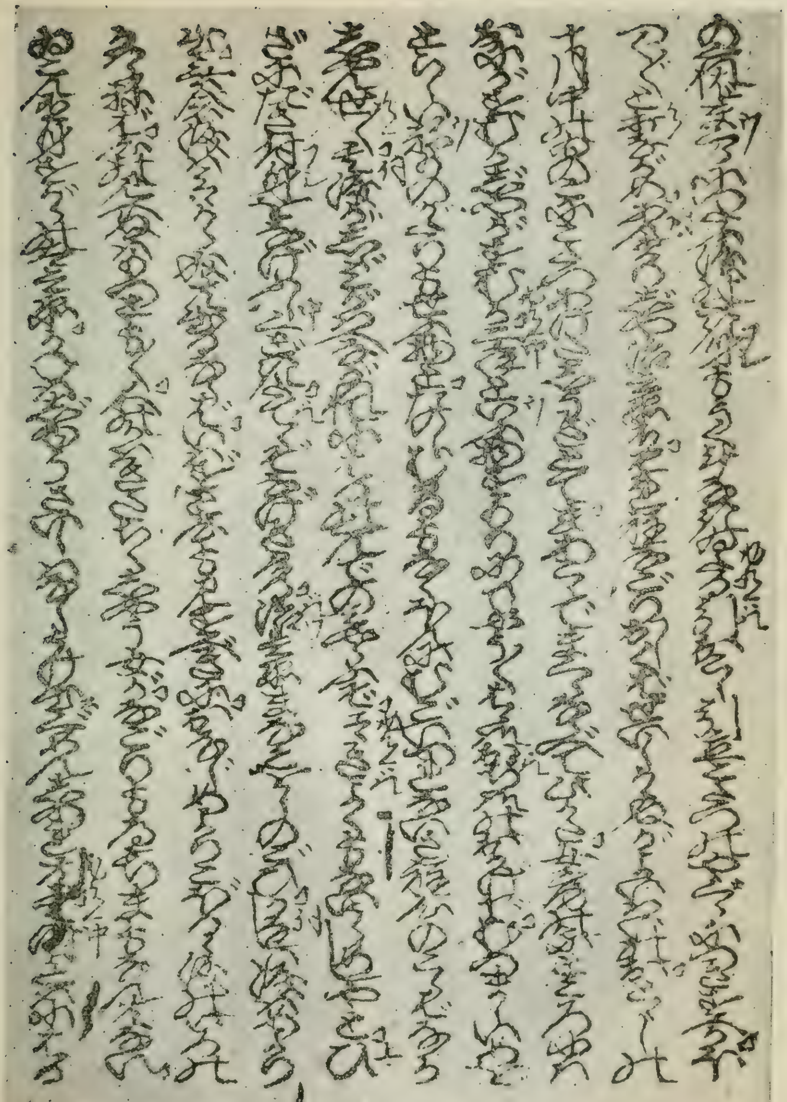
は政太夫のために書下したものであり、正徳五年六十三歳の作であるが、時代物の特質をよく現して居ると思ふ。三年越十七ヶ月の間大入を占めたといふのは、材を支那にとつて新しき趣向を示した所にあると思ふ。明朝の遺臣鄭芝龍が日本に於て設けた子の和唐内は母を伴つて支那に渡り、異腹の妹錦祥女の夫甘輝を語らひ韃靼を討つて明朝を再興しようとする。甘輝は妻の縁にひかれたと言はれるのを嫌つて和唐内に味方するのを肯じないのを、錦祥女が自ら死して、終に甘輝も和唐内とともに韃靼を討つといふ所に、義理と人情との葛藤を見せて觀者の涙をそゝる所がある。それは支那に材を借りただけで日本を題材としたものと變りないのであるが、表面的にも支那に材を取つた所に他の作品と變つた所がある。かういふ奇抜な趣向を以て觀者の興味をひかうとしたのは時代物一般の特質であつて、そこに不自然な點の多いのは當然である。この點に於て世話物は實際の世相をとつて描いてあるだけ自然であり、また人情の描寫といふ點に於てもすぐれてそこに高い藝術的價値を認めるのである。然しながら世話物に於ても展開が見られる。世話物の初は元祿十六年の曾根崎心中であると言はれる。この作はお初徳兵衛の情死を扱つて居るもので、惡朋輩の九平次に大事な金を騙り取られた困

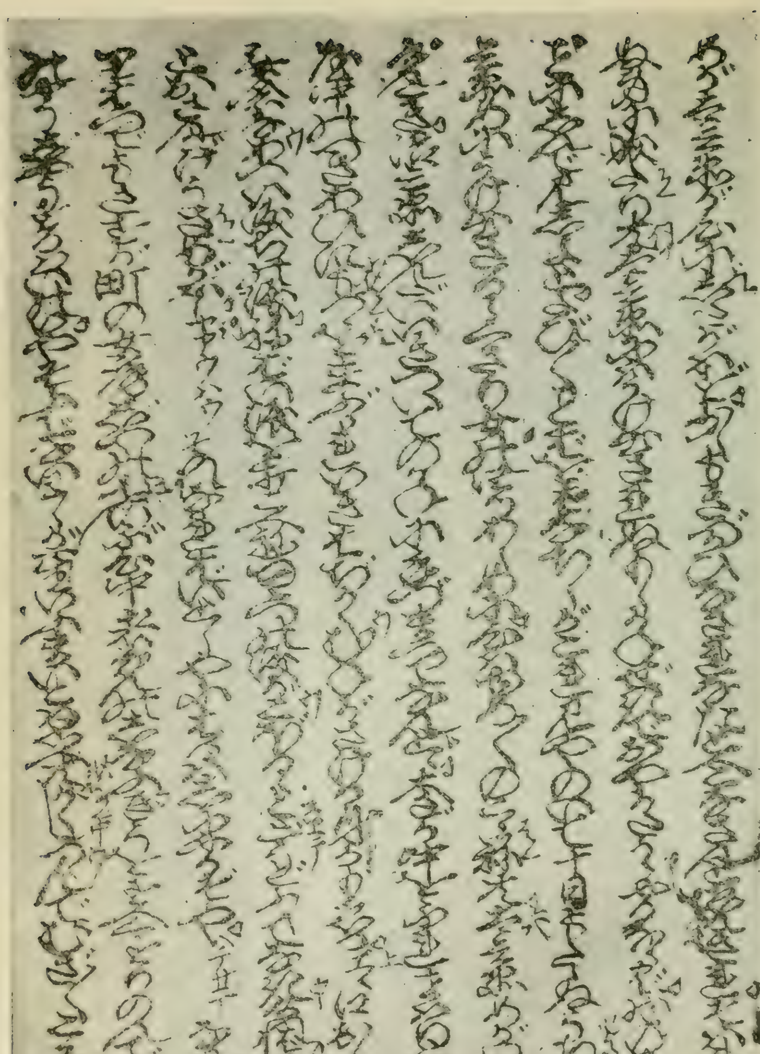
惑のはてに終に心中するに至るのであつて、構想は極めて簡單であり、また死に導く動機が餘りに輕いやうにも思はれるが、そこに單純な思切のよい、生に對して執着の尠い所に前期の作の特徴を示して居る。後期の作は是を前期の作に比すると、複雜な主題を扱ふやうになり、戀愛などを中心としながら、親子の愛や夫婦の愛の如きをも扱ふ樣になつて居る。寶永八年五十九歳の時の冥土の飛脚に於ても梅川と忠兵衞との戀愛を扱ひながら忠兵衞の父の愛を描いて居るのである。享保三年六十六歳の時の博多小女郎浪枕に於ても惣七の父の愛は、冥土の飛脚の新口村の二番煎じの感はあるが、同じく父性の愛を扱つて居る。享保五年六十八歳の時の天の網島は遊廓を中心とした心中物であるが、治兵衞の妻おさんの心情には妻としての眞情が溢れて居るのである。享保七年七十歳の時の心中宵庚申の如き八百屋半兵衞と其の妻の千代との夫婦の愛を描いて居り、遊廓や遊女を中心とした作から見ると、同じ心中物でも非常に相違がある。而して享保六年六十九歳の時書いた女殺油地獄は、家庭の境遇から生れ出た與兵衞といふ不良性を帶びた青年が人殺をする經路を描いてあるが、義父實母の與兵衞に對する愛を描いて社會悲劇的な性質を帶びて居る。が前期と後期との作を通じて見られる所は、愛の

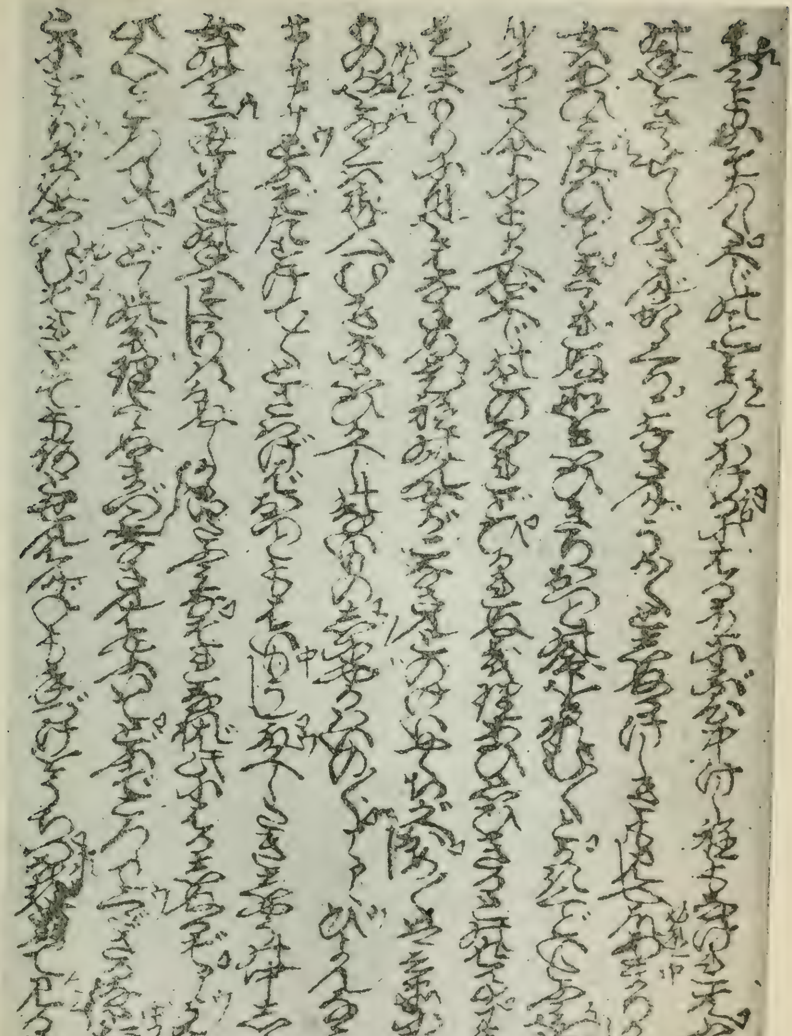
精神であつて、そこに人情の暖さが見られるのである。而してまた現實を美化して虛實皮膜の藝術論を作品として具象的に表して居るのである。

海音は近松と同時に出でて豐竹座に據つて竹本座の近松と對峙して居つたのである。海音は寛文三年に生れて近松より十一歳程若い。姓を榎並氏といひ貞嶠と號し、通稱を喜左衞門といひ、後善八と改めた。父は鯛屋善右衞門といひ貞因と號して俳諧をよくした。兄は油煙齋貞柳といふ狂歌師である。始め和泉の堺の柿本寺に入つて僧となり悅山和尙の弟子となつた。後還俗して醫者ともなり、又契沖









(天の網島)

に國學を學んだとも言はれる。而して豐竹座の座附作者となつて若太夫のために淨瑠璃の筆をとつた。最初に筆をとつたのは元祿十二年の頃であつて享保八年頃まで筆をとり、歿したのは寛保二年十月四日であり八十歳の時であつた。作品は四十曲程あるが八百屋お七。心中二つ腹帶の如きは世話物として傑れた作であり、鎌倉三代記の如き時代物としてすぐれて居る。八百屋お七は少女お七が我家の火事のため寺に避難した折戀し合うた吉三を忘れかね、また火事になつたら吉三と會はれようかとのはかない頼みに家に火をつけて、火事を出し、終に刑場にひかれる次第を叙してある。西鶴の好色五人女にも扱はれて居るのと同じ題材であるが、西鶴が性欲のまゝに動いて行く自然のまゝの姿を描いて居るに對して、海音にはうら若い少女と思はれぬ位、義理に徹した性格を描いて居る。近松も義理と人情との葛藤を描いて居るが、人情が主であるに對して海音は寧ろ義理を主として扱つて居るのである。心中二つ腹帶は近松の扱つた宵庚申と同じ題材を扱つて居るのであつて、地味な夫婦の心中を描いて居る。海音は近松に比して遊女とか遊廓とかいふ花やかな配景のない地女を多く描いて居るが、その意味に於てもこの作は彼の特質を最も多く發揮して居るのである。

要するに海音は近松に比しては劣るのであるが、なほ近松についですぐれた作家であつたのである。近松と海音とは竹本座と豐竹座とにそれ〴〵據つたのであるが、近松・海音の後にも兩座は對立して勢力を爭つたのであり、幾多の淨瑠璃作者が出でたのであるが、それ等については次期に於て說く事にする。

なほ此の時期に於ては淨瑠璃ほどの勢力は無かつたが、演劇が行はれ從つて脚本なども製作された。近松門左衞門にも脚本の作が多くあり、坂田藤十郎の如き近松とも互に影響しあつた俳優であつたのである。

第二章　中　期

一、賀茂眞淵とその時代の和歌

元祿時代に於ける和歌はまだ復古的ではなかつたが、此の期に於て萬葉調が實際に作歌の上に行はれた。それは賀茂眞淵を代表として考へる事が出來る。

賀茂眞淵は遠江の岡部鄕に生れて、初め從兄岡部政長の女をめとつたが、早逝し

たので、更に濱松の本陣梅谷の家に入夫した。しかし弱年から學問を好んだ彼は、妻と一子眞滋とを殘して二十八歳の時京都に出で、荷田春滿について國學を學んだ。春滿歿後元文三年に江戸に出で延享三年五十歳の頃田安宗武に仕へた。それより一方には萬葉集を中心として古典を研究し、古道を唱道するとともに、萬葉調の歌をよんだのであつて、元祿に於ては萬葉集の研究は勃興したが、未だ萬葉調の歌はよまれなかつたのであるが、こゝに至つて復古的精神が歌の創作の上にも現れたといふ事が出來る。眞淵の歌は村田春海の撰した賀茂翁家集によつて知られる。その他楫取魚彥の編んだ縣居歌文や、河津宇萬伎の撰して秋成が補つた縣居の歌集があるが、賀茂翁家集が中心となるべきものである。而して彼の歌は宇萬伎や千蔭も言つた如くほゞ三期に分れ、第一期は古今と新古今との中間の如き傾向であり、第二期は萬葉調を中心とした時代であり、第三期は萬葉集より更に上代にさかのぼつた時代である。萬葉調は彼の中心であるには相違ないが、なほ新古今調が加味されて居るのである。

をつくばも遠つあしほも霞むなりねこし山こし春やきぬらむ

信濃路のおきその山の山ざくら又も來て見むものならなくに

故里の野邊見にくれば昔わが妹とすみれの花咲きにけり

鳰鳥のかつしかわせの新しぼりくみつゝ居れば月かたぶきぬ

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな

眞淵の門下は種々の方面に分れて居るが、田安宗武や楫取魚彦を主とする萬葉の歌風、橘千蔭や村田春海を主とする古今集に近い歌風と、本居宣長を主とする新古今集に近い歌風とがある。

田安宗武

楫取魚彦

田安宗武は田安家の祖であつて、學問に志深く、有職律令に詳しかつた。初め在滿を師として學んだが歌の上に意見の相違もあり、其の他種々の原因から、在滿は退いて眞淵を推薦したのである。宗武には天降言といふ歌集があるが、萬葉風としては眞淵よりも徹底して居る。楫取魚彦は下總の佐原の人であつて本姓は伊能と言つた。江戸に出でて眞淵の家の近くに住まつた。假名遣の書として古言梯の如きすぐれた著書がある。歌としては萬葉集の歌風を最もよく體得したものであるが、宗武のやうな個性味は乏しい、縣門遺稿の中に魚彦歌集がある。

加藤千蔭は加藤枝直の子で芳宜園といつた。父の業をついで町與力であつた。枝直も眞淵の門でその識見にまさるものはあるが、學問にも歌にも殘した所は比較的少い。千蔭も研究に於ては萬葉集略解の如きを殘して居るが、彼の本領は歌人たるにあつた。「うけらが花」は彼の家集である。古今調・新古今調の間をいつた優麗な格調であつた。

村田春海

千蔭とならんで歌人として縣門に注意すべきは村田春海である。春海は文化八年に六十六歳で歿して居るから、千蔭よりやゝ若く、且町人であつたが兩人は互に許しあつて親しく交つたのである。彼は豪放の性質であつた。琴後翁といひ家集を琴後集といつた。歌と文とを集めてある。彼は擬古文も極めて巧みであつた。而して歌は千蔭と同じ優雅な歌風であつた。

本居宣長

最後に本居宣長は伊勢松坂の商家に生れたが、幼少から學問を好んだ。十九歳の時山田の今井田氏の養子になり、山田中地藏の宗安寺の法幢和尙に和歌の添削をして貰つたりしたが、廿一歳の冬養家を辭して松坂に歸つた。そして廿三歳の時母勝子のすゝめによつて都に上つて醫學を學んだ。その間に堀景山に儒學を學び、且つ景山のもとで契沖の著書を繙く機會を得て國學の研究にも從事した。廿八歳

眞淵と松坂に會つて古事記研究の志を語り同年十二月眞淵の門人となり、それから古事記傳を主著として源氏物語玉の小櫛・萬葉集玉の小琴・詞の玉緒その他幾多の著書を發表した。彼は新古今集を好んでその歌風は新古今調である。新古今集を主としたのは近世に於て荷田在滿があるが、宣長も同じ立場である。彼の石上私淑言に見られる歌論は精細を極めて居り妥當でもあるが、歌は藝術的にあまりすぐれてゐない。

田安宗武

ふる雪にみ笠もめさず皇子たち御狩せすなりみ鷹つとめよ

わが宿のそがひにたてるかしの木にかし鳥來なく頃は早きぬ

楫取魚彦

青雲の白肩の津は見ざれどもこよひの月におもほゆるかも

ちゝのみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり

加藤千蔭

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

墨田川みの着てくだす筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ

かはほりの飛びかふ軒は暮れ初めて猶くれやらぬ夕顏の花
內日さす宮路の雪にあぢまさの車しづけき朝ぼらけかな

村田春海

なづな咲く花のにほひに暮れかねて霞にのこる春の山畑
とまり舟とまの雫の音たえて夜はの時雨ぞ雪になりゆく
見し世には只なほざりの一ことも思ひ出づれば懷しきかな

本居宣長

軒くらき春の雨夜のあまそゝぎあまたも落ちぬ音のさびしさ
散るまでは世の營みもすててみむ花の日數はいくばくもあらず

小澤蘆庵

眞淵門下によつてかくの如く三方面の歌風が唱へられて居つた時、京都に於ては舊派歌風から出でて新しい態度を唱へた歌人があつた。それは小澤蘆庵である。蘆庵は享和元年に七十九で歿して居るから、宣長等とほゞ同時代である。尾張で生れたのであつたが、京都に主として住み、京都に於て活動したのである。蒲生君平や上田秋成とも親交があつた。冷泉爲村に歌を學んだのであるが、彼は獨自の立場を得たのである。彼は古今集を主としたが、たゞことうたを唱へて俗談平話がそのまゝ歌であると唱へた。これは俳論に於ける鬼貫などとも類似するので

あり古今集の平淡味から來て居る。彼の歌は六帖詠草や六帖詠草拾遺によつて知られる。而して蘆庵と親しかつた上田秋成も歌人としてすぐれて居た。秋成に就いては小説の所に述べるが、秋成の歌は藤簍冊子(つゞらぶみ)に載つて居る、詩心の流露した歌が多い。

をしからぬ命ながらも足乳根のある世はかくてあるよしもがな　　小澤蘆庵

うづまさの深き林をひゞきくる風の音すごきあきの夕ぐれ
大井川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ浪の音かな
都べはちまたの柳園の梅かへりみおほき春になりにけり
みぞれふり夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の音もせぬ
秋の雲風にたゞよひゆく見れば大はた小幡妹がたく領巾
　　上田秋成

二、蕪村とその時代の俳諧

芭蕉の歿後その門下は互に門戸をたてゝ爭ひ、次第に芭蕉の眞精神は失はれて來

た時に、淸新の俳風をたてゝ俳諧を復興したのは天明の蕪村であつたのである。もとよりこの時代の復興の功は蕪村のみではなく、樗良や蓼太・白雄・曉臺・闌更などもあるのであり、殊にその時代に於ては蕪村はむしろ畫の方に名があつて俳諧に於ては隱れて居つたのであるが、明治に至つて正岡子規が蕪村の價値を認めてから、その眞價を知らるるに至り、この時代を代表する俳人となつたのみならず、芭蕉とならんで俳諧史の上の最もすぐれたる一人となつたのである。

蕪村は享保元年に攝津の東成郡毛馬村に生れた（大江丸の俳諧袋）。姓は谷口名は寅といつたが、後與謝と姓を改めた。父母を詳にしないが大野洒竹の「與謝蕪村」には一說として大阪阿彌陀ヶ池に住した北國屋吉兵衞といふ者の庶子であるといふ傳說を擧げて居る。芭蕉のやうに武士の出ではなく、町人の出であつたであらう。而して毛馬村は附近に長柄川（一名中津川）があつて、その長堤には柳が茂り草が芽ぶいて靜かな自然の風物は蕪村の詩心を養ふものがあつたであらう。後年の作ではあるが、彼が他鄕にあつて後故國に歸つた時よんだ春風馬堤曲の中に

籔入や浪花を出でて長柄川
春風や堤長うして家遠し

の如き句があるのを見ても之を察することが出來る。蕪村は後この毛馬村から移つて同郡天王寺村に住んだが、やがて江戸に出て内田沾山に倚り、後に巴人宋阿の門人となつた（俳諧袋）。沾山は談林派の俳人であり、巴人は蕉風の俳人であるから蕪村もまた談林より入つて蕉風に入り、次に獨自の俳風を開いたと見るべきであらう。巴人は寛保二年蕪村が廿七歳の時歿して居る。蕪村は師の歿後東の國々をめぐつた。或は下總結城の雁宕の許に居つて俳諧に遊び、或は松島の浦傳ひをし、筑波山を眺め、妙義に至り、更に奥州をへめぐつた（新花摘）。彼は十年の間東にあつたが（夜半亭發句帖の蕪村の跋）後、寶暦の初め三十六七歳の頃西に歸つた。西に歸つた後も近畿・中國・四國等を歷遊して到る所に俳諧を殘し、後京都に居を定めたのである。居を定めた後も丹後の與謝に三年程過したこともあつた（几董から檜葉）が主として京都にあつたのである。而してから檜葉によれば明和のはじめに京都で先師巴人の業をついで二世夜半亭と號した。それ以後は京都にあつてその優美な自然の中に浸つてゐた。それを古典的教養と結びつけて彼の俳境は成つたのであらう。自在な空想と豐麗な修辭とは彼の俳諧の特色を形づくつて居る

のである。かくて天明三年冬十二月の廿四日夜六十八歳で此の世を去つた。彼の門人几董は蕪村の終焉の記にその最期のさまを傳へて居る。

蕪村の著には新花摘が天明四年に作られて居り、また女流俳人の句を輯めた俳諧玉藻集もある。一夜四唫は安永癸巳二年九月に興行した四巻の歌仙である。而して彼の句や文を見るべきものは天明四年に几董の編輯した蕪翁句集二巻と、文化十三年に、其獨亭忍雪・醉庵其成の編した蕪村翁文集二冊がある。

與謝蕪村

春月や印金堂の木の間より
春雨や小磯の小貝ぬるゝほど
春の海終日のたり〳〵かな
閻王の口や牡丹をはかんとす
寂として客の絶間のぼたん哉
不二ひとつうづみ殘して若葉かな
石工ののみ冷したる清水かな
秋の燈やゆかしき奈良の道具市
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

その他の俳人

蕪村の時代には更に幾多の俳人を有するのであつて、天明三年に八十二歳で歿した横井也有、明和八年に六十三歳で歿した炭太祇、天明七年に八十歳で歿した大島蓼太の如き、著しきものであり、更に蕪村の傾向をうけた加藤曉臺の如きがある。それらの中、也有は尾張の俳人で鶉衣を殘して居り、太祇は人事の句を多く殘して居る。更に曉臺は姓は加藤といひ、平兵衛と稱し、暮雨庵と號した。享保十七年名古屋に生れたが、壯年江戸に出で御祐筆部屋惣帳方へ出役したが後退き、京師にゆき又江戸にゆき東奥にゆき、更に京都に至つてそこに住した。蓮阿坊白尼に隨つて俳諧を學び、蕪村等とともに俳諧を中興せしめた。寛政二年正月二十日六十一歳で歿した。門人曲江亭桃睡によつて曉臺終焉記(一名落梅花)が作られて居る。が彼の句は門人臥央の編した文化六年板の曉臺句集によつて見る事が出來る。斯の如く種々の俳人はあるが蕪村はそれらの中で特に注意すべき人であることは言ふまでもない。

三、狂歌と川柳

狂歌

狂歌は短歌と同じ三十一文字形式を用ゐては居るが、俗語を用ゐ、また卑俗な内容をうたつたものであつて、和歌が傳統的な感情にとらはれて居る時に、それらから離れて近世の生活を背景として歌はれ、古典や古人に對する皮肉や諷刺ともなり、近世生活に對する陶醉ともなつたものが狂歌である。而して狂歌の源流は古今集に既に見えて居る俳諧歌などにまでさかのぼる事が出來るのであつて、狂歌風の和歌はそれ以後の歌集にも見えてゐるのであるが、所謂狂歌として文學の注意すべき一形式となつたのは近世の中期天明頃である。作者としては半井卜養や石田未得を始めとして四方赤良（太田蜀山ともいふ）・宿屋飯盛・手柄岡持に於て全盛に達し、北川眞顔等に至つては既にその勢力は衰へて來たと思はれるのであるがそれらの中で四方赤良は狂歌を代表する者であらう。

太田蜀山

太田蜀山（四方赤良）は名は直次郎といつて寛延二年に生れた。十七歳の頃父の業を繼いで御徒組となり、それ以來この業に從ひ、六十二歳で職を辭してからは專ら狂歌の方面に身を入れたのであつて文政八年七十七歳で歿した。彼の事物を滑稽

的に表す伎倆は驚くべきもので、時勢を觀て諷刺的によんだとも思はれる「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶといひて夜もねられず」「せいひつといへどもめるかみ合羽油斷のならぬあめの下かな」にもその才は十分に窺はれるであらう。それが少しも智巧的に考へられないやうに自然に表現されて居る所に彼の特質があり、また狂歌をすべての意味に於てよく代表するといふことが言はれるであらう。

次に主なる狂歌集を見るに古歌集の題名を滑稽的に變化したものが多い。古今夷曲集は十卷から成つて寛文六年の開板になるものであり、生白庵行風の編である。春、夏、秋、冬、賀付神祇、離別付羈旅、戀歌、雜上付物名、廻文歌、雜下付哀傷、釋敎に分つて古人の名をあげ、古人の歌に擬してよんである。後撰夷曲集も十卷から成り、寛文十二年の開板である。同じく行風の撰であり古今夷曲集と組織は同一で、古人の和歌を根柢に置いて之を滑稽的によんである。吾吟我集も慶安年中に石田未得の著したものである。是等の集は初期のものであり、古典に依據したものが多い。次に天明頃の狂歌の全盛時代になつて幾多の集が編まれて居る。萬載狂歌集は天明三年四方赤良等の撰したものであり、狂言鶯蛙集（故混馬鹿集）は

天明四年朱樂菅江と四方赤良等が撰したものであつて二十卷から成り、人名も古人の名を襲つて居ない。德和歌後萬載集も天明五年に四方赤良等が撰したものであり十五卷から成つて居る。才藏集は天明七年四方赤良等の撰したものである。四方赤良自身の集は千紫萬紅と萬紫千紅とがある。また天明三年のめでた百首夷歌、蜀山百首も彼の歌のみが集めてある。この他文化十一年の手柄岡持の我おもしろ、北川眞顏の蘆荻集の如きも狂歌集として注意すべきものである。

立　春

改年の御慶めでたく天の戸を明けましてよい春は來にけり

女　郞　花

をみなへし馬から落ちた僧正におけがのないぞめでたかりける

（めでた百首夷歌）

生醉の禮者をみれば大道をよこすぢかひに春は來にけり
春がすみたちくたびれてむさし野のはら一ぱいにのばす日の足
子の日する野邊に小まつの大臣はいまも賢者のためしにぞひく
おれを見てまたうたをよみちらすかと梅のおもはんこともはづかし

一刻を千金づつにしめあげて六萬兩のはるのあけぼの
ほとゝぎす鳴きつる跡にあきれたる後德大寺の有明の顏
ひとつとりふたつとりては燒いてくふ鶉なくなる深草のさと
駒とめて袖うちはらふ世話もなし坊主合羽の雪の夕暮
雀どのおやどはどこか知らねどもちよつちよとござれさゝの相手に

（蜀山百首）

狂歌とならんで、十七字を以て滑稽洒脫の想を表はさうとする所謂川柳が現はれた。江戶淺草に柄井川柳といふがあつて前句付の宗匠であつたが、この新しい形式を始めたのである。而して川柳を集めた柳樽は明和二年夏初篇を出してから次第に續篇を出だし寬政二年に川柳の歿する迄に廿四篇に達したが、更に二世川柳に至つて文政元年歿する迄に六十篇に達し、引續き三世・四世・五世と繼いで柳樽を出したのである（近世文藝叢書第八・第九に第一篇から第六十篇まで收めてある）

川柳は俳句と同じく十七音形式であるが、俗語を用ゐ、また卑近な材料を捉へて人情の急所を表はさうとする。自然をとらへてもそれを擬人化し、人間化して居るのである。人事をうたふにも英雄を凡人化することによつて滑稽を表したり

人生の缺陷や弱點を指摘してこれを諷刺的に表はさうとする。和歌に見えるやうな優雅な感情でなく、卑俗な世相をうつす事によつて民衆的な世界を表はして居るのである。

かみなりをまねに腹掛やつとさせ
米つきに所を聞けば汗をふき
國の母生れた文を抱きあるき
縫紋を乳をのみ／＼むしるなり
母親はもつたいないがだましよい
淸盛の醫者ははだかで脈をとり
道とへば一度にうごく田植笠
按摩とりいびきをきくと手ぬきをし
寢所をへし折つて置くひとりもの
風呂しきを解くとかけだす眞桑瓜
蚊帳釣つた夜はめづらしく子があそび

（柳　樽）

四、初期の讀本と洒落本

中期の小說は後期に於ける江戸小說の全盛期に入る先驅として、京傳・馬琴の出でる前の讀本、京傳の出でる前の洒落本を擧げる事が出來る。先づ讀本から考へて見る。

讀本

讀本は黃表紙の如く畫を主としたものと異なつて、文章を主とした所から生じた名稱であるが、內容から言ふと、浮世草子の如く現實を題材とせず、歷史小說と稱すべきものである。而して敎訓話や實錄等の系統をひき、是に支那の稗史演義が結びつけられて生じたものと思はれる。而して此の期に於ける讀本の世に知られたものに建部綾足の明和五年に著した西山物語の如きがあり、安永二年に出した本朝水滸傳(吉野物語)があるが、擬古的の物語であつて、是等は純粹の讀本とも言ひ難く文學的の價値も餘り高くない。この時代の讀本として最も注意すべきは英草紙と雨月物語とである。

古今奇談英草紙

古今奇談英草紙は寬延二年に出版せられた。作者は近路行者と稱し、大江漁史ともいつた。都賀庭鐘である。大阪の人で儒學・醫學・博物學に通じて居た。當時大

坂に木村巽齋といふ酒造家で富豪があつて、支那の知識に通じ、支那の書を多く取りよせて居たので、英草紙の作者は此の人に依つて、支那の稗史などをも讀み得た。英草紙も煎燈新話等の影響をうけて居るのである。短篇から成り、奇談と稱せらるべき說話から成つて居るが、幽靈。怪異を扱つたものは極めて尠く、歷史的題材を扱つてそれに新しい解釋を加へて居るのである。たとへば二位の尼が、安德帝を奉じて海に入つた史實を叙し、これに意見を加へて、外戚清盛のはからひで姬宮の安德帝を皇子として帝位に立てたのであるから、秘密の曝露せんことを恐れて幼帝と共に海に入つたのであると書いて居る。又賴朝と義經との關係を叙し、意見を加へて義經が賴朝に追はれた罪は賴朝にあるが、しかし賴朝には大江廣元があつて常に惡をすゝめたから賴朝の罪の一部は廣元にあるとした。第九の話に高師直を同情を以て記した如き道德的にとらはれて居ない傾向を見る事が出來る。而してやゝ怪奇的な題材を扱つた第二の話を見ると、馬場求馬といふ貧しき浪人が乞食の群に投じ、乞食の入婿となつて時期を待つたが、やがて歸參が叶つて歸る途中琵琶湖を渡る時、妻を湖中につき落した。妻は因幡の侍に助けられた。馬場が因幡の侍の媒介で後妻を求めた所が、それは元の妻であつたの

である。怪奇的になるべくして而も現實的になつた所に英草紙の特徴がある。

次に雨月物語は上田秋成の作である。秋成の傳に就いては列傳體小説史に詳しく上田秋成全集や秋成遺文にも見えて居る。姓は上田といひ、通稱は東作、號は餘齋というたが、無腸・鶉居等の號もある。享保十七年に生れ、父は秋成自らも知らないといつた如く明かでない。浪華の娼家の出であつたといふ事も否定すべきではないであらう。四歳の時母にも別れ、上田家に養はれたが、六歳の時養母も死に、繼母の手に成長した。後醫を學んで醫者を開業したが、これを廢して、文筆を以て立つたと見るべきであらう。性狷介にして人と容れず、又容れられず、不平の中に一生を送つたのであるが、この間に妻胡蓮尼は彼を助け、また秋成もこれに慰められたものであらう。

秋成は加藤宇萬伎に學んで國學にも深く、本居宣長とも論戰をまじへ、萬葉集にも萬葉集會説・金砂の如き著書があるが、最も注意すべきは讀本作者としての秋成である。而して讀本としては雨月物語があるのである。雨月物語は彼の生涯の中期に作られたと思はれるが、若い時代に作られたものには、八文字屋本の系統を引く諸道聽耳世間猿と世間妾氣質とがあり、伊勢物語の形を擬して作つた癇癖談（くせものがたり）

も作られ、また晩年の作と思はれるものに春雨物語がある。雨月物語は九篇の短篇小說集であるが、何れも怪異を扱つて居る所に其の特徴がある。

白峯は崇德上皇が讃岐の白峯に崩じたまうたのを、西行が仁安三年の秋詣でて崇德上皇の靈にあひまつる次第を記したもので撰集抄保元物語によつた事は明かであり、後馬琴の弓張月の中に摸せられて居る。菊花の約は丈部左門と赤穴宗右衞門との義の交を說き、赤穴宗右衞門が別れに臨んで菊花の咲く時に必ず訪れると約束したが、幽閉されて歸る事の出來ないために、自刄して魂になつて再會の約を果したといふ構想である。又淺茅が宿は葛飾郡眞間の鄕に勝四郞といふ男があつて、妻の宮木を殘して京に行つたが戰亂のため勝四郞は數年の間歸らなかつた。七年の後歸つて妻と久々で逢つたが、それは亡妻の靈であつたのである。そこに可憐なる妻の心情が見られる。蛇性の婬は蛇の淫蕩なる性質から女性に姿を變へて人間に執念深くまとふ事を描き、青頭巾は高僧の男色を描いて凄慘身にせまるものがある。その他の篇もそれぐ\怪異を描いて、一篇毎に特殊の相を示して居る。是等の題材は支那や日本の古典から得來つたものが多いであらうが、それらの題材をよく脫化した所に秋成の素質が見られるのである。

この黄草紙や雨月物語によつて開かれた讀本は第三期に於て全盛期に達する。

洒落本といふのは遊廓等を世界とし、男女の會話を主として廓の生活をうつしたものである。此の種の本は、滑稽や通を内容とするために洒落本と稱したのであらうが、その本の形が小さいため、小本といはれ又形の肖たために蒟蒻本とも呼ばれた。此の洒落本の内容意義に就いて上田博士は洒落は滑稽であつて、半可通や田舎者が都會の風俗に馴れず、而も通を氣取つて失敗する滑稽を叙述するのが主であつたが、後廓の寫實になつたのであると言はれ、佐々博士は洒落は眞面目の對照であり、滑稽の意味があるとともに、野暮の對照でもある。洒落本は粹人や通人の世界を描いたものであるといはれた。この滑稽と通とが洒落本の内容であらう。而してこれを遊廓の外面的寫實に於て表現するのである。而してその寫實も極めて輕い意味でいふのであつて、洒落本の書名を見ても契國策とか大抵御覽とか船頭深話とかいふ漢籍をもぢつたものであり、作者の名も匿名である上に山手馬鹿人とか夢中散人といふやうな茶化した名である事によつてもその態度は察せられるのである。

洒落本の起原に就いては寶暦・明和頃に始まつたと見るべきであつて、その初めの

作としては寶曆六年に江戸で作られた異素六帖や、同年に大阪で刊行された聖遊廓を擧げる事が出來る。異素六帖は支那の義楚六帖をもぢつた名であつて、寶曆七年孟春の出版で、澤田東江の作である。二卷に分れて居るが、上卷は歌學者と儒者と佛者とが三人集つて、遊廓の事を語りあひ、歌を引き詩をあげて說明するのである。下卷は畫を入れて詩の句と、百人一首の下の句をあげ更に說明を加へてある。聖遊廓は著者は不明であるが、釋迦・孔子・老子の三聖人が李太白を主人とする揚屋で相方の女や、太鼓持の白樂天を相手にして遊ぶ趣向である。然し是等は遊廓を材料にして居るだけで、戯文とすべきものであるが、明和年間の遊子放言に至つて寫實的傾向となつて來たのであつて、洒落本を比較的眞面目な態度で廓の生活をそのまゝに寫實したものに限るとすれば遊子放言を濫觴とすべきであらう。

異素六帖と聖遊廓

遊子放言

遊子放言は明和版であることだけ明かであつて、著作の詳しい年月は分らない。著者も田舍老人多田爺とあるだけで明かでない。但し今日傳ふる遊子放言には江戸堀江四丁目多田屋利兵衛とあるから、多田爺といふのは利兵衛の事であるとも思はれるが、或は隱れた文人が、利兵衛の名で出したのかも知れない。遊子放言は

[illegible]

小書のさろ柳しで三十に及の男すくしあさまのそげ。大本多。文びさい八端がけさつ人〳〵か羽織ら。帽の細き谷の帯むすびされ細身のわきざし拵まへ少しよごれ。黒羽二重の紋所もちくしよごれ小袖あかゑへ小紋無垢の片袖ちがいの古かれゑいろうさめさ緋縮緬のおび当でん。よきふくそうす。帽がひろのひくト袴。やまおう頭巾かぶられお。鼻紙袋へすなしさ

二五四

又は小菊の四ッ折すこし出しけり。紙よりわかれ逸男は
かたぎる場にあたりてときざつくとまつりてあそびし
あしらひくて行むかふよりも二十才ばかりの人柄
よき男和くそふあつて息ざまきざし京流にて縮緬の
まへ羽織ひつ紋あつく丹後嶋の小袖花ごろもおひ
網戸茶縮緬のきもん琉珀ぶ原の袴。すがねき草
履さときぐ供よいあるきの風呂敷みとはず花とり出せ
扇みかざして持る

通り者 これく色男く むすこ 是はどうでござりやすとは

万先生と御噂ちやーねへさ 通り者 先生はさんねはまく

おまへどちへ行なさる むすこ 私は本家へまゐりません

通り者 もし孫八が家来ノ何しにも色〳〵あやる むすこ 伯

父きの病氣で取り使してお筆にさんどまた 通り者 伯父

病氣かへ。ぐつとなどいふまい むすこ みせぐでござりますは

通り者 あんまりはがもへ。よい天氣ぢやによつて正燈

寺へよつてせよ、いふとねへよ むすこ なんぞと私も正燈寺

(遊子方言)

楊子方言をもぢつたものであるが、發端・友の出會・舟の中・堀の樣子・土手・大門記・中の町・夜の景色・宵の程・ふけての體・東雲の頃等に分つて叙述してある。友人との會合に話をはじめ、吉原に遊ぶ相談出來、舟に乘り、茶屋に送られ、遊女屋の中の宵から朝までの有樣を描いて居る。人物は主として半可通が種々の法螺を吹き、獨りよがりの洒落を言ひながら、初心な子息を同伴するが、半可通の男は茶屋に疑はれ女には嫌はれて、つまらなく歸るが、子息は初心のために愛せられるといふ事を描いて居る。洒落本はこの作に於て時期を劃したといふ事が出來るのであり、これから遊廓の特殊な生活の寫實を主とする洒落本が現れるに至つたのである。

廓中奇談

明和六年には廓中奇談が出た、作者は臼岡先生とある。船窓笑語・弄花巵言・掃臭夜話に分つてある。船窓笑語は吉原通ひの船の中の樣子をうつし、幇間藝者の雜談を叙してあり、弄花巵言は茶屋に送られ廓に至るまでの客と遊女との樣子を描いてある。而して掃臭夜話に於て夜鷹と二人の勞働者の立話を書いてある。又明

辰巳の園

和七年には辰巳の園が出た。作者は夢中山人寐言先生とある。深川の廓をうつした洒落本の最も古いものとして注意せられて居る。船宿の樣子、船宿の主婦と客

との對話、船頭との問答、深川の特殊なる遊女屋の樣子、その部屋を異にするに從ひ三組の違つた種類を描いて居る。半可通の部屋や、野暮な武士などを描いて居る。

更につゞいて安永二年に夢中山人の南閨雜話があつて品川の遊廓を描いて居り、安永三年には風來山人の里のをだまきがあるが異素六帖の系統に入るべきものである。同年に蓬萊山人の婦美車紫鹿子がある。かくの如くして異素六帖の出た寶曆七年頃から安永四年頃に至る二十年程の間に、洒落本は次第に其の一定の型を得來つたのであつて、これまでを洒落本の第一期とする事が出來る。而して江戸文學後期に於て山東京傳を主とする第二期に入るのである。この第一期に於ては作者としては蓬萊山人歸橋・山手馬鹿人・田螺金魚の如きが代表的な作家である。

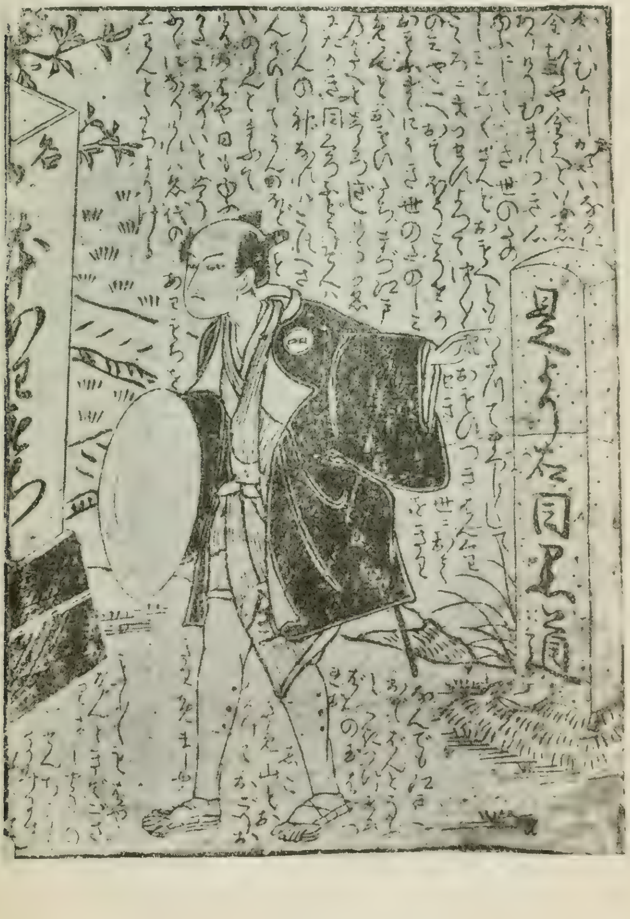
讀本や洒落本が此の期に於て作られるとともに、黄表紙を始め種々の形式の小說が作られた。風來山人の小說の如きもこの時代に作られた。風來山人は讃岐の生れであつて平賀源內といひ、本草學に詳しく科學的な才があつて火浣布なども作つたが、顧みられず不平の中に一生を送つたのであつて、文筆の如きは彼の餘業に過ぎなかつたのであるが、なほ淨瑠璃に小說にその才氣がひらめいて居るので

ある。小説では風流志道軒傳の如きがある。風流志道軒傳に淺草の境內に葦簾を張り一脚の机を出だし、一本の大きな自然木を携へ机をたゝいて太平記その他の軍書を讀んで生活した男が、風來仙人といふ仙人に會ひ、空を飛ぶ事の出來る扇を得て、大人國や小人國を訪ひ、支那に遊び、女護島に至るといふ樣に諸所をへめぐつた次第を叙してある。根無草は男色の流行を論じてある。又放屁論の如き彼の戲文は極めて多いのである。

黄表紙は繪畫本位の草双紙であつて、赤本・黑本・青本などとともに其の表紙の色からつけられた名である。是等の草双紙は江戸に行はれて既に八文字屋本の大阪に行はれて居る時から現れたのである。戀川春町の金々先生榮華夢はその時期を劃するものであつて、盧生が夢の故事をとつて金村屋金兵衞といふ男が粟餅屋で餅の出來るのを待つ間に夢を見て泉屋清三といふ豪商の跡目を讓られ、榮華を盡したが遊蕩のため追ひ出された時に夢は覺めたといふ趣向である。その後多くの作家が出たが、戀川春町・明誠堂喜三二の如きは代表者とすべきものであり、明和・安永の頃に出でて輕い文學を作り出して居るのであるが、その他にも作家は多い。天明五年出版の唐來三和の「逆題流名代家莫切自根金生木」の如きは萬々先生といふ

人物を主人公として金が出來るのに困つて種々焦慮するが少しも減らないのみか益々增加するといふ趣向を以て記してある。

何れも繪畫を主として詞はそれを説明したに止るものであつて、春町の如きは自ら畫を



も描いて居る。文學としての價値は乏しいが、また一つの小説の樣式であつたのである。



（金々先生榮華夢）

五、淨瑠璃と脚本

近松・海音が淨瑠璃界を去つて後、竹田出雲は竹本座にあつて、近松の跡を繼ぎ

別の方面に展開していつた。

竹田出雲は名を淸定といひ、近松に次いで竹本座に據つた淨瑠璃作者で、享保八年に作つた大塔宮曦鎧を始めとして、幾多の作をなし、寶暦六年六十六歲で歿した。始めからからくり人形をも扱つてゐたので舞臺の上の細かい經驗もあつたのであらう。近松の抒情的な演出から一歩を進めて、劇的な演出に工夫を凝らして、複雜にして而も統一のある場面を構成する上に於て成功して居るのである。彼の作品は多くは合作であるが、演出の上から近松に比して勝つて居るものがあるために今日もその生命を得て居るものが多い。菅原傳授手習鑑・義經千本櫻・假名手本忠臣藏・双蝶々曲輪日記の如きはそれである。

菅原傳授手習鑑は延享三年の作で五段物であり、菅公の流謫に材をとつて一子菅秀才に對する武部源藏夫妻や松王丸等の忠勤を扱つて居るのであるが、第四段の寺子屋の段は源藏夫妻の苦衷、松王丸の陽に時平につくと見せて、陰に我子を秀才の身代に立てるその犧牲的精神が人の心を打つものがあり、最も人口に膾炙して居る。義經千本櫻は延享四年の興行で、同じく五段物であり、源義經が平家追討の後賴朝と不和になつた事件に材をとつて、忠臣佐藤忠信の苦衷を配し、靜御

前や維盛の妻若葉内侍等を扱つて複雜なる說話を構成して居る。又假名手本忠臣藏は寬延元年の興行であつて十一段物である。赤穗義士の仇討を扱つて居るのであるが時代を室町時代にして居る。赤穗事件を扱つた作として最も代表的な作であり、人形操の劇としての性質を代表するものとも言ひ得べく、複雜なる事件を統一して舞臺演出にあれだけの効果を得しめたのは出雲の脚本作者としての力量をしめすものでなければならぬ。更に双蝶々曲輪日記は寬延二年の興行で九段物である。出雲としては尠い世話物であつて、濡髮長五郎・放駒長吉の二俠客と山崎與五郎・遊女吾妻との戀愛事件をからませて居る。以上の四曲とも並木千柳・三好松洛との合作であるが、千柳・松洛は出雲の門人であり、構想の大體の用意は出雲の力に出でたものと思はれるのである。

近松半二

出雲が活躍した後、淨瑠璃は次第に衰微して來たのであるが、竹本座に近松半二が出てやゝ復興の氣を生じ、江戶に於ては平賀源內によつて最後の光を擧げたと見るべきである。

半二は儒者であり醫者であつた難波土產の著者穗積以貫の子である。半二が淨瑠璃作者として名をつらねたのは寶曆元年からであり、天明三年に五十九歲で歿す

る迄筆を執つたが、その間の作が外題年鑑に五十餘曲見えてゐる。それらの中には彼一人の單獨の署名あるものもあり、合作もあるが、單獨の署名のあるものは晩年の作三・四に止まり其の他は合作である。

たとへば關取千兩幟は明和四年の興行で半二・松洛・竹田文吉・小出雲・竹田平七・三郎兵衞の合作であり、傾城阿波鳴門は明和五年の興行で半二・平七・吉田兵藏・文吉・三郎兵衞の五人の合作である。安永九年晩年に近い頃の作であるおそめ久松新版歌祭文は半二の單獨作である。この他彼の作で多く行はれるものに本朝二十四孝と妹背山婦女庭訓とがあるが何れも合作である。本朝二十四孝は明和三年の興行で五段物であり、武田信玄・上杉謙信に材を取つて、謙信の娘八重垣姫の勝賴に對する戀慕、器量すぐれた山本勘助などを扱つて居る。妹背山婦女庭訓は明和八年の興行であり、同じく五段物で、藤原鎌足が蘇我蝦夷・入鹿を滅す事件を主題として、大判事清澄の息久我之助清船と定高の女雛鳥との戀愛の葛藤を扱つて居る。其の他明和三年興行の太平記忠臣講釋は赤穗事件を扱ひ、安永九年の新版歌祭文はお染久松の戀愛を扱つて居る。

半二は出雲の作風を更に進めて構想の變化と複雜とを求めたので、その極全體を

支離滅裂ならしめた弊は免れないが、流石にその間に舞臺演出上の効果を思はせるものが多い。

並木宗輔

豊竹座の方では並木宗輔の如きすぐれた作家であつて、北條時頼記・一谷嫩軍記（寶曆元年）の如き作があるが、次第に淨瑠璃は衰へて來たのである。而してすべての文運が東遷しつゝある此の期に於て、淨瑠璃も亦江戸に於て掉尾の華を開いた。

福内鬼外

それは風來山人福内鬼外であつて、彼はその奔放なる奇才を此の方面にも向けたのである。彼の作としては明和七年に興行された神靈矢口渡が最も傑れた作と稱せられるものである。

歌淨瑠璃

而して斯の如くして淨瑠璃は次第に衰へて來た事は脚本に生命を奪はれていつた事も理由であるが、一方に淨瑠璃は劇的方面を次第に失つて、所謂歌淨瑠璃といふ音樂的性質を主とするものに發展していつたのである。かくて歌淨瑠璃としても初めは河東節・一中節の如く謠曲の節の名殘を止めて居る素撲なものから、豊後・常盤津・富本・清元・新内といふ樣に次第に、纖細な又ある意味からいつて高雅から離れて粹とか澁いとかいふ曲節になつて來たのである。かくの如くなると共に淨瑠璃の内容は殆ど顧みられずに、たゞ滅入るやうなその哀調の中にひたる事

に中心の目的を見出だしたのである。

脚本

脚本は既に古くから行はれ、元祿時代にも作られて居るのであつて、近松にも脚本の作のある事は既に述べた所であるが、中期に於ては、津打治兵衞が江戸狂言作者として出で、堀越菜陽・金井三笑は寶曆から安永にかけて活躍し、次いで菜陽の門に櫻田治助が出た。津打治兵衞は大阪俳優の子であつたが早く江戸に下つて、江戸で名を成したのである。寶曆十年七十八歳で歿した。

並木正三

是等は江戸の作者であるが、大阪に於て並木正三やその門から出た並木五瓶があつた。正三は傳奇作書によると、大阪の道頓堀宗右衞門町に住んだ高砂屋平左衞門といふ菓子屋であつたが、若き頃から劇場を好んで、淨瑠璃作者の並木宗輔に入門して歌舞伎狂言を數多著した。其作には桑名屋德藏入舟噺、三千世界商往來、日本第一和布苅神事、三拾石艠始等があり、安永二年に歿したのである。

並木五瓶

並木五瓶は正三の門から出て天明・寛政頃の作者である。初め大阪で作者として立つて名を擧げ、寛政六年に江戸へ出たが、更に十一年に大阪へ歸り、澤村宗十郎と結び、再び享和年間に宗十郎等と江戸へ出た。從來江戸では勇壯な藝が行はれたのであるが、五瓶が江戸へ出てから上方風の作風を加へて來たのである。彼の

すぐれた作は五大力戀緘であつて、寛政七年の興行であり、大當りをとつた。お萬源五兵衞と早田八右衞門の五人斬とを結びつけて脚色を加へてある。金門五山桐も彼の作である。

奈河龜助

正三の弟子に奈河龜助がある。もと奈良の産であつて放蕩のために家業を捨てゝ河内の縁家に食客して居た中にも常に遊里劇場に通ひ、後大阪で作者となつたのである。奈良と河内とに漂泊したために奈河と稱すると傳奇作書に見える。彼の作の中競伊勢物語、伊賀越乘掛合羽、加賀山廓寫本等はすぐれた作である。この龜助の高弟に奈河七五三助があり、又七五三助の弟子に奈河篤助もあつた。

かくて中期には江戸と大阪との兩地に作家があつたが、漸く江戸が中心となつて來たのであつて、この機運の中から後期に於て鶴屋南北が生じたのである。

第三章　後　期

一、和　歌

この時代に於ける和歌は京都に於て香川景樹が中心となつて居り、その門に熊谷

直好・木下幸文などが出るとともに、井手曙覧・良寛・大隈言道等が出でて短歌に於て新しい機運が動いて來た時である。

香川景樹

香川景樹は鳥取の人であつたが、若年の時京都に來てやがて香川景柄の養子となつた。景柄は梅月堂宣阿の子孫で舊派の系統であつたが、景樹は後に舊派から離れ、桂園派といふ一派を立てたのである。それには蘆庵の刺戟があつた事は明かであらう。天保十四年七十六歳で歿した。景樹は古今集を重んじて、調の說をたてた。古今集正義は彼のすぐれた著書であり、新學異見は眞淵の新學に反對したものである。彼の家集には桂園一枝がある。

熊谷直好

景樹の門下の中、熊谷直好は周防岩國に生れたが、後難波に住した。景樹には少年の時から歌を學んだのである。文久二年八十一歳で歿した。神樂催馬樂に註を加へた梁塵後抄は彼のすぐれた著書であるが、家集には浦のしほ貝・浦のしほ貝拾遺がある。景樹の傾向をよく傳へてその格調はなだらかであるが力が無い。

木下幸文

直好とならんで注意されるのは木下幸文である。幸文は備中の人であるが、初めは澄月や慈延等の舊派歌人に學んだが、後景樹に師事するに至つたのである。學者としては直好に及ばないが、歌人としては直好を淩いで居る。家集には亮々草子

がある。調は强いとは言はれないが、眞情の人を動かすものがある。殊に貧窮百首はその題材のとらへ方に於て新しい所がある。直好が寧ろ自然觀照に進んで居るとすれば、幸文は生活をうたひ主觀をうたつたと言ふ事が出來る。文政四年に四十三歲で歿した。

香川景樹

大井川かへらぬ水にかげ見えて今年も咲ける山櫻かな
妹と出でて若菜つみにし岡崎の垣根こひしき春雨ぞふる
うづみ火の外に心はなけれどもむかへば見ゆる白鳥の山
子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後になきが悲しさ
敷島の歌のあらす田荒れにけり荒すきかへせ歌のあらす田

木下幸文

遠近に門さしこむる聲すなり凉みする夜はふけやしぬらむ
かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきばかり悲しきはなし
大丈夫のをのこさびすと打ちあげて泣かぬ心ぞまこと悲しき
まどしきも嬉しかりけりかくまでに人の心の隈を知らめや

幸文のこの新しい作歌の態度は幕末の良寛・曙覽・言道等に共通するものがあるのである。

良寛

良寛は越後出雲崎に生れたが、若い時越後を去つて備中玉島に學び、廿餘年の後歸國して國上山の五合庵に住した。七十五歳で天保二年に歿した。書も巧みであるが、歌人としては萬葉風をとり、而も單なる萬葉の摸倣から離れて、自由な中に萬葉の精神を體得した。備前の平賀元義も萬葉の歌風によつて、生氣のある歌を作り、平賀元義集を殘して居るが、更に注意すべきは福井の井手曙覽である。

井手曙覽

曙覽は田中大秀の門から出たが、歌人としては萬葉を學んで萬葉から出て居る。その人物も詩人肌の物に拘泥しない恬憺たる所がある。家集を志濃夫廼舍歌集といふ。明治元年五十七歳で歿した。

大隈言道

大隈言道は福岡の人で二川相近に就いて歌を學んだが、後、家を弟に讓つて大阪へ出て歌人として立つた、後郷里に歸つて明治元年七十一歳で歿した。歌論にひとりごとがあり、家集に草徑集があるが、外に今橋集・戊午集・續草徑集等がある。言道の歌は形から言へば萬葉集よりも古今集に近いであらうが、その古歌から離れて自由な表現をなした所に良寛や曙覽等に類するものがある。

近世の末期に於ける是等の歌人の出た事は、近世の和歌を重からしむるものであつて、たゞ萬葉・古今・新古今を守つてそれから餘り出なかつた歌人に比して、個性の鮮かな點に於て最も注意すべきものがある。而も是等の歌人は多くは世に在る時は知られず不遇に終つたのであるが、明治以後に始めて高い位置を與へられたのである。

良　寛

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば
梓弓春になりなば草のいほをとく出て來ませ逢ひたきものを
風はきよし月はさやけしいざ共にをどり明かさむ老のなごりに
紀の國の高野の奥の古寺に杉のしづくを聞きあかしつゝ
月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに
歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ
かすみ立つながき春日を子供らと手まりつきつゝ今日も暮らしつ

井　手　曙　覧

今も世にいまされざらむ齡にもあらざるものをあはれ親なし
こぼれ糸網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ東へ

たのしみはすびつのもとに打ちたふれゆすり起すもしらで寢し時

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうまし〱といひてくふ時

大隈言道

そよといふ笹の葉音に引入りてなきがら顏になるかたつぶり

妹が背にねぶる童のうつつなき手にさへめぐる風車かな

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何も知らずて

さし柳さして幾日も經ぬものを根ざし引きみる友童かな

答へする聲おもしろみ山彥を限なきまでよぶ童かな

二、後期の俳諧

安永・天明の蕪村の俳諧復興の後は俳諧再び衰へて文化・文政から天保にかけて俗調のみ行はれたのであるが、この間に俳諧寺一茶に於て僅かに一道の光を見る事が出來るのである。而して大江丸も一茶とほゞ同時に出でたのであり、成美・士朗の如きも一茶時代をかざる人ではあるが、此の間に於て一茶の如く眞摯に人間愛

の精神をうたつた俳人は他に無いのである。

一茶の傳は一茶同好會から出た東松露香氏の俳諧寺一茶が最も詳審なる研究であるからそれによつて記して見る。一茶は名を信之、俗稱を彌太郎といひ、寶暦十三年に信濃國上水内郡柏原驛に生れた。父を小林彌五兵衛といひ、農を業として居たが三歳の時母に早く死に別れた。六歳の詠といふ、

我と來て遊べや親の無い雀

には母のない寂しい幼童の心境を見る事が出來る。而も八歳の時繼母が來て、十歳の時義弟專六が生れてからは繼母に虐待せられた。かくて十四歳の時父は一茶が繼母と不和なのを歎じて江戸に上らしめたのである。彼は郷里にある時柏原驛の本陣の中村六左衛門について學問を授けられ、更に六左衛門の宅にあつた老翁からも俳諧を授けられたのであるが、江戸に出た後も苦みつゝ俳諧の道に專心したであらう。而して江戸に出てから約十年間は其の傳を詳にしないが、天明七年二十五歳になつて江戸葛飾派の二六庵竹阿の門に入つて俳諧を學んだ事が知られる。而して寛政二年竹阿が歿した後はその庵をついで二六庵菊明と號して判者の地位になつた。が規矩にかゝはらない一茶は葛飾派と和せず、やがて寛政四年の

頃葛飾派を去つてしまつた。而してそれよりは俳諧寺一茶と號して西國の大行脚を試みた。而して江戸に住み俳人としての地位を確保したのである。三十九歳の時父が歿してその終焉日記を書いて居る。文化七年郷里へ歸つたが繼母や義弟の逆遇を憤つて草鞋をもとかず江戸に上つた。而も五十二歳の時には常田氏の女菊女（二十八歳）をはじめて娶り、江戸の俳壇を去つて郷里に歸つた。それから長子混藏、二男千太郎、長女さと、三男石太郎、四男金三郎が生れたが何れも病歿した。而して妻の菊女も一茶が六十一歳の時歿した。文政七年六十二歳の時には飯山藩士の娘雪女を迎へたがやがて離縁になつた。更に六十三歳の時やをを女を妻に迎へたが、一茶はそれから二年の後文政十年十一月十九日六十五歳で假住居の土藏の中に歿した。遺兒やた女はその翌年生れた。彼を苦めた繼母も一茶の歿した翌年歿して居る。

かゝる彼の生涯を見れば、一生を不幸の中に過した一茶にはひがみの心もあつたらう、强者に對して反抗するとともに弱者に對しては盲目的な愛をもそゝいだであらう、環境の中に支配されつゝ生きたであらうと思はれるのである。

一茶の句集は一茶發句集（これに二種あつて文政版とこれを增補した嘉永版とがある）一茶句帳

などによつて知られて居つたのであるが、七番日記（文化七年から九個年間にわたる自筆の日記）や八番日記、九番日記等が發見されるに及んで其の傳記資料たるとともに極めて多くの俳句が日記の中に示されて居るのである。またおらが春は彼自身の筆になるもので傳記資料たるとともに彼の文をも見る事が出來るのである。

なほ一茶時代の俳人として大江丸は享保七年に生れて文化二年三月十八日に八十四歳で歿した。彼は大阪の飛脚問屋であつて、大阪江戸の間を往來することが七十回にもわたつてゐる。その間に詩心を養つたものであらう。俳諧懺悔（寛政二年十一月板）と俳諧袋（享和元年二月梓）とは彼の句や文を集めたものである。

一　茶

霞日や夕山かげの飴の香
いうぜんとして山を見る蛙かな
やれうつな蠅が手をする足をする
鹿の親笹吹く風にもどりけり
早少女や子のなく方へ植ゑてゆく
這へ笑へ二つになるぞけさからは（こぞの五月生れたる娘に一人前の雑煮膳を据ゑて）

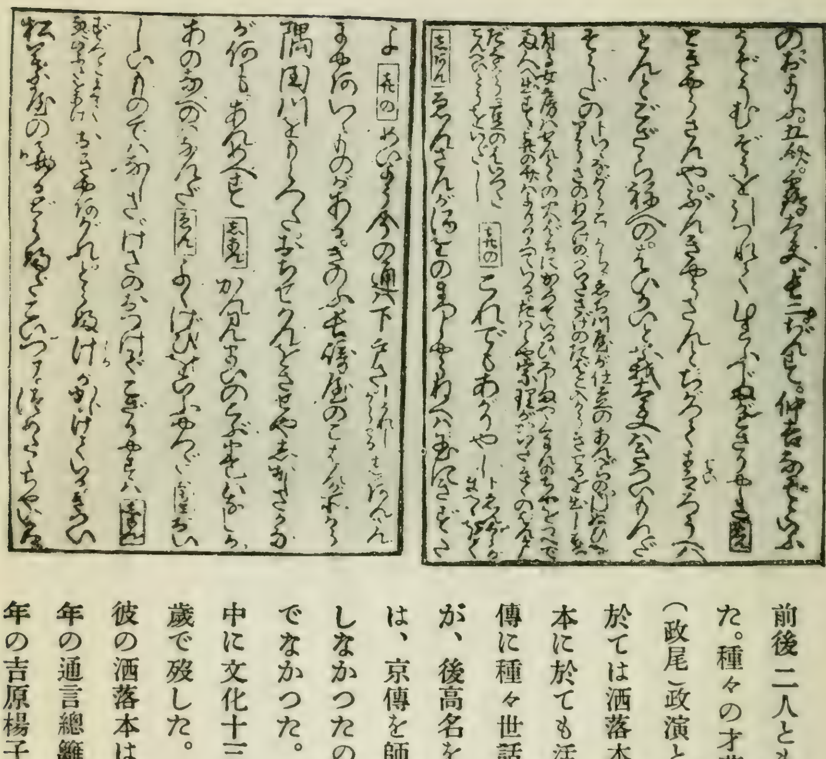
うそ寒や親といふ字を知つてから（文政二年正月一日）
あばら骨なでじとすれど夜寒かな
是がまあ終の栖か雪五尺（十二月廿四日古郷に入る）
露の世はつゆの世ながらさりながら
ともかくもあなた任せの年のくれ（五十七齡一茶）

三、後期の小說

中期に於て洒落本・讀本・草雙紙等の萠芽を見せた江戶の小說は文化文政時代を中心として咲き揃うたのである。次に代表的作家を中心にして解說を試みる。

洒落本では山東京傳を中心とする。明和・安永に於て第一期を開いた洒落本は京傳を中心として第二期を形作るのである。京傳の傳は伊波傳毛之記に詳しい。彼は本姓を灰田といひ、後岩瀨とも稱した。俗稱は傳藏である。寶曆十一年八月十五日生れたが父は傳左衞門信明といひ深川木場町の質屋伊勢屋の養子となり大森氏の女との間に設けられたのである。京傳は長男で、末子は岩瀨京山である。京傳は才氣に富んで、遊蕩にふけり、遊廓に於て執筆したと言はれるが、その妻も

京傳の洒落本



（通言總籬）

前後二人とも遊女出身であつた。種々の才藝に長じ、繪も北尾（政尾）政演といつたが、小説に於ては洒落本に名を擧げ、後讀本に於ても活動した。馬琴も京傳に種々世話を受けたのであるが、後高名を得るに及んで馬琴は、京傳を師とする事を快しとしなかつたので兩者の間は平和でなかつた。爲に京傳は悲痛の中に文化十三年九月七日五十六歳で歿した。

彼の洒落本はその數多く天明七年の通言總籬・古契三娼、天明八年の吉原楊子、寛政三年の通氣

粹語傳・京傳予誌・仕懸文庫をはじめ多くあるが、通言總籬は彼の傑作である。この作を見ると凡例に「予去々春江戸生艶氣樺燒ト云冊子を著シテヨリ云々」とあつて、その黄表紙の人物をかり篇中の人物として居るのである。卽ち艶治郎と志庵とが氣之介の家をおとづれ、氣之介の妻おちせも加はつて種々の食道樂やら何くれの話をなし、次に吉原にゆき遊女との對話となり、朝歸に至るまでを描いて、そこに通を示して居る。その會話の中に寫實的な描寫を見る事が出來るのである。而してその趣向は第一期の遊子方言や辰巳の園以來定まつたものであつて、その型の中に於て遊廓を描いて居るのである。

洒落本は風俗上害があるとて禁ぜられて居たのであるが、寛政三年蔦屋重三郎の勸めによつて禁を犯して仕懸文庫・錦の裏・娼妓絹籭等の洒落本を作つたために彼は罰を蒙つたのである。がこれより京傳は洒落本の製作を止め、讀本に主としてよるに至つた。而して寛政三年以後も洒落本は京傳以外のものによつて作られ、洒落本の第三期を作るのであるが、特に新しい展開は見られなかつたのである。

京傳の讀本は寛政三年洒落本に筆をとめてから後に作られたのであつて、寛政十年の忠臣水滸傳十冊、復讐奇談安積沼五冊文化元年の優曇華物語七冊、文化二年の

櫻姫全傳曙草紙五冊、文化三年の梅花氷裂三冊、昔語稻妻表紙五冊、文化五年の本朝醉菩提十冊、文化十年の雙蝶記六冊の如きこれである。是等の中、京傳の特質を最もよく現して居る稻妻表紙を見ると、お家騷動式の說話である。大和國を領する佐々木判官貞國の先妻の子に桂之介があり、後妻の子に花形丸といふ子があつたが、後妻は自分の腹をいためた花形丸を後嗣にしようとして、惡臣不破道犬とその子伴左衞門を味方にして桂之介を放埒に導かせる。桂之介は藤波といふ愛妾におぼれるので、忠臣佐々良三八郎は藤波を殺して出奔する。更に名古屋山三郎といふ忠臣もある。是等の忠臣の苦辛の結果惡臣が平げられ、桂之介が家を繼ぎ、忠臣が榮えるに至るのであるが、その間佐々木家に傳はる巨勢金岡の畫いた百匹の蟹の圖の寶物があり、種々の事件や挿話が結びついて複雜になるのである。而して元亨釋書に見える蟹滿寺の緣起や、また不破名古屋の傳說をとりいれてまとめた作である。

京傳の讀本の說話は複雜ではあるが、淨瑠璃演劇等よりとりいれたものが多く、なほそれ〳〵の說話が渾然として統一されて居ない憾があり、且つ全篇を貫く精神が稀薄であるために散漫の感じを免れない。その點に於て馬琴の說話を統一さ

せ且つ勸善懲惡主義の思想を以て全篇を貫いて居るのと相違があるのである。

讀本は京傳から馬琴に至つて極盛に達したのである。瀧澤馬琴は字は瑣吉、諱を解、通稱は佐七郎・佐五郎・佐吉等である。號も著作堂・曲亭・飯臺・簔笠軒等と多い。明和四年六月江戸の武士の家に生れた。父が事情によつて仕を退いてから生活は困難になり、二十歳の時には兄もなくなつて自ら生活をしなければならなくなつた。武士となる希望を止め、醫學を學んでも成らず、文筆を以て立たんとして、當時作家として一流である京傳に就いて、その盡力のもとに寛政三年「二十日餘四十兩盡用而二分狂言」といふ黄表紙を刊行した。それから次第に名をあげ書肆蔦屋重三郎にも認められたのである。二十六七歳の頃下駄屋伊勢屋に入婿になつた。彼は後黄表紙を去つて讀本を出し、京傳を凌駕して一流の讀本作者となつた。而して後には京傳の女らしい嫉視や、馬琴の傲岸な利己的な不人情のために不和になつたのであつて、京傳が歿した時にはその葬式にも參列しなかつた。彼は名譽心の强いために作家とも餘り交際せず、獨り高うして居つたのである。晩年には失明し、加ふるに妻お百の我儘に家庭の風波が絶えず、また病弱な一子琴嶺にも死なれて、寂寥の中に嘉永元年十一月六日八十二歳を以て世を終つたのである。綿密に

記した日記によつて彼の生活は窺はれる。而して彼の著した著作は極めて多く、殊に長篇が多く就中里見八犬傳の如きは文化十一年四十七歳の時から天保十三年七十五歳に至る二十餘年を費して完成した、日本に於ける最大の作である。其の他文化元年から文化七年にかけて完成した椿説弓張月、文化十一年から文政四年まで費した朝比奈巡島記、文政十一年の近世説美少年錄等後期の作は長篇が多いのである。而して彼の作には夢想兵衞胡蝶物語の如く、空想的な作品もあり、またお染久松の事件を扱つた松染情史秋の七草や、お駒才三の話を材料にした八丈綺談や、三勝半七を扱つた三七全傳南柯夢もあるが、この市井の事件をも歷史的に解釋せずにはおかなかつた。近世説美少年錄（玉石童子訓）もお夏清十郎を扱つて居るが、主なる説話は毛利元就、陶晴方を扱つて居るのである。而して椿説弓張月は爲朝の一生を扱つて、彼としては最も傑れた作の一つであり、俊寛僧都島物語は平家物語・源平盛衰記に出て居る俊寛を扱ひ、朝比奈巡島記（未完成で終の部分は松亭金水が增補して居る）は朝日將軍義仲の落胤で和田義盛に養はれた和田義秀を主人公とし、開卷驚奇俠客傳（未完、四篇まで成る）は南北吉野時代に、楠・新田兩氏の子孫が南朝の滅亡後ひそかに復讐をはかり、苦節を重ねた事を扱つてある。而し

第六十二回 紫門を敲きて雛衣宝刀を納む 故寺に詣して[illegible]

却説犬飼現八は[illegible]赤岩一角武遠[illegible]

霊鑑の教へ[illegible]

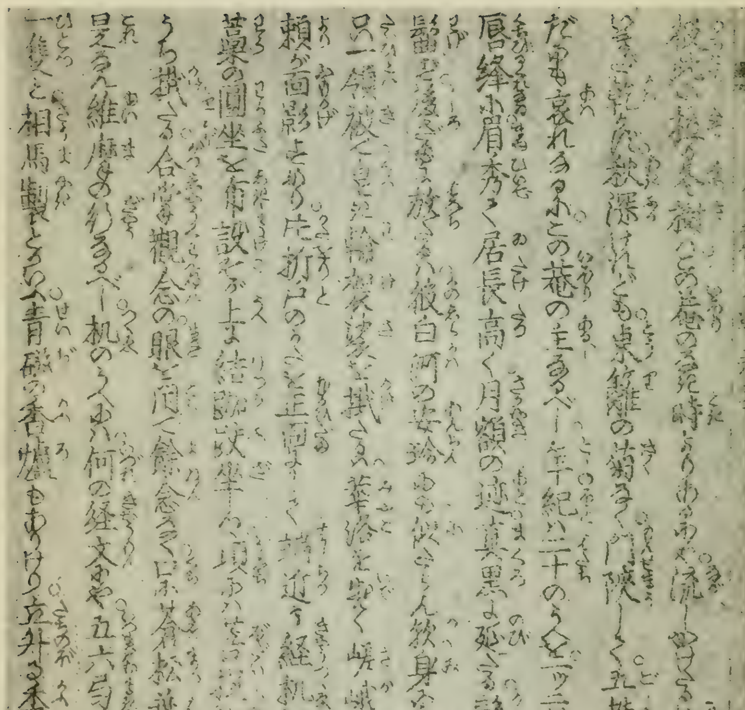
崎嶇と跡蹐[illegible]大村角太郎[illegible]

世を隠る世を[illegible]

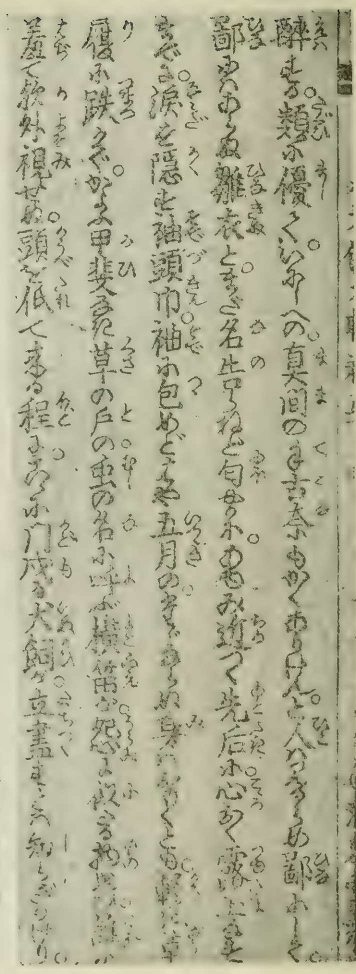
[illegible]

[illegible]

[illegible]


[illegible]
[illegible]の庵の[illegible]時よりわかれ流し出ける[illegible]
いまだ[illegible]秋深けれども東籬の菊多く門[illegible]しく五株[illegible]
ただも哀れなるふとの庵の主なるべし年紀ハ二十のうへ一ツ二ツなるべし[illegible]
唇絳ふ眉秀く居長高く月額の迹真黒よ延る髪ハ[illegible]の髪結ひ[illegible]
鬢[illegible]被白[illegible]の[illegible]身ハ[illegible]色の[illegible]
只一領被く[illegible]華洛を出て嵯峨[illegible]に隠れし[illegible]
頬が面影とかり[illegible]戸の[illegible]正面[illegible]経机[illegible]
菓の圓坐を[illegible]設ぞ上よ結跏趺坐[illegible]
うち拭る合[illegible]観念の眼を閉じ余念なく口に[illegible]
見ゆる維摩[illegible]なるべし机のうへハ何の経文[illegible]五六句[illegible]細[illegible]
一[illegible]と相馬焼とかいへ青磁の香爐もありけり立昇る香の煙の[illegible]

滅易ども人の命に思ひくらべて。かくハ行ひ済をなさんや。この人ハ是犬村氏。礼儀に
あらざらしく誰ならんと、ひとり頷く。現八を怪しく敵く紫の白の声
声を立てず卒尓に掛さえ。五尺餘ハ遠来の浪人なく。犬飼現八信道
と呼るゝのみ。犬村殿にハ要事ありて来つ。聞たまへと呼門く幾遍となく名告れども程
涵あハ絶く応せず。閉る眼をひらかず。ありけるに。その時現八
此家の世を隠遁に甘んじて。人と交を絶ちしにや。かくまでに音づれて耳にぞ入る人の
如くならん。今勤行の最中にて。此宗任せ。ありげなれど。一ツの草の
差れなんこれに昭烈の才ありて。臥龍を起すに。
常に。行の…遠…対面ならざらんと。思を…に折戸の…
心ともなく時を移せバ。亭午の日影。遂に浩然に前面より年…
身のざまも賤しからねど。その容止の艶麗なる。譬ば野花の日に…



（里見八犬傳）

て彼の最大長篇里見八犬傳は戰國時代南總の里見家の興亡を背景として其の家臣八犬士を扱つて、儒敎的精神を現してあるのである。この外梅若傳說を扱つた墨田川梅柳新書や、播州皿屋敷傳說や紅皿・缺皿の傳說などから材を得た盆石皿山記などいふ傳說を扱つた作品もあるが、說話の構成統一の巧みである事は彼を讀本作者として獨步の地位を與へしめた第一の理由であらう。

滑稽本

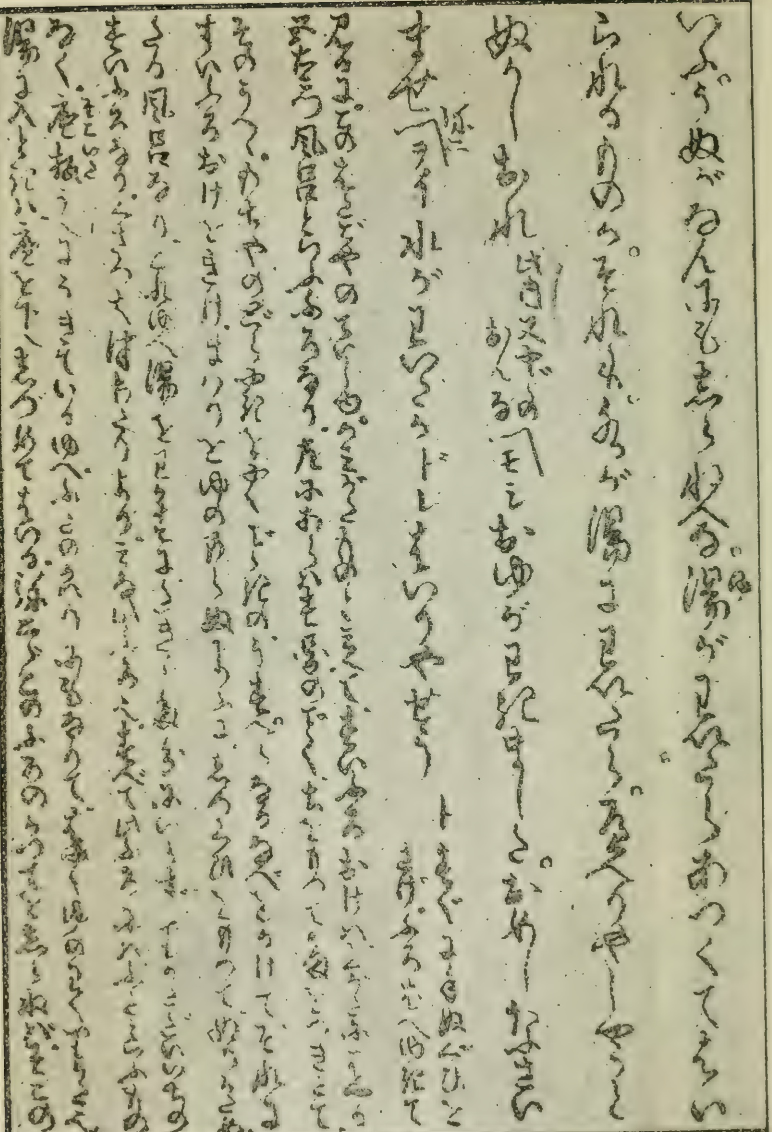
讀本とならんで注意すべき小說の樣式に、滑稽本・人情本・合卷がある。

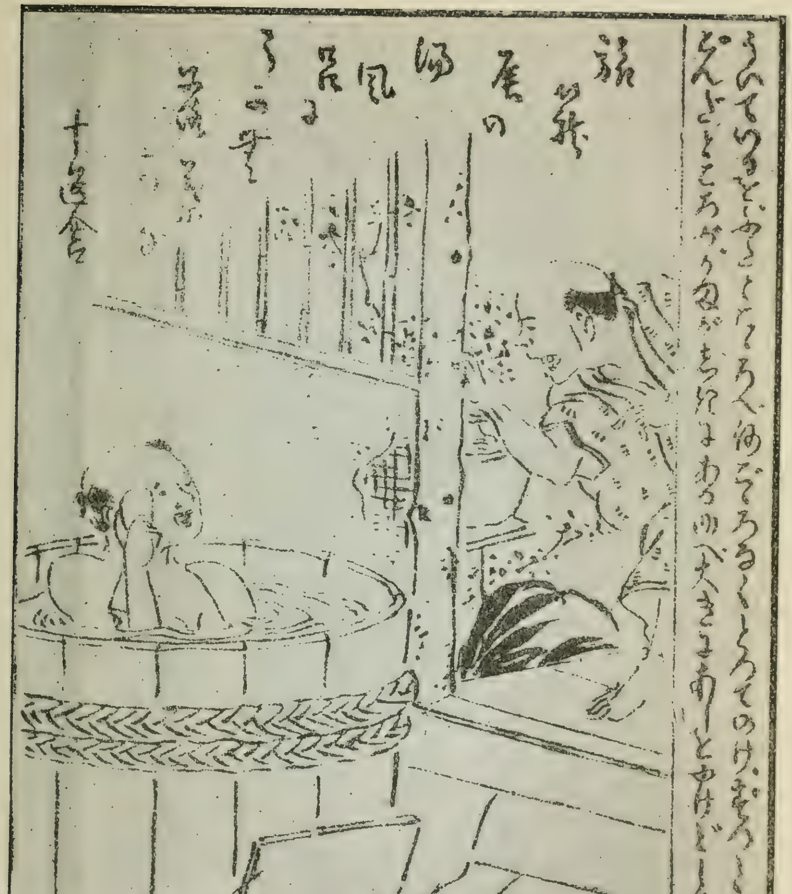
滑稽本は內容から名づけたのであつて中期に於ても風來山人其の他によつて作られて居るが、此の期に於て一九と三馬と出づるに及んで注意すべき一樣式となつ

たのである。

十返舍一九

十返舍一九は明和三年に生れて、姓を重田、名を貞一と言つた。駿府の町同心重田與八郎の二男であつたが、後小田切侯に仕へて大阪にあつた、やがて職を辭し、また大阪の材木商人の女婿ともなつたが、之も離縁せられた。後に妻を娶つて一女をも擧げたが、その性質は磊落で酒を好み無邪氣に世を送つたと思はれる。天保二年七月二十九日六十七歳で歿した。彼は青本や讀本をも作り、また洒落本をも作つたが、傑出して居るのは滑稽本であり、殊に東海道中膝栗毛である。膝栗毛は享和二年に初篇を出した所、非常なる好評を博したので文化六年迄に第八篇を出して東海道中膝栗毛を終つたのであるが、更に翌年から續膝栗毛を出して、金毘羅道中・宮島見物・木曾道中・上州草津溫泉街道等を刊行して文政五年廿一年目に正續全部が成つた。が東海道膝栗毛以後は新しい趣向も盡きて、二番煎じの感は免れなかつた。膝栗毛の脚色は江戸神田八丁堀に栃面屋彌次郎兵衞といふものがあり、駿河府中の出身であるが家產を蕩盡して、旅役者の成れの果てなる鼻之介（後喜多八と改めた）と江戸に出で、喜多八は商家に奉公し、自分は家を持つたが思はしい事もないので家をたゝんで、品川から東海道を上つて伊勢參宮や京見物をして





（東海道膝栗毛）

大阪に行くまでが發端と東海道中であり、續篇も同じ二人が旅をして居るのである。樂天的な二人が道中演ずるさま〴〵の無邪氣な失敗を描いて滑稽の感情を現したものが膝栗毛である、一九が膝栗毛を作るに當り其の悉くが彼の創意になるものでなく、部分的には種々の材料から得て來た事は明かである。山手馬鹿人の作である變通輕井茶話道中粹語錄といふ洒落本や、東海道名所記や、また室町時代の狂言や近世の落語から出て居る事を指摘し得るが、しかし大部分は作者の直接經驗若しくは作者が旅行中に蒐集したものが多いのであらう。

三馬は通稱を西宮太助といひ、姓は菊池名は泰輔、字は久德といつた。父は茂兵衞といひ、安永四年淺草田原町三丁目に生れた。幼くして本石町四丁目の書賈翫月堂堀野屋仁兵衞（一說に中橋の書賈北林堂）の丁稚となり、後山下町の書林蘭香堂萬屋太治右衞門の婿養子となつたが、間もなく妻も病死したので離緣して、日本橋十九文横町に住み古本店を開いた。而して書肆の小僧をして居る間に讀んだ知識を以て自らも戲作をはじめたのである。十九歲の時天道浮世之出星操（でつかい）といふ黃表紙を刊行したのが處女作で、それより多くの戲作を著したが、浮世風呂。浮世床によつて一九の膝栗毛と相對して聲名を得たのである。彼は世才に長じ戲作とともに

ヲヤ。ヲヤ。亀の子がおよぐよ。ヲヤ。ぞろ〳〵。およぐ〳〵。で。能ぞく。
兄さん能沈で温んゐ「アイよく沈むと金魚や緋鯉が出るの。
「弟て出るともぐ〳〵。啼くと水虎が出ますてゐるすぐ〳〵。
水虎出るな。雀ハ利根者だから啼きませぬ。のうあう絵へのう。
「兄おらアも弱虫じやア無いよ「弟ウ。兄さんも強い。ツリヤ耳の膜
ふだッちいの溜らねものアないと目。ゑぶつてまッそデ鼻
の下のお掃除をして虫の食付物アないやレ能でるさんハ
ぞて他所のおぢさんがお誉だよツリヤお舌をべろイやレ能

すみやうくそ、ポイ〳〵ぺるか咳が出るし、悪いおとつさんだの。あんまり
お舌を洗ッてやらう。腹の方へ参りやア、あまりやうするゝ。ぶせう。参ッ誰
すてゝやる。妹「おかゝア。食「おゝかゝアよ。にくい母めだのう。ちつとやくさせて
やらう。可愛坊が参ッてきえて。妹「おかゝアのゥ。食「ヲヽ、母もよく
まてやらうぞ。兄「おとつさんもう出るよ。食「まだ〳〵、モット温ッて。兄「そ
んでもぜんてへおめへの話。食「十おとなしく数へ。雀ハ是だぞと
あとひとめぐりさア、兄さんも雀も哥をうたひな。兄「お月さま
いくウつウ、十三七ツ。食「そうや。兄「まだ年ヤア若へなア。食「あの

に仙方延壽丹の藥屋をはじめ、また江戸の水といふ白粉下を賣出して利潤を得た。文政五年正月六日四十七歳で歿した。

譚評 浮世風呂は文化六年春に第一篇を出してから文化九年に第四篇を出だして完結した。また柳髮新話浮世床は文化八年に初篇を出だし、文化九年に第二篇を書いて未完のまゝであつたのを、文政六年に瀧亭鯉丈が代つて第三篇を記したのである。浮世風呂は男風呂と女風呂とに分けて、赤裸々な人間が世相を語るのを記してあり、浮世床も床屋に於て語る世相をとらへて之を客觀的に記してある。風呂と床屋とは最もくつろいだ氣分でそれ〴〵の個性を最もよく發揮する所であらう。全體の統一した構想はもとよりないが、種々の階級の男女の會話の中に廣く人生の相を思はせるものがあるのである。

瀧亭鯉丈と梅亭金鵞

滑稽本としては近世の末期に於て瀧亭鯉丈の花暦八笑人・滑稽和合人、梅亭金鵞の妙竹林話七偏人等がある。一九や三馬の滑稽は世相をとらへて描寫する所から生ずる自然の滑稽であるが、是等は生活の倦怠にあいて種々の趣向を案出して滑稽を感じようとするものであつて、そこに病的な頽廢期の藝術を見る事が出來る。鯉丈は三味線彈きと櫛や小間物の細工人とを兼ねて職業として居つたが、一九や三

馬にならつて滑稽本を作つたのである。しかしその作品性質が、一九や三馬と異なる事は前に述べた如くである。天保十二年に歿して居る。金鵞の七偏人は鯉丈の趣向にならつて作つたのである。彼は明治初年にまでわたつて筆を執つて居つた。

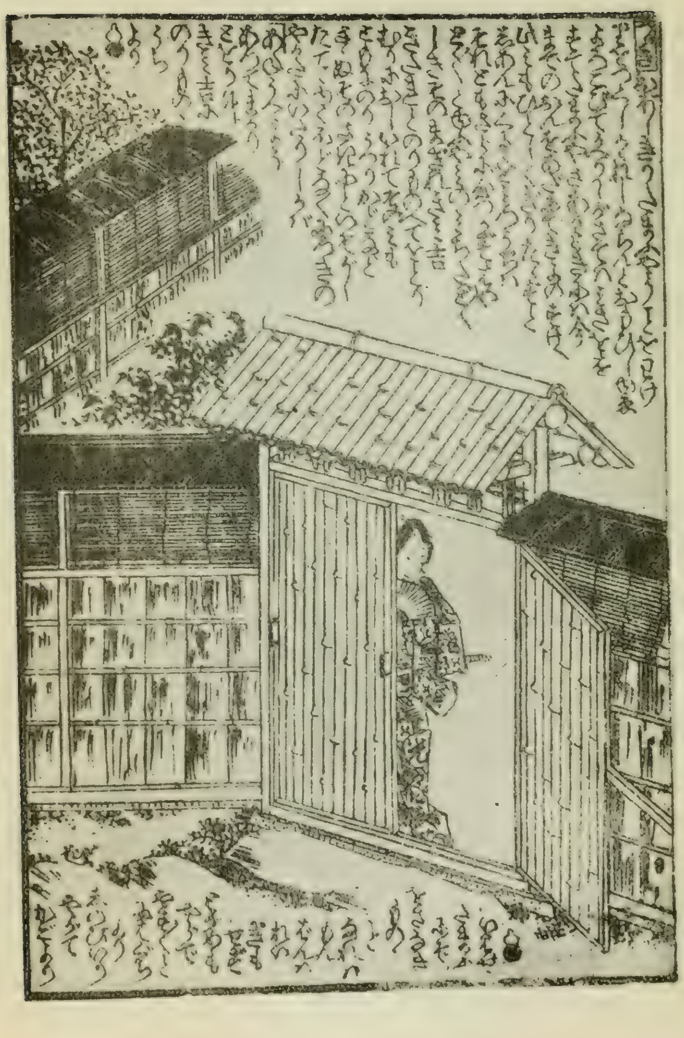
更に後期の小説で注意すべきは柳亭種彦の合卷と、爲永春水を中心とする人情本とである。

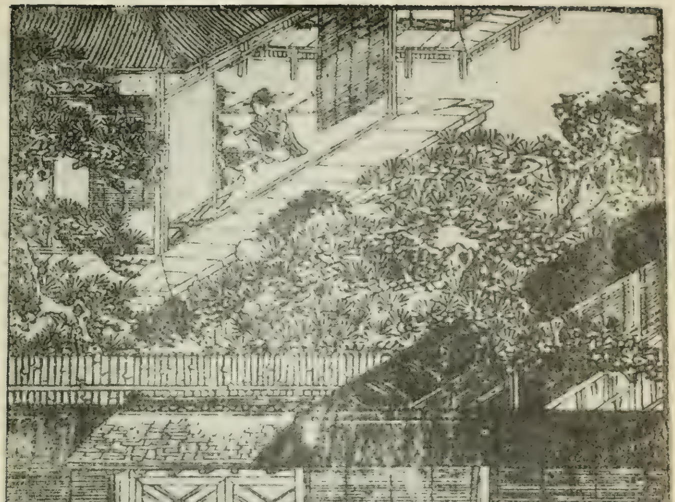
種彦は天明三年に幕府旗本の家に生れて本名は高田彦四郎知久といひ、祿も二百俵を領した。著作を始めたのは、文化四年二十五歳の時に既に著作がある(列傳體小說史)といふから、その時代からであつたらう。讀本にも二三の作はあるが、主として合卷作者として立ち、天保五年には邯鄲諸國物語の初篇を出だして更に稿を續け、また彼の作として最も名ある偐紫田舍源氏は畫工國貞の畫で文政十二年に初篇桐壺を出だし、それから引續いて天保十三年に三十八篇藤袴・まきばしらにまで及んだ。此の年水野越前守の改革があつて種々風俗の取締も嚴重になつたが、種彦も田舍源氏のために呼出しを受け、田舍源氏は絶板になつた。これがため種彦は意氣阻喪し、また病重つて終に天保十三年七月十八日六十歳で歿した。彼には考

證的隨筆として還魂紙料二册（文政九年刊）。用捨箱（三册天保十二年刊）の如きがある。

一體合卷は形の上では黄表紙の性質をうけ、內容の上では讀本から傳へてやゝ通俗にした繪入小說である。黄表紙は五枚を一卷とするのを普通とするが、文化三年に式亭三馬が雷太郎强惡物語といふのを綴つて普通の黄表紙十卷となるべきを五卷づつ合册にして二册として出版した。これから此の如き綴ぢ方が流行して、之を合卷と稱し、內容も大きくなり讀本式になつたのである。しかし繪畫は黄表紙ほどではないが合卷に於てなほ重要な要素である。更に正本製といふのは讀式の脚本であり、場面の立て方も劇的であり、舞臺上の說明などもある、卽ち當時の演劇の流行の機運をうけて、小說が演劇化された所に興味が存するのである。

而して彼には短篇の合卷もあるが、その最も世に知られて居るのは長篇の合卷であつて修紫田舍源氏は當時の士女の愛讀措かなかつたものである。源氏物語の飜案であつて、時代を平安時代から室町時代に移し、源氏と弘徽殿の女御の生れた皇子との關係を、義政の子の義視と義尙との關係に改めて、源氏の情生活を義理化し、全體をお家騷動式にしてある。それだけ源氏物語の生々した感情は失はれて居る。歌も俳句に改めてある。





人情本

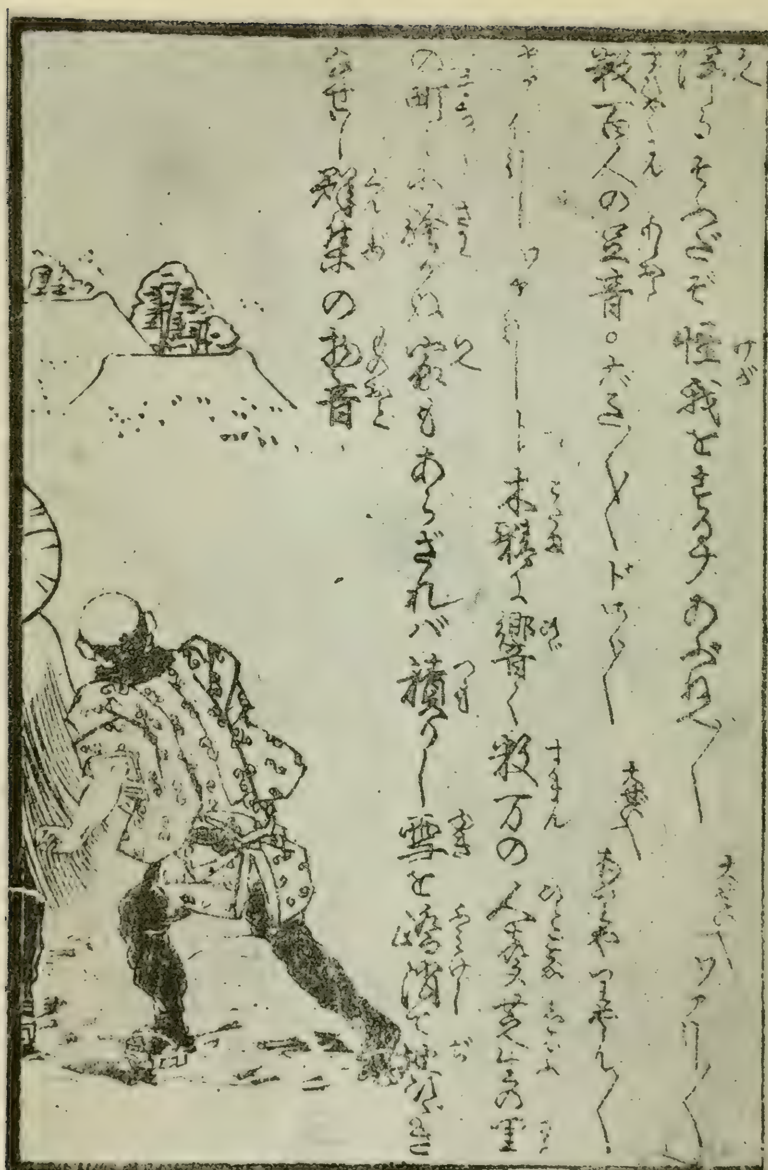
次に人情本は內容から言へば洒落本の洒落や滑稽味を除いて、人情を表さうとしたものであり、表面は敎訓を標榜して居るものもあるが、すべて淫蕩な情生活を描いて居る。この人情本の作者の中で爲永春水は代表的な作家である。

爲永春水

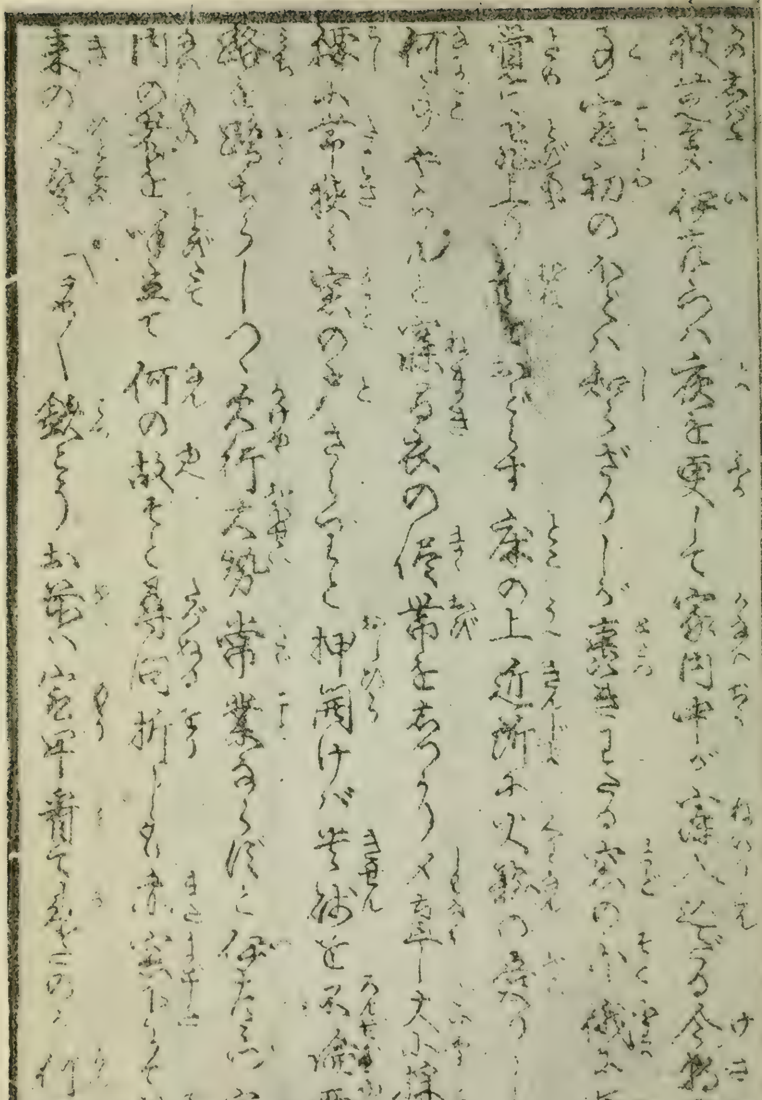
春水は越前屋長次郎といひ、書賈を營んで居つたが、その間に草雙紙などを作りはじめた。三馬の門人となつて三鷺と名乘り、また振鷺亭二世とも言つたが未だ名を成すに至らなかつた。然るに天保三年に春色梅暦を著して時好に投じ、爾來金龍山人狂訓亭爲永春水と號して人情本を作つた。同四年には春色辰巳園を出だし、引續いて同じ性質の作を發表したが、彼の作には代作もあるらしく、いろは文庫の如きも二世爲永春水の作と言はれて居る。天保十三年の改革に春水も手鎖の刑に處せられて間もなく歿した。五十四歲であつた。梅暦等は丹次郎といふ美男子に多くの女性をからませ戀の葛藤の後一人は正妻となり、他は妾となるといふ如くして、結末を告げるのであるが、その間に淫蕩的な氣分をそゝる點に於て風俗上の害は多い。人情本が當時禁せられたのは或は當然であつたらうと思はれる。人情本の作者としては春水の前に曲山人や鼻山人もあり、後に松亭金水をはじめ多くあるが、特に注意する程の作者もない。

第十六回

雪の翌朝は格別に清閑物寂しき中に極月は春も近づき
あるひハ武家の屋敷の町方より風情も遠からぬ己が割合お役ぶまり
の窓の下表のくやの住居を定めし人の騒ぐ声にて ーヤアイ
遣立ちに行るべく早く来ねへかアイ引ー ハやく来や此方へ
杉弁まで方の彼の足が生るたかり起付て寝る日か不断が
やいく此の父行せれありつたく待てヨ引ー此身が前に来て
のお先へ来る根をするねへやうナ ヘヘあいやくまで道路の方へ

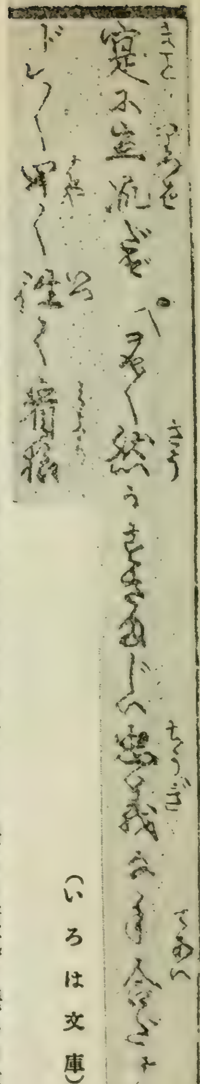

数百人の足音
群集の足音





彼茶屋ハ伊左衛門夜を更して客門中が寝入込ミる今朝の
ら寝初のわるく物うぎりしが裏の書言る窓の外に機の音
覚に目覚上りて詠めけるに家の上近所に吹鏡の音なりしに
何ぞやらんと寝ぬる衣の帯をあらうて[illegible]大小屋
樋に常陸の宮のきらふるを押開けば若衆を不[illegible]
路を踏まうしつて行く大勢常業するにはたらいて家
門の表上げて何の故もなく[illegible]折しも雪下りて往
来の人[illegible]一ツやく鐵をり[illegible]ハ出[illegible]帯て[illegible]行の

徳ざる賓客が分解なき〽コヽ金さんの早く行て当る實ハ
威勢が能ぜ何様なるやしらぬ今頼業まるの屋敷へ
這入る所ぞ〽武藤ら旅が頼業まるの這入るのぞ〽夫や必竟之
竺も知るまいのかアノソレ徳公家の浪人元がナ言るの師直の
屋敷へ夜討に行て敵を討て今頃圓覚寺ヱ引取て居る青人
引上るのごとき時分も御ざる所らぬアノ今来しく未だ仕遣
細川さんで出会て聞くのが実に仕て見る鏡の先へ着て居
実践て四十人まうり行列で提燈を用ぬ高まかる押て行ん



（いろは文庫）

以上の如く江戸時代の小説は文化文政を中心として幾多の様式と幾多の作家とを出だしたが、德川時代の末期にはすべて歿して僅かに假名垣魯文等によつて明治初期に結びつけられるのである。

四、脚本

後期に於ては淨瑠璃は既に衰へ、歌舞伎が全盛を極めて居るのであるが、作者としては鶴屋南北が中心となつて居る。

鶴屋南北

鶴屋南北は勝俵藏といつたが、後南北を繼いで立作者となつた。傳奇作書によれば「肚裏に一字の文學なけれど、狂言に一流あつて、入組みたる出し物なれど、筋からみ合ひて新しく、これを生世話と稱へて其の頃に叶ふ」とある。其の上松本幸四郎・坂東三津五郎・岩井半四郎等の俳優と呼吸を合せて人氣を得たのである。文

政十二年七十五歳で歿した。東海道四谷怪談・お染久松色讀販・隅田川花御所染の如き傑作とせられるものであるが、殊に東海道四谷怪談は彼の特色をよく現して居る。東海道四谷怪談は南北が文政八年七月中村座で三代目尾上菊五郎のために二番狂言として新作したのであつて、（一番狂言と二番狂言とを分けて一番目には時代物を出だし、二番目には世話物を出だすのである）お岩を中心とした怪談を扱つて居る。この怪談は風雲集に見える青々園氏の說によれば三つの說話を根幹として居る。一はお岩の事件であつて、寬文年中、御先手組頭諏訪左衛門の組屋敷であつた四谷左門町で、其の組下の同心田宮又左衛門の娘お岩といふ者が、嫉妬の爲め死して、その怨靈が良人に祟をなしたといふ傳說である。一は中間小平次の事件であつて、菊五郎の養父松助の下男小幡小平次といふものが陰氣の性質で朋輩から幽靈と綽名され、後旅役者となつて故鄕の奥州へ歸つたが、其の妻が密夫を語らひ小平次を途中で殺したといふ事件である。一は直助權兵衛の事件であつて、赤穗浪人小山田庄左衛門が後年町醫者となつて深川に住居したが、其の下男權兵衛が慾に迷つて庄左衛門を殺し、後捕はれて磔に行はれた事件である。是等を結びつけて脚色したのであらう。醜貌なお岩を妻にした民谷伊右衛門が、お岩を嫌

つて虐待し死に至らしめる所から、幽靈となつて伊右衞門にたゝる事を骨子として居るが、凄慘な場面が多く、怪談を扱つた劇として代表的なものであると同時に、また南北の作をも代表するものである。

南北の後、暫く優れた作者を出ださなかつたが、幕末から明治にかけて從來の歌舞伎劇を集成したとも言ふべき河竹默阿彌を出だしたのである。默阿彌は明治二十六年に七十八歳で歿して居り、明治初期の劇壇をも代表して居るのであるが、また近世末期の劇壇を飾つても居るのである。

默阿彌は通稱は吉村新七、初め二世河竹新七といつたが後默阿彌と改めた。江戶日本橋の質屋吉村勘兵衞の子で文化十三年に生れて居るが、矢張少年時代から芝居を好んで、十七歳の時ある貸本屋の小僧となり、十九歳で五世鶴屋南北の弟子となつて見習作者となつたのである。天保十四年二世河竹新七を襲名した。三十歳の時河原崎座の立作者となつたが、彼が自ら一部の脚本を書く樣になつたのは嘉永四年三十六歳の頃からである。彼の書いた脚本は極めて多いのであつて、嘉永・安政の時代には小團次と結んで任俠のある盜賊を多く描いた。彼の傑作と言はれる文久二年に書いた村井長庵巧破傘の如きは、惡に徹した人物であつて任俠の所

は少しも見えないが、なほ最後には惡を悔悟して居る。三人吉三・鼠小僧・髮結新三・十六夜清心の如き、何れも任俠な白浪を中心として居る。そこに惡の華は咲きにほふが最後に善によつて統一せられるのである。默阿彌に就いては明治時代に尚ほ述べることゝする。

第五篇　明治時代

序說

明治時代の文學はそれ以前の文學と異なつて、西洋文學の影響を受けて內容的に深くなつて來た。この意味から之を二期に分つて觀察すると、前期は明治初年から明治十九年坪內逍遙氏の小說神髓の出る頃までであつて之を歐化主義の時代といふことも出來る。この時代は新しき西洋思想の輸入によつて、歐化主義の極端に現れた時代で、英國風の實利的傾向とキリスト的博愛の精神と自由民權の思想によつて過去の日本を破壞してしまはうとした。而して一面には詩歌・小說・劇の各方面に飜譯が現れるとともに政治小說が行はれて靑年の理想を作品として表現し

前期

た。しかし未だ外面的粗朴であつて個性的な纖細なる感情を把へる事は不可能である。而してたゞ批判的な見地もなくして西洋思想を讃美したのである。もとよりこの風潮の間にも舊文學の傳統の流れは假名垣魯文の小說や河竹默阿彌の脚本にも見られ宗匠風の俳句や堂上風の和歌の流れにも殘つて居るのであるが、一般の傾向としては西洋讃美となり過去の美しき價値あるものをも亡しつくさうとしたのである。而して中期は明治二十年頃より明治三十四五年迄の時期の文學であり、浪曼主義の時代ともいへる。この期の文學は前期の皮相なる見地から個性的意識に目覺め、西洋思想と固有思想との融合の下に新しき文學的活動をはじめたのである。小說に於ても寫實殊に心理描寫を唱道して坪內逍遙氏や二葉亭四迷が出で、更に尾崎紅葉を中心とする硯友社と幸田露伴氏とが對立し、更に泉鏡花・川上眉山・廣津柳浪・樋口一葉諸氏によつて觀念小說・深刻小說など作られたが眞の現實に立脚しない所に浪曼的傾向が存する。これは詩歌の方面に於ける文學界一派の詩や島崎藤村氏や土井晚翠氏の抒情詩に於ても見られ、又落合直文より明星派の歌の傾向に於ても見られる。この時代に起つた新派劇や史劇の如きも皮相なる寫實の上に起ち若しくは理想主義・浪曼主義の上に立てられたものである。斯

の如くこの期の文學の主潮は浪曼主義的傾向であつたのである。

而して後期は明治三十五六年頃から明治の末年に至る自然主義の時代である。此の期の文學は眞の現實の上に立脚して物の眞相を捉へんとした。是にはフランスのモウパッサン・ゾラ等の影響が著しいが、小説に於ける國木田獨歩・島崎藤村氏・田山花袋氏等の自然主義運動は明治文學のみならず日本文學の一大革新運動と言ひ得る。かくて美を中心とした文學が眞の上に立脚するに至つたのである。是は長詩の上に於ける象徴主義、劇の方面に於ける社會劇・思想劇などと相呼應する。しかし自然主義の文學は餘りに現實の醜をのみ求めて人生そのものの全部を眺める態度にかけて居たために、そこに不滿を感じてやがて衰へてしまつたが、この運動の起つた事は極めて注意すべき現象である。

明治時代の後に來るのは大正時代の文學であつて自然主義の上に立てられた人道主義・新理想主義的傾向又は新現實主義的傾向の文學であつて、現實の醜を認めた上でその上に理想を建設せんとする。或は現實をば人性の上から一の解釋を加へようとする。卽ち人性の基礎の上に立つて居る所に明治時代の第二期の浪曼主義と異なる所がある。これは小説に於ける武者小路實篤氏や菊池寛氏の作品、長詩

に於ける民衆詩的傾向や短詩に於ける新寫實的傾向などに於ても見ることが出來る。而してこの機運から更に新たなる開展の道をたどらうとするのが現在の狀態である樣に思はれる。こゝでは明治時代の文學を三期に分つてそれぐ主な作品作家を解說して置く。

第一章　前　期

一、思想概觀

明治の第一期は外來の思想が輸入され、それらの思想に國民は心醉したのであるが、その主な思想を代表する著書を擧げて解說を加へる。第一はイギリスの功利主義的思想であり、第二はルーソーの民約論に現れた自由思想であり、第三はキリスト敎的思想であり、第四はドイツの國家主義的思想である。第一の功利主義的思想は福澤諭吉を中心として居るが、氏はどこまでも功利主義的立場に立脚して居り、慶應義塾を開いて敎育を鼓吹するとともに、新しき學說を多くの平易な著書によつて世に傳へたのである。彼の著書は極めて多く、福澤全集五册を成し

福澤諭吉

學問のすゝめ

て居るが、當時に於て最も行はれ、影響を與へたものは、學問のすゝめ・西洋事情・世界國盡・窮理圖解等である。學問のすゝめは明治五年から九年に至る間に出來、十七篇から成つて居る。此の書の中に彼は學問そのものの立場を明かにして居るのである。人間はすべて平等であるべきであるが、賢い者と愚かなる者の生ずるのは學問すると否とによつて分れる、故に我々は學問をしなければならない。而も學問は「唯むつかしき字を知り、解し難き古文を讀み、和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學を云ふにあらず」として「專ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり」と言つて居る。この實學は彼の立場の根本であり、英國風の功利說の思想を繼承した事を示して居る。彼は深遠なる學理をも啓蒙的に說き、民衆化を勸めたのである。この立場から彼は既に漢字節減を唱へ、明治六年の「文字の敎」の中に

文字の敎

> 今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし。其の用意とは文章を書くにむつかしき漢字をばなるべく用ひざるやう心掛くる事なり。

と唱へて居るのである。而して彼の實學とは人生そのものをよりよくする事に努めるのであつて、學問のための學問は第二義的のものである。而も彼の人生をよ

りよくするには、精神上の豐かさよりも物質上の裕かさによつて得られるとした。かくて從來の物質を輕んずる態度より解放せしめて、生活そのものの充實を計つたのである。而して各々生活を充實せしめる事によつて、獨立自存の精神を皷吹した。この功利主義的立場を高唱するとともに、福澤翁は西洋に關する知識を一般に傳へたのであつて、西洋事情は西洋の政治その他の萬般の知識を記述したものであり、世界國盡は「世界は廣し萬國は」の如き七五調を以て、世界の國々の歷史地理を語つたものであつて、是によつて西洋の事情が一般國民の間に廣く注入されたのである。福澤翁の著書は極めて平易であるが、時代を啓蒙するには與つて力あつた事は言ふまでもない。がもとより高遠なる精神の世界には觸れ得なかつたのである。

第二のルーソーの自由思想は中江篤介氏の民約譯解によつて傳へられた。民約譯解は漢文で譯して之に解を施してある。始めに本卷旨趣として人の原始的狀態は物の取捨を己のみに依つて、人の處分を仰がなかつたのであつて、之を自由の權といつたが、今はすべてが束縛されて傭人よりも甚しい。しかしその自由の權は天の我に與へる所である。而もそれを壓迫する現社會は天理に本づかないとし、

次に家族、强者之權、奴隸、終不レ可レ不三以レ約爲二國本一、民約、君、人世、土地等の各方面からこの所說を說いて居るのである。この立場をとつたものに馬場辰猪の天賦人權論があり、人の權利は天の與へたものであるといふルーソーなどと同じ流である。この自由思想はこの時代の政治の上に非常な影響を與へた。

基督的精神

第三に新島襄等の基督的精神は注意すべき思想的影響を與へて居る。日本に基督敎の渡來したのは、歷史的に見て戰國時代からであるが、思想的にこれが受け容れられ、眞面目なる人生探求の結果として、信仰せらるるに至つたのは明治初年からであるといふ事が出來る。明治初年熊本藩の學校に於て米國の大尉ジェーンスをして洋學を敎へしめたが、この感化によつて熊本に基督敎を信ずる者が多く出でた。而して新島襄は明治八年に同志社を開いた。襄は岩倉大使の通辯として西洋を漫遊し、歸來佛敎の盛んな京都に於て之を開いて燃ゆるが如き信念を以て基督敎を鼓吹し、六合雜誌を機關として熱烈に論議した。

國家主義

第四はドイツ學派の影響を受けた國家主義であつて、加藤弘之の如きはその代表者である。加藤弘之は最初は天賦人權說を唱へて自由平等の思想をとつたのであるが、進化論の感化によりその說を改めて、人は平等でないと唱へ、人權新說を

著してこの思想を主張した。此の書に於てルーソーを古來未曾有の妄想論者であるとし、その立場に反對して「進化主義ヲ以テ天賦人權主義ヲ駁撃セント欲スルナリ」とし、國家の歷史的發達を說いて、强き者は發達すると說いて居るのである。この進化論的國家主義に對しては自由思想のみならず、基督的博愛の思想も反對の立場に立つのであつて、その論爭は第二期にまで亘つて居る。

二、詩歌と戯曲

前期に於ける詩歌には未だ見るべきものが少い。和歌は香川景樹末派の堂上風の歌が勢力を占め、御歌所には高崎正風を中心として海上胤平・松波遊山など歌人は少くなかつたが、それは從來の月を弄び花に吟ずる態度を以て進んだのであり、生々とした感情からは遠いものであつた。俳句を見ても蕪村・一茶の後鮮明に個性を表現する俳人なく、所謂宗匠風の傾向に流れたのであつて、それらの中其角堂永機・春秋庵幹雄の如き、初期の俳壇の代表者たるべきものも因襲的な態度を持するに過ぎなかつた、がこの期の詩歌に於て新しき形式を創始したのは長詩であつた。

長詩は明治十五年に外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎三氏によつて新體詩抄が作られて新しい形式が創始されたのである。それにはテニソン・ロングフェロー・キングスレーなどの詩の譯が主であり、グレーの挽歌やシエークスピアのヘンリー四世やハムレットの一節なども譯されてある。また自作の詩もある。形式は七五調であるが、未だ言葉の洗練されない詩味の乏しいものである。例へばハムレットの一節でも

ながらふべきか但し又　ながらふべきにあらざるか
こゝが思案のしどころぞ　運命いかにつたなきも
これに堪ふるが丈夫か　又さはあらで海よりも
深き遺恨に手向うて　之を晴らすがもののふか

の如く言葉の洗練を缺いて居る。一體に抒情詩には理智がかつて感情の純粹さが見られないのであるが、叙景詩にはこの點が尠いために見るに足るものがある。グレーの挽歌の譯詩の如き秀作の一とすべきであらう。

山々かすみいりあひの　鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸りゆく　耕す人もうちつかれ
やうやく去りて我ひとり　たそがれ時に殘りけり

河竹默阿彌の脚本

要するに未だ生硬を免れないが、斯の如き新しき詩形が行はれるやうになつた所に注意すべきものがある。

次に戯曲を見ると、明治十六年の坪内逍遙氏の該撒奇談は沙翁のシーザーを淨瑠璃風に飜譯したものであるが、此の期の戯曲に於ける中心は河竹默阿彌の脚本によつて代表されるのである。默阿彌は近世末期の劇壇に活躍した事は前述した所であるが、明治になつても幾多の作を公にし、明治の新しい空氣を多少示さうとしたのである。しかし中心となる所は勸善懲惡主義であり、たゞそれに幾多の新しい配景を與へたに過ぎなかつた。たとへば明治十三年の作である木間星箱根鹿笛といふ作を見ると、四幕物であつて、岩淵九郎兵衞が遊女に迷つて、妻のおさよを殺すのであるが、そのために妻の亡靈に苦められるといふ勸懲主義が中心となつて居る。たゞ九郎兵衞は士であり、明治の始めに商人となつて失敗したといふ明治初期の空氣を配景として居り、また郵便や男女同權といふやうな言葉を珍しげに用ゐて居るのである。又明治十四年の島衞月白浪を見ると、四幕物であるが、白浪物である。辨天お照・望月輝・松島千太・明石の島藏は何れも盜賊であるが、何れも最後には善に歸つて居る。而して明治初年の空氣はこれにも見られ、一途錯

なければ妻にあらず。表面に公裁を仰がねば證據は立たざるぞ」といふやうな言葉も見られるのである。要するに假名垣魯文と同じく、明治の空氣の上に立つて而も傳統に生きた作家と見られるであらう。而して前期の劇はこの傳統的藝術である歌舞伎劇にのみよつて居たのである。

三、小　說

此の期に於ける小說は此の時代の新しい思潮を扱つた政治小說が中心であるが、一方に假名垣魯文を代表とする傳統的な作品と、また飜譯小說と言ふべきものとがある。

傳統的作家の方から眺めると假名垣魯文は江戶時代から明治にわたつて居る作家である。文政十二年に江戶に生れ東條文京（魯介）の門に入つたために魯文と號したのである。弘化元年に政談青砥碑を編んでから種々の作があり、滑稽富士詣十卷に於て滑稽本作者としての特質を發揮して居る。明治になつてからは新しき時代を舊式に眺めて居る作品を出して居り、西洋膝栗毛十五篇は彼を代表するものである。この作は福澤諭吉の西洋事情などより題材を採り、一九の膝栗毛と同じ

趣向のもとに彌次郎兵衛・北八といふ二人の滑稽人物を出だし、横濱の大腹屋といふ豪商に雇はれ、上海より英國に至る間に滑稽失敗を到る所で演ずるのである。新しい明治の環境の中にどこまでも傳統的な古い氣分を押通して居る所に特徴がある。この外に魯文は福澤翁の窮理圖解を脱化したる胡瓜圖解を出だし、福澤翁の説いた道理を茶化して居り、又安愚樂鍋を著して明治の人民が牛鍋をかこんで論議するといふ趣向を以て記して居る。いづれも題材に新しき事件を採擇して江戸人としての觀察を行つたのである。

政治小説

が此の時代の小説の中心は政治小説である。政治小説は當代に於ける政治的野心に燃えた者が、己が理想を小説に託して表現したものであつて、文學としては洗練されて居ないが、此の時代の思潮をよく表して居る。それらの中で經國美談・佳人の奇遇・雪中梅・花間鶯等は代表とすべきものである。

經國美談

經國美談は矢野龍溪の著であつて、齊武名士經國美談とあり、明治十七年一月十三日に成稿したのであつて、明治十七年二月の藤田鳴鶴の序や森田思軒の跋もある。ギリシャのテーベ（齊武）の勃興の歴史的事件を主として、之に多少の脚色を施した小説である。その組織を見ると、夕日が西に傾く頃ギリシャのテーベのある少年子

弟を教へる學校に於て、老教師がアテヌのゴドリウス（格德）・スラスブリユス（士亘武）の二名士の肖像を示して、その功績を語つたのに對して、その後年テーベのために義をつくしたペロピダス（巴比陀）・イパミノンダス（威波能）・メルロー（璃留）等を始めその一群の童子等が義に勇む心からスラスブリユスを讃美した所に筆を起し、是等の少年が青年となつた時奸黨が起つてテーベの危き時、或はアテネに行きて援を請ひ百折たゆまず、ある宴會の時女装して奸黨を殺し、テーベを平和に導いた所までを前篇とし、更に才略拔群人品優美なるペロピダスや寛弘深沈なるイパミノンダス等の力により、テーベがギリシヤの盟主となるに至る迄の事柄を記述してある。そこに武斷的專斷的なるスパルタに對し、民主的なるアテネ、テーベの態度を對立せしめて武斷を退け、民主的傾向を謳歌してあるのは、明治初年の自由の精神を最も強く表したものである。

而して同じく材を西洋諸國に主として取つて居るけれども、日本人の經驗として描いたものが佳人の奇遇である。此の書は明治十八年に成り東海散士の作である。會津亡命の士東海散士が世界を周遊して亡國の士に逢ひ慷慨の情を談ずるのであつて、西班牙の幽蘭女史と英國のために虐げられた愛蘭の熱血の女丈夫紅蓮は東

海散士とともに最も主要なる人物である。其の他明朝の遺臣范卿なども點出せられる。而して到る所に亡國の悲哀をとむらひ、慷慨の情をそゝぐ。會話の間に叙景を挿み、又交々詩を吟じて悲をやる如き點も多く見える。文は漢文直譯流であつて華麗であり、且つ力強くはあるが、しかし描寫は粗茫である。全篇十卷から成つて極めて大部なものではあるが、たゞ亡國を嘆く感情のみ見えて人物に個性味の缺けてゐる事は遺憾であり、また全體を統一する構想がないために東海散士の歐米漫遊記といふやうなものになつたと思はれる。

雪中梅と花間鶯

雪中梅と花間鶯とは末廣鐵腸の作であり、前者は明治十九年に刊行され、後者は明治二十一年に刊行されて居る。明治十四年の詔勅によつて今より十年後、期して國會を開かうとした後數年、往年の政治熱のやゝ衰へた時の事件としてある。國野基といふ青年政治家が苦節を通して政治的に成功し、穩健なる進取派である自由黨の首領として國會議員に當選するまでの經緯を描いてある。保守黨である川岸や過激黨の武田などを點出してあるが、雪中梅ではお春といふ女性と國野とが結婚するに至る事件を結びつけてやゝ花やかである。花間鶯は國野の政治的活躍を主としたもので、作品としては情趣に乏しい。

而して此の時代に於ては西洋思想に心醉した結果、飜譯文學も行はれたのであるが、それらの中小說に於ては明治十二年に織田純一郎の譯した花柳春話がほゞ最初であると思はれる。之はロードリツトンのアーネストマルトラバースの譯で譯文は極めて生硬な漢文直譯體であり、譯語も今日から見て洗練されない處がある。爾來飜譯小說は多く作られ、藤田鳴鶴の繫思談、坪内逍遙氏の慨世士傳の如きはリツトンの作品の飜譯であり、關直彥の春鶯囀はヂスレリーの作品の飜譯である。是等は材を歷史にとつた作品であり、明治の政治思想に呼應するものであるが、井上勤の譯した海底旅行や月世界旅行は科學的な題材を扱つた作品であり、そこに一面には政治的興味とともに新しき科學に對する興味をも見る事が出來る。しかし文體の如きは何れも生硬を免れないものであつたが、二十年頃になるに從つて新しい文體もとられるやうになつて來た。それらの中で注意すべきは末松謙澄の谷間の姬百合であらうと思ふ。この作は明治二十一年から出版されて居るので、年代から言へば第二期に屬するものであるだけに飜譯の態度も花柳春話以來の漢文直譯體ではなくして流麗なる文を用ゐ、會話は言文一致で表現してある。會話の飜譯は未だ精練を誇る事は出來ないが、地の文殊に叙景には淸新の趣を傳へて

居る。原作は乘澄の序によれば、ベルサ、クレーといふ女性のドラ、ツルンといふ作品であつて、英國の有洲伯爵家といふ家庭の事件を扱つて居る。

第二章　中期

一、思潮概觀

國家思想と基督思想

第一期は外來思想を謳歌し、これに心醉した結果、固有の國民思想生活を破壞しようとしたに反して、この期に於ては國民的意識が目覺めて、外來思想と調和しようとするに至つたのである。この國粹的機運が浪曼主義的時代には一貫して動いて居るのを認められる。即ち二十年代に於ける啓蒙的國粹主義と、三十年代の初期に於ける思索的日本主義とは是れである。而して二十年代に於けるこの國粹主義は種々の運動となつて現れたのであるが、最も注意すべき現象は、第一は國家思想と基督思想との交渉であり、第二は國文學研究の復活といふ點である。第一の國家思想と基督思想との交渉は前期に於て既に見られた所であるが、此の期に更に甚しくなつた。明治二十一年に三宅雪嶺氏などによつて設立された政教社は

高山樗牛の日本主義

「日本人」といふ雜誌を發刊して國家主義を鼓吹し、外來思想の幾多の缺陷を指摘し、歐化主義を有する民友社に對峙して居た。而して明治二十三年には敎育勅語を賜うて國民道德のよる所を示され、これによつて國民思想は確立したのである。この立場から井上哲次郎氏は明治二十五年に「敎育と宗敎との衝突」といふ書を著してその國家主義的立場を闡明し、一方矯激に亘つた基督敎を排擊した。このために橫井時雄・植村正久等は大いに反對して論戰したのであるが、國家主義と相反する如き意味を有する基督思想は次第に衰へつゝあつたのである。
この國家主義とともに一方に第一期の西洋心醉から醒めて國文學の勃興となり、落合直文等の日本文學全書の刊行などに依つて過去の文學が一般に攬められ、また紅葉・露伴等の作家によつて西鶴等の近世文學も研究せらるるに至つた。
而して三十年代に於ては啓蒙的の國粹主義から、次第に思索的に進んでいつた。高山樗牛等によつて唱へられた日本主義は之を代表するものである。樗牛は二十九年に大學を出でてからその華やかな才筆を以て論壇に活躍したのであるが、その第一に唱へた日本主義は非常なる影響を與へた。彼の言によれば、「國民的特性に基づける自由獨立の精神に據りて建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする

所の道德的原理は卽ち是れなり」とあるが、更に國祖を崇拜し、生々たる光明を旨とし精神の圓滿と淸淨潔白を期し、一面には武を重んじ、更に國民的團結と社會的生活を重んじ、最後に世界の平和と人類的情誼を期するにあつたのである。卽ち日本の國民性の特性を察してそれに基づいて道德を定めようとするのであるが、その本質的な所は從來の考へ方と餘り異なるものではない。かくてこの日本主義に對する非難も出でたが、とにかく當時の思想界に於ける注意すべき現象であつたのである。樗牛等の日本主義はその根柢に國民道德を基礎にして居るために當然の歸決として倫理研究が盛んに唱へられて、樗牛もこの方面に入つて倫理的立場から時代の墮落を慨したのであるが、逍遙氏の如きも三十一年に早稻田文學を廢刊する時「社會の事日に非にして頽波滔々たり」と述べて暫く文壇を退いて社會敎育の方面に精力を盡さうと言つて居るのである。然しながら此の如き倫理研究が彼等をして十分なる思想的確立を得しめなかつた事はやがて彼等が何れも倫理的探求から離れていつた事でも明かである。綱島梁川が倫理から宗敎研究に向つたのもそれであるが、樗牛等によつて唱へられたニイチェ主義はことに著しきものである。卽ち國家主義から一轉して個人の心靈とか天才の精神を重んず

ろ立場をとるに至つた結果、權力意志を主張して勇敢に戰つたニイチエにその具體的な姿を見出だしたのである。

樗牛が國家主義から個人主義に變化した事はこの時代の注意すべきことである。浪曼主義が漸く頽廢的になつてそこに世紀末的な思潮を示して居るのであつて、更に第三期に於ける實證主義的思潮の起る事を暗示するものと思はれる。而して樗牛自身から言へば、ニイチエから更に同じく強い自我を貫いた日蓮に移つてそこに彼の最後の光を見出だしたのである。

二、長詩と短詩

長詩

此の期に於ける文學はすべての方面に勃興したのであるが、詩歌に於ても同樣である。先づ長詩を見ると、新體詩抄などが出でて長詩なるものが創始せられてから二十年代の終には藤村。晩翠兩氏によつて、長詩がほゞ一の完成にまで導かれたのであるが、その間にも種々變遷はある。第一は落合直文。山田美妙。宮崎湖處子等によつて試みられた表現の上の改革である。

落合直文

落合直文は明治二十一年に井上哲次郎氏の漢詩を譯した孝女白菊の歌を發表したが、流石に詞句は洗練せられて流

山田美妙

麗の調は愛誦に値した。また山田美妙は明治二十年に尾崎紅葉・丸岡九華等と新體詩選を著し、更にその後も國民の友やいらつめ等に詩作を發表した。美妙はその小說に於けると同樣に淸新な格調を有し、つぼすみれの如きには民謠調を加へて可憐の情緒を見得るが、輕妙といふだけで深みは見られない。

宮崎湖處子

宮崎湖處子も明治二十三年の歸省の如きによつてその詩才を認められて居る。是等に於てはその格調の上に整へられて來た事は明かであるが、その思想・感情の上には未だ新しいものはなかつたのである。

中西梅花

中西梅花・森鷗外・北村透谷等に於て感情の上に於て新しいものを產出さうとする點が見られる。中西梅花には明治二十四年に新體梅花詩集が作られて居る。その感情には個性的な力强さが見られるが、表現には未だ完成しない點が多い。

森鷗外

而して此の時代に注意すべきは森鷗外のＳＳＳ社の譯詩「於母影」である。形式上にも種々の試みをなして居るのみならず、感情・內容に於ても從來の詩に見られないものを傳へて居るのである。例へば形式上からいふとゲエテを譯した「ミニヨン」の歌は十十調であり　又バイロンを譯した「マンフレツド」も

　ともし火に油をば　いまひとたびそへてむ

されどわがいぬるまで　たもたむとも思はず

の如く十十調である。更にレナウを譯した「あしの曲」は

日はかたぶきけり　あなたの岸に

ひねもすつかれし　ひるもねむりぬ

の如く八七調であつて、美妙のうたつた八六調よりも複雜なる感情を現す事が出來る。この形式上の種々の試みの外に、感情に於ても從來の常識的若しくは智的の內容と異なつて近代的な幽鬱をうたつて居る所に注意せらるべきものがあるのである。

北村透谷

この幽鬱な感情を以て詩の上にうたはうとしたものに北村透谷がある。彼の詩は蓬萊曲といふ劇詩と他に楚囚の詩・蝶のゆくへ・雙蝶のわかれ等の短章を有するに過ぎないのであつて、その形式表現ともに未だ洗練を經ないものであつたが、それらに於て理想と現實との葛藤と、その理想の壞されてゆく經路とを語つて居るのである。蓬萊曲は三齣八場から成る長篇劇詩であつて、柳田素雄といふ世を憤り戀人をも捨てた反抗兒が、蓬萊原にあくがれ、斷岸の上にたつて大魔王に遭遇して、その嘲に反抗して終に斷岸の上から身を躍らすといふ悲壯なる事件をうたつてあ

る。詩的燃燒の足りない憾はあるが、透谷の感情はよく表現されて居るのである。

新體詩歌集

なほ明治二十八年には外山博士・上田萬年博士等の新體詩歌集が作られ、散文詩といふべき詩が提唱された事は注意するに足りるが、未だ詩として圓熟したといふことは出來ない。

島崎藤村の若菜集

以上の樣な種々の試みが島崎藤村氏の若菜集によつて完成されたと見ることが出來る。若菜集は明治三十年に刊行され、二十九年頃の藤村氏の詩を集めてあるが、五十篇程の詩に於て青春の感情のあらゆる相を描きつくして居る樣に考へられるのである。その形式は七五調を主としてあるが、その形式としては完成したものであり、その感情は優雅と哀愁との溶けあつた、しんみりした情趣を中心としたものである。而して三十一年の一葉舟。夏草、三十四年の落梅集に至るに從つて、青春の感情から、次第に行爲の方に轉向する趣が見えた。それは若菜集の中にある「深林の逍遙」に見えるやうな冥想的な詩風、「雞」に見えるやうな勞働をうたひ生活をたゝへるといふ傾向であつた。而して「雞」の傾向を進める所彼は詩を去つて小説に進んだのである。

土井晩翠

藤村氏と並んで土井晩翠氏は漢詩から得た雄渾なる格調と冥想的な傾向を以て詩

壇に并び稱せられた。彼の詩のまとまつたのは明治三十二年に出た天地有情であるが、その中の星落秋風五丈原といふ諸葛孔明をうたつた長篇の詩を見る時、意氣に感じて主の遺孤を守りたてた彼が、病篤きに及んで經て來た辛苦の跡を思つて、感慨に沈む悲壯な心持が現れて居るのである。が細かな感情のリズムを感ずる事は出來ないと思ふ。又冥想的である「萬有と詩人」といふ篇をとつて考へて見る時何となき深みのあるやうにも思へるが、なほ詩的感情の深さを十分に感ずることは出來ない。小山鼎浦が「彼は能く理想の形相を描いて其の内容を歌はず」と言つたのは、妥當な言と思はれるのである。然しその雄渾なる格調としては洗練せられたのであつて、殊に物語詩若しくは譚詩と稱すべき長篇の詩に於てその壯美なる格調を巧みに運んで、全體の統一をほゞ得しめたのは何人の感覺に訴へても快いリズムを殘すのであつて、この時代の浪曼的な傾向とよく合致して居る。氏は明治三十四年に曉鐘を出だして居るが、氏の作風は固定して心境の開展を示すものが殆どなかつたのである。かくて明治三十九年に出た東海遊子吟も同じ詩風で而も天地有情ほどの情熱も見えないために殆ど顧みられずに終つた。

この藤村・晩翠二氏の時代に於ては他に幾多の詩人を見ることが出來る。與謝野鐵

幹氏はその一人である。明治二十九年に東西南北を著して居り、三十年に天地玄黄を出だし、更に三十四年の「むらさき」三十五年の「うもれ木」を始め多く刊行されて居る。彼の詩は彼の歌の如く雄渾の調はあるが、感情は粗雜であり、晩翠氏の冥想的な所も見られないのである。所謂ますらをの歌と自らも言つた如く男性的な意氣と力とが見られる所に特質がある。然し後に至つては短章の中に情趣のたゞよつて居るものをも見るのである。要するに彼は意氣と才とを以て詩を作つたと思はれる。

岩野泡鳴

而して更に岩野泡鳴も詩を作つて居る。生硬であり詩味に乏しいが、思索をそのまゝに詩として表現しようとする所に特色があり、また詩形の種々な試みをなして居るのである。

薄田泣菫

藤村・晩翠二氏の後を受けて詩壇を代表するに至つたのは薄田泣菫氏と蒲原有明氏とである。泣菫氏が始めて詩壇に立つたのは明治二十九年頃であつて、明治卅二年には最初の詩集である暮笛集を出だし、更に明治三十四年に「ゆく春」が出た。故に藤村氏の時代に既に詩人としての力を發揮して居るのであるが、單純な感情のために何人にも入りやすい藤村氏等の詩が重んじられた時代には彼の詩は多く注意せられるに至らなかつたのである。もとより藤村氏の如く完成せる境地には

到達して居ないのであるが、その未完成の中に新しい感情を見出だし、新しい形のもとに表現しようとした。卽ち詩形を見ても藤村氏の如く七五調を中心とせず八六調を好んで用ゐて居る。

鳥鳴く柿の實紅をさして
夕日に浴びたる上枝高く
首ふる尾をふる興に入りて
歌ふよ山雀律も優に　（山雀）

七五調の如く一般的感情にひきずられる事もなく、又泡鳴の十音詩の如く斷續的になる事もなくその感情を自由に盛り得ると思ふ。而して泣菫の感情は重々しくそれだけ複雜である。暮笛集の「尼が紅」の如きは長篇で叙事的傾向が見られるが、その間になやましき官能的な情緖がたゞよつて居る。而して「ゆく春」に至つては暮笛集に見える生硬な用語の不熟も失はれて、重くるしき中に落着を與へて居るのである。世をのろふ聲、沈鬱なる人生に對する悲嘆が強く現れて居るのである。而もその中には石彫獅子の賦の如き藝術の永遠性を認めて居る作品もある。泣菫氏のこの傾向は次の期に於て白羊宮によつて象徵詩的傾向を開拓している。

つたのである。

泣菫氏と并べられる蒲原有明氏もまた明治二十七年頃に詩を發表して居つたのであるが、その處女詩集「草わかば」を出だしたのは泣菫氏の「ゆく春」よりも遲れて明治三十五年であるが、彼が詩壇に反響を與へたのは翌三十六年に出した獨絃哀歌であり、更に三十八年に春鳥集を出して佛蘭西の象徴詩の影響をうけて象徴詩運動を起してからである。彼の詩は泣菫氏よりも更に複雜な情操の世界に入り、その表現は殊に幽玄難解である。彼は泣菫氏の八六調から更に進んで一種の詩形を創造した。

道なき低き林のながきかげに
君さまよひの歌こそなほ響かめ
歌ふは胸の火高く燃ゆるがため
迷ふは世の途倦みて行くによるか　（あだならまし）

連續してつきない情緒の戰慄が見えるやうな詩形の中に、複雜な近代的情操を盛つたのが彼の詩であつたのである。「草わかば」に於ては詩形は多くは未だ七五調であるが、獨絃哀歌はこの新詩形を試み、また「草わかば」のやうな幽遠なしかし

若々しさをもつ戀愛の境から、人生の憂鬱や寂寥の世界へ奥深く進みいつて、それを感覺的に表現しようとした點に既に象徵詩的な傾向を示して居る。

次に此の期に於ける短詩を考へるに、先づ和歌は落合直文の短歌革新から始まつて居る。直文は長詩の上に於て思想は特に新しいものはなかつたが、その表現に於て清新なものを作りあげたのである。而して歌界に於ては長詩に於けるよりも一層はつきりした新機運を導き出したが、なほその特質は清新なる表現にあつて感情や物の見方の上に特に新しいものを多く求めることは出來ないのである。もとより堂上派から見れば內容に於ても新しい所があるが、特に明治の新空氣を見出だす事は出來ない。しかし氏が多くの門下を養成して明治の短歌の革新を遂げさせた功勞は注意すべきものである。明治二十五年に淺香社を組織してから與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・鹽井雨江その他多くの歌人が輩出した。

而して和歌史の上に最も注意すべきは與謝野鐵幹氏である。鐵幹氏の東西南北は明治二十九年に出て二十年代の歌を集めて居る。彼の歌は所謂男性の歌と自らも稱する如く雄健ではあるが、感情に粗い所がある。しかし格調はよくとゝのつて快い旋律を感ずることも無いではない。且つ三十年代に入ると次第に變化して來て

纎細な感情も表現されるに至り與謝野晶子氏とともに明星派全盛時代を作り出だしてその浪曼的傾向を皷吹した。東西南北時代の

韓にしていかでか死なむやまとには父もいませり母もいませり
韓にしていかでか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまたすたれなむ
この秋も我はかへらずふるさとの川ぞひ柳ひとり散るらむ

の歌をこの期の

うしろよりきぬきせまつる春の宵そゞろや髮のみだれて落ちぬ
見かはしてふたり伏目の人わかし梅にゆづれる車と車

の歌に比すると隔世の感があるであらう。

而して鐵幹氏と並べて考ふべきは、其の妻晶子氏である。晶子氏は鐵幹氏の門下であつたが、詩才に於ては鐵幹氏よりも優れ明星派の中心たるが如き觀があつた。三十四年の亂れ髮を最初の集としてその情熱的な歌風を以て歌壇の驚異となつた。舞姫・春泥集など同一傾向を以て進んで居るのである。それらは與謝野晶子集三册として刊行されて居る。晶子氏の歌は戀愛感情を中心として居るが、彼の戀愛は強い奔放的な情緒のほとばしり出たものであつて、靜かな情趣の表現ではな

いのである。かつ彼の情緒と伴つて肉感的・感覺的な要素が多いのを感ずるので
ある。次に二三の例を擧げる。

春みじかし何に不滅の命ぞと力ある乳を手にさぐらせぬ
清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき
ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき
人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす亂れ亂れ髪

而して之に比すると尾上柴舟氏・金子薫園氏の如きには清楚な感を有するのであるが、柴舟氏の歌には理智的傾向の伴ふのを見られ、薫園氏には自然や事象の中にひたる温雅な態度を見得るのである。柴舟氏には銀鈴・靜夜、薫園氏には小詩國・凌宵花・伶人・我思等の歌集がある。

更に佐佐木信綱氏は落合直文とは系統を異にして居り、やゝ保守的傾向を有するが、浪曼的な傾向を有する歌人として擧げる事が出來ると思はれる。主觀的な歌よりも自然を眺めた歌に靜かな情趣をたゝへた歌が多い。思ひ草・新月が此の期に作られた。

以上の諸家に見られる歌の中抒情的の歌にそれ〴〵浪曼的傾向のあるのは勿論で

あるが、自然を描いた作にも主觀が濃厚であつて靜かに自然を觀照し自然の姿をうつした點が少い。

正岡子規

是等と全く反對の傾向を取つたのが正岡子規である。子規は次に述べる如く俳句に於て革新を唱へて純客觀的表現を主張したのであるが、三十年代に至つてその態度を以て歌の上に寫生を唱道した。彼は「歌人に與ふる書」の中に萬葉集を中心とすべきを說いて、當時の主流であつた明星派の浪曼的傾向に反對し、鐵幹氏の態度が是ならば自己の態度は否であり、自己の態度が可ならば鐵幹の態度は否であると說いて居る。子規は明治三十五年に歿してその唱道には未完成の點もあり、この時期には主流にはならなかつたが、後の期にこの系統が歌壇の中心となるに至つた。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

俳句
正岡子規

次に俳句を見ると、第一期に於ては天保の墮落的傾向をそのまゝに引繼いで月並俳句が行はれたが、正岡子規が出でて再び俳諧に新しき生命を與へたのである。子規は大學時代から俳諧を研究し、後に大學を半途でやめたが、「日本」によつて

種々俳論を發表するとともに新しき句を唱へた。明治二十五年に獺祭書屋俳話を出だし、明治二十六年に芭蕉雜談を出だし、二十九年に俳人蕪村を出だしたが、彼の中心とする所は蕪村への復歸であつた。蕪村は芭蕉とともに俳諧史上最も注意すべき俳人であるが、芭蕉が蕉風の開祖として多くの門下を擁して居つたに比して蕪村は餘り多く知られる事なく、明治に至つても殆ど忘れられて居たが、子規によつてその眞價を認められるに至つた。子規の蕪村への復歸は更に一歩進んで芭蕉にまで到達すべきであつたと思はれる。事實子規にしても三十年代に至つては蕪村よりも更に一歩進んで行つたやうに思はれるのであるが、子規の性格は理智的な明晣さがあつて、病床に呻吟したその境遇に拘らず彼の句には暗い影は見られず明るいほがらかな感じを見出だすのである。彼が蕪村を見出だしたのは彼の心境と最もよく合つて居つたためと思はれるのであつて、そこに復歸する事によつて、俳句を救つた事に偉大なる功績を認めて宜いと思ふ。

子規は小說界に於ける紅葉や歌に於ける落合直文の如く統率と指導の才があつたために、その門下には高濱虛子氏・河東碧梧桐氏や內藤鳴雪氏を始め夏目漱石をも出だした。虛子氏は主觀的傾向を示し、碧梧桐氏は客觀的傾向を受繼いだが、

次の期になつて碧梧桐氏により新傾向句が唱道されるに至つたのである。

雪残る頂一つ國境　子規

島々に灯をともしけり春の海

麓田の夕日に多き案山子かな

猿曳を親猿と思ふ夜もあらん

八萬の毛穴に瀧の音冷し

この日本派の俳句の外に他の流派を少しく考へて見るに、尾崎紅葉を中心とした紫吟社といふ一派があつた。紅葉の外に巖谷小波氏や石橋思案の如き硯友社の同人が主であつたが、此の派は蕪村などよりも談林派を模範とした。この紫吟社の外に秋聲會といふ流派は角田竹冷・戸川殘花等によつて作られ、また大野洒竹・佐佐醒雪・沼波瓊音氏・笹川臨風氏等によつて筑波會が作られた。

三、小説

次に中期の小説を概觀する。前期に於て政治小説が中心であつたが、明治十八年に坪内逍遙氏の小説神髓が成り、明治十八年から十九年にかけて「一讀三嘆當世書生氣質」が出版され、更に二葉亭四迷によつて浮雲が刊行されるに及び、新しき機運

が起つて來たのである。小說神髓は小說に關する考察を組織的にまとめたものであつてこれによつて小說の進み行くべき道が開かれたのであるが、その所論に基づいて作られたのが書生氣質である。東京に於ける學生生活の狀態を描いたものであつて、ある英學塾に於ける數名の學生を主として豪傑風の學生や柔弱なる學生等その性格の相違を擧げて其の生活を赤裸々に描寫して居る所に、寫實的傾向が見られる。雪中梅に見える政治家の如きでなく、平凡なる書生生活がありのまゝに寫し出されてあるのであるが、然し性格も多く類型的な性格であり、個性の心理的葛藤よりは表面的な會話事件が主として描いてある。かつ脚色には作爲的傾向を殘して居る。また文章もまだ戲作的部分のあるのを免れなかつた。

さまざまに移れば變る浮世かな、幕府さかえし時勢には、武士のみ時に大江戶の、都もいつか東京と、名も新玉の年每に、開け行く世のかげなれや。

の如きを見ても想像することが出來る。がその題材に於て、表現に於て逍遙氏の所論の幾分を實現し得たのは勿論であつて、明治小說の初頭を飾る作品であることは疑をいれない。逍遙氏にはこの書生氣質の外に妹と脊鏡・細君・壹圓紙幣の履歷ばなしの如き作品がある。是等の中細君は明治二十二年の作で一人の女中の眼

浮雲

にうつつた紳士の家庭を寫し出した所に、その當時の生活を思はせるものがあり、壹圓紙幣の履歴ばなしは明治二十三年に書かれたもので、紙幣がその多くの人の手に渡つて行く經路を紙幣の觀察として叙して居る所に奇警な觀察が見える。斯の如く逍遙氏の作は種々あるが、此の時代に最も注意すべき作品は二葉亭四迷の浮雲である。浮雲は三篇十九回から成り、明治二十年に第一篇、廿一年に第二篇が刊行され、第三篇は二十二年都の花に連載された。始めは春のや主人、二葉亭四迷の合著として出て居る。この作は叔父の家に寄寓して某省に勤務する内海文三といふ青年が世才に長じなかつたために免官になつたので、今迄好意を寄せて娘を娶せようとしてゐた叔父の妻のお政は急に辛く當るやうになるが、文三はその一人娘のお勢を戀して居るので、その家を去り得ない。その中に叔母の家に同僚で世才に長けた本田昇が出入してお勢の心がその方に傾く。お政・お勢・本田等に嘲笑せられても去り得ないで居るといふ構想であつて、たゞ四人の男女の性格ならびに心理的葛藤の描寫を主眼として居るのである。而して平凡なる日常生活を描いてその人物を活躍せしめて居るのである。なほその描寫に不十分な點もあり、文章にも戯文的な所もまゝあるけれども此の時代の作品として一頭地を抽くもの

である。二葉亭は露西亞文學の造詣が深く飜譯の上にも功績があるが、その小說の上に寫實的態度をとつた所に最も注意すべき點がある。

硯友社

この二葉亭の時代に於て硯友社の一派が小說壇に出て來たのである。硯友社の生じたのは明治十八年の始めで、最初は我樂多文庫といふ回覽雜誌を綴つたが、明治二十一年印刷發賣するに至つたのである。而してその中心となつたのは尾崎紅葉である。が始め紅葉と對立し紅葉よりも寧ろ先に名を出したのは山田美妙齋であり、美妙齋の去つて後紅葉が中心となつて多くの門下を率ゐ文壇に於ける一大勢力をなしたのである。この硯友社の設立は小說神髓の世に出でたよりも三月程前であるから必ずしも小說神髓の影響といふ事は出來ないのであるが、硯友社の同人の作が、實際に於て文壇に認められるに至つてからの作は、この小說神髓の主張する寫實主義の影響のもとに起つて居るのである。然し硯友社の寫實は狹い主觀の上にたてられた寫實であるために、その主材は狹くとらはれて居り、皮相なる寫實であつたのである。その點に二葉亭と相違して寫實的態度に徹底し得ない憾がある。

山田美妙

第一に美妙齋に就いて考へると、彼が紅葉に先んじて名を成したのは短篇集夏木

立によつてである。是によつて清新なる抒情を基調とする彼の傾向は十分に見られるのである。六篇から成つて居るが「籠の俘囚」といふ作品は雛馬の貴族厭びあすが平民の馬あじにあすの女馬あじにあを戀し、裁判官の黒おぢあすといふものに打ちあけ馬あじにあを囚へ來らしめて戀を打ち明け終に辱める。父馬あじにあすが幽囚せられた女の所へ來り、仇を討つ事を言うて女を殺すのである。所謂貴族の暴虐を背景として可憐なる少女の運命を描いたのである。柿山伏は輕い諷刺的な作品であつて那須意外といふ文士が野間勇といふ政治家で小説も作つた男にたのまれて小説の代作をするが不評で耻をかいたといふ構想である。更に武藏野といふ作品は材を歷史にとり、南朝の新田義興の臣秩父民部とその婿とが武藏野の秋の夕暮をとぼ〳〵とたどる中に敵にあつて殺される。二人を待ちわびる民部の妻と嫁とはその報を聞いて傷心し、嫁は武裝して出でて熊に殺されるといふ抒情味の高い作である。

夏木立の後、美妙は硯友社を去り都の花といふ雜誌により、花車・ぬれ衣・いちご姬等を出だした。又國民の友に出た蝴蝶の如きは傑作であつて、平家の末路に時代をとつて、戀と忠義との葛藤を描いたものであり、蝴蝶といふ女がその愛人の

源家について平家に仇なすを知り、その情を捨て、愛人を殺すといふ村を扱つてある。が美妙の盛時は僅かでやがて紅葉に壓倒されてしまつた。

尼崎紅葉

紅葉の始めて名を成したのは美妙の蝴蝶と同時に明治二十二年新著百種の第一篇として二人比丘尼色懺悔を出してからである。

色懺悔

色懺悔は武藏野や蝴蝶と同じ抒情的な作品である。山里に主客の二人の尼が語るのであるが、ともに同じ男性を戀して其の男性の死のために尼になつたことが明かになる。不自然な作爲の跡もあるが、夢幻的な此の種の作品としては已むを得ないことである。而して豐麗を極めた文章はこの作品の名を高くした主要な點である。此の作の後紅葉は次第に寫實的傾向に進んで來た。明治二十三年から明治二十七年頃までは紅葉の第一期の全盛時代であるが、多く女性を描きかつ女性の類型的性格及びその性格から展開し來る運命の變化を描かうとした樣に思はれる。

二人女房

二十四年に作られた二人女房はある官省に勤める士族の娘二人の性格ならびに運命の相違を叙してある。姉は容貌も美しく華美であつたが、官吏に嫁して家庭の風波に苦み、妹は醜くして地味を好んだが、職人に嫁して幸福な生活を送るといふ事を描いてある。同年に出た伽羅枕は遊女の腹に生れたお仙といふ女性が遊女

伽羅枕

三人妻

飜案小說時代

になつて數奇の運命を辿つた次第を叙してあり、西鶴の好色一代女からの構想上の影響が見られ、文章も西鶴の影響の最も著しきものである。二十五年の三人妻は葛城餘五郎といふ一富豪の三人の妾の性格の相違と、それより起る運命の相違とを描いて居る。是等この期の主なる作は女性の類型的性格を描いたものであるが、次の二十七・八年の頃は創作から飜案に隱れた時代で冷熱・隣の女・不言不語の如きそれである。かくて紅葉は想涸れたりといふ非難も起つたのであるが、二十九年に於て傑作多情多恨が作られ、また三十年より長篇金色夜叉に筆を執り、明治三十六年死してなほ完結しなかつたのである。

多情多恨

多情多恨は鷲見といふ妻を失つた男を中心として、その唯一の友人葉山と其の妻お種との二人を配して構成されて居る。鷲見の亡き妻に對する追慕が主であつてそのあきらめ切れない弱々しき心の微妙なる動搖が精細に叙せられてある。外面的事件としては極めて平凡であるが、心理描寫の精細なるに至つては紅葉の作の中でこれに比較すべきものがないのである。その文體も口語文の洗練せられたものであつた。

金色夜叉

最後の金色夜叉は最も大作であつて歿した後小栗風葉によつて續篇が書き續けら

れた程である。金のために戀に破れた間貫一が金を以て復讐しようとする所にこの作の基調がある。この作は多情多恨の內面的には複雜であるが、外面上は殆ど事件といふ事件はない程であるに對して劇的な事件に富み、熱海の海岸を始めすべて外面的に波瀾があるが、それだけ一方に通俗味がある。紅葉の力作ではあり紅葉の特質をよく語つて居るが、必ずしも彼の秀作ではない。

硯友社の他の作家

硯友社は以上の如く紅葉が中心をなして居るが、外にも石橋思案や巖谷小波氏・江見水蔭氏がある。更に川上眉山・泉鏡花氏・小栗風葉等も硯友社から出て居る。眉山以下は紅葉の衰へてから活動して居るのであるが、これを說く前に紅葉に對峙した幸田露伴氏を概觀する。

幸田露伴

幸田露伴氏の處女作は明治二十三年の首に都の花に連載した露團々であつて、材を西洋に取りぶんせいむといふ大富豪のその女に對する奇拔なる求婚廣告からその女がしんじやといふ純直な青年と結婚するに至る經緯を描いてあるが、まだ露伴の特色を十分發揮して居ない。風流佛に藝術と戀愛との間を彷徨する珠運を描

五重塔

いて聲名高く、明治廿五年に出だした尾花集の中の五重塔は、彼の藝術的感興の最高頂に達した作品として彼の傑作とすべきものである。建築の天才あつて世才

足らざるのつそり十兵衛と、建築の天才とともに人としても優れて居る川越源太とを點出して、十兵衛によつて自然の暴威によつても少しも傷けられない五重塔が作られ、源太によつて更に完成されて行く經路を描いて藝術の永遠性に對する氏の信念が作の基調をなして居る。更に明治二十六年には風流微塵藏の大篇が出て明治二十九年頃まで連續して居り、現實的傾向が比較的多い事を特色とするが長篇であるだけに統一がない。明治二十八年には浦島傳說に新解釋を施した新浦島が出で、二十九年には髯男が出て、武田信玄の歿後、暗愚なる勝賴によつて衰亡して行く時に當つて主家のために氣を吐いたひげ男笠井大六を描いて男子の意氣を語つて居る。更に三十六年には長篇天うつ波を出だしたが未完成のまゝで小說界を退いてしまつた。彼の描く人物は紅葉と異なつて常に理想と意氣に燃えて居る。辻淨瑠璃の主人公西村道也の如き遊蕩兒にも藝術に對する意氣と理想とが見えるのである。

新浦島
ひげ男
天うつ波

饗庭篁村

紅葉・露伴時代にも更に種々の流派の作家があつた。饗庭篁村は傳統的作家の尤なるものであつて八文字屋自笑の影響をうけて氣質物の性質を有する作品を出だした。新著百種の中に出たほり出し物によつても知られる如く水の如きなだらか

な筆致の中に、人生の事件を描いて居るが、それは説話本位の表面的なものが多い。ほり出しものは衰へた家運を同復しようとする主人公が舊の家の庭から寶を掘出して再び富豪になる事を叙してある。短篇集むら竹は彼の作を多く集めてある。

齋藤綠雨

篁村は樂天洒落であつたが、皮肉諷刺を主潮とする傳統的作家に齋藤綠雨がある。彼の作では門三味線や油地獄の如きが傑れて居る。門三味線は下町の少女の心理を扱つて居り、溫順な富裕の商家の女と、近所の貧しき我儘な女との間に一人の男性をからませてある。また油地獄は田舍の富家の青年が都へ勉強に出たが、同國の者の懇親會の席で逢つた一人の藝妓の事が忘られずに溺れてゆく。が終に棄てられるに至る次第を描いて居る。何れも下町や狹斜の情調をたゞよはせて居る。

森鷗外

篁村や綠雨等の傳統的作家に對して主情的な傾向を有する作家に森鷗外及び矢崎嵯峨の舍がある。鷗外は評論家としてまた獨逸文學の紹介者として功勞があるが古典的の匂の高い和文調から出發して清新な情調を湛へて居る。舞姫。うたかたの記。文づかひなどすべてドイツ留學時代に材を得た作品であつて、何れも若き外國歸人を主人公として日本の青年を配し純粹感情の境地を描いて居る。鷗外の

作品には古典的な句があるが、感情を主として熱烈なるものに嵯峨の舍がある。彼の明治二十年に出した無味氣には第一期の政治小說の口吻が著しく見えるが、流轉及び初戀などには嵯峨の舍の個性的な態度が見える。流轉には純眞なる戀愛感情と宗敎的感情との葛藤を扱つて居り、初戀には純眞なる戀愛が扱はれて抒情的傾向が著しい。

矢崎嵯峨の舍

かくの如くこの時期には種々の作家はあるが、殆ど紅葉・露伴によつて被はれて居つた觀がある。

紅葉・露伴氏が衰へた後、小說壇には種々の機運が動いて來た。それ等の中で先づ注意すべきは樋口一葉である。

樋口一葉

樋口一葉は明治五年に生れて二十九年十一月僅に二十五歲で歿して居る。明治二十五年三月に闇櫻を出だしてから僅か四年程の間に二十餘篇の作品を創作したのである。早く父に別れて世故の辛酸をなめ、そこから人生に對するさまぐ〵の經驗を得、また人生に對する反抗を感じてそれが作品となつて現れたと思はれる。彼女の傑作はたけくらべであつて廓近くに成長して比較的早熟な少年少女の微妙な心理の描寫を行つて居る。遊女を姉に持つみどりといふお轉婆の少女が、次第

に性に目覺め、戀愛を意識する心理を描き、他に正太郎といふ家も性格も學問もすぐれた少年、長吉といふ家も貧しく智慧もない亂暴な少年、龍華寺の信如といふ一見冷い消極的ではあるが犯しがたい所のある少年を配して、全篇渾然たる場景を描いて居る。其の他にごりえはある場末の銘酒屋の女のお力といふ女性の淪落の生涯を描くとともに、このお力のために產をなくし妻をも去るに至つた源七との悲劇的な家庭を描き、最後にお力と源七との無理心中によつて兩者を結びつけて居るのである。また十三夜は身分の相違する家に嫁いだお國といふ女性が、夫の愛のないのに堪へかねて離緣して歸らうとして、父母に諭されて力なく夫の家に歸る途中、乘つた人力車の車夫は己が戀人である事を知つて儘ならぬ世をかこちながら別れて行くといふ構想である。彼の作品の中には未完成のものもあるが、女性の心理を描き、女性のために泣いて同情して居る所に閨秀作家としての特色がある。

一葉はむしろ露伴氏に私淑して居つたと思はれるが、三十年代に於ては紅葉の系統を引く作家によつて小說壇が形作られた。川上眉山や泉鏡花氏や小栗風葉の如きはそれである。廣津柳浪氏もこの期に活躍した。

觀念小說

川上眉山

川上眉山と泉鏡花氏の作品は觀念小說と呼ばれて居る。一の觀念を表すために具象的な人間生活をとらへて描寫するのであつて、あるがまゝの人生を描寫するといふよりも觀念の表現が主になつて居るのである。川上眉山のうらおもてといふ作品をとつて見ると、人生の罪惡はいかにして構成せられるかを說いて、それは社會の罪であるといふ點から解釋しようとする。德行家として名望のある者が社會の冷酷なるものによつて飜弄せられ財產も失ふに至つたので、社會の無情と冷酷とに泣き、そのために自らも盜賊となるに至るのであつて、盜賊となる彼は惡むべきであるが、それは社會の罪であると見るのであり、その觀念を表すためにふくの如き事件を描いたのである。

泉鏡花

鏡花も二十八年の夜行巡査と外科室とによつてこの傾向を明かにしたが、彼は次第に神秘幽玄な境地を描くやうになつた。しかし湯島詣の如き遊女の腹に生れた男性と一人の遊女との悲劇的な戀愛を扱つた現實的な作品もあるが、照葉狂言に於て少年が年上の二人の女性に對する極めて純なる愛を表現して、現實の中にやゝ神秘的な感を抱かせるのである。更に高野聖に於て鏡花の幻怪趣味は遺憾なく表れて居る。高野の說敎僧と旅にあつて、一夜をあかした時に聞いた說話としてある。說敎僧が蛭の降り、蛇の横はる道を通

つて、宿つた家には美しき女性と白痴の男とがあり、むさゝびや牛や馬や猿があつた。川の流れに浴びる美しき女性に、人の變じたむさゝびや猿がまとひつく、深夜の戸外にはむさゝびや猿が泣き叫ぶ。そこに作者の女性觀や戀愛觀が表されたと見てもよい。かういふ深秘的な傾向は彼の作品に最も多いのであつて人跡至らぬ神秘幽玄の世界に咲く黑百合を求めようとする事を描いた黑百合の如きもそれである。

廣津柳浪

而してこの觀念小說といふ類型の中に入れるべきものであるが、特に深刻小說と言はれるものに廣津柳浪氏の作品がある。深刻小說はある觀念を具象化した作品であるが、現實の社會的缺陷から、又其の他の缺陷から極めて悲慘なる悲劇的運命を産み出す、卽ち深刻なる悲劇的事件を扱ふといふ點から、特に深刻小說若しくは悲慘小說と名づけられたものである。たとへば氏の最初に名を成した明治二十八年の黑蜥蜴・變目傳の如きを見ると、黑蜥蜴は片目で痘面の醜くはあるが貞淑なる大工の妻が、その舅の酒亂によつて貞操を奪はれんとするために、黑蜥蜴で舅を殺して自殺するといふ悲慘なる悲劇を構成するのであり、變目傳は傳吉といふ小さいめつかちの男が、人に嘲弄せられつつ、なほある女性に對し戀慕の心を起す

が、その不具のためにそれも得られない結果殺人を犯すといふ如き悲劇を構成するのであつて、境遇や肉體の缺陷が必然的に產出す悲慘なる事件が描かれて居る。この境遇や不可抗な運命が人間を悲劇に導いてゆく例として畜生腹や骨ぬすみを擧げることが出來る、畜生腹は夫の不在中に雙兒を產んだ妻が畜生腹と言はれるのを恐れ、女中の惡婆に誘はれて一人を殺すやうになる所から生出す悲劇であり、骨ぬすみは相愛の男女が結婚する事も出來ず、女は他の男性に嫁し、男も主家の女を配せられようとするこの境遇から悲劇を生出すのであつて、何れも殺人や自殺を以て終つて居る。更に今戶心中の如きも遊女が愛する男性と離れなければならなくなつた所から自暴自棄となり、嫌つてゐた男と心中するに至る經路を描いて居る。かういふやうにすべて環境等から悲慘なる事件を產出すといふのが柳浪氏の作の主想であつて、人生の暗黑面を鋭く解剖してあると言へるのである。

この時代には小栗風葉も紅葉の衣鉢をうけて華麗なる筆致を以て活躍し、戀慕流に於て尺八の天才である一青年と音樂の才ある女性との間の悲劇的な戀愛から男性も次第に零落し、女性も病臥の身となり、投身し、辱められ、終に惡人の妻となり、自殺に陷る運命を描いて居る。その他德富蘆花氏等の家庭小說、村上浪六氏の

小說等種々現れて來たが、やがて小杉天外のはやり歌に於て寫實的傾向が唱へられて次期に自然主義的傾向が中心となるに至つたのである。小栗風葉の如きは自然主義時代にも生命を持續したが、多くは新しき作家によつて小說壇が作られるに至つたのである。

四、戯曲

第一期の劇文學は主として默阿彌によつて代表される歌舞伎劇であつたのであるが、二十年代に於てはこの歌舞伎劇が新しい方面に展開して行くと同時に別の一運動が起つたと見られるのである。卽ち二十年代に於て最も注意すべきは史劇の勃興であると思ふ。史劇といふのは從來の時代物から來て居るのであるが、時代物はたゞ時代を過去に取つただけでその精神なり表現なりに於ては世話物と同一であるか、若しくは夢幻的な表現をなして居るに過ぎないと思ふ。默阿彌の作品も世話物であるか、若しくは夢幻的なものに過ぎなかつたので、史劇といふものとは餘程異なるものであつたが、二十年代に於て夢幻的な作品から離れて史劇としての第一義的なものに進んで來た。思ふに史劇はその根柢に於て夢幻的空想的な

依田學海

點から、寫實といふ精神に基礎をもつて居るものと思ふ。もとより歴史的事實そのまゝではないが、少くともその根柢に於て歴史の上に現れた人間生活の解釋といふ點に基礎をもつて居る。この機運に促されて先づ依田學海の史劇が作られた。學海の史劇は夢幻的な立場から離れて寫實を基礎として居つたのである。吉野拾遺名歌譽や文覺上人勸進帳などを始め作品は多いのであるが、荒唐無稽の奇を求むることを避けて居る。しかし只管史實によつて過去を再現するのみにつとめた結果劇的の力に乏しいのである。この時代に實際の劇といふ點から見て勢力のあつたのは福地櫻痴である。

福地櫻痴

櫻痴は始めは新聞記者として政治の方面に携はつたのであつたが、終に劇界の方面に轉じた。劇界に於ては默阿彌の後をつぎ市川團十郎と結んで雄飛した。所謂九代目團十郎は茫漠な不器用の中に大きい藝を見せたのであつて、一方に劇なるものの品位を高めた點に於ても演劇史の上に忘るべからざる人物である。五代目菊五郎・四代目左團次との三人が明治三十六年頃までの歌舞伎劇の上に力があつた。櫻痴は團十郎のために多くの作を成したのであつて其の作は多いが二三の作に就いて述べると、春日局は明治二十一年に稿して實際に演じたのは明治二十四年の

頃である。五幕であつて山科に閑居して居る稻葉佐渡守正成の妻のお福が、家康の拔擢により後に三代將軍家光となるべき竹千代の守役となり春日局となる。而して次男の國千代を御臺所一派が世嗣にしようとするに對して男まさりの春日局が竹千代をあくまで守つて世嗣とするに至る苦心を主題として扱つて居る。不自然な構想はなく寫實的であるが、外面的事件の記述に偏して內面的解剖に乏しい。かういふ點は櫻痴の作には共通した點であるが、比較的この弊が尠くて、すぐれた作は俠客春雨傘である。この作は始め小說として作り、後明治三十年頃に脚色して舞臺に上せた。大口屋曉雨といふ者が始め淺草の藏前の札差であつたが、後家督を弟に讓つて俠客となり廓に出入する中に丁山といふ遊女になじむ。丁山のかむろのお鶴といふ女の可憐な境遇を聞いて金を遣つたのを後に丁山になじられたといふやうな行懸りから、丁山と離れ葛城といふ遊女の力によつてお鶴は薄雲といふ遊女になる。お鶴の父は邊見一角に殺されたが、一角は曉雨が札差の時恥をうけた男であつたので、薄雲を助けて敵討をさせるといふ曉雨の義俠的精神を中心にして描いてあるが、その精神が全篇を貫いて劇的な强い力が見られる。が全體から言つて櫻痴の作にはなほ內面的解釋が乏しいのであるが、この寫實的態

度を取りながら内面的解釋を企てゝ、性格劇といふ方面を開拓したのが坪内逍遙氏である。

逍遙氏が小說に於て革新を企てゝから更に劇方面に移つて新しい方面を開拓した功は偉大である。逍遙氏は所謂劇は個々人物の性格を因となし、境遇を緣となし、此の因緣によつて來る著大なる業果を描いて人事の眞相を現す所に精髓があるとして、史劇にしてもその人物を過去の特殊の境遇の下に立たしめて、人事の眞相を過去事實の中に表現するのが目的であるとする立場から先づ試みたのが桐一葉であつた。卽ち豐臣氏の滅亡に頻してゆく間に起る歷史的事實の中に人生の普遍なる相を見出ださうとしたのであつて、片桐且元を中心人物としてその性格を解剖するとともに、一方に淀君といふ人物の複雜なる性格を表現して居るのである。

坪内逍遙氏の史劇

而して桐一葉に於ては且元が大阪城を退去するまでの事件であつて、事件も完結せず、且元の性格も盡さないのであるが、その點を完結させたのが沓手鳥孤城落月である。この作に於ては且元の退去後、木村・後藤・薄田等も戰死して大阪城の落城も旦夕にせまつた時から筆を起して、淀君の狂暴性に陷つてゆく所を表してある。而して且元が落城に臨んで秀賴母子の助命を請うて、一旦家康の許しを得

たが、それも遂げずして秀頼母子は自盡し、且元は燃え上る火の手を眺めながら倒れるといふ所に終つて居る。この作は桐一葉の終篇としては意義があるが、獨立の戲曲としては桐一葉だけの統一性がない。逍遙氏は更に鎌倉時代に材を取つて牧の方を著して居る。此の作は時政の妻の牧の方を中心としてその陰謀事件を扱つて居る。卽ち牧の方は己が腹に生れた政範を將軍にしようとして稻毛入道重成父子とともに實朝を弑する陰謀を起すのであるが、更に偉大なる陰謀者義時によつてその惡謀が覩破されるのである。この作に於て牧の方は作者自身もマクベスと同じやうな性格の女性を描かうとしたのであると言つて居るが、また桐一葉の淀君とも類似する。そこにはひがみやすい淺慮な我子の愛に溺れて公平な道を失ふ女性が描かれて居るが、淀君のやうにその性格が生々として居ない。逍遙氏はこの作を三部作の一として描かれた事は自ら言はれる所であつて、後年になつて星月夜に實朝を描き、義時の最後に義時を扱つて居るのであり、是等によつて大きな戲曲が完成せられるのである。

斯くこの時代は歌舞伎から出た史劇が作られると同時に、一方に於て新派劇が現れて來た事は劇の發展の上から言へば注意すべき事である。歌舞伎劇から出た史

劇が過去の題材の中に新しき時代精神を加味せんとしたのに反して、新派劇は新しき時代の皮相的な寫實から始まつて居る。第一期に於て政治小説が明治初期の社會の皮相なる寫實であつたのであるが、この新派劇の始めは雪中梅や花間鶯程度の皮相なる寫實であつたのである。殊に日清戰爭などの影響によつて壯士劇といふものが出來、戰爭を題材としたものが行はれるに至つた。是等は劇としては殆ど價値のないものであるが、三十年時代に於て川上音次郎や伊井・高田などが出て金色夜叉や不如歸などを演ずるやうになつてから、劇としてやゝ價値あるものとなり、殊に明治三十五六年の頃に團十郎・菊五郎・左團次等の名優を失つた歌舞伎劇の衰微に乘じて勃興したのである。

森鷗外の飜譯劇

更に森鷗外等によつて浪曼的な劇が飜譯せられて居る。カルデロンの作を譯した調高矣洋絃一曲は明治二十二年に成り、またレッシングの作であるエミリヤ・ガロッチィを譯した折薔薇といふ作が現れて居る。かくの如き飜譯劇も逍遙氏の史劇などとともに容易に實演せられる迄には至らなかつたが、次第に劇の上に新しい機運を導き出すに至つた。而して鷗外によつて明治三十五年に玉篋兩浦島が作られ、明治三十七年に日蓮聖人辻説法が作られて居るのは注意すべきである。何れ

も短い形式であつて對話を主としたといふよりは敍事詩劇ともいふべきものであり、是等より更に逍遙氏によつて樂劇の如きが作られるに至るのである。

第三章　後期

一、思潮概觀

浪曼主義が漸く頽廢的になり空想的な憧憬や理想が、得られざる夢であつたと氣付いた時、そこにすべての理想の破壞された後の幻滅があつた。自然主義的思潮はかくして起つたのである。すべての美を捨てゝたゞ眞なるものの探求に向つたのである。かくの如き思潮を導き出したのは唯物的な實證主義的精神・科學的精神に據る所が多いのであらう。かくてシエリイやキイツの詩から、ゾラやモウパサンの小說に移つて來たのである。而してこの自然主義を評論の上に於て主張したのは島村抱月。長谷川天溪等であつた。殊に抱月は穩健冷靜な態度で條理備はつた論文に於て自然主義を主張した。自然主義の價値、文藝としての自然主義をはじめ彼が自然主義のために論じたものは多い。それらに於て自然主義の態度方

法の上から見て純客觀的であることを唱へ、目的題材の上から自然の眞を捉へること、換言すれば社會問題・科學・現實等に現れた眞を捉へることを唱道して居るのである。

この自然主義の主張が空想的な世界から離れて現實に立脚し、その眞實をつかむといふ所に根本の精神があるのは、動かすべからざる確乎たる立場であつて、この主張の前には過去の文學や思潮は何等の反對をもなす事は出來ない。自然主義の現實觀照は眞理と妥當との上にたつて居る事は明かであるが、併しなほ現實に對する餘す所なき觀照と言ふ事は出來ない。現實には醜い厭ふべき事が多い。利己と爭鬪との世界、肉慾と虛僞との世界のある事は事實である。しかしそれのみが人生の全部ではない。破壞の側には建設がある。利己と爭鬪との側には愛と平和とがある。惡の中に善を見出だし、悲の中に喜を見出だし、絕望の中から理想の光が輝くであらう。かくて自然主義の中心勢力をなした時代にも後藤宙外の如き反對者もあつたのであるが、やがてこの自然主義から醒めて、現實の上に立つた理想の建設への道程を辿るに至つた。しかし自然主義によつて始めて現實の上に力強く立つことを知つた。卽ち眞なるものの上に立つ事を始めて知つたのである。

空想的な美にあこがれた夢から醒めて、眞の美をつかむ第一歩を敎へられた事に於て大きい意義があるのである。而してこの思潮が文學作品の上に與へる影響も大きかつたのである。

二、詩歌と戲曲

長詩

先づ始めに詩歌と戲曲とに就いて述べる。此の期に於ける長詩は薄田泣菫・蒲原有明二氏の象徴詩時代を以て始まる。既に前期に於て藤村・晩翠二氏に代つた泣菫・有明の二氏はその深みのある感情を以て、深秘幽玄の世界を表象して居つたのであるが、明治三十八年に有明氏の春鳥集が作られ、上田柳村の譯詩集海潮音が出るに及んで象徴詩は詩界の中心となつた。而して三十九年には泣菫氏の白羊宮も出でた。たとへば春鳥集の「誰かは心伏せざる」の一節

春鳥集

煙は鈍む日に
映りてくらきむらさき
ながれぬ　霜の壓す

弓かとひくく撓みぬ

閃ゆるけぶり　世の
底なるいぶきか　壞ゑくゑ
うづまき去るかなた
ねびてぞ落つる日黃なる

海潮音

の如きには壓倒されるやうな幽鬱な情調が象徴的に表現せられて居る。かういふやうな氣分情調を象徴的に表現しようとするのが象徴詩の傾向である。海潮音を見ても清新な細かい表現の中に、氣分が搖曳して居る。それは譯詩ではあるけれども、その氣分を表す點に於て創作詩と見ることも出來る位に洗練されて居る。

秋の日の
ヸオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな

（落葉、ヹルレエヌ）

而してやゝ遅れて三木露風氏の如きも象徴詩人として活躍した。露風氏は軟かな感觸の中に細かい氣分を表して居る。白き手の獵人の中にある「雪の上の鐘」の

白き手の獵人

心の上に暮れ方の
雪はしづかにふりつもる

灰色にしてあぢきなく
やはらかにふるへつゝ

の如き、又「指」の

汝が髮のやさしき中にわが指の
わけ入りゆくはうらかなし
いとやはらかにゆふぐれの
あたりさまよふこゝちして
百合のなげきをきくごとく

の如き氏の特質を見ることが出來る。

而して岩野泡鳴は刹那的表象を唱へて自然主義的傾向を多く示したのである。以上述べたやうな象徴詩は長詩に於ける一の態度として長く勢力を有して居るが、一方に民衆詩的傾向が出でて來た。有明氏も始めの難解な詩風から口語詩などを作つたが、この傾向は更に民衆的な傾向へ向ふ機運を示すものである。自由詩社が起り、相馬御風氏が口語詩をうたつたのは明治四十二年であつた。

短詩を見ると、歌は前期に引續いて浪曼的傾向がなほ勢力を保ち、明星派の與謝野晶子氏の如きが中心をなして居る。氏の舞姫の出でたのは明治三十九年であ

る。しかし次第に衰へて明治四十一年に明星が廢刊したのは短歌の推移を示して居るのである。かくて一方に人生をうたはうとする石川啄木の出でて來た事は歌壇に於ける自然主義的傾向を示すものである。そこに職業をうたひ生活の苦をうたひ、人生のまことの感情を赤裸々にうたつた所に心に沁み入るもののある事を感ずる。若山牧水氏が字餘りの歌をうたひ、土岐哀果氏が啄木の如く生活をうたつたのもこの傾向を示すものである。

石川啄木

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

うぬ惚るゝ友に合槌うちてゐぬ施與をするごとき心に

猫耳を引つぱりてみてふと啼けばびつくりして喜ぶ子供の顏かな

藥のむことを忘れてひさしぶりに母に叱られしをうれしと思へる

而して俳諧を見ると子規の後、虚子・碧梧桐の二氏が活躍して居るが、殊に碧梧桐氏が新傾向句を唱道したのは、同じく自由なる態度が俳句の上にも現れて來たことを示すものである。新傾向句は十七字句に制約せられずにうたふのであつて

その點だけでは談林派に似て居るが、談林派のやうな遊戯的なものではなく、力強い生命の表れであるべきであつた。

長閑なる水暮れて湖中灯ともれる　　碧梧桐
遠く高き木夏近き立てり疊む屋根に
鴉立つや霜に掻く藻の棹光り
水鷄來し夜明けて田水滿てるかな
燒山の夕暮淋し知らぬ鳥
蝶々の物食ふ音の靜かさよ　　虚子
宿かさぬ蠶の村や行き過ぎし

樂劇

次に戯曲を見ると、歌舞伎劇は傳統的な勢力を持續して居り、また坪内逍遙氏の性格劇や樂劇なども作られた。殊に氏は明治三十七年新樂劇論を著して樂劇を鼓吹し、それを實際の作品の上に現した新曲浦島を始め新曲赫夜姫・鉢かつぎ姫・新曲初夢・新曲金毛狐等を著した。是等の中新曲浦島は浦島傳說を扱つたのであつて浦島が龍宮にあこがれる事を以て迷とし、現世に蓬萊をうつすべきことを說いた所に現實的な見方が見られる。而して此の期に於て自然主義の戯曲に與へた影響

飜譯劇

としては、イプセン劇などの飜譯劇の行はれた事と、その影響を受けた中村吉藏氏等の社會劇の起つた事を擧げることが出來る。イプセンの人形の家にはたゞ傳襲的に家庭の妻となつて居る女性が、自覺の結果家を出る事を主題として扱つてある。海の夫人にしても、社會の桂にしても個性の自覺、權威の失墜といふ點を扱つてある。

社會劇

かういふやうな作品が行はれるとともに、その影響をうけて社會劇が行はれて居る。中村吉藏氏の作品の如きはそれであつて、たとへば氏の作である剃刀を見ると、村の小學校を優等で出た一人の男は家の貧しいために學問をすることも出來ず理髮屋になつて居る。餘り優等でなかつた少年は家が富んで居たために學問をして名士となり、郷里に錦を飾る、その理髮屋で頭髮を刈る中に理髮師は彼を剃刀で殺してしまふといふ構想である。社會の缺陷から起る悲劇が深刻に描かれて居るのである。が是等の社會劇にも西洋劇の内容をそのまゝ取入れた感があつて、日本の社會生活の上に悉く適合せられない點もあつたと思はれる。而してかくの如き社會劇から次第に日本の實社會そのものの上に立つた思想劇が行はれて來て、それが歌舞伎劇に對して一つの流れを展開せしめて居るのであると思ふ。

三、小説

自然主義の作品

この期に於て自然主義の思潮が最も明かに文學に現れたのは小説であつた。自然主義の作家としては國木田獨步・島崎藤村氏・田山花袋氏・德田秋聲氏・正宗白鳥氏を始め極めて多いが、こゝには二三の作家の作を少しく述べて自然主義的傾向を大體に見るに止める。

國木田獨步

自然主義的傾向を最初に示したものに小杉天外氏のはつ姿の如きがある。はつ姿のある部分には寫實的傾向が見えるが、なほ深く現實を諦視する迄には至つてゐない。が國木田獨步に於て自然主義的傾向ははつきり現れた。卽ち牛肉と馬鈴薯に於て夢から醒めて眞の自己に目醒めるべきことを說き現實的と理想的との思想を開展さして最後に現實に立脚すべきことを說いて居るのである。而して運命論者に於てはこの現實が如何に暗いものであるかを暗示して居る。ある一人の男性が數奇なる境遇の後知らずして兄弟の間に不倫の關係を生じてそれを運命であると寂しく諦める所に悲痛なる現實が見出だされる。獨步の作は簡潔な筆致で力強く主題を展開させる所に特徵がある。從つて彼の作には短篇が多い。之に反して

島崎藤村氏や田山花袋氏等は大きな構想の中に人生の相を表した。殊に藤村氏は前期に於ける多感な抒情詩人から、また田山花袋氏は浪曼的傾向から展開して自然派作家の中心となつた所に文學の展開とともに個性の展開を思はしめるものがある。

藤村氏の破戒は丑松といふ新平民の青年敎師が、階級的壓迫の苦楚をなめつゝ、新平民たる事を告白してはならないといふ親の戒を破つて、生徒の前に新平民たる事を告白し奉職して居る學校を去る點を骨子として、信州の鄕土的色彩を描きながら、人間の階級的爭鬪を描いて居る。また明治四十一年に刊行された春は、作者自身及び北村透谷等の文學界の青年が現實と理想との矛盾に惱みながら、眞率に歩いて來た道が客觀的に描かれて居る。春に至つて人間生活のある斷面を切離した感があつて現實的である事を思はしめる。しかし春は若い青年を對象として現實を描いて居るためになほ主情的な理想的精神に燃えて居るが、家に至ると青年が家を持ちそこに複雜な人生の相を體驗して居る所に、更により現實主義的な內容が扱はれて居る。三吉といふ作者自身であるらしき青年作家が新しき家庭を作りゆく經路を主として、三吉の生れた家である小泉家ならびに姉の嫁いだ橋本家

といふ舊家の衰へてゆく經路とともに、三吉の新しく作つた家にもさま〴〵の艱みと苦みとを體驗しつゝゆく經路が描かれて居る。そこに家より個性といふ信念が見られるのである。

一體に藤村氏の作品はかくの如く傳統・權威・理想が現實との爭鬪によつて破壞されゆく經路を現實的の筆を以て表して居るが、藤村氏の有する抒情味は是等の作品に於ても全く失はれてはゐない。

田山花袋

田山花袋氏は藤村氏とやゝ異なつて平面描寫を主張し、あくまで客觀的に事象を寫さうとする所に特徴を有するが、氏の作にも抒情的傾向はなほある。蒲團はある中年の男性が、弟子である若き女性に對する性慾を大膽に描いた作品であり、文壇の上に大きな波紋を投げた。また藤村氏の春と同年に出た生は重くるしき人生を描いて居る。弟等を世に出だすために覇氣に充ちた精根を涸らしてしまつた兄の鐐といふ人物がある。鐐の後妻のお桂、鐐の妹で他に嫁いで居るお米といふ二人の女性が、家庭に於て常に爭鬪する。而して死んだ老母の形見分けに二人は摑み合ひをして爭ふのである。皮肉な勝氣な而して溫情もある老母が病のために次第に衰へて死んでゆく經路は、たゞに一人の女性の死ではなくして人間そのもの

の必然的な運命を暗示して居る。花袋氏の作はこの他妻や毘や田舍教師を始め數多いのであるが、何れにも重くるしき人生が見られる。花袋氏はこの壓倒する如き人生の姿を時によつて解決せしめて居る。如何なる悲も艱みも時が洗ひ去つてしまふと考へるのである。この點に花袋氏の消極的なあきらめ、若しくは運命論的な思想が見られる。

正宗白鳥

而して更に自然主義作家の中に於て正宗白鳥氏の如きも特徴を有する。白鳥氏の作品には虛無的な思想がたゞよつて居る事を感ずる。白鳥氏の描く人生は人生に疲れ切つた聲を擧げて悲む事も出來ないやうな敗殘の人生である。氏の作泥人形は家のためにのみ生きる妻が泥人形の如きであると觀じた所に、光明も理想もなき人間の姿を表して居る。又何處へ の如きも人生の享樂に疲れ切つた物憂い人間生活を描いて居るのである。また德田秋聲氏は藤村・花袋二氏のやうな花やかさも

德田秋聲

なく、獨步のやうな直截もないが、質實に人生を描寫してそこに倦怠しきつた人生を見ることが出來る。黴や爛の如きにしても平凡な人間生活を描いてそこにしみ〴〵人生を思はせるものがあるのである。自然主義作家は是等の外にも多い。小栗風葉氏にも戀ざめを始め、自然主義的作品が多くあり、二葉亭四迷も其の面

影、平凡の二作を殘して居る。

しかしこの時代に於ても傾向を異にした作家も無いではない。夏目漱石を中心にした高踏派・餘裕派の作品と、谷崎潤一郎氏を中心とする唯美主義的作品の如きはその最も著しきものである。夏目漱石が俳人より出でて作家となつた點は西鶴に類似して居るのであるが、この俳人より出でた事が漱石氏の作品の色調の重要なる點となつて居るのである。自然派は客觀描寫をとつて居るけれども、その全體に於ては人間の心の苦鬪が溢れて居る。從つて作品の基調は暗いじめ〳〵したものであるが、餘裕派の作品は傍觀的な態度を以て觀察し描寫されるために、それによつて人生そのものに當面するやうな眞劔さが見られない。漱石の最初の優れた作である我輩は猫であるを見る時、氏の物を見る場合に於ける餘裕のある態度は明かに見られる。虞美人草にしても坊ちやん、三四郎から、それから・行人・明暗と彼の作品を辿つて見ても、常に自然派のやうな暗いじめ〳〵した氣分は見えない。もとよりこの間に相當の變遷は認められるのであつて、初期の草枕にしても虞美人草にしても華麗なる表現を用ゐて居り、殊に倫敦塔の如きには浪曼的な香が高い。而して次第に華麗なる表現から內面的に進み、心理的な觀察を下して居る。

然しながら後年の心理描寫にしても理智的な態度で心理の變遷を傍觀的に眺めて居るのであり、そこにユーモアも見ることが出來る。それからに扱はれた題材にしても心に扱はれた題材にしても、人生の悲劇的材料を捉へながら、それを讀んで深い人生の苦悶の中に引入れられる事もなく、かゝる悲劇的葛藤の心理的解釋を開くやうな心持を感ずるのである。かくてその作品の展開に於て浪曼的から寫實的心理的傾向に進んで行くのであるが、その根柢に於ては常に我輩は猫であるの境地は離れないのである。即ち草枕に於て作者が繪師の口をかりて述べた非人情の世界は是れである。それは一面から見れば、小さい我を超越して大きい我の上にたつて居るとも言へる。則天去私の境地は新理想主義的傾向を産出するものであつたとも言はれるであらう。

この外餘裕派の作品としては高濱虛子氏の俳諧師・續俳諧師の如きがあるが、その寫實の態度に於て漱石に近づいては居るが、漱石の冷靜な心理解剖には到つてゐないのであつて、作者自身である三藏の觀照の態度は餘裕派的であるが、十風夫婦の破壞されて行く生活の描寫には自然派的傾向が見えると思ふ。

この自然派と餘裕派とはその人生の觀照の態度に於て非常な相違はあるが、何れ

も人生のための藝術であつたに比して谷崎潤一郎氏の唯美主義的傾向は藝術のための藝術を創作した所に特異の境地がある。谷崎氏の描く所はありのまゝの人生でもなく、人生の中から美をえぐり出して居るのである。その美は道德的な美でもなく又生々した現實の醜さを情趣化する事によつて得られる美でもなく、人生の中から感覺的な美を見出ださうとして居る。それは惡の中に見られる美でさへもある。谷崎氏の刺青に見える女性の鼻汁のついた手巾によつて味ふ感覺的陶醉は人生にかゝはりなき中に見出だされる美である。

斯の如く自然主義以外に種々の傾向はあつたが、その中心となるものは自然主義であり、それは小說に於てのみならず、自然主義時代の文學の中心をなして居つたのである。然しながら自然主義の作品は人生の暗い方面をのみ描いたのであつて、そこに人生觀照の點に全からざるものがあつた。かくて明治の末年には自然主義は次第に衰へて、大正時代に入り新理想主義・新現實主義等が擡頭するに至つたのである。

國文學史總說　終

わ

み

む

め

も

や

ゆ

よ

ら

り

る

れ

ろ

な

に

ぬ

ね

の

は・ば

そ・ぞ

た・だ

ち・ぢ

つ・づ

て・で

と・ど

し・じ

す・ず

せ・ぜ

く・ぐ

け・げ

こ・ご

さ・ざ

か・が

き・ぎ

索　　引

大正十五年二月廿八日印刷
大正十五年三月三日發行
大正十五年三月十日再版印刷
大正十五年三月十三日再版發行
大正十五年四月二日三版印刷
大正十五年四月五日三版發行
大正十五年四月十二日四版印刷
大正十五年四月十五日四版發行

大正十五年五月二日訂正五版印刷
大正十五年五月五日訂正五版發行
大正十五年七月七日訂正六版印刷
大正十五年七月十四日訂正六版發行
大正十五年十一月廿五日訂正七版印刷
大正十五年十一月廿八日訂正七版發行

國文國史總說

定價金二圓五十錢

著者　藤村作
東京市神田區表神保町二番地

發行者　矢島一三
東京市神田區表神保町二番地

印刷者　上條勇
東京市芝區愛宕町三丁目一番地

印刷所　中興館印刷部

東京市神田區表神保町
振替東京四一一二三番
□發行所　中興館
〔電話神田一二三五番〕